

黒い銃弾とは何だった
のか

黄金馬鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも里見リーダーがワンパンマンだったらっていう一発ネタ

目次

ワンパンチ	1
ツーパーンチ	12
スリーパンチ	31
フォーパンチ	50
ファイブパンチ	73
シックスパンチ	84
セブンパンチ	101
エイトパンチ	121
ナインパンチ	137
テンパンチ	154
イレブンパンチ	173
トウエルブパンチ	189

サーティーンパンチ	212
フォーティーンパンチ	234
フィフティーンパンチ	253
シックスティーンパンチ	269
セブントィーンパンチ	281
エイティーンパンチ	297
ナインティーンパンチ	310
トウエンティーンパンチ	332
トウエンティーンワンパンチ	350
トウエンティーンツーパンチ	368
トウエンティーンスリーパンチ	389
トウエンティーンフォーパンチ	405
トウエンティーンファイブパンチ	426

トウエンティーシックスパンチ	453
トウエンティーセブンパンチ	488
トウエンティーエイトパンチ	518
トウエンティーナインパンチ	530
サーティーパンチ	547
サーティーワンパンチ	560
サーティーツーパンチ	575
サーティースリーパンチ	587
サーティーフォーパンチ	602
サーティーファイブパンチ	608
サーティーシックスパンチ	619
サーティーセブンパンチ	626
サーティーエイトパンチ	645

サーティーナインパンチ	666
フォーティーパンチ	694
フォーティーワンパンチ	712
フォーティーツーパンチ	723
フォーティースリーパンチ	735
フォーティーフォーパンチ	752
番外パンチ	761
番外編其の二パンチ	768

ワンパンチ

ガストレアにより破れた人類がモノリスと呼ばれる物を作り、立てこもったのは今や何年も昔の話。

人類はガストレアに破れ、地球の土地の殆どを失った。

ガストレア戦争の最中は誰もが絶望し、ガストレアに勝つのはは無理だと思つた時、一人の少年だけは行動を起こしていた。

その少年の名は里見蓮太郎。彼は思った。ガストレアが人間を駆逐するのはガストレアが強いからだ。だから、俺が強くなればガストレアなんて簡単に駆逐できる。と。それからの蓮太郎の行動は早かった。毎日ハードなトレーニングをこなしていった。腕からプチプチと嫌な音がなろうが、歩く度に足から激痛が走ろうが、それを続けていった。

異変に気が付いたのは一年半経った頃だった。

自分の髪の毛が成長を止め、例え日本刀でも銃弾でも断ち切る事が出来なくなつたと気付いたのは。

ハードなトレーニングにより、自分の髪の毛すら鍛えられたのだ。

二年経った頃にはステージⅡのガストレアを苦戦の末素手で倒せるようになった。本来、鍛える事を考えなければ右手右足、左目を奪われる運命だったが、彼は襲つてきた野良ガストレアをあらゆる事かワンパンで倒したのだ。

それ以来マツドな科学者に解剖させると迫られたりしたが、頑張つてトレーニングを続けた。

そして、3年が経った。

彼は無敵になっていた。

まず出てこないステージⅣとは戦った事が無かったが、ステージⅢまでのガストレアならワンパンで倒せるようになった。

そんな彼は何時の間にか引き取られた天童家の娘、天童木更の運営する民警会社で民警をやっていた。

これは、そんな彼のちよつとしたお話。

「お前が今回派遣された民警か？まだガキじやねえか。」

警察官、多田島茂徳は目の前で民警のライセンスを突き出す青年を見て、溜め息をつ

いた。

今回の件はガストレアが関係している。ガストレア関係の事件は大体民警へと依頼がされるのだが、今回も例外ではなかった。

だが、依頼により走ってきた民警はまだ二十歳にもなっていない青年だった。

「んなこたいいんだよ。」

「イニシエーターが居ねえじゃねえか。」

民警とは基本的に人間であるプロモーターとガストレア因子を体内に留めた子供、通称呪われた子供たちであるイニシエーターで構成される。

だが、目の前の青年の側にはイニシエーターの姿はなかった。

「一緒に走ってたら何時の間にか居なくなってた。」

「はっ。」

走ってたら居なくなってた。と言われてまさかイニシエーターよりも速く走ったのかと思つたが、イニシエーターは人間を軽く殺せるくらいの身体スペックはある。それを追い抜いて見えなくなる程の速さで走るなど常識的に考えられなかった。

だから、イニシエーターとはぐれたのか。と自己解釈した。

多田島はすぐに今回の事件を説明しようとしたが、目の前の青年は、

「んなもんいらねえ。とつと中に入らせてもらう。」

と、言うところズカズカと事件現場であるマンション、グラウンド・タナカの中に入って行く。ロクな装備もせず。

「お、おいお前！」

「お邪魔します。」

青年が周りにいた武装隊を無視してドアを蹴つ飛ばした。

そう、文字通り『蹴つ飛ばした』のだ。

『……は？』

ドゴオ!!と音を立てて室内にぶつ飛んだドア。

ノックするような簡単な動作でドアを蹴つ飛ばした青年はさらに被害現場にズカズカと入っていく。

「うわ、くっせ。掃除してんのかよ。」

それは死臭だ!とその場にいた全員が内心で叫ぶ。

「……おい警察のおっさん共。中に入んなよ。」

ガストレアが居たのか。そう解釈し、武装隊はアサルトライフルを何時でも発射できるようにセーフティを解除し、多田島はドアがあつた場所から離れる。

そして、中に入った青年はと言うと。

「やあ、待っていたよ。」

「あ、この住人か？ちよつとここで起きた殺人事件について聞きたいんだけど。」
赤い燕尾服と帽子、さらには仮面と不気味な格好をしたその人物に近づいて行く青
年。

「いいや、私はね……」

赤い燕尾服の男は懐から拳銃を取り出すと、

「加害者だよ。」

瞬間、発砲。

拳銃から放たれた弾丸は青年の目の前に行き……弾かれた。

青年が少し体勢を下げ、頭でガードしたのだ。

「顔面セーフ。」

「……………」

ツツコミどころは多々あるが、燕尾服の男は何も言わない。

「成程、噂に聞いていただけある。」

「なあ、終わらせていいか？」

「ほう、何をだ……」

「ワンパンチ。」

一瞬だった。

ほんの一瞬で青年は燕尾服の男に肉薄すると、残像なんて生温い。腕が何重にも見える程の速さで拳を振ったのだ。

が、その拳は何かの見えないシールドに阻まれた……かと思いきやそれを安安と突き破って顔面に直撃。赤い燕尾服の男はすっ飛んでいった。

「お仕事完了。」

パンパン。と手を払う青年。

ふと、燕尾服の男がすっ飛んだ際に空いた大穴から手紙が入ってきた。

それを青年は躊躇なく見る。

『いずれ会うことになるだろう。それまではさらばだ。』

「なんだこりゃ。」

青年はそれをポケットに仕舞うと、元から空いていたもう一つの穴から飛び降りた。

「……な、何だったんだ？」

多田島はそう言うしかなかった。

一方その頃、青年のイニシエーター、藍原延珠は事件現場に向けて力を開放して全力

で走っていた。飛び跳ねてもいた。

「蓮太郎め……この妾を置いていくとは……何時もの事だが悲しくなる……」

どうやら彼女は力を開放して全力で走っても蓮太郎という名の男に置いていかれたらしい。

さあそろそろ着くぞ。と、言う所で延珠はふと路地に人がいるのに気が付いた。

すぐに力を開放するのを止め、そこを見る。

そこにいた男性を見た延珠は声を失った。だが、男性は声をかけてくる。

「お嬢ちゃん……すまないけど、ちよつと道を案内してくれないか……? 何故ここに来たのか……ここが何処なのか分からなくてね……」

男性は息を荒らげながらそう延珠に言った。

延珠は目を背けながら、言った。

「お主……自分の体がどうなってるのか、分かっているのいないないなのだな。」

男性はそんな延珠の言葉で自分の体を確認した。

その体は脇腹が無くなり、そこからは奇妙なナニかが蠢き、地面には赤い水溜まりを作っていた。

そこで、男性は思い出した。突如自分の部屋に入ってきたガストレアに襲われたのだと。

「……遺言があったら聞くぞ。」

「……なら、妻と子供に言っておいてくれ。今までごめんと。」

「うむ、しつかりと伝えておこう。」

「……ありがとう、優しいお嬢ちゃん。」

その瞬間、男性は姿を変えた。

体内から何かが飛び出し、男性だったものは原型をなくす。

それは巨大な蜘蛛。目は真つ赤で、大きさは三メートルはあるだろう。

ガストレアステージI・モデルスパイダー。

本当はまだ人間の内にあの世に送ってあげようと思っていた延珠は歯噛みをした。

「こちら藍原延珠。ガストレアステージI・モデルスパイダーを確認した。これより交戦に……」

延珠は気持ち切り替え、ガストレアへと突撃しようとする。が、その直前、目の前に現れた男がいた。

黒い髪をなびかせ、拳を構えるその青年。

「蓮太郎!」

里見蓮太郎。先ほど燕尾服の男をすつ飛ばした張本人がそこにいた。

「……なんだ、ステージIか。そういえば延珠。今何時だ?」

いきなり聞かれた延珠はちよつとお洒落なスマートフォンを取り出し時間を確認する。

「午後の一時だ」

「……なに？ 午後の一時だと？」

蓮太郎はそれを聞いた瞬間、俯き肩を震わす。

それを好機と見たのかガストレアは蓮太郎を食らおうと恐るべき速さで突っ込んでくる。

だが、その気配を感じた瞬間、蓮太郎は顔を上げ、踏み込み、地面にクレーターを作り、

「もうタイムセール始まってんじゃねえかアアアアアアアア!!」

アッパー。

グチャツという音と共にガストレアの体に穴が空く。その瞬間、アッパーの衝撃が全身を伝わり、ガストレアの体を粉碎した。

「……今日もワンパンつと。」

延珠は慣れた手つきでスマートフォンの日記機能を開くと、本日の日付を記入して、タップする。

ガストレアステージⅠ・モデルスパイダー、ワンパン。と。

彼女のスマートフォン日記には、バラバラだが日付が書かれており、そこにはガストレアのステージ数、モデルが書かれており、毎回そこには続いてワンパン。と書かれている。

「チクシヨオオオオオオ!! (タイムセール品を絶対に) 持って行かれた!! チクシヨオオオオオオオ!!」

蓮太郎が地面に膝をつき、涙を流しながら地面を両手の拳で叩きまくる。

その度にクレーターが巨大化していくが、延珠は慣れてしまったのか振動して崩れていく地面をよそに電話をかける。

「あ、もしもし、木更か? こちらはもう終わったぞ。え? どうだったか? ワンパンだった。ではな。」

最早様式美とも言わんばかりの会話をした延珠は崩壊していく地面をよそに多田島の元へと向かう。

「……あいつ、何モンだ?」

「妾のふいあんせだ!」

無い胸を張る延珠。破壊されていく地面。

「……そ、そうか。」

破壊活動を続ける蓮太郎を白い目で見ると多田島。だが、蓮太郎はハツとすると。

「そうだ！あつちのスーパーならまだタイムセール直前かもしれない！こうしちゃいられない！行くぞ延珠!!」

「蓮太郎!?!まだ報酬貰ってn」

残像すら見える速度で延珠の手を掴んだ蓮太郎はそのまま報酬を受け取らず走り去って行った。

「……………」

多田島はくわえていたタバコを落とすしか出来なかつた。

結構前から話題となっていた。どんなガストレアでもワンパンで葬るロリコンプロモーターがいると。

それは、名前も分からないため、ネットでは自分の顔を分け与えるあのヒーローの名をもじってこう呼ばれていた。

『ワンパンマン』と。

ツーパンチ

「里見君！報酬を貰い損ねるだなんてどういう事よ!?お陰で今月も色々火の車なのよ!?!」

「うっせえなあ……倒せたんだからいいだろ。」

「わ、た、し、は！報酬が欲しいの！じゃないと明日にでも雑草食べて暮らす生活が待ってるのよー!」

「別にいいだろ。食えれば。」

「良いわけあるかア!!」

その日のおやつを食べるにはいい時間帯。ゲイバー、キャバクラ、闇金という笑うしかない立地の悪さの中、キャバクラと闇金に挟まれた場所にある天童民間警備会社の中。社長、天童木更の怒りは爆発していた。

地面にクレーターを作ったせいで関係者に平謝りさせられ、その作った張本人はタイムセールに行ったという。しかも間に合わなかった。

報酬が無いから自分と蓮太郎の給料はだだ下がり。延珠への給料はちゃんと払っている。何故なら延珠に罪はないし子供への給料を減らすのだけは木更の良心が許さな

かった。

「お陰で明日からお腹いっぱい食べられないかもしれないのよ!?!あとタイムセールあるんなら私にも教えなさいよ!」

(そこもきつちり怒るのな。)

怒り心頭の木更と何処吹く風の蓮太郎。延珠は用事があると言つてどっかに行つてゐる。

今回ばかりは説教決め込んでその歪んだ根性叩き直してやると言わんばかりの木更。その中、ガチャツとドアが開く。

そこから入つてきたのは延珠だった。

「あら、延珠ちゃん。用事はいいの?」

「もう済ませてきたのだ。」

そう言う延珠は笑顔で木更に封筒を渡した。それには、天童民間警備会社様へと書かれていた。

「?」

よく分からずにそれを開けると、中からはお金が。

「!?!」

「貰い損ねてたからな。ちよつと警察署に行つて受け取つてきたのだ!」

「延珠ちゃん……あなたが最後の良心よ……」

蓮太郎が駄目なばかりにしつかりと育った延珠に思わず涙する木更。

「これで里見君の給料差つ引くだけで済む……」

「はあ!? 何で俺の給料下げられるんだよ!？」

「あんたがほぼ毎回厄介事作ってくるからでしょうがア!？」

初めてキレた蓮太郎とそれを迎え撃つ木更。

「わ、妾の給料は減らしていいから……あんまり使つてないし……」

「……………ごめんさい、なんか涙出てきた……」

「……………俺も。ごめん延珠。」

「?」

十歳児にここまで気を使わせた事になんかやりきれなくなる木更と蓮太郎。

原作よりも苦勞して育った彼女はもう、色々と健気だった。

ちなみに、木更はこんな男に惚れるなんて……と、二重の意味で涙している。

それと、延珠が給料使つてないというのは本当で、食費、学費、家賃、水道代、光熱費、電気代諸々は全て蓮太郎が支払っている。いくら延珠が出すと言っても、流石にそればかりは蓮太郎の良心が許さなかった。と、どうかそれをさせてたら十歳児の子供に生活費を支払わせるという史上最底のヒモ男になる。

だが、実は延珠は木更の知らないところで巻き起こしている蓮太郎の面倒事のせいで胃薬を最近飲むようになってきている。延珠曰く、自分が倒しきれなかった時に蓮太郎が横から手柄をかつさらって、それだけならまだしも吹っ飛んだガストレア（死体）の巻き起こす二次災害を見ると胃が痛んでくるのだそうだ。ちなみに、そういう事故は大體延珠が

「これはガストレアが最後の悪あがきとしてやった。イイネ？」
「アツハイ。」

という形で駆け付けてきた警察やら何やらに説明している。

「何度大人しく私が民警やって延珠ちゃんと組んでたらと思つた事か……」
「おい。」

実は木更、原作とは違い、腎臓は健康そのものだ。だが、自分よりも遥かに強い蓮太郎を民警にしたら自分はガツポガツポ儲かるんじゃないかという邪な気持ちに負けた結果がこれである。

木更はリアル空破斬が出来る人外に片足突っ込んだ人間だが、蓮太郎は例えどんな敵でも神速のワンパンで片付ける人外という領域からはみ出てもう何か別の次元に行つて存在だ。ちなみに木更が一度だけ興味本位で焼夷手榴弾を蓮太郎に投げて爆発させた事があつたが、服が全焼するだけという物理法則とかこの世界を構成する法則とか

全てに喧嘩を売るという結果が残った。もちろん謝った。

さてさて、そんな木更のSEKKYOUは延珠が蓮太郎と組んでしまったという不遇に心を痛めた事によりお流れになった。

そして蓮太郎はちよつと知人の場所へと向かっていた。受付を顔パスし地下の研究室に入る。

「せんせー、来たぞ〜」

「やあ蓮太郎くん。」

と、挨拶してきたのはカツサカサの死体……ではなくその後ろにいる隈がものすごく濃い女性、室戸董だ。

「……先生、今ここでその死体を塵に変えられなくなかったら今すぐそれを退けてくれるか?」

「全く、冗談の効かない男はモテないよ?」

「るっせえ、余計なお世話だ。」

董が死体を側にあるベツトに置き、蓮太郎がそこら辺の椅子に座る。

「で、蓮太郎くん。君は何時になつたら死体になつて私に研究させてくれるのかな?」

「俺なんか研究しても役に立たねえだろうが。それに延珠が悲しむ。」

「役に立たないなんてとんでもない。君のその異常なまでの強さ……研究者からしたら

是非ともモルモットにしたいだろうね。」

「あんた医者だろ。」

「だから私は無理強いはいしない。だが、君が死んだら死体はここに来るように既に手配済みだ。」

「天寿全うしてからになりそうだな。その手配が完了するのは。」

二人の軽口が暫く続いた。そして、董が死体の胃袋から出てきた消化しかけのドーナツを食わせてきたりとかして吐いたりとかあったが、蓮太郎が本題を切り出す。

「で、先生。今回の事件の感染源ガストレアの特定は出来ているのか？」

「残念ながら。だが、感染源ガストレアはおそらくハエトリグモだと言う事は分かっている。」

「そんならい俺にも分かる。」

今回、蓮太郎は董に今回の騒動を引き起こした感染源ガストレアについて聞きに来ていた。だが、どうやら有力な情報はないようだ。

「そういうえば君は初めてあつた時からそう言う事に関しては詳しかったね。」

蓮太郎と董が会つた理由。それは、蓮太郎が初めてガストレアをワンパンした時だった。董はそんな蓮太郎に目を付け、拒否権ありの人体改造を提案してきた。勿論蓮太郎は断つたが。それからこうやってちよくちよく会っている。

「そんじや、先生。何かあったらまた頼みます。」

「精々頑張つてくるといい。蓮太郎くん。」

蓮太郎はそのまま振り向かずには帰っていった。

そして蓮太郎が帰宅してから夕飯時。

「今日の晩飯はもやしご飯ともやし炒め、もやしのステーキともやしの味噌汁だ。」

「今日も美味しそうだな！」

「たんと食え！おかわりなら（多少は）ある！」

そんな感じでワイワイとした食事が終わり、しばらくしてから。

「延珠、注射の時間だ。」

ガストレアウイルスの進行を抑制する抑制剤。これは民警ペアには必ず配られる物で、大怪我やガストレアウイルスを注入されるのを防げば進行度を0に抑えることもできる。

これを針のない注射器で打ち込む。針があると呪われた子供たちの驚異的な治癒力により針が肉に埋まって大惨事となるからだ。他にはバラニウム製の注射針を使うというのもあるが、それだと暫くの間血が止まらないのでこの針のない注射器で薬品を打ち込むしかない。

「うう……これは嫌いだ……」

が、延珠は注射の痛みは苦手なようだ。

「なら俺が握力で無理矢理染み込ませてや……」

「とか思ってたけどそんな事はなかった。」

蓮太郎が骨の折れない程度で液体の入った小瓶を握り潰せば人体に染み込ませることは一応可能だ。小瓶のガラスが延珠の皮膚に突き刺さる事になるが。

そんなの目に見えてるので延珠は素直に従う。

そんな感情豊かで十歳にして胃痛持ちの延珠はIISOで初めて蓮太郎と会った時は人間不信の塊のような目をしていた。

そんな延珠がなんで今のようなようになったか。それは、人間不信がために蓮太郎が触れようとした途端にその手を蹴り上げようとした足を蓮太郎がカウンターのカウンターで掴んで無意識にアッパーを決めてしまった事が原因だった。延珠曰く、そんな強さとそのあとすぐに土下座してくれるくらいの優しさに惚れた、と。ちなみにその時の延珠は顎の骨にヒビが入っていた。が、三日で治った。だが、蓮太郎曰く常人なら三回死んでる位の勢いで殴っちまったからマジで死んだかと思っただけらしい。

「さあて寝るか。」

と、蓮太郎は布団の敷いた部屋に向かう。その後延珠と色々あったが就寝。なんやかんやで二人の仲は滅茶苦茶いい。

次の日。蓮太郎が学校で授業を受けてる途中で木更が蓮太郎を迎えに来るといふ事件が起きたりした。

木更が言うに自分と蓮太郎は防衛省へと招待されているらしい。どうやら、重要な会議があるらしく、高ランクの民警と民警会社と呼ばれているらしい。

だが、蓮太郎のIP序列は10万位ポッキリ。実はこれは蓮太郎が無理矢理ここにしてくれと聖天子に願った結果なのだが、それはさておき中に入ると、様々な民警会社の社長及びその付き添いが多数居た。

が、蓮太郎も木更もこの場にいる者よりも強い。それは本能で分かっているので視線を無視して天童民間警備会社とプレートの置かれた席に座ろうとする。

「ん？なんだ？今時の民警は子供でも務まっちゃうようになったのか？」

が、道を塞ぐように話しかけてきたのは明らかに柄の悪い口元にバンダナをした男。

その横で蓮太郎と木更の人外っぷりをこれまた本能で感じたのかペアの子供が引き留めようとしているが迷ってるらしくウロウロしている。

「おいおっさん。殴り飛ばされたくなかったらとっととそこどけよ」

「里見君！（殴ったら相手の命が）危ないから止めなさい！」

「へっ、その嬢ちゃんは分かっているようだな。」

明らかに途中に入った○の部分をはいてはいない男。その横でペアの子は泡吹い

てぶつ倒れてる。

「あく……もういい。殴り飛ばす。」

「こら！本当に（相手の命が）危ないから止めなさいってば！（相手が）病院送りどころの騒ぎじゃなくなるのよ！」

完全にヤル気の蓮太郎を羽交い締めして止める木更。泡吹いてぶつ倒れた子はもう白目も向いて顔面土気色という生きてるのか不安になる程の症状で倒れている。さらに、若干の実力者が冷や汗垂らしたりたつたまま気絶してたりたつたまま泡吹いてたりしてる。

「将藍。止めておけ。（お前が負けるといふ結果はお前以外）分かっているからな」

「……………チッ。」

下手したらDie惨事になってたのをなんとか男の所属してるところの会社の社長が止めた。その最中に蓮太郎が白目向いて泡吹いて顔面土気色で倒れている男のインシエーターにビンタかまして起こそうとしていた。ゴキツという音が聞こえたが彼女も呪われた子供たちなので特に問題はないだろう。無いと信じたい。あと歯が飛んでたのも気のせいだと思いたい。思わせてくれ。

「おい夏世。起きろ。何寝てんだ。……………お、おい？大丈夫か？」

ほっぺた真つ赤で顔面土気色で倒れてる（口から吹いた泡は木更が綺麗に拭き取り白

目向いたままだったのも木更がそつと瞼を降ろしてあげた。自分のイニシエーターを起こそうとするが、起きないためにちよつと心配になる男であった。

さて、そんな事はさておき、木更が席に座ったところで真正面のモニターの電源がつき、一人の女性（後ろにジジイ付き）が現れた。

『どうも、民警の方々。聖天子です。』

瞬間、その場に居る全員に衝撃が走った……いや、蓮太郎以外にだ。

聖天子はモニター越しに会議室を見渡す。そこには、一つだけ空席があった。が、聖天子は特に気にした様子はない。

『今回集まっていたいただいたのは他でもありません。あなた達に極秘の依頼を頼みたいのです。』

聖天子から直接の極秘依頼。それによりさらに衝撃が走った。聖天子からの依頼なんて達成した暁にはどれだけ知名度が上がる事か。

『依頼の内容を聞いてから断る事は許されません。しかも、今回の依頼は命を落とす可能性もあります。なので、そんな危険な事を受けるのは御免だという方は出ていって構いません。こちらからは何も咎めません。』

つまり、聖天子は命が惜しければここから去れと遠まわしに言ってるのだ。だが、民警とは元より生と死の瀬戸際を行くような職業。今更命が惜しいとは言えない。その

ため、その場にいた全員は動かなかった。

聖天子はそれを見ると、改めて依頼を口にする。

『今回、あなた達に頼みたいのは先日感染者を一人出した感染源ガストレア。それと、そのガストレアが持っているであろうケースを回収して欲しいのです。成功した暁には十億円払わせていただきます』

「よし行くぞ木更さん。俺達なら楽勝だ。」

「待てやこの馬鹿野郎。」

閃光。それが蓮太郎の頭へと吸い込まれ、ガキンツ!!と音が鳴り響く。それは真剣だったが、蓮太郎の髪の毛すら斬れていない。

「まだ何を回収するのかとか何をしたらいいのかとか聞いてないでしょうがこの馬鹿!!」

「……………ああ!」

「……………もういや。」

木更がこつそりポケットから水なしで飲む即効性胃薬を口に含んで飲み込む。

「ごめんあそばせ。おほほほ。」

木更は表面上をそれで取り繕って席に再び座る。

『……………よ、よろしいでしょうか?』

流石にドン引きの聖天子。一応彼女も蓮太郎の人外っぷりは知ってるがドン引きせざるを得ない。

『……こほん。回収して頂きたいのはこちらのケースです。』

モニターに写真が映し出される。それは、白いケースだった。

全員の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

勿論、蓮太郎の頭にも。あれが十億円の評価があるものなのか。しかもそれは聖天子が欲しがるほどのものなのか、と。

一瞬の沈黙。だが、それを蓮太郎が破った。

「聖天子様。その中身は何なんだ？ それ位知る権利は俺達にだってあるはずだ。」

(さ、里見君が珍しく真面目な事を……)

「木更さん？ 何か失礼な事考えたろあんた。」

デコピン（普通なら頭パン）をくらわせてやろうかとか考えた蓮太郎だが、すぐに聖天子からの返事が帰ってくる。

『それにはお答えできません。それは依頼人へのプライバシーへの侵害になりますから。』

ざわつく会議室。当たり前だ。幾ら聖天子からの直接の依頼だからと言って中身がわからなければどう扱っていいのかすらも分からない。

「……チツ、ああそうかよ。だろうと思っただぜ。」

蓮太郎はそう言うと、トントン。と地面を靴のつま先で叩き、

「木更さん、二秒後、伏せろ。」

構えをとった。

「え？」

「行くぜ!!」

「みんな！伏せて!!」

木更の叫び。必死すぎるその声に全員が伏せる。その瞬間、

「普通のパンチ！」

壁が消し飛んだ。そう、文字通り蓮太郎の真正面の壁が消し飛んだのだ。

遅れて衝撃。ビル全体が揺れる。

「ヒヒヒ、見事な物だよ、里見蓮太郎君！」

「……またテメエか。」

穴の下から飛び出してきたのは赤い燕尾服と仮面、さらにシルクハットを被った男。

そして、小太刀を二本背中につけた黒髪で赤目の少女。

「どうもお初お目にかかる。私の名は蛭子影胤。」

赤い燕尾服の男、影胤は机の上に登ってモニターへ向けて礼をした。

「ほら、小比奈。挨拶を。」

「蛭子小比奈、十歳。」

小比奈と自己紹介をした少女はドレスのスカート部分を摘んで少し持ち上げ、お辞儀をした。

これだけならまだ愛らしい。だが、全員が感じていた。こいつらは普通ではないと。

「このままここにいとまた彼に仮面を壊されかねないからね。要件だけ伝えよう。」

影胤は蓮太郎を一度見てから、すぐにモニターへと視線を戻す。

「七星の遺産は私が頂く。」

「つまりお前もこのレースに参加するって事だな。蛭子影胤。」

「その通りだ。」

「ついでに聞く。七星の遺産ってのは何だ。」

「君達が探し求める事になる物だ。」

「けっ、んな事知ってんだよ。」

「まあ、そうだね。さて、掛け金としては……君達の命なんてどうだい？」

「何訳のわかんねえこと言ってるんだ！」

その時、将藍が動いた。背負っていたバスターソードを地面に一度突き刺し、片手で構え、突っ込む。

「ぶった斬れろやアアア!!」

高速で振るわれるバラニウム製のバスターソード。だが、それは見えない壁のようなものに弾かれ、飛んでいく。

飛んでいったバスターソードは気絶した彼のイニシエーターの顔の僅か数センチ横につきささった。その瞬間目が覚めたその子はいきなり目の前にバスターソードがあつた事で再び夢の中へ。

と、ここで蓮太郎が腕時計を見て焦りの表情を浮かべた。

「なっ!？」

「ヒヒヒ。」

「う、撃て!撃てえ!!」

誰かが叫んだ。その瞬間、銃を持っている人間が全員それを抜き、引き金を引く。が、飛んでいったバラニウム製の弾丸すらその壁に止められる。

「に、人間なのか?」

「もちろんだ。まあ、そのために内蔵の代わりにバラニウム製の機械を詰め込んでるけどね。あ、こら小比奈。触ったら危ないよ。」

驚愕に染まるプロモーター達。だが、それを見て影胤はどんな表情をしているのかは分からない。

「改めて名乗ろう。私は元陸上自衛隊東部方面第七七七機械化特殊部隊……『新人類創造計画』蛭子影胤だ。」

その瞬間、風が吹いた。

「ゴチャゴチャうつせえんだよ。オッサン！こちとら時間ねえんだ！」

蓮太郎だ。彼が一瞬で影胤の真つ正面に回り込んだ事により起きた風だった。瞬間、蓮太郎の神速の拳により割られる見えない壁。パラパラと弾丸が地面に落ちる。

「パパー！」

だが、それに小比奈は反応した。小太刀を抜きながら蓮太郎へと斬りかかる。しかし、

「天童式抜刀術一の型一番、滴水成氷！」

爆音。それと同時に小比奈の小太刀が小比奈ごと弾かれる。

「私だつて戦えるのよ。」

それをしたのは木更だった。小比奈はその木更を見て表情を変える。

「パパ……この二人、マズイ。」

「知っている。だから、ここはご退場させて頂こうか。」

「逃がさないわ。ここで捕まえさせてもらう、蛭子影胤。」

チン。と音を立てて鞆に仕舞った刀の持ち手に手を掛ける木更。

だが、蓮太郎は。

「……いや、とつとと行け。」

「里見君!？」

木更が蓮太郎に掴みかかる。だが、蓮太郎は懐から何かを取り出し見せ、ついでに腕時計を見せた。それによりハツと表情を変える木更。

「そ、そうね。別にその内捕まえられるんだし逃がしてもいいかもね。(里見君がさつき気付いてくれてよかった……)」

「(何を企んで……あつ) そうかい。ならば逃げさせてもらおうよ。」

仮面の下で察したような顔を見ると影胤。ヒョイヒョイと元壁の前へ行くと、影胤は何かを取り出し。

「プレゼントだ。」

と、置いていった。それは結構でかいプレゼントボックスだった。それをおいた影胤は小比奈と共に去っていった。

「う、家の社長が!自宅で殺されて……」

それと同時に唯一出席してなかった会社の社員がドアから入ってきた。プレゼントボックスからは赤い液体が……

「……悪趣味なやつだな。」

『……依頼の追加です。何をしても蛭子影胤より先にケースを奪い、蛭子影胤、蛭子小比奈ペアを討伐してください。話は以上です。』

そして通信が終わる。その瞬間、パアン！と音がした。

その音の方向を見ると、そこにはもう蓮太郎と木更の姿はなかった。

まさかもう討伐に行ったのか……と、戦慄する民警達だった。

将藍のペアの子は暫くの間スヤア……していた。

さて、そんなソニックブームを残して消えた蓮太郎と木更はというと、

「タイムセールまで後三十秒よ!?!あなたが変な質問しなけりや完璧に間に合ってたのに!!」

「三十秒だと?・楽勝だぜフーハハハー!!」

結果、タイムセールに間に合い、二人で六円となったもやし（お一人様二袋限定）を全力で取りに行ったのだった。

この二人の優先順位は蛭子ペアへタイムセールらしい。これを悟った影胤は鋭いのか自分もお世話になっているのか。真相を知る者はいない。

「見ろよ木更さん!もやしがこんなにあるぜ!」

「明日から暫くはもやしには困らないわね」

ちなみに、タイムセール中の奥さんたちはこの人外に蹂躪されていた。

スリーパンチ

タイムセールから余裕の生還を果たした蓮太郎はホクホク顔で帰宅し、その日は特に何もなく終わった。そして翌日。

「で、なんだ。お前ら全員俺に弟子入りしたいとか言ってるのか？」

『そうで〜す！』

早朝の公園。延珠に叩き起され連れてこられたかと思ったら延珠のクラスメイト男女合わせ八人に弟子入りしたいと言われた。

「なあ延珠？このガキ共にお帰り願いたいんだが？俺は寝たい。」

「よいではないか。」

実際、蓮太郎は本当に眠たい……と、言うかふて寝したかった。

丁度昨日、帰宅した時に延珠がこっそり買ってつい数分前に届いた最新型のノートパソコン（18万円）をこっそり使ってるのを見た蓮太郎が自分の通帳を見て涙してふて寝したからだ。夕食はちゃんと作ったが。

ちなみに、延珠の通帳には子供の小遣いにしては多すぎる位の額が入っている。どれくらいかというと最新型のノートパソコン（18万）を安かったと言えるくらいに。

「はいはい、分かったよ。この俺が噂に聞きし里見蓮太郎だ。」

もう観念して技……と、言うかなにか適当に見せてお帰り願おうと考えた。

「ししよー、ガストレアをいつもワンパンで倒してるって本当ですか!？」

「本当だ。」

「ししよー、この公園をパンチだけでクレーターに作り替えれるって本当ですか!？」

「本当だ。」

「ししよー、マシンガンの弾を髪の毛で弾けるって本当ですか!？」

「本当だ。」

「ししよー、このボールを受け止めてみるお!」

「そのまま蹴り返す。」

門答の途中で蹴られたサッカーボールを蹴り返して割れない程度の力で近くの木にぶち当てる。

ちなみに、予備動作はパスのそれであった。

『おお〜!』

「まあ、ざっと説明すると俺の流派……と、言うか戦い方は、」

軽く目の前に向かってジャブを放つ。その瞬間、突風が吹き荒れた。

「とにかく殴る。それだけだ。」

「必殺技はないんですか？」

「ない！」

あるといえばあるのだが、必殺『マジシリーズ』はただ全力でパンチを放つたりするだけの技だ。正直必殺技とは言えない。

「んじゃ、試しにその木から落ちてる葉っぱを全て粉々にしてやろう。」

と、蓮太郎はすぐそばの葉っぱが落ちてきている木の前に立った。楽に構え、拳に力を込め、

「連続普通のパンチ。」

開放した。

パァンツ!!と破裂音にも等しい音が響き、瞬きの瞬間で落ちてきていた葉っぱは消え去っていた。

遅れて衝撃波が背後にいた子供達に襲いかかる。

「ま、こんなもんだ。」

「……なんか思ってたのと違う。」

「もつとこう……ドパーンツ! って感じの期待してたのに何も見えなかった……」

「技名もかつこ悪い……」

「せうかいせうかい。」

技名がかっこ悪い？当たり前だ。そのままの事なんだから。と蓮太郎は内心で言う。それとドパーンツ！って感じの事は蓮太郎なら軽くできるのだが、そんな事したら目の前十メートルにある物が全て跡形もなく消え去るだろう。

「家帰ってプレスステやろうぜ。」

「そうしとけ。」

ぞろぞろと帰っていく子供達。それを引き留めようとする延珠だが、スルー。

「なんでだ！蓮太郎はあんなにも凄かったではないか！」

「子供ってのはもつとキラキラしたものとカドカーンってしたもんが好きなんだよ。別にお望みとありやマジシリーズをもつと使ってやつても良かったんだぜ？」

「それは地図が書き換わるから止める。」

実は数年前、モノリス外の地図が書き換わったことがあるような無いような……

「で、これからどうする？行きたいところあったら行くぞ？」

今の時間はちょうど10時辺りになったところ。出かけるには丁度いい。

「なら面白い物だ！」

「自分のもんは自分で買えよ？」

と、そんな感じで二人が出かけて電車に乗ってやつと到着し入店したのは電気屋。その中の丸々一フロア使ったアニメグッズ発売所が目的地だった。

店内の大型モニターでは最近女の子と大きなお友達の中で流行りの天誅ガールズのPVらしきものが流れていた。

その中でヒロインである天誅レッドが「死ねエエエ!!」と悪役にもなれるのではないかと思える程凶悪な顔で敵に斬りかかっているシーンが写されていた。

「どういうアニメなんだよあれ……」

そして延珠は絶賛その天誅ガールズのグッズが並んでいる場所で商品を見ている。

スマホで調べると、魔法少女物なのに復讐譚が描かれたりとかして面白い。どの層を狙ってるのか本気で分からなくなった蓮太郎だった。

はぐれると見つけるのが大変なので近くの商品を見ながら延珠に近づく。

コスプレ衣装等の値段を見てギョツとしながらも延珠に近付くと、延珠は既に手に商品を持っていった。

「なんだそりゃ」

「これか？これは……」

延珠の説明によると、天誅ガールズ本編で出てくる物で、仲間が嘘をついたり裏切ったりすると割れる物らしい。

なんという嘘発見機……と思ってたら延珠はとつと購入。レジで表示された値段を蓮太郎の人外並の視力が捉え、食費二カ月分……とさらに蓮太郎にダメージを与え

る。

ダメージで動けない間に延珠にそのブレスレットをまんまと着けられた。外したら延珠が泣くから外さないでおくか。と取り敢えずは袖で隠しておくことにした。が、店を出てから自分の腕と蓮太郎の腕を見て嬉しそうに笑っていたので、隠すのは止めた。

その瞬間、地に響くような怒声が聞こえてきた。

「……面倒な事になるから回り込んで……」

「そいつを捕まえろオオオオ！」

響いて聞こえた声。走ってくるのは目が真つ赤な少女。

「また厄介な……」

手には大量の食料。おそらく、盗品だろう。

こつちまで逃げてきたら首根っこ捕まえて民警という立場を使ってとつとと警察に突き出すと言つてそのまま外周区に蹴り出してやろうと考えたが、その前に捕まってしまうた。

「放せエー！」

手から食料がボロボロと落ちる。そして罵倒の声。

蓮太郎がお前らが赤目の子を呪われた子供たちと差別して外周区に食料もなしに追いやつた結果がこういう事案だろうが……と思ひながらもこつちで引き取つて外周区

に蹴り出そう。と考え、民警のライセンスを取り出そうとしたが、先に何をしたか聞く事にした。

やった事次第では少年院に送り込まなければならぬ。

「なあ、この子は何をやったんだ？」

「ああ？盗みをやったあとに取り押さえに来た警備員を半殺しにしたんだよ。」

こりゃあ少年院送りか。と考え、民警ライセンスを取り出そうとした時、赤目の少女は延珠へと手を伸ばした。それを掴もうとする延珠。だが、蓮太郎はその手を遮って延珠を遠ざけた。

「れ、れんた……」

「このままだとお前までバレル。それにあの子のやった事は犯罪だ。少年院で反省させなきゃ駄目だ。」

延珠の耳元でそれだけ言い、民警ライセンスを取り出そうとする。が、

「おいお前ら！何をやっている！」

騒ぎを聞きつけた警察がやってきた。警察が来たのなら民警がこういう事案には関われないと、舌打ちをする。民警はガストレアが専門だ。こういう事案では警察の方が立場は上だ。

警察は少女を見るとああ。と頷き、何も聞かずに手錠を嵌めた。

「なっ!? お、おい!」

堪らず蓮太郎が警察に呼びかける。

「あ? 何だ?」

「その子が何したか分かってんのかお前ら。特に罪状の確認もせずに捕まえるなんざおかしいだろうが。」

警察は蓮太郎の言葉を聞いて周りを見渡す。

「窃盗だろう。」

「本当にそれだけか?」

「チツ……うるさい。それ以上は公務執行妨害とするぞ。」

「……………くそが、なんつー職権乱用だ。」

この時点で蓮太郎は察しがついた。この子がこの後どうなるかを。

罪状が分からなければ罰のつけようがない。そして相手は人権のない呪われた子供たち。ならこの子がこの後どうなるか。

警察は謝礼だけするとパトカーに少女を押し込め、去っていった。

「蓮太郎……なぜ……なぜ!」

「延珠、一人で帰れるな?」

「……………え?」

「こつからの俺は『民警』じゃない。」

蓮太郎は目が薄赤く染まった延珠の頭に手を乗せて、ワシヤワシヤと撫でると、
「今からの俺は趣味でヒーローをやってる男だ。」

蓮太郎は、人気のない路地裏へと消えていった。

延珠はその場で立ち尽くすしかなかった。

延珠と別れた蓮太郎は少女を乗せたパトカーを追い、建物の上をフリーランで駆けていた。

最早この時点でパトカーは警察署へ向かっていない。鍛え抜いた蓮太郎の体は足場の悪い建物の上でもパトカーに負けない程速く動いていた。

「んな胸糞悪い事させるかよ。」

蓮太郎は駆ける。今の蓮太郎はガストレア専門のプロフェッショナル、民警ではない。悪から呪われた子供たちでも、市民でも、動物でもなんだろうと守り抜く『ヒーロー』だ。

咄嗟に延珠にはヒーローだと言ったが、案外民警を止めてフリーターをしながら自称

ヒーローをするのもいいかもしれないと思ってしまったりもした。

そしてパトカーは人気がない廃墟へとたどり着いた。途中からパトカーのミラーに写らないように陸路を走っていたため、警察官には気付かれていない。

二人の警察官は少女を乱暴にパトカーから出すと拳銃を押し付けて廃墟へと誘導する。それを見て蓮太郎も中へと入る。

壁へと押し付けられた少女は拳銃を突きつけられ、恐怖によつて動けない。警察官はゲスい笑みを浮かべている。

撃たれてからでは間に合わないかもしれない。そう思った蓮太郎は声を上げた。

「おいおい、今時の警察様は女の子を廃墟に追いやって拳銃突きつけんのか？」

突然の声に驚き蓮太郎の方に振り向く警察官。そして、まだ絶望に染まった顔色をしている少女。

「き、貴様……さっきの……」

「覚えていたのか。頭悪そうなのにな。」

どうやってつけてきた。と聞きそうになったが、その前に拳銃を少女に突き付けるのを忘れない。逃げられてはこちらが殺されるかもしれないからだ。

「なんだ？お前もこいつを撃ちたいのか？なら別に一発くらいなら……」

「んな事頼みに来たんじゃねえよゲス野郎共が。」

瞬間、蓮太郎から放たれたのは圧倒的怒気。

「大の大人がそんな子供に拳銃突き付けて恥ずかしくねえのか？」

「こ、こいつは呪われた子供たちだぞ！殺して何が悪い！」

「例えその子の目が赤かろうがその子は人間だ！殺していい理由にはならねえだろうが！」

「人間？何言ってるんだ。こいつはガストレアだ！人類の敵だ！」

「俺の知ってるガストレアはそんなに可愛くないね。伊達にいつもガストレアの専門家名乗ってねえんだよ。」

そう言つて蓮太郎が取り出し見せたのは民警ライセンス。

だが、それがどうしたと言わんばかりの警察官二人。

「……どうせこの際だ。全部このガキのせいにしてテメエも殺してやるよ。」

「そ、その人は関係ない！」

少女が叫ぶが、拳銃を突きつけられ、短な悲鳴と共に黙つてしまう。

「……そうか。なら、テメエら……地に伏せる覚悟は出来てんだろうな！」

「死ね!!」

「ガウン!!と発砲音と共に放たれる弾丸。蓮太郎はその音を聞いた瞬間、地面に手を置き、指をめり込ませる。」

「必殺『マジシリーズ』、マジちゃぶ台がえし!!」

そして蓮太郎が手を上に持ち上げた瞬間、コンクリートの床が持ち上がり、弾丸を弾いた。

驚きの声を上げる間もなく蓮太郎は拳でそのコンクリートを砕き、ソニックブームを巻き起こしながら一瞬で肉薄した。

「フンツ!」

アッパァー一閃。クレーターを作りながら放たれたそれは警察官の顎を打ち抜き、真上へと吹っ飛ばす。

ドガツ!!と音を立てて首から上が天井にめり込む。

「ここ、この化け物めエエエ!!」

ガウン!!と再び放たれる弾丸。だが、蓮太郎はそれを避けた。

「弾丸見てから回避余裕でした。」

「ひ、ヒイヒイ!!」

さらに三発弾丸が放たれた。だが、蓮太郎はそれをすべて手のひらで握りこんだ。

そしてグシャツと音がして次に蓮太郎の手が開かれると、そこからはぐしゃぐしゃになった弾丸が転がり落ちてきた。

「オラァ!!」

そしてお返しに放たれた蓮太郎の拳はもう一人の警察官の顔面を打ち抜き、吹っ飛ばした。

「ゲス共に負ける俺じゃねえんだよ。」

再び出来たクレーターの中心で蓮太郎は残心を解いた。そして、少女の元へと歩んでいく。

「ひっ……」

弾丸すら避けて呪われた子供たちでも出来るかどうか分からない芸当をさらりとした蓮太郎が歩いてくるのを見て後ろに下がる。が、壁に背中が触って後退出来ないのを悟らせる。

そして、目の前で手を伸ばしてきた蓮太郎を見て殺される。と目を固く瞑る。だが、待っていたのは衝撃でも痛みでも無く、人肌の暖かさだった。

「え？」

「間に合った……マジで危なかった……」

蓮太郎は少女を抱きしめていた。

「な、なんで……」

「困っているやつを見つけた助ける……それが、ヒーローだろ？」

少女を抱きしめながら蓮太郎はそう言った。

「ここから離れよう。見られたらお前に罪が擦り付けられるかもしれない。」

蓮太郎はそう言うのと、少女をそのままお姫様だっこし、その廃墟から去っていった。残ったのは天井にめり込んだ警察官と顔面が物凄い腫れた警察官だけだった。

そして廃墟から少し離れたところで蓮太郎は少女を下ろした。

「なあ、お前、本当は何をしたんだ？」

さっきの商店街での事だ。少女はゆっくりと話した。

「もう食べ物がなかったから盗んで……そしたら勝手に後ろで人が転けて……そしたら半殺しにしたとか冤罪擦り付けられて……」

やっぱそんな感じか……と溜め息をつく蓮太郎。

「まあ、事情は分かった。」

「そ、その……出来たらあなたに恩返しさせてほしい。何でもするから……」

変態が聞いたらん？今何でもするって言ったよね？とか言ってエロ同人的な展開になるのだろうか、蓮太郎はそんな男ではない。

「そうだな……なら、俺の知り合いに信用できる警察官がいる。その人にお前を引き渡すから少年院行きか嚴重注意か……それは分かんらんがちゃんと罰を受ける。そんでもってもう人様に迷惑のかかる事だけはするんじゃないぞ？」

蓮太郎はそれだけ言うのと、携帯を取り出して先日知り合った多田島刑事へと連絡し、

少女を引き取ってもらう事にした。

暫くしてやってきた多田島刑事に少女を引き渡した蓮太郎は帰路についた。

さてさて、そんな訳で人助けしてスカツとした蓮太郎は鼻歌を歌いながら歩いて帰路についていた。案外遠くに行つてたようで夕飯は遅くなりそうだった。

延珠にはちゃんとあの子は助けた。と帰つたら言わないとな。と考えていると、横の路地から嫌な気配を感じた。

「……なんだ、男相手にストーカーか？ 蛭子影胤。お前ホモかよ。」

「残念ながら私は同性愛者ではないよ。至つてノーマルさ。」

「お前がノーマルだつたらこの世の人間の殆どがノーマルになつちまうだろうが。」
「ヒヒヒ、違うない。」

出てきたのは蛭子影胤。そして、その娘の蛭子小比奈。

蓮太郎は鬱陶しげに影胤を睨みつける。

「何のようだ？」

「君はイラついているようだね。ならば単刀直入に言おう。我々と組む気はないか？ 里

見蓮太郎君。」

「は?」

「我々と組んでこの世界を破滅と混沌と絶望に染め上げる気はないかい?」

「何言つてんだ。ぶん殴るぞ。」

「……やれやれ。小比奈。ちよつとあの邪魔な腕を斬つてきなさい。」

「うん!」

瞬間、小太刀を抜いて恐るべき速さで突つ込んでくる小比奈。

やれやれ、どうもモデルはマンティスらしいな。と溜め息をついた蓮太郎。それと同じ時に蓮太郎の背後から何者かが跳躍。突つ込んできていた小比奈へと突つ込んだ。刹那の間交わる赤と黒。

「蹴れなかつた!」

「斬れなかつた?」

そして着地。軽い音と共に二人は着地する。

「なんで帰んなかつた、延珠。」

「蓮太郎が心配だったのだ。」

「お前に心配されるほど弱い男かよ。俺は。」

「そんな事はないが、もしもと言うものがあるだろう。で、蓮太郎。あれはなんだ?」

「敵だ。」

やっぱり。と延珠は呟くと、いつでも飛び出せるよう構える。蓮太郎はその延珠の前に手をやり、自分の後ろに下がらせる。自分一人で十分だと言わんばかりに。

延珠もそれに気付き、そつと構えを解いて、だけど何時でも手助け出来るように力だけは開放しておく。

「パパ……あのイニシエーター強い。名前は？」

「藍原延珠だ。モデル・ラビットのイニシエーターだ。」

「延珠、延珠、延珠……うん、覚えた。私は蛭子小比奈。モデル・マンティス。接近戦は無敵。」

(……目の前に本当の無敵がいるけど黙っておこう……)

空気を読める女、延珠。

「さて里見君。私の提案、受け入れてもらえるかな？勿論、報酬なら……これだけ出そう。」

影胤はアタッシュケースを取り出し、蓮太郎の目の前にロックを解除して投げる。

接地と共に開かれたアタッシュケースの中には大量の札束。思わず唾を飲んでしま

う。「……幾ら金を積まれても俺はお前の提案には乗らねえぞ。」

「目が金に行ってるようだが？」

「貧乏人が札束見りやあそりや受け取る気はなくとも目は惹かれるさ。」

もちろん受け取る気はない。だが、札束に目が行ってしまふのは最早仕方が無いことだ。

蓮太郎はもう目が惹かれないようにアタッシュケースを閉じて影胤へと蹴り返す。

「……君は大きな過ちを犯したよ。」

「俺に過ちがあるんなら髪型変えられなくなったことだけだ。」

「………そ、そうかい。だが、一つ言っておこう。君がどれだけ奴らに奉仕したところで奴らは何度でも君を裏切る。」

蓮太郎と影胤は睨み合う。だが、そこに響くパトカーのサイレンの音。

「……水入りだ、里見君。」

影胤は踵を返す。それに小比奈がトテトテとついていく。

「………こういうやり方は趣味ではないが、明日学校に行ってみるといい。君もいい加減現実を見るんだ。」

そして影胤と小比奈は闇へと消えた。

残ったのは蓮太郎と延珠の二人。

「……あやつら、強いぞ。」

「だけど、俺達が勝てない相手なんかじゃない。だろ？ 延珠。」
「うむ！」

だが、蓮太郎の心には何かが突っかかっていた。だが、それは気のせいだと振り切つてとつとと帰った。

タイムセール逃したのを気付いたのは帰宅してからだった。

「うわあああああ!! 今日もやし一袋六円で肉まで半額だったのにいいいいいい!!」
なんとも締まらない蓮太郎であった。

(……余りにも遅かったからそこら辺でホットドック買って食べてきたなんて言えない。)

フォーパンチ

翌日。蓮太郎は延珠を学校へとマツハ自転車（比喻無し）で送った後にマツハ自転車で学校へと通学した。

眠気のある授業と楽すぎる体育を終わらせて再び授業。それも終わってもうすぐ昼食も食べ終わったと言うところでふわあと欠伸をしていると、延珠の通っている勾田小学校の教師から連絡の電話がかかってきた。もしかして延珠が何かやらかしたのか？ と思い出てみる。

「はいもしもし。」

そして、教師から言われた言葉に絶句した。思わず携帯を落としそうになるが、なんとかもち堪え、すぐに蓮太郎は携帯をしまい、教師に居候の小学生が早退することになったから迎えに行くと言っただけ言っただけから飛び降り、走る。

自転車の事は忘れていた。だから、ソニックブームが巻き起ころうと必死で走った。到着したのは電話から五分後だった。

学校に事情を話して中へと入れてもらい、対面室のような場所に連れていかれる。暫くしてから延珠の担任の先生が来た。

延珠の保護者と言う事を知らせると、どちらからともなくソファに対面して腰掛け
た。

「……今日の朝から藍原延珠さんが呪われた子供たちであるという噂がいつの間にか
立ってまして……給食の頃には嫌がらせが……」

一体誰が……いつ見られた。今日までバレて無かったのに。と歯噛みする。

「……延珠は否定しなかったのか？」

「……」

無言の肯定。思わず目の前の机を叩きそうになるがグツと抑える。

「……里見さん。あなたは私達に隠して『呪われた子供たち』の教育をさせていまし
たね。」

「ならよ……あんた達にあいつが『呪われた子供たち』だと話したらあんた達はあいつに
ちやんとした教育を施してくれたのか？」

「……」

「違うよなア！あいつがただの赤目の『人間』の子供ってだけで入学なんてさせなかつた
だろっよオー！」

蓮太郎にとつては反吐が出るような常識。

『呪われた子供たち』は『人間』ではなく『ガストレア』だ。そんな常識が自分に……自

分の家族に影響した事にその常識に対して今までで一番腹が立った。

『呪われた子供たち』が『人間』ではなく『ガストレア』である。だから、こうやって差別し、気味悪がり、あんな化け物と同一視する。

そんなもの、ただ力のない人間達が大多数で行っている八つ当たりだ。子供であり、ガストレアのように知性が無いわけではない。だから、ガストレアへと向ける筈の怒りをただガストレアの因子が入ってるだけで子供たちへとぶつけ、ガストレアには恐れて逃げて助けてくれと懇願する。

ガストレアから人間を守っているのは『呪われた子供たち』だと言ってもいい。プロモーターとイニシエーター。人間よりも赤目の子供の方が強いのは明白。イニシエーターはその子供たちの事だ。

蓮太郎と延珠のような、人外と組んだイニシエーターなら分らない。だが、大抵はイニシエーターの方が力が上。それはすなわち、モノリス内へと侵入してきたガストレアは自分達が忌み嫌っている『呪われた子供たち』に守られていることになる。

今代の聖天子は『呪われた子供たち』に人権が無いのを改善しようと、ガストレア新法を発案している。蓮太郎は大いに賛成している。それが、赤目の子供達への差別撤廃への一歩になると信じているから。

「いいか、あいつはガストレアなんかじゃねえ。『人間』だ。ガストレアになるような心

配なんてのも無い。抑制剤打ってるからな。」

蓮太郎は怒りを目に宿しながら教師にそう言う。

「もしも。もしもだ。あいつが明日もここに来た時に何かあつてみる。俺はお前らを許さねえ。犯罪者になろうがどうなるうがな。」

蓮太郎はその部屋の窓を開けると、そこから飛び出し、走っていった。

延珠が既に早退してるのは知っている。だから、部屋に帰ってるかもしれない。

もうあの学校はダメだ。転校の手続きをしなければ。そう考えながらアパートまでの最短距離を走る。

水の上を水中に足が落ちる前に次の足を出して走り、建物を飛び越え、車を飛び越える。

そして、毎日目にするボロアパートへと辿り着き、ドアが壊れてしまうのではないかという程の力で開ける。

「延珠!!」

返事は……ない。延珠なら普通に歩けばとつくに着いている位の時間だ。ランドセルが置いてある。この間買ったばかりのパソコンも置いてある。

目の前が真っ暗になりかけた。

だが、蓮太郎はすぐに帰ってきたら連絡しろとメモ帳に書き残して分かり易いところ

に置いたあと、そこを飛び出した。延珠を探すために。

蓮太郎の足なら一日で東京エリアを全て見て回るくらいはできる。

だから、走る。見つけなくては。探さなくては。慰めなくては。あの、元気の塊のよ
うな笑顔を見なくては。

三時間くらい全速力で走ってたとところで息が切れ始めた。知った事か。さらに三時
間くらい走ったところで足が少し痛くなってきた。知った事か。さらに三時間くらい
走った。周りが真っ暗だ。知った事か。さらに三時間くらい走った。汗が滝のように
流れ、全身が休めと信号を出してくる。もう、民家も灯りがついていない。もう真っ暗
で見えるものの方が少ない。知った事か。

足を止めたのは東京エリアを一周し、大まかな場所を見終えたあとだった。時刻は深
夜二時。スマートフォンには連絡一つ入っていない。

これ以上の搜索は無意味だと判断し、走って帰った。
アパートの電気をつけても中には誰もいない。入った痕跡もない。

無償に悲しくなり、シャワーを浴びる。滝のように流れた汗でビショビショになった
制服をシャワーを浴びた後にコインランドリーで適当に洗う。水洗いOKの制服だけか
ら問題はない。

ああ、タイムセール行くの忘れてた。その日は死んだように眠った。そして、延珠は

その日、帰ってこなかった。

目が覚めたら朝七時だった。二度寝する気にもなれず、だが腹は空腹を訴えてくる。ダルさとキリキリと痛む腹を抑え、冷蔵庫を開け、半分ほど残った牛乳を一気飲みする。半固形化した唾が口に違和感を与えるが、気にせずにレタスと食パンをそのままがつついて腹を満たす。

それでやつと収まったが、まだ何か食べさせろと腹は訴える。

料理する気にはなれない。料理が趣味の一つなのにこのざまかよ。と自分に毒づいた。

このまま待つても延珠が帰ってくる可能性は薄いだろう。外は生憎の雨。今どこで何やってんだと。こんな雨の中外にいたら風邪ひいちまうぞ畜生とつぶやきながら傘を手にとって外に出る。

宛はないが、もしかしたら居るかもしれない。と言うところならある。

東京エリアの外周区近くにあるマンホールの下。発電所などが瓦礫となつてすぐ前に積み重なっている。

マンホールの下は下水道でとてもじゃないが人の住めるような場所ではない。

もしかしたらとそのマンホールをノックする。すると、なにー?と舌足らずな声が聞こえ、マンホールの蓋が開く。出てきたのは目が真つ赤な少女だった。

「人を探してるんだけど、いいか?」

「けーさつのかたですか? わるいですけどたちのくきはないので。」

「いや、ちげえよ。」

「ならせーはんざいしやのかたですか?」

「何故その選択肢が出てきたのかお前の脳に問いただしてえな。」

「じゃあけーさつかせーはんざいしやかどちらなんですか?」

「おお、何だその究極の二択は。だから違つてな。俺はご覧の通り民警だ。ほら、これが民警ライセンス。」

「せーはんざいしやじゃないんですか?」

「何故そう思ったのか一応聞いておこう。」

「あなたのおかおをはいけんしたらいっばつでわかりました。」

「ははは。殴つていいかお前?」

蓮太郎はよく不幸面とか言われるが、性犯罪者の顔とか言われたのは初めてでイラツとした。

が、蓮太郎は携帯電話を取り出して延珠の写真を見せる。

「この子知らないか？」

「このこがたーげつとですか？」

「おう、喧嘩売ってるよな？ 喧嘩売ってるんだよなお前？ 買うぞ？ 喧嘩なら買うぞ？」

「じゆうまんえんでうります。」

「ことごとくムカつくなお前。で、この子を知ってるのか知らないのかどっちだ？」

しりません。と素直に言う少女。だが、大人の人はいないか？ 話してみたい。と言うと少女は長老に聞いてきますと言つてマンホールの下へ潜つていった。

そして待つこと数分。再びマンホールが開いた。

「おはなししてくれるみたいです。」

「そうか。ありがとう。」

蓮太郎が少女に続いてマンホールの下へと潜つていく。

マンホールの下はなんだか外よりあつたかかった。

ここで待つててくださいですので。と何とも奇妙な言い回しをした彼女はトコトコと去つていった。

暫くして、何処か知的な印象を与える初老辺りの男が杖についてやってきた。

「里見蓮太郎だ。」

民警の名刺を男に渡す。

「あんたがあの子の言つてた長老つて人か？」

「ははは、長老というのはただの愛称みたいな感じで、本当は松崎と申します。」

行儀の正しい人だ。と蓮太郎は内心で評価を上げる。

「失礼だがあんた……」

「はい、ここで子供たちの面倒を見てる者です。」

内心の評価を上げる。ホームレスとは思えないから恐らく自発的にここに住んでいるのだろう。

教鞭でも振るつてたのだろうか。そんな感じがする。

「ここは暖かいでしょう？」

「そういえばそうだな。ストーブでもあるのか？」

「いいえ、発電所から出る排水は大抵温水なものでね。」

「なるほど。だけど生活環境は悪いだろう。」

「ガストレアウイルスを体内に宿している彼女たちはここの方が居心地はいいみたいだね。」

「そう言う事か。だが、やっぱりあの子も『呪われた子供たち』なんだな。あんなに重そうなマンホールを軽々と持ち上げるなんて俺やインストラクター位だろう。」

「おや、あなたは持ち上げれるのですか？」

「鍛えてるからな。」

はははと笑う蓮太郎。

松崎はさらに少女達共にここで住んでるのは力の制御を覚えさせて人の生活に紛れ込ませるためだと言っていた。

だが、

「松崎さん。あんたも『奪われた世代』なんだろう？」

奪われた世代とはガストレア戦争に巻き込まれた者達と想ってくれればいい。

「そんな事関係ありませんよ。『無垢の世代』は被害者です。」

「……気が合うな。俺もだ。『奪われた世代』はガストレアからの被害に対する怒りを

『無垢の世代』にぶつけてるだけだ。」

「それは違うと思いますよ。十年やそこらで遺恨が消えるものではありません。みんなガストレアという単語に敏感になってるだけなのです。だから、ガストレアと名のつく菌を持っている子供達が街中を歩くことに嫌悪するのは仕方ないと思いますよ。」

「……………それもそうか。けど、あんたみたいな人もいるんだ。その遺恨も年が重なる事に無くなっていけばいいな。」

「そうですね。ですけど、あなたの言う事もあると思いますよ。八つ当たりしている部

分も、中にはあると思います。」

久しぶりに話の合う人と話せた事で何時間も話せそうになると時間がなくなる。本題に移ることにした。

「すまん、急いでいるんだった。この子を知らないか？」

携帯を取り出して延珠の写真を見せる。いいえ、知りませんな。と言う松崎。

「そうか。ありがとう。助かったよ。」

じゃあ39区にも行ってみるか。と立ち上がる。

「その子はイニシエーターですか？」

「ん？ああ、そうだ。」

「新たなイニシエーターとペアを組む、というのはどうですか？」

「……」

「イニシエーターとペアを解消したら一時は順位が下がりますが、また新たに組んだイニシエーターと共に名声を上げれば……」

「俺はイニシエーターとかプロモーターとか抜きで家族であるあいつを探しに来てんだ！何も知らねえのにそんな事言うんじゃないやねえ！」

蓮太郎が怒鳴った。下水道全体が振動しているのではないかと疑ってしまうほど蓮太郎の声がビリビリと響く。

「……すまん、怒鳴るつもりは無かったんだ……あの子達を、ちゃんと育ててくれ。いつか『呪われた子供たち』が差別されなくなつた時のために。」

蓮太郎は傘を手に取り、下水道から出ていった。

松崎は朗らかな笑みを浮かべながら、

「君は幸せ者だね。あんなに優しくして強い人に大事にしてもらえて。」

一つ壁を挟んだ向こう側で膝を抱えている少女に声をかけた。少女はうん。と、かすれた声で答えた。

蓮太郎は念の為持つてきていたもう一本の、天誅ガールズがイラストされた可愛らしい傘を、忘れていった。

翌日。なんとか物を食べれるくらいには元気になった蓮太郎は有り合わせのもので適当な料理を作つて腹を満たした。

学校に行つたつて安心してどうせ先生に叱られるだけだと割り切り、今日もサボる事にした。

「そーいや自転車置いてきちまつてるな。と考え、取りに行くか。と。」

まだ登校時間までは一時間近くある。自転車だけ取ってきたらまた辺りを探してみるか。とでも理由をつけて外に出た。

外にはとうに花が散り、葉を伸ばす桜がある。来年は花見でもちやんとやるか。と見当違いなことを考えながら高校に到着。朝練してる生徒を横目に。パパッと自転車だけを回収して乗り、去っていく。

何度も自転車の想定を超えた走り方をさせられたためボロボロの自転車だったが、まだ十分に現役だ。それに乗り、何時もとは違いゆつくりと、自転車をこいでいく。

ゆつくりとしてたら登校時間になっていたのか小学生がハシヤギながら登校していた。

あんな噂が立たなければ今頃延珠も……と考えてしまいが、もう過ぎた事だと割り切る。

松崎の話の思い出しながらゆつくりと自転車をこいでいると、いつの間にか何時ものボロアパートにたどり着いた。

暫く二度寝でもするか。と思い、久々に布団を敷いてその上に制服のまま寝転がる。

丁度いい感じの眠気が襲ってきて、蓮太郎はそのまま意識を沈めていった。

夢を見た。延珠が学校で元気にはしゃいでるのを遠目で見ている夢だ。

夢の中の延珠は友達やクラスメイトと笑いながら喋っていた。

『彼女の笑顔を失わせたのは君だ。里見君。』

後ろから響いてくる声。

蛭子影胤の声。

『呪われた子供たちであるイニシエーターがそう簡単に一般人に紛れ込めるとも思ったのかい?』

ああ、そうだ。一般人にバレなきやあいつらの認識は一般人だ。バレる筈が無い。

『だが、現にバレて彼女は化け物扱いだ。』

言い返せない。

『火のないところに煙は立たぬ。この言葉を知ってるかい?』

根拠がなければ噂なんて立たないって事だろう。

『そうだ。悪い隠し事など、いつかバレる。犯罪と同じだ。』

……何がいたい。

『こんな世の中に君は満足してるのかい?彼女たちのような強い者が迫害され、弱い者が我がが物顔して道を歩く。君は強い。いや、無敵だ。敵などいない。なら、君は自分の想像する世界を実現する権利がある。』

そんな権利、どんな人間にもない。

『今の政治家がそうだろう。聖天子もだ。彼女は権力という力を使って呪われた子供た

ちに人権のある世界を作ろうとしている。そして里見君。君には権力は無いが暴力がある。自分の気に食わぬものを殺し、全てをねじ伏せ、己が頂点に立つための力が。』

……そうだ。確かに俺は『無敵』である『人外』だ。鍛え始めてから数年経った頃には気付いてたさ。俺は何処か可笑しい。何せあのガストレアをワンパンで葬るんだからな。

『そうだ。君には世界の支配者であるガストレアすら塵に等しい。だから、私と共に来い。私は君と共に暴力の支配する世界を実現させてあげよう。』

……んなもん、お断りだ。

『こんな腐った世の中を変えられるのにかい？』

ああ。何故ならそんな世界を実現させたところで、

「延珠も木更さんも先生も、喜ぶ訳ねえだろうが!! 必殺『マジシリーズ』! マジパンチ!!」
踏み込み、背後の蛭子影胤へと向けて全力の拳を振るう。その瞬間、幻想の世界の目の前全てが『消滅』した。

そして、蓮太郎は幻想の世界から帰ってきた。

敵は、決まった。

「蛭子影胤。お前は俺が……潰す。あいつのせいだ。うん、全部あいつのせいだ。あいつがいるからタイムセールが微妙な時間で俺の髪型が変えられなくなって制服が汚れ

てガストレアがモノリス内に迷い込んできて延珠がこんな事になって俺に金がないのも全部蛭子影胤のせいだ。そうだ。そうに違いない。」

おい、誰かこいつの思考回路をどうにかしろ。なんか全部人のせいにしてるぞこの脳筋。

蛭子影胤は一瞬背筋がゾクツとした。

そういえば、延珠が学校を休む旨を言つてなかつたな。と思い、もし途中で延珠を見つけてもいいようにコバルトブルーの液体の入った注射器をポケットに突っ込み、勾田小学校へと向かう。丁度今の時間は一時間目と二時間目の間だった。

学校についた蓮太郎は延珠の担任を呼び出してもらった。再びこの間の面会室に連れていかれた。

そこで延珠が休む旨だけ話して帰るか。とでも思っていると、担任が来た。

「…………どうも。」

顔を見た途端、この間怒鳴った事により居づらくなつた。これはもうすぐに帰ろうと思ひ、話を始める。

「すみません、今日延珠が休む件を……」

「…………藍原さんは、学校に来ています。」

絶句。暫くしては？と声が出る。

そういえば延珠の教科書やら鞆が部屋になかったと思ひ出すと、額に手をつけた。

「そう……か。」

絞り出した言葉。もう用はないから行こう。と思つたら、ポケットの中にある硬いものに手が当たった。

注射器だった。

「……先生、これを延珠に渡して欲しい。」

「これは……？」

「持病の薬……」

と、ここまで言つてももう隠す意味なんて無いんじゃないかと改めて考え直した。

「いや、正直に言おう。これはあいつの体内侵食率を上げないための薬だ。流石に何日も薬を投与しないとじわじわと体内侵食率は増えていくから……」

先生にそれを渡し、学校から去ろうとしたが、先生は物言いたげな顔で蓮太郎をとある場所に案内する。

それは、延珠の所属してる教室だった。

延珠はポツンと自分の席に座っていた。

「……お会いに、なりますか？」

出来れば連れ帰ってくれとでも言いたいのかと蓮太郎は思ったが、そんな事考えるの

は失礼だろうとすぐに考えを改めた。

いや、いい。それだけ渡してくれ。と言うと窓から身を投げ出した。

先生が慌てて下を覗き込むが、蓮太郎はいとも簡単に着地し、帰り始めていた。

蓮太郎は、なんとなく董の研究所に向かった。愚痴る相手が欲しかったのだろう。

「……せんせい、ちよつと話しに来た。」

「やあ、里見くん。相変わらず不幸面だね。」

「せんせいも相変わらず凄い限で。」

チラつと横の棚を見るとそこにはタイトルからしてわかるエロゲーが置いてあった。

それは女性がやる物なのかと考えながら座る。

「ちよつと聞いてくれるか?」

「ああ、構わんよ。私も少し暇してたからね。」

董は珈琲を入れて蓮太郎の前に出してくれた。礼を言つてそれを口に含む。

コーヒーは喉を潤して腹に溜まる。不思議と出てくる安心感。

蓮太郎は話した。殺されかけた女の子、延珠の家出と学校の事。

「……せんせい、正解だったのかな。延珠を学校に編入してさ……」

蓮太郎は思わずそんなことを言ってしまった。

董は考えるような仕草をせずと言った。

「君と彼女が満足してるのならそれは正解だ。この言葉に満足できないのなら一つ聞こう。君はあの子を何だと思ってる？」

「ただのマセた女の子だよ。人間のな。」

「なら君は当然の事をしたんだ。子供は学校で学ぶべきだからね。」

「……そう言われるとなんか報われた感じがするわ。」

「当然のことだと思いがね。」

蓮太郎はグイッとコーヒーを飲み干した。

「ここから少しだけ私からアドバイスだ。君はそう思っていても彼女たちは自分の事を知らないんだ。周りのせいで人間だとは思えないからな。その内第一世代の子達は思春期に入る。そうしたら待つているのはアイデンティティの喪失だ。そんな時に君は家族として接してやればいい。」

「……そうだな。そんじゃ、俺は延珠に会ってくる。家族として悩みや現状はなんとかしてやりたいからな。」

「クサイこと言うね。君は。」

「うっせえマッドサイエンティスト。」

「生きたまま解剖されたいか？」

「おお、怖い怖い。解剖されたくないから行かせてもらうぜ。」

そんなことを言つて研究室から出る。すると、電話。携帯を見ると勾田小学校からだつた。それに出る。

『すみません、藍原さんの件について少し厄介なことになりました……至急来て頂けますか?』

瞬間、ソニックブームが発生した。

蓮太郎は音速を超えて走つた。残像すら生ぬるい程の速度で走る。数分もかからずに勾田小学校に到着した。

グラウンドには人垣が出来ていた。

所々聞こえる声には何で民警はこいつを始末しないんだとかとつと外周区に帰れとか好き勝手言つてる子供がいる。そして、本気でガストレア因子を移されるとか思っているのか青ざめた顔で震える子もいる。

それを見て聞いた瞬間、蓮太郎がブチ切れた。

「好き勝手言つてんじやねえぞガキ共がア!!」

震える空気。地面すら揺らす怒号。聞こえていた話し声は一瞬で止んだ。

「こいつの事も知らずにいけしやあしやあと好き勝手よくもほざいて俺の家族傷付けてくれたなア!? 化け物だ? ガストレアだ? テメエら現物見てねえのに良くも言えたもんだなア!」

一般人がガストレアを見るということは八割方死ぬと言う事だ。運良く生き残れてももしかしたらガストレア化してしまうかもしれない。

「ついでに何様のつもりだ!?! 誰のお陰で今までガストレアを見ずに生きてこられたと思っっている!?!」

答える者はいない。いるわけがない。こんな怒号と怒気を放つ人間に向かって意見できるものなどわずかにしかない。

「知らねえ訳ねえだろうが!! テメエらがガストレアだ化け物だと罵っている呪われた子供たちのお陰だろうが!!」

沈黙。その中で音は蓮太郎の溜め息をつく音だけ。

「……………おい延珠。帰るぞ。」

「蓮太郎……………」

「もうそいつらは赤の他人だ。お前がどう思おうとな。」

冷たいように感じるが、これが蓮太郎の言える言葉だった。

「最後まで胸張って帰ろうぜ、延珠。」

泣いている延珠に声をかける。延珠は涙を拭つてうん!と言った。丁度その時、携帯電話が震えた。

「はいもしもしっ!」

『里見くん、感染源ガストレアを発見したわ。場所は32区。』

「はあ？何でそんな所に？」

『どうもそのガストレア、『飛んでる』みたいなものよ。』

「飛んでいる？ガストレアが？相手はモデルスパイダーだろうか。」

『いえ、本当よ。』

「飛ぶ蜘蛛ねえ……わかった。至急向かう。」

『へり呼んだ方がいい？今回は報酬も多いから呼ぶわよ？』

「いらねえ。走った方が速い。」

『相変わらずの人外っぷりね……』

「斬撃飛ばす人に言われたかねえよ。」

『ワンパンでガストレアを屠る馬鹿に言われたかないわよ。』

「そんじや、お互い様ってことで。」

通話を切る蓮太郎。仕事だ。とだけ延珠に伝える。

「ついでだ。見せてやるよ。本物の『化け物』ってやつのを。」

そう言うのと、蓮太郎は延珠を抱えると、

「え、これ妾苦手なんだけど。酔っちゃうんだけど。」

「ひあういーごー」

「や、止め……」

瞬間、パァンツ!!とソニックブームが発生し、半径五メートル以内にいた子供全員が吹っ飛ぶ。蓮太郎の姿はどこにもなかった。

誰からともなくこう呟いた。

「化け物……」
と。

ファイブパンチ

「っし、見付けた。」

32区辺りの森。そこで飛行している蜘蛛型のガストレアを肉眼で発見した。

ここで蓮太郎は思い出す。蜘蛛の糸をパラグライダーのように編んで数百キロ移動する蜘蛛がいることを。今回のガストレアはそれだと判断する。

だが、躊躇する理由はない。すぐに潰させてもらおうと思っただが、抱えていた延珠がピクリとも動いていない。

延珠におくい、大丈夫か？と聞く。延珠はすぐにハツとすると、蓮太郎の手を離れて木陰に隠れた。

なんで逃げるんだと聞こうとした時。

「オロロロロ……けほっ、うえええ……」

女の子から聞いちゃいけない声を聞いたのでとつとガストレアの追跡を再開した。

音速を超えた中で吐くだけで済んだのならかなりいい方だろう。生身で外傷なしの延珠は鍛えられているようだ。

「……とりあえず片付けるか。」

トン。と地面を蹴って飛び立つ蓮太郎。狙いは飛行中のガストレア。

蓮太郎に気付いたのか逃げようとするガストレア。だが、蓮太郎はそれよりも速い。蓮太郎の手がブレた。その瞬間、ガストレアは文字通り粉碎された。

それと同時に落ちていく手錠のついた白いケース。視界でそれを捉え、追っていく。何秒かケースが落ちる方が速かった。

蓮太郎は着地してからすぐにケースの回収へと向かった。

ケースは無事見つけた。要らないモンと一緒に。

「やあ、里見君。」

「蛭子影胤……漁夫の利か？」

「勝てばよかろうと言うだろうか？」

影胤は手を後ろに、蓮太郎はポケットに入れてお互い戦闘時の構えはとらない。その後ろで延珠は？延珠は？と言ってくる小比奈はアウトオブ眼中。

「これは私が頂こう。君達には過ぎたものだ。」

「テメエのような要注意人物に渡せるかってんだ。」

ザツ。と音を立てて足を広げてポケットから拳を出す。

「ヒヒヒツ、今までは出力を最大にしてなかったが……今回は80%のイマジナリイ・ギミックでお相手しよう。」

そして影胤の周りにあのバリアーが張られる。正直、蓮太郎にとっては紙も同然だ。
「蓮太郎!!」

そしてそこに颯爽と駆け付け、影胤に蹴りを一発お見舞いする延珠。だが、影胤に蹴りは届かなかつた。

延珠の蹴りを受けて破れないということはかなり滅茶苦茶な強度を誇っている事を意味するのだが、延珠の蹴りがボクサーの右ストレートなら、蓮太郎の拳は例えるのなら核爆弾。蓮太郎の拳で破れない物などまず無い。

「蓮太郎、ケースを取り……かえ……うっ。」

延珠が口を抑えて近くの川までダッシュする。そして、そこで開放する。

「……君は何をしたのかね?」

「ちよつと急いでたからな……」

「……彼女も大変だね。」

「皆そう言う。解せぬ。」

「解したまえ。」

影胤にすら同情される延珠。そして当の延珠は川に向かって数時間前に食べたものを還している。

どうやら一度土に還した位では延珠の体調は戻らなかつたようだ。

「……ちよつと待つてろ。口をゆすぐから……」

川の水でうがいを始める延珠。本来はあまりオススメした事じゃないが、こんな自体故に仕方が無い。

「……まだきもちわるい……」

「その……なんだ。戦えるか?」

「当然だ!この程度で参つては蓮太郎のふいあんせは務まらぬからな!」

「はいはい。おませなこつて。」

戻ってきた延珠が蓮太郎と隣合い、構える。敵は、蛭子親子。

小比奈は狂気の笑みを浮かべ小太刀二本を構え、影胤は二丁の拳銃を手に持つ。

一触即発。

先に動いたのは小比奈と延珠だった。

二人の姿が残像のように掻き消え、瞬間、金属音が鳴り響く。

延珠の靴はバラニウムが靴底に埋め込まれた特殊性だ。故に、延珠はバラニウムの小

太刀相手にモデル・ラビットが故に強化された脚力を遺憾無く発揮できる。

そして、次に動いたのは影胤。その手に持つ二丁のベレッタがフルオートで弾丸を吐

き出す。

「ちやぶ台がえしー!」

蓮太郎は手を地面に突っ込み、それを一気に持ち上げる。

出来上がった土の壁がベレッタの弾丸を防ぐ。最後の弾丸が当たった刹那、音速を超えて蓮太郎が影胤へと接近する。

「マキシマム・ペインツ!!」

だが、影胤もそう簡単には拳が振るわれるのを許さない。影胤のイマジナリイ・ギミック……斥力フィールドが蓮太郎にだけ向けて展開。蓮太郎を少し押しやり、拳が目の前を通過する。

あまりの衝撃に体が後ろへと持っていかれる。が、それを利用して蓮太郎から距離を取る。

「とんだ『化け物』だよ。君は。」

「知ってらァ。」

瞬間、蓮太郎の目の前に黒い影。そして、影胤の目の前に赤い影。

蓮太郎の目の前に行った小比奈は蓮太郎の首を跳ねんと小太刀を振るう。が、蓮太郎はそれを腕で防ぎ、頭突きで小比奈を吹っ飛ばす。それと同時に延珠が影胤のマキシマム・ペインにより吹っ飛んできた。小比奈は斥力フィールドに、延珠は蓮太郎の腕にキヤッチされる。

延珠の体には無数の切り傷が。小比奈の体には無数の痣が。

「蓮太郎……あいつ、強い！」

「まだ戦えるか？」

「当然だ。妾はそんなに柔ではない！」

「延珠……斬る!!」

再びの戦闘。かと思いきや、影胤が小比奈の前に手を出して小比奈を止める。

「小比奈、悪いがここは撤退だ。時間が勿体無いんでね。」

「させると思おうか？」

「させるさ。マキシمام・ペイン!!」

その瞬間、先程よりも強い衝撃が蓮太郎達を襲う。さっきのが最大出力かと勘違いしてた二人はまんまと吹っ飛ばされ、近くの川に落ちた。

「蛭子影胤エエエエエ!! テメエ卑怯だぞゴルアアアアアア!!」

「勝てば官軍だよ。」

川の流れに逆らえず、蓮太郎と延珠はどんぶらこ、どんぶらこと下流に向かって流されていくのであった。

延珠はきやー溺れるーとかいいながら蓮太郎に抱きついてた。

二人が川から上がってそこに戻った時には、既に蛭子親子はいなかった。

「……………あ、タイムセールが……」

蓮太郎の眩きは、どうでもいいものだった。

翌日。天童民警事務所の中はお葬式ムードだった。

「…………ごめんね、里見くん。私のせいでは……」

「木更さんのせいじゃないさ…………」

「そうだ…………妾がちゃんと時間を確認してれば…………」

「ここで違和感を感じる人もいるだろう。」

まず、三人の目の前には芋。さつま芋がホカホカと湯気を上げている。

「私がタイムセールにあの時行かなかったばかりに！今日はなんかタイムセールなかったのよ!!」

「違う！俺がとつとあの仮面野郎をしょつぴいておけば!!」

「二人のせいではない！妾があそこでリバーズしてなければ…………」

『延珠（ちゃん）のせいじゃない!!』

そう。今日は何故かいつものスーパでタイムセールをやっていないかったのだ。

おかげで三人のご飯は朝はもやし炒め、昼はお茶碗一杯のお米。そして夕飯はさつま

芋一個である。

東京エリアが滅亡の危機なのに何に嘆いているのかこの三人は。

ちなみに、蛭子影胤の持ち去ったケースはガストレアステージVを呼び出せるというのは既に聞かされている。そして、影胤追撃作戦があるのも。

その為に前勝祭でもしようかと思ったらこれである。

「……はあ、もうそろそろ時間よ。」

もぐもぐと三人で焼き芋を頬張る。蓮太郎と延珠はさつさと食べ終わった。

聖天子直々のブリーフィングは終わっている。後は、堇の元へ行き、装備品を受け取るのみ。

「そんじゃ、行ってくる。」

蓮太郎は焼き芋を食い終わってからすぐに堇の元へと向かった。

堇の研究室の周りは何も変わっていないかった。

「ほら、君のパトロンからだ。」

「……十分だ。」

蓮太郎は堇から渡された装備を確認する。それは、非常食の詰まったウエストポーチだけだった。

蓮太郎は司馬重工の司馬美織と装備を提供される契約をしている。司馬重工が蓮太

郎へと装備を提供する代わりに蓮太郎は今いる高校へと通っている。

だが、今回渡されたのは装備ではない。ただの非常食だ。

だが、蓮太郎はこれで十分だった。蓮太郎にナックルグローブはいらない。一発で使
い物にならなくなる。メリケンサックも必要ない。一発で形が變形して使い物になら
なくなる。防弾ベストや防刃ベストはいらない。機動力が削がれる。故に、蓮太郎の装
備はこれだけで十分なのだ。

「それと、おまけらしい。」

さらに缶詰を渡される。ヘリで食えとでもいうのか。だが、今は腹がほとんど満たさ
れてないため、ありがたく頂いた。

「それと、これは私からだ。」

葦から渡されたのは液体の入った注射器五本。

「これは？」

「AGV試験薬だ。死にかけたら使うといい。まあ、君が死にかける事があるのならそ
れは人類の滅亡に繋がるがな。」

「ま、使わねえと思うが貰っておくよ。」

蓮太郎はAGV試験薬の入った注射器をしまつて、研究室の扉に手を掛ける。

「……先生、ちよつと東京エリア救つてくるわ。」

「お土産も頼むよ。」

まるで旅行に行くようなノリ。だが、余りにも重いノリなんて二人には似合わなかった。

そして、蓮太郎と延珠は木更に見送られながらへりへと乗った。

「ほら、食べ。延珠。」

「最後の腹ごしらえだな。」

「ばあか。いつもどおりの晩飯だよ。最後じゃねえ。」

「そうだったな。こんなの妾と蓮太郎にとつては危機でもなんでもないからな。」

「よく分かつてんじやねえか。ほら、とつと食つちまおうぜ。」

缶詰を二人でかきこんで胃に落とす。程よい満腹感が二人の気持ちを安らげる。

これから行くのは戦場だ。生きるか、死ぬかの。

だが、二人は確信していた。これは勝ち戦だと。

何故なら、居るからだ。希望が、負ける筈の無い一人の人間が。

それは、蓮太郎自分。例え斬撃を飛ばせようが、バリアーを張れようが、その前に立とうものなら一撃の元粉碎される。

正しく無敵。死ぬ要因など二人には見えない。

自分が守るから。守られるから。だからこそ、死ぬ事なんてない。

延珠が蓮太郎に寄りかかる。蓮太郎はそれについて何も言わず、空いた手で延珠の頭を撫でる。

そして、パイロットの着きました。という声を聞き、立ち上がる。

「行くぞ、延珠。」

「うむ、蓮太郎。」

時は来た。最終決戦のゴングは鳴り響く。ならば、叫ぼう。ここからは、悪を倒すために正義を振るおう。

『正義執行ツ!!』

死にたくなければそこを退け。正義が怖ければそこを退け。今からそこには正義が通る。今からそこには希望が通る。絶望なんて殴り飛ばす、無敵のヒーローが通る。

死にたくなければそこを退け。正義が怖ければそこを退け。今からそこには正義が通る。今からそこには希望が通る。今からそこには『ワンパンマン』が通る。

シックスパンチ

パンツ！パンツ！と何か爆ぜる様な音が響き、道ができる。蓮太郎と延珠はそこを進んでいく。

蓮太郎が延珠の進路を塞ぐようにして生えている蔦等を拳で消し飛ばす度にパンツ！という音が響く。

明かりは無い。その場で目を慣らして節約するというもうただの節約の鬼と化している。

「蓮太郎、その音でガストレアが起きるかもしれんぞ。」

「……確かに。」

ガストレアだって生き物だ。睡眠だってする。

すぐに蓮太郎は拳を手刀に変えて振るう。スパンスパン。と延珠の邪魔になる木々を手刀で切り払っていく。

「蛭子親子がこんな木々の生い茂った所に居る訳がねえか……延珠、街に向かうぞ。」

「街なんてあるのか？」

「ここは無入島じゃなかったからな。今は無人島だが。」

蓮太郎が支給された地図を取り出す。地形が変わりすぎて宛になってなかったのだが、街の場所ならちやんと書いてあるし土地がトランスフォーマーよろしく変形してるわけでは無いので十分役にはたつ。

そんな訳でスッパンスッパン邪魔なものを切つてたどり着いたのはもう原型をとどめてない道路。

「手抜き工事だな、これは。」

「いいや、流石に人の手にかからず何年も放置されればこうなるさ。」

「でも流石にこれは手抜き工事だろう。」

「どうやつてもこうなっちまうの。」

その時、何かか唸るような音が聞こえた。ガストレアの声だ。

蓮太郎が拳を構えて後ろに振り向くが、何もいない。携帯を取り出してライト機能を使う。

照らされた道路の脇の脇に何か空洞のようなものを見つけた。そこを覗き込む。

「……ワニか？」

そこにいたのはワニのような生物。だが、その大きさは普通のワニどころの騒ぎではなかった。

「……殺つとくか。」

後ろ向いた瞬間噛まれたら流石に服が破れてしまう。それは勿体無いので拳を振るった。

パアンツ!という音とグチャツという音が同時に響いた。

肉塊と化したガストレアを確認してからすぐに道路に戻ろうとした時だった。

ドオオンツ!!と破裂音が響いた。

「ツ!?どつかの馬鹿が爆弾でも使いやがったな!？」

「……ねえ蓮太郎。何か聞こえないか？」

「ん? そうだな。なんかドスンドスンていう……」

二人がゆっくりと後ろを見る。そこには、超巨大なドラゴンのようなガストレア。

ステージⅣ。目測だろうとそれが分かった。だが、延珠は妾達の前に現れたのを呪うがいいと言った後、蓮太郎の後ろに隠れた。

「ステージⅣ……ガストレアの完成形か。初めてお目にかかるぜ。」

蓮太郎は足に軽く力を入れ、飛ぶ。

跳躍して一瞬でステージⅣガストレアの目の前へと行く。

「記念に貰っていけや!!」

蓮太郎が拳を構える。延珠はすぐに木の下へと避難した。

「連続普通のパンチ!!」

ドドドドドドドドドンツ!!という音と共にステージIVガストレアの体が『消えた』。
「……………うわあ、塵も残らず消し飛びおった……………」

血肉が降り注ぐのだろうと思ひ避難した延珠だったが、その避難は必要がなかった。
蓮太郎、ステージIV討伐達成。

おい本来の任務ほっぽかして何やってんだよお前。

「なんだ、ステージIVなんていうのは伊達だったか。」

「そんな事を言えるのは蓮太郎、お前だけだ。」

ジトーつと蓮太郎を見る延珠。よせよ、照れるだろうと言う蓮太郎。どこも照れる要素なんてない。

そんな延珠を置いておいて前へと進んでいく蓮太郎。それについていく延珠。

暫く歩くと崖にぶち当たった。

「飛び降りるか?」

「うむ、なんとなく降りてみよう。」

「ならばレッツゴー。」

二人が助走をつけて崖から飛び立つ。黄色の月と天へとその銃口を向ける超巨大レールガンモジュール、天の梯子が見えたのも束の間。すぐに落下していく。

「イイイイイヤツフウウウウ!!」

「い、意外と怖いイイイイ!!」

興奮する蓮太郎。涙目の延珠。

暫くの空中浮遊。すぐに落下先に木があるのが見えたが、蓮太郎が拳を振るつた際のソニックブームでへし折つた。

「無事着地。」

(蓮太郎、どこまで人間やめたら済むんだろう。)

スタツと着地する蓮太郎と延珠。もう人間を止めすぎて引く蓮太郎を見る延珠。顔は引き攣っている。

蓮太郎みたいな無敵な人を主人公にした小説とか書けるんじゃないかなとか現実逃避してる延珠を蓮太郎は手を引いて引つ張っていく。

「延珠、地雷とかに気をつけるんだぞ。流石の俺も靴が吹っ飛びかねん。」

「アツハイ。」

地雷で靴が吹っ飛ぶだけの方が可笑しいとツツコミを入れたかったが、淑女な延珠はそんなツツコミをいれない。ストレスがマツハだ。

モノリスの外に出たおかげで大分気分が高ぶっていたが、その気分も一気に引いてきている。

流石にガストレアと会って殴りとばすのも面倒なので延珠に高いところから周囲を

見渡させた。結果、小さな明かりを発見できた。

誰かいるのが分かったため、とりあえず接触してみようとそこに音速を超えて向かう。勿論延珠を抱えて。

一瞬でトーチカに到着。中に入る。

「ども、ちよつといいか？」

なんの躊躇もなしに入ってきた蓮太郎に目を見開いてビックリする少女。

「ん？あの時気絶してたやつか。」

「えっ……………あっ」

その少女はギプスのようなもので首を固定して、頬に湿布のようなものを貼っていた。

延珠はすぐに何処かへと走っていった。

目の前の少女はショットガンを抱えていたが、蓮太郎は特に何も気にしていない。

「なんでそんなにボロボロなんだ？」

主に首とか頬とか。

「……………蛭子影胤が来たらしいあの会議の時に気を失って……………気がついたら首の骨にヒビが入ってほっぺたが倍以上に膨れ上がりました。将監さんには寝違ったとか言われましたが流石に痛かったので首を固定してほっぺたに湿布貼りました。湿布が目には染

みます。」

蓮太郎はそうか。大変だったな。と他人事のように聞いていたが、内心では冷や汗ダラダラだった。

(やつべえ、この子つてあの時俺が往復ビンタで目を覚まさせようとした子だよな……えつ、なに？こんな重症になつてたの？治療費請求されないよな？してこないよな？)

そう、この子はあの時気絶した時に蓮太郎が往復ビンタしたあの子だ。

どうやら体は丈夫じゃなかったらしく、そう簡単に首の骨のヒビは治らなかったらしい。

「撃つ度に首が痛いです。一体誰がやっただらうなー。」

チラツチラツと蓮太郎を横目で見る少女。やべえ気付いてるとダラダラ冷や汗をかき蓮太郎。

「そ、そうだ！その手、どうしたんだ!?血が出てるじゃないか！治療してやるよはっはっはー！」

と、蓮太郎は少女の持ち物であろう包帯を勝手にとって少女の手に巻き付ける。

どうも責めるつもりは無いらしいが、ジト目で見られている。

暫くして延珠がトーチカの側で見張りをしていると本当に見張りに行った。

「えつと……自己紹介がまだでしたね。私は千寿夏世です。」

「俺は里見蓮太郎だ。」

「知ってます。私に往復ビンタした張本人だって。」

「マジすんませんでした。」

その場で土下座する蓮太郎。あの時は笑い事で済むさとか思ってたら意外と重症だったので笑えることではなくなった。

土下座した蓮太郎の頭をいきなり踏み始めた夏世。

「……おい。」

「え？ロリコンってこうすると喜ぶんじゃないんですか？」

「首折るぞお前。」

イラツとした蓮太郎。ニヤニヤとしてる夏世。

すぐに蓮太郎は土下座をやめた。

蓮太郎は無言で少女のショットガンをひったくり、銃口の下についてるグレネードを発射するアドオンタイプのグレネードランチャーユニットを見る。どちらも司馬重工製かと思いつながらランチャーユニットをスリングアウトする。中は空だった。

「何で使った？」

一言言つてショットガンを夏世に返す。夏世は申し訳なさそうな顔をする。

責めてるわけじゃない。とだけ言うと、夏世は口を開いた。

「私と将監さんは罠にかかってしまつて……何か光のような物が見えたんですよ。味方かと思つてそこに行つたらガストレアがいて……驚いて撃つてしまいました。首から嫌な音がしました。ついでにあの脳筋とはぐれました。」

最後あたりは愚痴だろう。と言いたくなつた。と、言うか自分のプロモーターを脳筋呼ばわりとは。

「だつてあの脳みそまで筋肉ですもの。」

まあ、確かに筋肉ダルマだつたしと同感する。

「まあ、そのガストレアは恐らくホタルのガストレアだな。居るんだよ。光で別のホタルを誘つて捕食するホタルが。」

「そんな事あるんですか?」

「それしか考えられない。と俺は思う。」

「……と、いうかよくそれだけの情報で分かりましたね。あつ、オタクですか。虫オタク。」

「……」

「あれですか。昔アリの巣を水没させてたんですか。楽しいですよ、ええ、楽しいですよね。」

「お前俺を煽って楽しいか？」

「はいッ!!」

「殴りとばすぞこのガキイツ!!」

いい笑顔で返事した夏世に拳を向けるが、ロクに吹けない口笛吹いてそっぽ向いている。

「……あなたのイニシエーターが羨ましいです。あなたみたいな愉快的プロモーターと一緒に。」

愉快的プロモーターってなんだよおいと言いたかったが、ぐつと喉の奥に押し込める。

そして、代わりに質問する。

「お前、伊熊将監という楽しいか？」

「……イニシエーターは殺すためだけの道具です。是非なんてありません」

夏世の答えに蓮太郎は何も返せなかった。

「……延珠さんは恐らく人を殺した事ありませんね。目を見たらわかります。」

「……お前の目は人殺しだな。」

蓮太郎は人の目を見てそんな事は分からないが、話の流れから蓮太郎は勝手に言った。夏世はええ。ここに来る途中に出会ったペアを殺しました。と言った。

何でかは大体分かる。蛭子影胤を討伐した際の手柄を独り占めするためだろう。

蓮太郎は無償に将監を殴りたくなつた。自分の手柄のために小さな少女に人殺しをさせるのか、と。

「……何回目だ？」

「二回目です。その内慣れます。」

蓮太郎はトーチカの壁を殴つた。トーチカの壁が吹っ飛んだ。

有り得ない拳の威力に夏世が目を見開く。

「二度とんな事言うんじゃないぞ。殺人の怖いところはそれだ。人を殺して罰せられないと知れば、人は罪の意識を忘れていく。」

「里見さん……それは、あなたが人を殺したことがあるから言えるんですか？ 不思議な瞳です……優しさが溢れてるのに、どこかに怖さがあるような……」

「……ウチの延珠がなんであんな喋り方か知ってるか？ あいつは今の仕事で人類を守る立派な仕事だと思ってるから胸張って偉そうにしてるんだ。昔プロモーター崩れの犯罪者を殺しかけた事がある。延珠は手術中ずっと塞ぎ込んでた。助かったと聞いたときは一日中喜んで見舞いに行つたんだ。俺はそれでいい思っている。」

「……綺麗事ですよ、それ。」

彼女は蓮太郎を見上げている。その瞳にはオレンジ色の光が写っている。

「……すまん、偉そうなこと言ったな。」

「どうして謝るんですか？」

蓮太郎の制服の裾が握られる。

「……どうして謝るんですか？あなたの言ってることは正しいのに……もつと自分に自身を持つてくださいよ。否定する言葉は浮かんで来るのにあなたの言ったことを否定したくない……こんな気持ち初めてなんです。」

「……そうか。」

この子は、人なんて殺したくない。そんな事はすぐに分かった。

すぐに涙を拭った彼女にはもう弱さが見えなかった。

夏世は自分の荷から湯沸かし器とインスタントコーヒーを取り出し、飲みますか？と聞いた。ああ、頂こう。と蓮太郎は返した。

天井が無く、ついさつき壁のなくなったトーチカから見上げる月は淡く輝いている。

「……今の時代行われている復興って正しいものなんですか？」

夏世は唐突に蓮太郎に聞いた。コーヒーも手渡された。

『無垢の世代』は知りませんが、『奪われた世代』はガストレアに様々なものを奪われました。その人達を見ると、大きな憎悪が見え隠れするように見えるんです。世道人心は乱れてただ、殺戮能力に特化した武器が大量に開発されました。例えば、『天の梯

子』」

夏世は雲の中を走る巨大な天の梯子を指さした。

『奪われた世代』の憎悪なんて見え隠れどころじゃない。今の呪われた子供たちの現状なんてまさに憎悪のそれではないか。

「さらに里見さんも聞いたことがあるでしょう。『新人類創造計画』。私達呪われた子供たちの戦闘能力に気づいて立ち消えた計画らしいですが……人体実験すら行われたこの計画は昔の日本では考えられなかったものなんです。」

そんな事知っている。だが、夏世の話には割り込まなかった。

「……新人類創造計画の方は蛭子影胤を見るまでは信じられませんでしたけど。」

「……あんな力、頼るのは卑怯者のする事だ。」

「里見さん?」

蓮太郎の内心からの言葉だった。

この身が使い物にならなくなるのではないかと勘違いするほどの特訓をして身に付けたこの力。確かに人体実験は一步間違えれば死だ。だが、蓮太郎はそんな計画によって得れた力よりも自分の力の方が上だと、自負している。

蓮太郎はコーヒーに口をつけた。苦味に顔をしかめる。その時、夏世の近くにあった通信機からノイズと共に野太い男の唸り声が聞こえてきた。

夏世は飛び付いてツマミのようなものを回すと、音は鮮明になった。

『き……ろよ！おい、生きてるんだったら返事しろよ！』

夏世が視線をこちらにやつて口に人差し指をつけた。蓮太郎は口の端から端まで何かをつまんで引つ張るかのようなジェスチャーをした。お口チャックという事なのだろう。

笑いかけた夏世だったが、すぐに通信に出た。

「無事だったんですね、将監さん。」

『つたりめえだろ！んな事よりも夏世。いいニュースがある。くくく、仮面野郎を見つけたぜ。』

蓮太郎と夏世が顔を見合わせた。

「どこですか?」

蓮太郎が地図を取り出して広げる。将監の言ったポイントは、海辺の市街地だった。

続いて出てきた将監の言葉は近くにいる民警総出で影胤を奇襲するそうだ。手柄は山分けのようだ。さつさと合流しろという言葉と共に通信は切れた。

「……行くのか?」

「ええ、あんな馬鹿な脳筋でも私のペアなので。里見さんはどうします?」

夏世は荷物を畳んで焚き火を踏み消し始めた。蓮太郎も共に踏み消す。

「行かせてもらおう。あいつの顔面に一発ぶち込まないと気がすまん。」

蓮太郎は携帯電話で時間を確認する。深夜のタイムセールまでもう二時間きつっているが、すぐにぶん殴って音速で帰ればギリギリ間に合う。

「腕はどうだ？」

夏世が包帯を取る。傷は完治していた。

「首は？」

夏世は何も言わなかった。

蓮太郎は現実逃避気味に街の方角を見た。ああ、タイムセールよ。今日こそ商品をもぎ取らせてもらうぞ。と言わんばかりに。

午前三時。延珠を呼び戻して道を歩き始めた。今回のタイムセールはなんと五時から。なんでそんな時間に……と呟くが、気にしない。夏世が時間を確認した時えつという顔をしていたが、気にしない。

すぐに街の方へと向かう。奇襲にしては早い時間だとは思っていたが、と思ったが、気にせず進む。夏世からライトを買ったのでそれをつけて歩く。

暫くしてから街が見えた。

街へ向けて進む。途中、夜営の跡が見えた。思ったよりも所帯が大きかった。

もう居ないということとは作戦は始まっている。急がなくては、死人が出る。

慎重に迂回しながら小高い丘に立つ。

教会と思わしき建物に白い光が灯っていた。あそこか。と目をつけて走ろうとする。

首の骨にヒビが入っている夏世を連れて音速を超えた走りは出来ない。だから、夏世が追いつける速さで走ろうと考える。だが、その瞬間銃声や小高い剣がぶつかる音が聞こえる。

「行くぞー!」

蓮太郎が叫ぶ。が、

「私は残ります。」

夏世は後ろを向いた。

「どうし………そう言う事か。」

蓮太郎もうしろをむく。そこには、真つ赤な目。目、目目目目目目目目目目目目目目目目

目目目目目目。

「ここで時間を稼ぎます。」

「首の骨にヒビ入ってるやつに任せられるか。ここは俺がやる。」

「いいえ、私が。」

「何やっっている！伏せないと衝撃波に吹っ飛ばされるぞ！」

「えっ、」

延珠が夏世を引つ張って無理矢理伏せさせる。タイムセールまで残り一時間十分。帰る時間を合わせると一時間は欲しい。

「ふう……………連続普通のパンチ!!」

刹那。赤が散った。

遅れて衝撃波。台風の風よりも強い衝撃が延珠と夏世を襲う。

は？と夏世が声を漏らす。

「殲滅完了。」

蓮太郎は音速を超えて動き、一体一体を潰していった。かかった時間は二秒もない。空を舞っていたガストレアまで墜とされている。

「……………は？」

夏世はもう一度声を漏らした。

目の前に戻ってきた青年は、ガストレアを殲滅する前の格好と全く同じだった。

セブンパンチ

深夜の街を蓮太郎と延珠と夏世は走っていた。三人の足は教会へと向いている。

蓮太郎が人外レベルの速さで走れるし、モデル・ラビットが故にかなり速く延珠が走れるので延珠と蓮太郎は夏世の出せる全速力に合わせている。

もし、置いていった時にガストレアに襲われたら首の骨に異常がある彼女では死んでしまうかもしれないからだ。

「……すみません、スピードを合わせてもらって。」

「気にするな。お前を一人にしておけないからな。」

蓮太郎と夏世が話していると、延珠が文句あり気に見てくる。そんな延珠に夏世が耳打ちする。

「取ったりはしませんよ。」

「うえっ!？」

「どうした、延珠。」

「な、何でもないぞ!」

そんな延珠を見て愉悅に浸った笑みを浮かべる夏世。この子の性格も大概である。

もうすぐ教会につく。と、そんな距離になった時、延珠が何かを蹴った。

「な、何？」

「……ッ！見るな二人共！」

蓮太郎が自分の体で二人の視線を遮る。

延珠が蹴ったのは『腕』だ。

腕の先に、体はない。蓮太郎は二人に目を閉じてろ。と言うと二人を抱えて走り出した。

この光景は子供にはキツすぎる。蓮太郎自身も気を抜いたら吐いてしまいそうだ。

夏世の首が悪化しない程度に走る。

暫くして、後ろに人の気配を感じた。威嚇には丁度いいだろうと夏世のショットガンをひったくって後ろに向ける。

数秒後、闇の中から出てきたのは夏世のプロモーター、伊熊将監だった。

「あんた……」

「将監さん！」

夏世が蓮太郎の手を離れて将監に近付く。が、途中で足を止めた。

「夏世か……う？なあ、俺の武器を知らないか……う？あれがあれば俺は……」

そこまで将監は言うのと、ドサツ。と音を立てて倒れた。背中には将監のバスターソー

ドが突き刺さっている。

いきなりの事に頭がついていかなかった蓮太郎だが、すぐにAGV試験薬を手に将監に近付く。

呆然としている夏世を傍目に脈を確認する。

「……………間に合わなかった……………ッ!!」

蓮太郎が悔しそうに喘ぎ、首を横に振る。死んでいるのなら、AGV試験薬を使っても生き返る事はないだろう。

「そんな……………」

「すまない……………俺がさっさとこいつを打っておけば……………」

蓮太郎はAGV試験薬をしまう。

「……………ここに残るか?」

地面に座り込んで両手で口元を覆っていた夏世だが、ゆっくりと首を横に振った。

蓮太郎はそうか。と言うと、将監の遺体からバスターソードを抜き取り、将監の横に置いた。

蓮太郎は無言で夏世の肩に手を置くとすぐに走り出した。夏世も返されたショットガンを手に、延珠も蓮太郎について走る。

そして教会につく。

「蛭子影胤エツ!!」

怒号。教会が震え、ステンドグラスが割れる。

蛭子親子はいた。教会の屋根にそびえる十字架の上に。

「やあ、里見君。」

「さつさと降りてこい……」

「言われなくとも。だが、ここでは君と戦うには狭すぎる。あっちの橋へと移動しよう。」

影胤と小比奈が橋の方へと移動する。

「……来るか?」

蓮太郎は夏世に聞いた。夏世は首を縦に振った。

ならば止めはしない。三人は橋へと走る。

橋の向こう側。影胤はいた。

「……タイムセールまで時間がないんだ。」

「ヒヒヒッ、あの世のタイムセールになら間に合わせてあげるよ。」

「やれるもんならやってみるよ。」

蓮太郎から発せられる怒気。いつになく、蓮太郎は本気だった。

影胤の前に蓮太郎。そして夏世が並び、小比奈の前には延珠が行く。

「おや、その子は？」

「テメエの殺したプロモーターのイニシエーターだ。」

おやおや、敵討ちかい。と影胤が笑いながら言う。

夏世はショットガンを構えた。

瞬間、動いたのは延珠と小比奈。残像が見える程の速さで動き出し、超高速下での戦闘を開始する。それと同時に夏世がショットガンのトリガーを引く。

「それ、お返しだ。」

影胤がそれを斥力フィールドで防ぎ、散弾をそのまま夏世へとお返しする。蓮太郎はそれを全て拳で打ち落とす。

夏世が蓮太郎の肩に足を置いて跳躍。空中でリコイルをもとめない連射をする。

ドンツ！ドンツ！ドンツ！と三回の銃声。だが、それも斥力フィールドに防がれ、返される。それを蓮太郎が拳圧だけで明後日の方向に軌道変換する。

「どうやら、君は足手まといになつてるようだが？」

「っ……」

「んな事はねえ。」

蓮太郎が動く。一瞬で拳の間合いへと移動する。そして振るわれる拳を影胤はイマジナリイ・ギミックとマキシマム・ペインでいなしていく。

唐突に蓮太郎が後ろへと飛んだ。そして、蓮太郎に隠れるように突っ込んできたのは夏世。

「この距離なら、バリアは張れませんね!!」

零距离でのショットガン。本来ショットガンは中距離での面制圧をするための武器だ。そのため、零距离では弾が広がらずに面制圧が出来なくなるが、今回はそれでもいい。

ドンツッ!という重低音。やった!と叫びそうになる。が、影胤の体からは血が飛び出さない。

「死にたまえ。」

そして、夏世の額につけられるベレッタ。

(し、死ぬっ……)

だが、夏世は死ななかつた。凄まじいGと共に夏世は後ろに投げ出されていた。前を見れば手を後ろへ振り抜いた蓮太郎。

その瞬間、始まる拳とガン!!カッ。

蓮太郎の拳を斥力フィールドで上手く受け流し、蓮太郎へ向けて拳と共に銃弾をお見舞いする。それを蓮太郎が歯で噛んで受け止め、吐き出す。吐き出した弾丸はライフフル真っ青なスピードで飛んでいくが、斥力フィールドを貫けない。

さらに蓮太郎の拳が超高速で振るわれる。顔を捉えるコースの右の拳を影胤はマキシマム・ペインを最大出力で横からぶつけ、さらにベレッタから弾丸を放つ。蓮太郎の右拳が影胤の顔の横を素通りする。弾丸をほぼ零距离から受けたというのに蓮太郎の腕には弾丸は通らず、皮膚で塞ぎ止められている。影胤は次の攻撃が来るわずか一瞬。蓮太郎の顔面へマキシマム・ペインを最大出力で放つ。が、蓮太郎の顔面は特に形を変えず、表情も変わらない。さらに振るわれる左拳を先程と同じ要領で避けると、ベレッタを乱射しながら後退する。が、蓮太郎はそれを許さず、目と鼻の先から放たれる弾丸を全て手のひらで包んで衝撃を殺す。

さらにその弾丸は圧縮され一つにされて凝縮され、全力で投げられる。音速を超えた一撃は斥力フィールドにぶち当たり、あまりの威力に斥力フィールドに沿って真横へと飛んでいく。その弾丸の当たった木はそこを中心に円形にくり抜かれ、倒れた。そして蓮太郎が拳の射程内に影胤を捉える。

肉を打つ音と銃声が響く。だが、音が蓮太郎と影胤の動きについて行っていない。二人は、音すら置き去りにして戦っている。

(……無理だ。こんなの、私が踏み込める領域じゃない……)

夏世はイニシエーターでありながらも武器に頼っている自分が情けなく思えた。だが、不意に悪寒。振り向けば、そこには首を跳ねようと刀を構える黒い天使。

「死んじやえよ」

そして振るわれる避けようのない一撃。だが、それは割り込んだ赤い残像が蹴りとばす。夏世がなんとか後ろへ跳ねる。

黒の足が赤の足を払い、態勢を崩させて刃を振るう。が、態勢が崩れても両手を地面につけバク転の要領で刀を打ち上げ、足が地面についた所でその足に力を込め、回転しながらの踵落としを繰り返す。が、それはもう一本の刀に止められ、届かない。素早く着地し、足払いを結構するが、小さく飛んで避けられる。そして、上段から振るわれる漆黒の刀。

ちよつと下がって足を広げる。ザクつ。と刀が橋に突き刺さった。

「……股が割れるところだった。」

「最初から割れてる!」

そして首を跳ねようと横なぎに振るわれる刀。頭を下げて避ける。赤い髪の毛が舞う。両手を地面につけて起き上がりざまに顎に一撃。だが、顔を逸らされ避けられる。

たった数秒の戦闘。だが、夏世はこれについていけるなんて思えなかった。

さらに小比奈が延珠へと接近する。振るわれる神速の刀を延珠は見切り、最低限の動作で避ける。そして、威力を込めた上段の一撃を避けてから、後ろに倒れ込み、腕の力だけで飛び上がる。空中で回転しながら右足での踵落とし。小比奈はそれを左手で防

ぐが、ミシミシツと音がする。さらに、今度は左足での踵落とし。それを小比奈は右手でパリイして延珠の左足を振り払い、そのお返しにと延珠の胸へ向けて右手の刀を突く。が、延珠は払われた足をすぐに戻し、刀の横っ腹を蹴り飛ばす。そして、延珠がすぐさま右足に力を込め、小比奈から距離を離し、地面に足がついた瞬間、再び小比奈へと突っ込む。

実力が違いすぎる。それが夏世の抱いた思いだった。だから、

「……里見さん！」

蓮太郎に呼びかける。

「将監さんの仇を取ってください！」

自分の達成できない願いを託して。

「任せろ!!」

蓮太郎はチラッと夏世を見て微笑んだ。だから、夏世はその場を離れる。足手まといにならぬように。

そして、思った。蓮太郎のように、強くなりたいと。この二人についていきたいと。

「どうした影胤！思ったよりも弱いんじゃないか!？」

「やれやれ、飛んだ期待をされてたものだ。」

既に戦闘を始めて何分も経っている。だが、影胤は余裕そうだ。

「まあ、このまま負けるのは嫌なのでね。卑怯でも勝たせてもらおう。」

「なに?」

その影胤の声と共に後ろで何か地面に激突したような音が響く。

そして、振り向けばそこには狂気の手を浮かべた小比奈。

「斬れちゃえ!!」

振るわれる小太刀。それは確かに蓮太郎の脇腹を捉えた。が、

「フンツ!!」

蓮太郎が脇腹に力を入れる。すると、蓮太郎の筋肉が小太刀を挟み込んだ。

「ふえ?」

血は出ていない。蓮太郎の強靱な肉体がバラニウムの小太刀の侵入すら許さなかった。

流石に予想外だったため、可愛らしい疑問の声をあげる小比奈。

「好都合だ。タイムセールが五時なんでね。一時間は欲しいからもう倒させてもらおう。」

「……はて、もう四時五十分だが?」

「……は？」

蓮太郎が携帯電話を見る。四時五十分だった。

ここに来る前トーチカで確認した腕時計を確認する。三時五十分だった。

蓮太郎が俯く。影胤はこれぞチャンスだと全力の一撃を発動する。

「やっばだ、里見君!!」

蓮太郎の腹に赤い光が直撃する。勝った。影胤は確信した。

だが、その赤い光は蓮太郎を貫通しない。腹部で止まっている。

「……今日のタイムセール………」

そこからは影胤と小比奈が目で追えなかった。だが、蓮太郎は確かに一步踏み込み、

拳を構え、

「も　う　間　に　合　わ　ねえ　じゃ　ねえ

かアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツツ!!」

振り抜いた。影胤の顔面に確かにぶち込んで。なんかその時にパリーンって音もした。

影胤は空を舞った。小比奈は脳みその処理が追いつかなかった。夏世も同じだった。

延珠は南無。といって両手を合わせて合掌した。

暫くの沈黙。遠くでポチャンと音がした。

「うわアアアアアアアアアアアツ!! 春の山菜弁当120円がアアアアアアアツ!! 牛丼弁当100円がアアアアアアアアアアツ!! ボリリュームたっぷりカラマヨ弁当130円がアアアアアアアツ!!」

「……………はっ! パパああああああ!!」

蓮太郎が地面に足と手をつけて地面に向けて拳を振るう。崩壊していく橋。延珠はそつと夏世を連れて避難し、携帯電話を取り出した。

昨日の分も書いてなかったので書く事にした。

ガストレア一杯、全部ワンパン。

ステージIVガストレア、連続普通のパンチ。

蛭子影胤、実質ワンパン。と。

「あの弁当が買えれば延珠に肉だって食わせてやれたのに!! チクシヨオオオオオオオオ!!」

「……………延珠さん? 里見さんは一体…………」

「タイムセールに行けなかった事で嘆いておるのだ。何時ものことだ。」

蓮太郎が地面に叩く度にクレーターと地震が発生し、地形が変わっていく。

延珠はその地震をもともせず立っている。夏世はそんな延珠の足にしがみついている。

延珠の服は小比奈に地面に叩き付けられた際にちよつと汚れたが、それだけだ。

「れんたろー、そろそろケースを回収しないと……」

「俺の肉がアアアアアアアアアア!! 久々に肉が食えると思つたのにイイイイイイイイ!!」

「あ、駄目だ。聞いちゃいねえ。」

延珠はボソツと毒づく。多分教会にあるだろうと延珠は教会に向かおうとする。が、そこで延珠が持つてきた通信機に通信が入った。

「どうかしたか? 蛭子親子なら蓮太郎が無力化したぞ。」

『いいえ、違います。……最悪のニュースです。ステージVゾディアックの一体、スコーパーが現れました。』

「……………そんな…………」

ガシャン。と延珠が通信機を落とし、夏世の顔色も絶望に染まった。

変わらないのは蓮太郎だけだった。

「焼肉ウウウウウウウウ!!」

延珠は静かにショットガンを夏世から受け取ると、黙らせるために蓮太郎に向けて発射した。蓮太郎はいでっ!?と言う声とともに黙った。その時には延珠は水なしですぐに効く胃薬を飲んでた。木更も聖天子の横で水なしですぐに効く胃薬を飲んでた。

延珠は夏世にもそつと一錠渡した。夏世も迷わず服用するのだった。

「急げ蓮太郎！でないと被害が出てしまう!!」

「分かっている!!」

（痛い痛い痛い!!首痛い!!折れるもげるもげちゃう!!）

延珠と蓮太郎は走っていた。あの超巨大レールガンモジュール、天の梯子へと向けて。

蓮太郎は夏世を背負っている。が、走る際のGで夏世の首は悪化していく一方。

だが、これも夏世が足手まといになりたくないからと提案したもの。夏世は声を堪えて我慢している。

今の速度は延珠の全速力と同じ。暫くしてから段々と天の梯子が見えてきた。

ステージVゾディアック、スコープオンを倒せる唯一の希望、天の梯子。

音速を超えたバラニウム弾を放つそのレールガンモジュールは通常のバラニウム弾等では歯が立たないであろうステージVへの唯一の武器となりうる物だった。

だが、もう使われなくなって十年。もしかしたら行っても使えないかもしれない。

だが、そんな最悪なパターンは想像しない。するだけ無駄だからだ。

さらに数分走って天の梯子にたどり着いた。入り口から中に入り、電源を起動する。

電気が流れ、モニターが活動を始める。ここまでしたら防衛省の方が遠隔操作でレールガンを発射する手はずになっている。

「……俺が行かなくてよかったのか？」

「流石の蓮太郎もステージVなんて相手にしたら死んでしまうかもしれない……だから嫌だ。」

「……そうか。」

蓮太郎はボン。と延珠の頭に手を置いた。正直、ステージVに自分の拳が通用するのか試したかったが、こう言われては仕方が無い。

だが、ここで異常が起きた。モニターにレールガンのシリンドラーの様子がモニターされ、そこには何も入っておらず、はつきりとemptyという表示が出ていた。

「……なあ、聖天子様や？ 弾薬は何処におありで？」

『嫌ですねえ、里見さん。あるわけないじゃないですか。』

レールガンのモニターに何かもう諦めたような笑みを浮かべた聖天子が映る。

あ、詰みだこれ。とレールガンの様子を知るものは全員思った。蓮太郎を除いて。

「おっと、弾丸じゃなくても飛ばせるものはあるぜ？」

『え?』

「……れ、蓮太郎? 流石に妾もそれはドン引きだぞ?」

「……あつ」

蓮太郎は弾薬を詰め込む場所に立ち、ロックを解除して中を覗き込む。

「俺自身が弾丸となる事だ!!」

滅茶苦茶キラキラした笑顔で蓮太郎は中に入った。

モニターの empty という表記が無くなる。

延珠と夏世が聖天子の映るモニターを見る。聖天子はそつと目を遠隔操縦してる者に移した。

『あー、なんかこちらからは撃てませんー。手動で撃ってくださいーい。』

逃げやがった!!と全員が思った。

夏世がささ、こちらに。と言つて延珠をトリガーの目の前にある椅子に座らせる。えつ、ちよつと声を出すが無理矢理座らされた。

聖天子を見る。そつぽ向いてる。その後ろの木更を見る。そつぽ向いてる。周りの人を見る。そつぽ向いてる。振り向いて涙目で夏世を見る。そつぽ向いてる。

「は……はははつ、もうどうにでもなればいいのだ……」

延珠はもう、何もかも諦めたような乾いた笑いをすると、トリガーに手を掛ける。

ロックオンは済んでいる。

トリガーに手をかけたことで安全装置が解除された。そして、余りのストレスに耐えきれなくなつた延珠が壊れた。

「あなたのハートにてんちゅーてんちゅー♪」

決めポーズとウインクと共にカチツとトリガーが引かれ、レールガンが蓮太郎を発射した時の光で目の前が真っ白になつた。

延珠はさつき薬を飲んだ筈なのにキリキリ痛む胃に向かつて胃薬を投入するのであつた。苦労人延珠に胃薬はかかせない。

「痺れるぜエエエエエ!!」

蓮太郎は電気を纏つて音速を超えて飛んでいた。レールガンで発射されたら普通なら愉快的ミンチになるのだが、蓮太郎はならなかつた。もう、人間をやめている。

そして、段々と見えてきたスコープオン。

蓮太郎は態勢を整え、いつでも接触できるようにする。

一秒もかからぬうちに直撃。スコープオンの体が大きく揺れる。

それでも蓮太郎はミンチにならなかつた。音速でスコープオンにぶつかつても。だ。蓮太郎はスコープオンの体をよじ登り、頭の天辺まで移動する。途中、鋭いウロコとか吸盤とか触手とかあつたが、全部殴り消した。

そして、構える。繰り出すのは全力の一撃。手加減はしない。きつと、このゾディアックなら体のいいサンドバッグになつてくれるだろうと期待している。

「必殺『マジシリーズ』!!」

ギリギリギリ……と蓮太郎の拳が音を立てて構えられる。さて、何発で消し飛ばせるのかと内心楽しみみの蓮太郎。まるで新しいおもちゃをもらった子供のような笑みを浮かべ、蓮太郎はその力を開放する。

「マジパンチツツツ!!」

そこ拳はゾディアックに直撃した。

何十分の一秒だろうか。そんなの関係ない。常人から見ればほんの一瞬。

ステージVのガストレアの一体スコープオンは、蓮太郎のマジパンチを受けたその瞬間、この世から『消滅』した。

数分後、聖天子等が見た映像では、スーパースローにすると、ゾディアックが一コマで半分以上消滅し、次のコマではゾディアックが完全に消し飛んでいるのが見えた。

そして、スコープオンを消し飛ばしたその衝撃は留まらず、海に直撃。津波を巻き起

こし、幸いにも無人だった近くの陸に直撃。今は人のいない海沿いの街が海水に飲まれ、数秒の間、スコーピオンのいた場所の半径百メートルの水源が無くなり、海底がそのまま見え、水中にいたガストレアがらもれなくその衝撃により消し飛ぶか気絶して、半径五キロの中で大量の水生ガストレアが発見された。

さらに、海底には隕石がぶつかつたのではないかと思える程の大きなクレーターが出来上がり、ゾディアック越しでもそれだけ大きなクレーターを作つた事から、蓮太郎の本気は大災害レベルだと無理矢理認識させられる。

さらに起こつたのは震度七の地震。そこを中心に震度七の地震が起こり、全世界で地震が発生した。日本では震度五以上の地震が発生。その地震で死者は出なかつたが、家具が壊れるなどの小さな問題が起きた。

聖天子はそれをリアルタイムで見っていた。これからしなければならぬ他エリア等への対応を考えると胃がキリキリとしてきた。そして、腹を抑える聖天子に、一つの錠剤が差し出される。差し出したのは木更。もう片方の手には胃薬の箱があつた。

聖天子はそれを受け取り、木更も箱から新しく胃薬を取り出して一緒に飲んだ。胃薬はキリキリと痛む胃を安らげてくれた。現実逃避出来る程度に。

そして、クレーターの中心に蓮太郎は立っていた。呆然と。

「……………なんだ、ステージVもこんなもんか。」

期待をしてた分、このあっさり感に溜め息もつきたくなつた蓮太郎だったが、とつとと延珠と夏世にステージVを倒したことを知らせようと来た時と同じ速度で走つて帰るのであつた。

延珠と木更と聖天子が蓮太郎が原因で胃薬飲んでるとも知らずに。

エイトパンチ

「では、里見蓮太郎、藍原延珠ペアを今回の蛭子影胤、蛭子小比奈の討伐、さらにゾディアック、スコーピオンをワンパンでの討伐という異例の功績をたたえ、貴方方を序列十萬位から三位へと昇格させ……」

暫くしてから。蓮太郎と延珠は聖居へと招かれた。聖天子直々の賞賛等があると聞き、木更が無理矢理礼装に着替えさせて送り込んだ。

聖天子の言葉を右から左に九割聞き流すという暴挙を犯していると、とうとう本題に入った。

実は蓮太郎の強さを聖天子は今回の件より前から既に知っており、功績も十萬位どころか一萬位より上になってもいい程だったのだが、蓮太郎のあまり目立ちたくないという言葉で聖天子から直々に十萬位に数ヶ月以上固定していたのだ。だが、今回のような事をされては昇格させざるを得ないということで蓮太郎の順位は上がった。

三位と言う言葉を聞いて蓮太郎はまあ、ステージV倒したんだし当たり前かと思っ
ていると

「ようかと思いましたが……ええ、思いましたよ？ 思いましたとも。ですけど、あなたの

巻き起こした災害のせいで各エリアから何事かと苦情の電話が私宛に全て来ているのですよ。今だつて空いた時間を狙つてこうして話をしていっているのですが、この話が終わつたら今回の件の事後処理を私はしなくてはいけないのですよ。お陰で胃が痛くなつて胃薬手放せませんし。なので本来は序列を三位に上げれる功績だったのですが、私の私怨げふんげふん……私の独断により序列を千位に上げるまでとします。」

聖天子は笑顔だったが、こめかみに青筋浮かべて結構キツめの怒気を放っている。延珠は静かに胃薬を飲んだ。

蓮太郎が私怨は可笑しいだろと叫びそうになつたが、口を開く前に聖天子がなにか？と威圧してきたために何も言えなかつた。延珠は腹をおさえている。胃薬の効き目が悪いようだ。

「津波とか地震とかをまさか人災で済ませるわけにもいきませんしね、ええ。なので天の梯子とかででつち上げてく内になんか滅茶苦茶になつていきますし胃は痛くなつてきますし……ぶつちやけ里見さん恨んでますよ？こんな事後処理残していくくなんて。スコープオン倒してくれたのは感謝してもしきれない程ですよ？ですけどここまで人間じゃできないことやつてのけられると色々と後始末が大変なんですよええ。見てみますか？今までに私が対応した電話の数々を記録した用紙。」

いや、いいです。と声を絞り出すのに五秒。延珠が顔色悪くするまで五秒。

もはや聖天子はただ愚痴ってるだけだ。一応護衛はいるものの周りには人はそんなにいない。だから愚痴りたかつたのだらう。額にまで青筋浮かんで美人が台無しになりかけているが。そして延珠の顔色が真っ青だ。

「蛭子影胤は見付からないからどうなんだと色んなエリアから言われて確保した蛭子小比奈にはまんまと逃げられ……」

「げほっ(づ)ほっ……」

途中、延珠が咳をした。

「あ、えつと……すみま……」

口元を抑えた手が生温かつたので手を見る。真っ赤だった。

「……あ、これダメなバター(づ)こふう。」

延珠が咳をしながら倒れた。口からは血が垂れている。

「……え、延珠ウ!？」

「は、早く病院に！後はやっておきますから！」

「わかつた……と、言いたいのが一つだけ質問がある。」

「……なんででしょう?」

「俺はケースの中身を見た。中身は俺が幼少期に使っていた三輪車だった……聖天子様、なんであれがゾディアックを呼ぶ鍵なんだ。」

「……知りたいのならば序列十位以内に入る事です。」

「……次にゾディアックの一体が現れた時がそれを知る時だ。」

その後、蓮太郎が音速を超えなかったが、中々のスピードで延珠を病院へと連れていった。

延珠の病名はストレス性の胃潰瘍だった。

胃潰瘍との事で、延珠は一週間弱の入院となった。そんなプチトラブルがありながらも蓮太郎と延珠の序列は無事千位に上がった。延珠の胃と引き換えに。

「延珠ちゃん。君も苦労人だね。」

「……胃に穴があきそうなのだ。」

「いや、あきかけてるから胃潰瘍なんだけどね。ほら、私特製の胃薬だ。水なしで飲めですつと溶けてすつと効く。胃が痛くなったら飲むといい。」

「ありがとう。」

翌日。延珠は見舞いに来た葦から葦が延珠用に作った胃薬を貰っていた。イニシエーターとは言え、ストレス性の胃潰瘍の治りは常人と同じようだ。

なんか延珠が入院した後、蓮太郎が天童の家に文字通り殴り込みに行ったとか聞いて胃潰瘍が悪化しそうになった。延珠の胃にトドメをさしたのは聖天子の愚痴だが、さらにそれが追撃になりそうだった。今でも胃がキリキリと痛んで正直麻酔を打つてもらって早々と寝て治したい気分だ。

「まさか血を吐くほどとはね。彼の与えるストレスは恐ろしいよ。」

「もうゲームする気力もない……」

延珠の横にある台にはゲーム機が二機置かれている。木更にお金を渡して買ってきてもらった物だ。今まではこういう高価な物を蓮太郎が見ると自分の財布を見て溜め息はいてたので買うのは自重してたのだが、もう知った事かと木更に買ってきてもらった。ゲームは天誅ガールズのゲームと架空の民警を作ってガストレアを殲滅しながらIP序列一位を目指すという無双系ゲーム、そしてノベルゲームだ。

「おや、このゲームは。」

「知っているのか？」

董がノベルゲームのパッケージを手に取る。

「私がこの間買ったエロゲのコンシューマ版ではないか。神ゲーだから出てるのも当たり前か。」

「え？エロゲ？やるの？」

「まあ、暇つぶし程度にね。」

董がエロゲやる事が意外だったのかちよつと目を丸くする延珠。

「さて、私は用も果たしたし帰るとしよう。」

「もうか？」

「彼が消滅させたスコープピオンのほんの数センチ単位の細胞が今日見つかったらしくてね。どうやって見つけたのか、なんであったのか良く分からないが、それを解析せねばならんからな。お大事にな。」

董は病室から出ていった。

延珠は痛みもなくなった胃に特に疑問を抱かず、眠りについた。久々の安眠だった。

その前日。蓮太郎は延珠を病院に送ってから一人で天童の家へと行っていた。何故そこなのか。聞かれれば、蓮太郎は勘だと答える。

今回の事件で検挙された人物は皆天童の派閥、もしくは派閥だった者だ。しかも、その内一人が捕まっていない。

きな臭い。蓮太郎の心がそう告げていた。

だからこそ、調べてみる。今回の事件についてを。

合い鍵で天童の屋敷へと入る。中は殆ど変わってなかった。

堂々と……はせずになるべく隠れるようにして歩いていく。今日、この屋敷の主、天童菊之丞は夜まで帰ってこない。だから、ちやちやつと終わらせる気にいる。

途中、昔世話になった老年のハウスキーパーとすれ違い、ぼつちやまですか？と聞かれた、そうだと答えたかったが、スルーした。

そして、目的の部屋につく。鍵を腕力のみでこじ開け、中に入る。中はカーペットと棚と机がある部屋だった。

そこに纏めてあるプリントに目を通し始めようとした時、電話が鳴る。

知らない番号だったが、迷わず出る。

『やあ、ごきげんよう、里見君。』

「蛭子影胤……やっぱ生きてやがったか。」

電話の主は、蛭子影胤だった。

「八つ当たりだったとは言え、俺の拳を顔面に二度も受けて生きてるやつは初めてだ。」

『顔面の骨がエライことになってるけどね。お陰でこの先仕事が暫く出来そうにない。』

「そのまま仮面もつけられないほどデコボコになっちゃまえ。」

『その時はその時用に仮面を作るさ。』

「その度に殴り壊してやるよ。」

『特注品だから止めてくれるかな。』

「なおの事壊させてもらおうかこのブルジョワが。」

『醜い嫉妬は止めてくれないかな。延珠ちゃんに悪影響だよ?』

「ははは、自覚はある。」

『治そうとしない君は私よりも性格が歪んでるかもしれないね。』

「それはない。」

『それもそうか。』

敵どうしなのにこうもペラペラと軽口叩けるのは蓮太郎がもう一度影胤が本気で殺しに来ても本気のワンパンを出せば返り討ちにできるからと知ってるからか、ただの馬鹿だからか。

『そうそう。それと君に私のクライアントを紹介しよう。』

「そのクライアントつてのは……」

蓮太郎は勢い良く振り向き、裏拳を放つ。

バキヤツ!!と音がして突き付けられていた物が木っ端微塵になる。

それは二弾装填型のデリンジャーだった。

「あんたか。」

「くっ……」

『おやおや、ここからは話を続けるのは無粋だね。』

影胤は電話を切った。蓮太郎は携帯電話をポケットにしまうと、改めて後ろにいた人物、天童菊之丞に向き直る。

「……そこそとコソ泥の真似か、蓮太郎。」

「じゃああんたは暗殺者の真似事か？」

菊之丞はデリンジャーを持つていた手を抑えながら、蓮太郎を睨む。

「……で何をしている？」

「証拠を探していた。けど、あんたから聞く事にする。今回の事件は表だつては轡田大臣の暴走つてので決着ついてるが……今回の事件の黒幕、あんたなんだろう？天童菊之丞。」

暫く黙る菊之丞。

「……木更の差し金か？」

「俺の独断だ。」

その声を聞いた菊之丞は馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「何故私が怪しいと思つた。」

「……否定しないってことは……」

蓮太郎は菊之丞が否定しない事に自分の勘が合っているのだと悟った。

だから、聞く事だけ聞く事にした。

「傘連判を見た。書かれていた奴らは皆逮捕された。けど、首謀者の名前は書いてなかった。書いてあった人間の名前は分かるよな。」

菊之丞の返事を聞かずに話を続ける。

「皆いい人だったつてのを覚えてる。俺がガストレアをワンパンで倒したのにドン引きしてたのも覚えてる。俺の髪の毛にハサミが入らなかつたのにドン引きしてたのも覚えてる。轡田さんはあんたに尾ひれがつく前に首をくくつたんだ。そして、彼が死んでから、みんなは測つたように彼をスケープゴートにした。あんた、これを見過ぎてふんぞり返つて楽しいか？」

「何故私がそんなことをしなくてはならないのだ。」

「まあ、色々と言いたいことはあるが……先に結論を言っておこう。あんたは筋金入りのイニシエーター差別主義者だ。あんたと影胤の間で何があったか知らねえが、あんたとあいつは『ガストレア新法』を潰したいがために今回の事件を起こした。あいつには蛭子小比奈っていうイニシエーターがいるからな。イニシエーターが一枚噛んでいると知れば世論は誰一人彼女たちの味方をしなくなる。卑怯者めが。」

何の前触れもなく腹を蹴られた。だが、戦車の装甲より硬い蓮太郎の腹に蹴りを入れ

た菊之丞の足はバキツと音を上げた。

「いっつ……」

「おい、今痛いつて……」

「言つてない。」

「いや、小さくいっつ……つて。」

「言つてない。」

「でも足が変な方向に……」

「曲がつてない。」

「いや、見てからに……」

「決して脛から曲がつてたりしないから。歩けるから。ほら……いっつ……」

「今の完全に痛がつてたよな。」

「痛がつてないから。」

「……………固定しとけよ。じゃあな、お義父さん。」

何か後ろで今ここで殺さなくては後悔するぞとか、お前もガストレアを恨んでいるの
だろうとか聞こえたが、全くシリアスな場面に思えなかつた。

蓮太郎がお義父さんと言つたのはなんか、最後の良心が働いたからだ。

結局、蓮太郎が関わると色んなことがしまらない。

「おーい！れんたろー!!」

病院で延珠が叫んだ。それと同時に何か色々嫌なことが起こったが、蓮太郎は目を塞いだ。

「……ちゃんと診察して来たんだろうな？」

延珠は今日退院だが、同時に体についても診察した。

「うむ、変わりなしだ。」

「なら良かった。けるぞ。」

「あ、これ、董からなのだ。」

「先生から？分かった。」

延珠が差し出したのは封筒。そこには、延珠ちゃんは見ないように。と書かれてあった。

すぐに、蓮太郎はそれが延珠の体内侵食率などの事が書いてある用紙だと分かった。蓮太郎は帰りがてら、それを流し読みした。

蓮太郎は溜め息を吐くと、その用紙を封筒にしまった。

なははと笑つて話しながら二人は無事に帰宅。部屋に入つて一息ついた。

と、すぐにインターホンが鳴つた。はて、誰か来る予定なんてあつたか？と延珠と顔を合わせるが、延珠も首を傾げたのですぐに延珠にも来客の予定はないと悟る。

そしてもう一度鳴るインターホンを聞き、蓮太郎が玄関を開ける。そこにいたのは。

「ドーモ、里見Ⅱサン。」

「か、夏世!？」

先日、スコープピオンを消滅させてから一緒にへりに乗つたものの、聖天子直属の部下にドナドナされていった夏世だった。

「ちよつと色々と面倒なことがあつたので来るのが遅れました。」

「いやいや、なんで来た。つてか、ペアがいらないイニシエーターはIISOに身柄を保護されるはずだろうが。」

「その辺含めて話しますので入れてください。」

「わ、分かつた……」

何故かキャリーバッグとか持つてる夏世を中に入る。予想外の客に延珠が驚きのあまりに目を見開いている。

蓮太郎がちゃぶ台を出してきて床に置き、延珠と隣り合つて座り、夏世の正面に行く。

「で、なんでここに?」

「えっと、あの後ドナドナされた私ですが、そこで色々と言われた訳ですよ。今回の件は公表でもされたら困るから何か一つ要望を聞く代わりに決して口外しないでくれと。あ、世間では里見さんがレールガン使つてスコープオンを倒したつてことになつてるそうです。なので、事情通の人以外には話すな。だそうです。」

「お、おう。」

「どうやら、聖天子があの時言おうとしたことつぽいが、代わりに夏世が伝令役みたいなものにされたらしい。」

「で、私はその取り引きに応じて、何も喋らない代わりに里見さんの所に住むのを許してくれと。あと、侵食抑制剤も何時も通りにくれという取り引きをしまして。」

「ちよつと待て！何故俺の部屋だ!？」

「そうだ！ここは妾と蓮太郎の愛の巣だ!！」

「延珠く、頼むから黙ってくれね？愛の巣とかじゃねえから。」

「まあ、そういうだろうと思つて。」

夏世はキャリーバッグを漁ると、ポイツ。と机の上に紙の束を投げた。

「部屋代、払います。」

「歯ブラシ持つてきたか？」

投げられた札束を見て蓮太郎が一瞬で心変わり。そんな蓮太郎を見てこれから大丈

夫なのかと考える延珠。胃も軽く痛くなってきた。

「それと、私を強くしてください。どんな特訓にも耐えます。」

「……まあ、そこは後後だな。俺が鍛えてやってもいいと思つたら鍛えてやろう。」

下手するとまた蓮太郎のようなストレスの種の塊が増えるのかと思つてしまう延珠。その光景を想像してみた。蓮太郎と夏世のワンパンで色んな災害が……

「ぐっふっ。」

「つて、延珠がまた吐血したア!？」

「ちよっ、救急車を!!」

想像しただけで胃潰瘍再発。

頼むから、頼むから普通でいてくれと薄れていく意識の中、願う延珠であった。

ちなみに、入院期間は三日でした。

藍原延珠診察カルテ

担当医、室戸堇

・藍原延珠、ガストレアウイルスによる体内侵食率二四・七%。

・ 形象崩壊予測値まで残り二五・三%

・ 担当医のコメント——安全領域。大きな怪我等をしなければ余程の事が無い限り大丈夫でしょう。

ここからは医師としてでなく、友として進言する。

頼むから彼女の胃を休ませてやってくれ。見てると健気過ぎて泣けてくる。割とマジで。

ナインパンチ

「もしもし木更さん？え？なに、誘導に成功した？」

『ええ、いい具合に夏世ちゃんがショットガンでの牽制で誘導してくれたわ。もうすぐ着くからスタンバイよろしく！』

「あいよ。」

とある遊園地の中。蓮太郎はグッズ売り場のアルバイターをしていた。

ちよつとトイレ行つてくると同期のアルバイターに声をかけてサツと外に出る。来るとしたら入り口付近だろう。と、考えているとショットガンの爆発音にも似た銃声が聞こえてきた。

それが夏世の持つショットガンの銃声だとすぐに察し、一直線に建物を飛び越え進んでいく。

暫くしてショットガンを突きつけている夏世とやつと追い詰めた。という顔をしている木更と延珠。そして絶望に染まった顔色をしている今回のターゲット二人が目に見えた。

「待たせたな。」

建物の上から飛び降り、夏世の後ろで木更と延珠の前に降り立つ。

「今回の依頼であなた達の身柄は天童民警会社が捕縛させてもらいます。」

そんじゃ、とつとと捕まえますか。と蓮太郎が木更に手を差し出す。木更は察してロープを蓮太郎に渡す。

「天童民警会社って……あの天童民警会社？」

「知ってるのか？」

「そりゃあ……あの里見蓮太郎がいる事務所だつて。」

「その里見蓮太郎は俺な。ほら、お縄についたついた。俺まだシフト中なんだから早く捕まってくれよ。」

数分ならまだ大の方かと思われるだろうが、流石に十数分もあけるわけにはいかない。

「つつかお前ら何やったんだ？ 確か俺らとは別の民警から追われてたんだろ？」

「それが……」

二人の青年と少女の内、青年が話した。青年はどうやら父親の借金の肩代わりをさせられ、ヤクザのバラニウム鉱山で強制労働させられていたらしい。

そして、隣の少女……朱里と共にその鉱山からジープを奪って命からがら脱出してきたそうなの。

しかも、その鉾山では雇われた民警が気に入らない作業員を青年、常弘が知る限り三人も殺してゐるらしい。逃げるのも納得だ。

「蓮太郎、妾はこいつらが犯罪者とは思へんぞ。」

「私もです。」

「……嘘は言つてないんだな。えつと……小星常弘に那澤朱里……だったか?」

コクリ。と二人が無言の肯定。人の嘘は多少見抜ける夏世にアイコンタクトで嘘はついてないか?と聞くと夏世は嘘はついてないと頷く。

「……俺としては見逃したいが?」

「奇遇ね。私もよ。けど、もう連絡しちやつた。」

「つて事は?」

「もうすぐ来るわよ。」

瞬間、風切り音。方角は後ろから。自分たちには角度と音と方角的には当たりそうになかったが、常弘の足には当たりそうだった。ここで刺さったらスプラッタ間違いなしなので自分の顔の横を通過した時、二本指で挟んで止める。ボウガンの矢だった。

「ようやく見つけたぞ、ガキ共が!!」

何処の世紀末の下っ端だと蓮太郎は思ってしまったが、モヒカンじゃないので違うかと分かった。

「とつとと連れ帰って殺して豚の餌にしてやらア!!」

常弘の顔色は真っ青で朱里は常弘にしがみついてガクブルと震えている。

蓮太郎はやってきた民警を見る。民警の側にイニシエーターはいない。

「おい、イニシエーターはどうした? あの子は呪われた子供たちだぞ。プロモーターだけで連れて行けると思ってるのか。」

そう言うと、プロモーター……羽賀は目を逸らした。

「あー、いたな。いたいた。ギヤアギヤアうるさかったからぶつ殺しちまったぜ。ま、殉職扱いにすりゃあ代わりのイニシエーターなんて……」

「何言ってるんだ……」

「ひよ?」

「俺のバトルフェイズが始まったぜこの腐れ外道が!!」

刹那。風が吹いたと思ったら羽賀が吹っ飛んでいた。

「次に民警やつてるの見たら顔面が矯正必要な位の力で殴ってやるぞこの虫野郎!!」

見えないほど速く動き、殴ってたのに気付いたのは蓮太郎が拳を振り切った姿が一瞬見えたからだ。しかも、大の大人が吹っ飛ぶ力で殴っても本気ではない。その事実往常弘はポカンとする。

「里見くん! 何してるの!?! やるのは報酬貰ってからにしろなさいよ!!」

「んなもんあいつが報酬払わなかったってことにしといてくれよ。」

「この……つて電話だわ。はいもしもし……つて十一区でガストレア!? 里見くん、走りなさい!」

「俺バイト……」

「辞めなさい!」

「理不尽だな家の社長は!! お前らも就職するならこんな理不尽な社長の元に就くなよ!! 経験者からの助言だ!」

急に指をささされて叫ばれたのでビクツとする常弘と朱里。

「いいから走りなさい!」

「わーつてるよ!! 掴まれ、延珠、夏世!」

「いえーい!」

「えいつ。」

「アデュー木更さん!」

「私も連れてけこの馬鹿!!」

結果、蓮太郎に延珠、夏世、木更が掴まり、蓮太郎はスポーツカー真つ青な速度で走り去っていくのだった。

そして、常弘は決めた。将来は蓮太郎のような強い民警に、朱里と二人でなろうと。

隣でポケーっとしてる少女を見て思うのだった。

蓮太郎はバイトをクビになった。

「んじや、延珠、夏世。留守番しとけよ。」

「分かったのだ！」

「誘拐だけはしないでくださいね。」

「するか馬鹿野郎。」

今日は平日。蓮太郎は学校へと行く日だ。延珠と夏世は今は学校に通ってないため、留守番だ。

延珠の転校先は未だに見つかっておらず、夏世も延珠と同じ学校に編入させようと考えているので夏世の通う学校も保留中だ。

どうやら勾田小学校から色んな学校へと延珠の事が又聞きで伝わってるらしく、どこも延珠を受け入れようとしない。毎回それにブチ切れそうになりながらも抑えている。延珠はストレスで胃をやられてるが、いつか蓮太郎は怒りで血管をやるかもしれない。

「おはよ、里見くん。」

「おはよー、木更さん。」

途中、木更と偶然にも合流した。延珠ちゃんは？と聞かれるが、まだ学校が決まっていなくて話す。

「……そう。大変ね。」

「ああ。延珠のような奴は学校へ行くべきなのにな……」

「大切に思ってるのね。延珠ちゃんのこと。」

延珠の事をちゃんと考えている蓮太郎を見て微笑む木更。

「家族だからな。当たり前だ。」

蓮太郎は当然だと返す。この御時世、蓮太郎と同じ考えを持つ者は少なくはないが珍しい。蓮太郎は是非とも聖天子の発案したガストレア新法を可決してくれと何時も願っている。

「そうね。それじゃ、そんな里見くんにお話がひとつ。」

「なんのだよ。」

「護衛の依頼よ。しかも聖天子様から直々のご指名よ。へましないように。」

「どうやら、スコープオンを倒した後も蓮太郎に降り注ぐ厄介事は後を絶たないらしい。」

蓮太郎の小さな溜め息は鳥の鳴き声にかき消された。

蓮太郎は指定された時間通りに聖居についた。守衛に要件などを伝えると記者会見室に守衛がバンズで蓮太郎が具のサンドイッチされて連れて行かれた。

中は綺麗に椅子が並べられおり、登壇には聖天子が登っていた。そして、聖天子が演説を始めた。

演習か。と蓮太郎は察すると、なるべく音を立てないように近くにある椅子に座る。が、ガタンツ。と大きめの音が響き、やべっと思つたその時にその場にいた全員が蓮太郎の方を向いた。

「ごきげんよう。時間通りですね、里見さん。」

「家の社長と居候が失礼のないように時間通りに行けつて行つて蹴り出されてな。仕方なく時間に合わせて歩いて来ただけだ。」

例え相手が国家元首でも蓮太郎はタメ口のままだ。何というか、蓮太郎はその無敵さ故に恐れという物を捨てたようだ。

「そうでしたか。」

と、聖天子と会話していると隣にいた聖天子の秘書らしき人物——名は清美と言うら

しい——が聖天子にこの人は何者かと聞いてきた。

「この方あのゾディアックの一体を消滅させた東京エリアの英雄、天童民警会社の里見蓮太郎さんです。」

「レールガンで倒した事になってるんじゃないのだったのか？」

「聖居に居る方の大半は真実を知っています。」

「里見蓮太郎って……あの元歌のお兄さんでゲイバーのストリップバーのあの里見蓮太郎
!？」

「おーい、何だよその俺が変態みたいな言い方。」

「違うのですか？」

「聖天子様？言っつていい冗談と悪い冗談つっのがあつてだな。」

清美の言葉に聖天子がニコニコとしながら便乗する。蓮太郎、軽くキレかける。

どうやら中途半端な報道規制のせいで蓮太郎の事は色々と歪んでネットに広まり、蓮太郎は元シイタケ栽培員とか元開運アドバイザーで元占い師でネットで噂されるあの『ワンパンマン』らしい。ワンパンマンだけは正解だ。

「俺をおちよくる為だけに呼んだのなら壁を破壊してマッハ3で帰宅させてもらおう。」

「それやったら捕まえますよ？おちよくる為ではありません。あなたに依頼を頼みたいのです。」

「最初からそう言えつての……で、何をしたらいいんだ？」

聖天子がニコニコとしながら冗談を言うのに蓮太郎は彼女はこんな事も言うのかと考へながらも要件を聞くことにした。

「明後日、大阪エリアの齊武大統領が非公式に東京エリアを訪れます。」

「……これまた大々的な事が……」

齊武宗玄。大阪エリアで色々とやっていると聞く大阪版聖天子と言った感じだ。性別も性格も真逆に近いが。

蓮太郎は一応齊武宗玄には会ったことがある。

「なんで今だ？」

「菊之丞さんの不在が大きいかと。」

「いねえのか？」

「足を折つてゐるのに外国に出張に……」

「……」

なんか凄く申し訳なくなつた。だが謝らない。

「……つて事は、俺はジジイの代わりか？」

「はい。彼のやつてた護衛の仕事を里見さんにはやつてもらいたいです。」

「あんたにや専属の護衛達がいただろ。」

よくテレビの端に写っている男たちのことを思い出す。

「はい。今からその方達を紹介します。入ってきてください。」

聖天子の言葉と共に軍靴が地面を叩く音が聞こえる。

「こちらが隊長の保脇さんです。」

保脇と呼ばれた男が一步前に出て蓮太郎に手を差し出す。

「どうも、紹介にあずかりました、保脇卓人です。階級は三尉。護衛隊長をやらせてもらっています。お噂はかねがね。もしもの時はよろしくお願いします。」

保脇が手を差し出して来る。握手という事だろう。

「ああ、よろし……」

刹那の間感じた悪寒。蓮太郎は本能に従い保脇の目を見る。

歓迎されていない。それは目を見ただけで分かった。だが、他にも蓮太郎は感じていた。蓮太郎の勘が告げている。

こいつは、自分達とは根元から違う。腐っていると。本能が告げている。

差し出そうとした手を引っ込め、保脇を睨む。

「里見さんっ！握手を返さないのは流石に……」

「……」

蓮太郎の発するただならぬ気配に聖天子が言葉を引っ込める。何か、蓮太郎の様子が

先程までのおちやらけた感じとは違う。

保脇は肩をすくめると手を引つ込めた。

その後話された報酬の話を右から左に聞き流すと聖天子は時間が迫つてたのか何処かに行つてしまった。

「あつ………出口………」

数十秒後、蓮太郎は見事にレッドカーペットが敷かれてる廊下で迷つた。

窓を開けてそこから出るか？なんて考えて窓を探す。が、不意に後ろから殺気。倒すことは容易い。だが、何故殺そうとするのか知りたいがためにわざと捕まる。腕を組まれて近くの男子トイレの壁に叩きつけられる。額が壁に当たつたが全く痛くない。

「喚くな。」

「お前がな。」

後ろから組み付いてきた二人をまず後ろに下がつて壁から距離をとり、上半身をお辞儀をするように勢い良く曲げて組み付いていた二人を壁に叩きつけ、手を無理矢理開放し、鳩尾を死なない程度に殴り気絶させる。

「………何だつたんだ。」

さらに背後に殺気。同時に撃鉄の音。

「………だろうと思つたぜ。」

後ろにいたのは保脇を含めた護衛官六人だった。

保脇は腰から大振りのナイフを取り出すと、蓮太郎を壁に再び叩きつけ、顔の横にナイフをつきたてる。

「聖天子様からの依頼を断れ。」

「……」

「目障りなんだよ。何がゾディアックを倒した英雄だ。たまたま放棄されてたレールガンで倒せただけじゃないか。あの場に僕がいれば僕がやっていた。」

ああ、こいつらは本当の事を知らされてないのか。と蓮太郎は何の脈絡もないことを考える。所詮、こいつらが持つてる武器を一斉に振るおうと蓮太郎は殺せない。

しかも、あのレールガンには弾が無かった。どの道、保脇にあのスコピオンを倒すことは不可能だ。

「やる事が小物だな。」

「黙れ。お前が僕の意味だけで地獄に落ちる事が分かっているのか。」

「その言葉、まんま返すぞ。」

「この民警風情が……貴様がいなければ聖天子様の隣は僕の居場所だったんだ。それを貴様は……」

「いつも傍にいるだろ。」

蓮太郎はそれのどこが不満だコノヤローと内心で付け足す。これ以上何か言ったら蓮太郎にナイフを突き刺して折れたナイフで傷ついた保脇が冤罪を擦り付けかねん。

「馬鹿めが。車中や会合でのお供と一緒にするな。それにな、里見蓮太郎。」

保脇が舌なめずりする。今すぐぶん殴りたかった。

「聖天子様はお美しく成長され今年で十六歳となった。そろそろ、世継ぎが必要だとは思わんか？」

「ケツ、ロリコンが。触んじやねえよ。」

「なんだと貴様ア！」

まだ学生に例えれば高校一年生の少女に欲情する大人の何処が正常だこのロリコンがと付け足す。

保脇が拳銃を乱暴に突き立てる。

「で、返事は？」

聖天子の依頼を断るかだろう。

「お前の指図なんてギロチンで首を搔っ切られようと受けるか。」

「……手足を粉砕しろ。」

保脇が拳銃をしまい、後ろの護衛官に命令。護衛官が蓮太郎に組み付く。

手足を粉砕しようとするが、蓮太郎はビクともしない。

「手足の粉碎つっのはな。」

蓮太郎が片足で一人の足を払い、腕を引つ張つて拘束から外す。そして、もう一人の腕を握り、思いつき握る。そして、倒れたもう一人の足を踏みつける。

「こつやつて圧倒的力でやるのが一番なんだよ。」

何と言う暴論。だが、現に蓮太郎に腕を掴まれ踏まれている護衛官の骨はミシミシと悲鳴をあげている。

「貴様!!」

保脇が拳銃を抜く。

だが、それより早く蓮太郎がもう片方の手を拘束から解き、手をコイントスをするときの形にする。

親指を保脇へと向け、手加減して弾く。弾丸が発射されたような音が響いた瞬間、圧縮され発射された空気の弾丸が保脇の頬を掠った。

蓮太郎が新たに開発した遠距離攻撃、指弾。空気を弾き弾丸のように発射するというワンパンマンである蓮太郎だからこそ出来る芸当だ。

全力で放てばアンチマテリアルライフル真つ青な威力も出るであろうそれはもしかしたら影胤の斥力フィールドも貫くやもしれない。

「貴様……何をした!!」

「次は……当てる。」

次弾の装填は容易い。そして、ロックオンも。

聖居内では発砲できない。保脇は部下に行くぞ。と言うと去っていった。蓮太郎も聖居の換気用窓から出ていった。

聖居前にやっと出れて伸びをする。パキパキと小気味のいい音が響く。そしてちよつとした爽快感。

さて、タイムセールも近いしとつととスーパーに行くかと歩き始めようとするが、聖居の前の噴水になにやらプラチナブロンドの髪の毛の子が自転車でぐるぐる回っているのが見えた気がした。パジャマでスリッパ履いて。

疲れているのかなと目頭を揉んでから暫く噴水をじーつとみる。確かに噴水を回っていた。パジャマでスリッパ履いた子が。頭が痛くなった。

触らぬ神に祟なし。と考えたが、流石に放っておくのもどうしたものか考える。家に強制送還するのは容易いが話しかけづらい。

と、考えているとガシャーン。と自転車で転んだ音がした。

「つてえなアアア!?このガキヤア!!」

はいめんどくさくなくなつてまいりましたと蓮太郎が額に手を置く。

仕方ないし助けるかと自転車をストンピングしてる不良三人に大きめの石を持つて近付く。

トントン。と肩を叩き振り向かせる。威圧しながら振り向く。

「ここに石があるじゃろ?これをこうしてこうじゃ。」

蓮太郎はここに石があるじゃろ?の所で手の上に石を乗つけてこれをこうしての所で石を握り込み、こうじゃのところを粉砕する。ガゴツバキイツ!!と凄まじい音が響くが、蓮太郎の鋼の皮膚には傷一つつかない。そして、落ちている石の破片を拾い、こう言った。

「これが三秒後のお前たちの姿だ。」

不良三人は迷わず全速力で逃げ出した。

テンパンチ

「で、お前は何処に住んでるんだ？」

あの後、少女の顔を濡らしたタオルでガッシガシと拭いた後、蓮太郎はボロボロの自転車を自分の力のみで直していた。

幸い部品が飛んでる等は無かったので歪んだフレームやタイヤをグイッグイッと引っ張って叩いて元通りにしていく。

「……わかりません。」

少女は何やらジャラジャラと何かを取り出すような音を鳴らすと、ボリボリと咀嚼する音を鳴らした。は？と少女の方を見ると、少女はボトルのようなものを持っており、今現在ボリボリと何か食べていた。ボトルにはカフェインと書かれていた。

カフェインの錠剤はボリボリと食うもんじゃねえよと蓮太郎は言うと共に自転車の修理に取り掛かる。

「で、お前、名前はなんていうんだ？」

そういえば聞いていなかったと思ひ出し、すぐに聞く。

少女は暫く黙ってたが、

「……ティナ。ティナ・スプラウトです。」

「ティナか。俺は里見蓮太郎だ。もうすぐ直るから待ってる。」

「……見知らぬ人の自転車を直すなんて優しいんですね。」

「おい、これお前の。お前が乗ってきたやつ。」

「……私、自転車になんて乗ってました?」

「ただ寝ぼけてんだお前。」

まさか自転車に乗って来たことすら覚えてないという。数分前の事なのに。

頭をガシガシと掻きむしりながら自転車を直していく。

「……力持ちですね。」

「まあな。それなりに力はある。」

お前がそれなりなら他の人間は全て非力になる。

「ふう……こんなもんか?」

蓮太郎は直していた自転車のスタンドを上げ、ハンドルを持って少しだけ走らせる。特に問題はなかった。

すぐにスタンドを下げる。

「ほら、とつとつこれに乗って帰れ。んでもって寝れ。」

「……帰り道わかりません。」

「……交番行け。俺には手が負えんと今分かった。」

「……………」

「だあ！とりあえず覚えてる範囲で帰れ！道がわかんなくなったらこれに電話かけろ！」

蓮太郎は民警ライセンスが入っている手帳から紙を取り出し渡す。これには蓮太郎の携帯電話の番号が書かれている。

ティナはそれを受け取ると、紙を見ながら携帯を操作し、耳に当てた。数秒後、蓮太郎の携帯電話に電話がかかってきた。

「……ほぼ零距离だろうが。」

蓮太郎は電話に出てからティナに向けていった。

「偽の電話番号の可能性があると思って……」

「それやって俺に何の得がある。」

「あと、一つ伝える事が。」

「何だよ。」

「私、帰り道分かります。」

「とつとと帰れ寝惚すけ少女!!」

蓮太郎は携帯電話の通話を切った。ティナは覚束無い足取りで座ってたベンチから

立ち上がると自転車に手をかけた。

「今日はありがとうございました。さようなら、蓮太郎さん。また会えるといいですね。」

そのまま覚束無い足取りで去っていくティナを見えなくなるまで眺めた。

さて、これからは戦闘タイムセトルの時間だと気持ちを切り替え、走る。

辺りが暗くなる。細胞の一つ一つが覚醒していく。ここからは、私の時間だと体が告げる。

ティナは段々と意識がはっきりしてきた体で自転車を押して歩く。その時、携帯が震える。

「マスターですか？」

『定時の報告をせよ。』

簡素な言葉。だが、ティナは言葉を綴る。

「無事、東京エリアに潜入しました。これから一度アパートへ戻ってアイテムの回収地点へと向かいます。」

『何か異常は?』

「小さなトラブルが……ですが、親切な人に助けてもらいました。」

蓮太郎の事を思う。寝ぼけてた自分の相手は凄く面倒だったろうに、ちゃんと相手してくれるなんて。とティナは思う。だが、ティナがマスターと呼称した人物の言葉でその浮ついた気持ちを断つ。

『接触は避けると言った筈だ。あらゆる情報の流出を避け、名前も偽名を使え。』

「……………問題ありません。」

蓮太郎に名乗った『ティナ・スプラウト』という名前は彼女の本名だ。

一度くらいなら。とティナは思い、次のマスターの言葉に備える。

『最後に一つ。お前の任務はなんだ。』

ティナは迷わず、言い放った。

「東京エリア国家元首、聖天子抹殺です。必ず、遂げてみせます。」

例え、もう蓮太郎と会う資格を無くそうと。

ティナは電話を切ると、そのままの足でアパートへ戻った。

中に入るとかび臭い匂いが歓迎するが、気にせず中には入り、姿見を見る。

肩元がはだけてボタンも何個か付け間違えている上に髪の毛は寝癖大量。私だって

おめかししたら可愛いのに……と若干の後悔をしながらシャワーを浴びる。

そして暗い色が主体のドレスを身にまとい、携帯のバッテリーを満充電の物に変え、小型ヘッドセットを右耳につけ、髪の毛で隠し外に出る。

首尾よくティナはコンテナルームへと到着し、その内の一つにパスコードを打ち、それを開ける。

中には多数の兵器。その内の一つ、対戦車ライフルの入ったガンケースを見つけ、中を確認する。ちゃんと中身があるのを確認して持ち上げる。が、非力な少女の力では持ち上がらない。力を開放。全身に力が満ちる感覚と共にガンケースを持ち上げる。

俯きながらコンテナルームを出て早足にアパートを指す。後は部屋に戻るだけと慢心してためか、背後からの車の音に気付くのが一歩遅れた。

「……マスター、不測の事態です。ポリスに見つかりました。」

『ふむ……誰もいないな?』

「はい。」

ティナは髪で目を隠しながら警察官が降りてきたのを確認する。
『殺せ。』

十秒ほど経っただろうか。警察官は重傷をおい、パトカーは使い物となくなつた。

返り血が着いてないのを確認し、ティナは動く。もう、失態はしない。だが、何故だ

ろう。

あの、優しい青年の事が浮かんでくるのは。もっと、考える事はある筈だ。ティナは思考を振り切るかのように足早にアパートを目指した。

「こりやひでえな……」

蓮太郎と延珠と夏世はタイムセールスの戦利品片手にとある事故らしき現場の野次馬に来ていた。

パトカーは側面が大きく凹み、その他にももう使い物にならなくなった部品が多い。そして、重傷の警察官が見える。

すぐに、子供たちの仕業だと理解できた。

「……」

「……延珠、お前のせいじゃない。お前のせいじゃないんだ。」

「蓮太郎……」

延珠は苦笑しながら気にはおらぬ。と言った。

「……延珠さん。気にしないでください。」

「夏世？」

「そうだ。気にするんじゃない。お前のせいじゃないんだ。」

延珠の瞳が揺れる。

「延珠……」

蓮太郎が延珠の目を見て名前を呼ぶ。

「……なんで、分かったのだ？」

「家族だからな。」

延珠は涙を流した。夏世は何があつたのかは知らない。だが、知る気にはならなかつた。

「……どうして、みんな仲良くできないのだ……？」

「……いつか、いつか皆仲良く暮らせる時が来る。」

蓮太郎は延珠の頭をクシャクシャと撫でながら先を歩く。俺について来いと言わんばかりに。そのすぐ後ろを夏世がついていき、数秒遅れて延珠がついていった。

「今日はすき焼きだ！ たんと食うぞ!!」

「たくさんお肉が買えましたからね……じゅるり。」

「おいイルカ。涎垂れてんぞ。」

「これは失礼。」

場所は変わって蓮太郎宅。目の前にはグツグツと煮える鍋。中には肉五割と野菜五割。

なんとも蓮太郎宅では豪華な料理が胸を張って置いてある。

夏世が部屋代と言つて蓮太郎に渡した札束は蓮太郎の銀行にあり、いつか夏世が一人立ちする時に渡そうと考えてある。そのため、この肉は蓮太郎の金のみで買ったという信じ難いものだ。故に、三人とも目がギラギラしている。久々の肉だと。

「卵用意よし。」

「米よし。」

「煮え具合よし。」

「完璧だ。では、手を合わせて、材料となつた全ての生物と育てた方に感謝の意を込めて
！」

『いただき……』

。ピンポーン。とインターホンが鳴る。

『誰だア!!』

さあ食べるぞという時に無粋な音。蓮太郎と延珠と夏世はイライラしながら玄関を開ける。

「里見ちゃん……看病して……」

何の断りもなく入ってきた和服の少女はドサツとその場で倒れた。

「……誰なのだ？」

「……司馬美織。知り合いだ。」

「もしかして、司馬重工の？」

「そうだ。よく知ってるな、夏世。」

「苗字が同じだったので。」

司馬美織。司馬重工の社長令嬢で、延珠の特別製の靴を製作してくれると申し出てくれた者である。

「お前の靴もこいつが作ってくれたんだ。」

「そうだったのか。」

美織の手にはビニール袋。そして、中には栄養ドリンクと風邪薬。

上げるだけ上げるか。と三人で美織を引っ張ろうとした時、今度は無音でドアが開く。

「里見くん……すき焼き……作って……」

今度は木更だった。ドサツと美織の上に倒れ込み、美織がむぎゅつと変な声を出す。

「……夏世、好きな方を選べ。捨ててくる権利をやろう。」

「要りませんそんな権利。」

「何でなのだ？」

「毒を生み出す化学反応を引き起こす。」

「要するにめちやくちや仲悪いと。」

「そうだ。」

「でも片方捨てて野垂れ死にしたら私は里見さんの事をネットに流して炎上させて愉悦に浸ります。」

「お前さ、容赦ねえよな。」

「人が焦って絶望に浸った顔……最高じゃな」

「黙れDSロリ。」

「正に愉悦。」

そして数分後。

「いやあ、美味しいわあ、里見ちゃん。」

「里見くん……？何でこいつがここにいるのかしら？」

「あく肉うめえ。」

「肉最高です。」

「夏世！それは妾のだ！」

「取ったもん勝ち……って取り皿の中のお肉が!？」

「取ったもん勝ちなのだ。」

「ぐぬぬ……もう普通に……」

「箸がつく前に掠めとる。」

「私を虐めて楽しいですか二人とも!？」

『うんっ!!』

「死んでしまえ!!」

「って話聞けこのロリコンとドSロリとマセガキ!!」

『アア!?!』

「ひっ!?!」

なんか、もう、カオスだった。美織は一人で笑顔でパクパクと肉を頬張る。

ちなみに、美織は風邪薬と栄養ドリンクを混ぜてぶち込んだら数秒で治った。

「と、とにかく! 私は材料持ち寄ったけどこの蛇女はタダ飯よね!？」

「あら木更。おったんか? 胸が大きすぎて顔が見えなかったわ。」

ピシガキッ! と箸から音がなり、バキィッ!! と見た事のない割れ方をする箸。

「……里見くん? 箸変えてもらえるかしら?」

「その前に。」

夏世が手を出す。木更が小首をかしげる。

「箸の弁償代、払ってください。この家のものなので。」

「はい……」

木更が申し訳なきような顔で財布から五百円玉を取り出し、夏世に渡す。

「ああ……この感覚……正しく愉悦。」

「性格悪いわねこのロリは!!」

「黙れ牛!!」

「里見くん!?教育がなってないわよ!」

「肉うめえ。」

「聞きなさいよこのロリコン!!」

「んだと牛!!」

「あんたもかい!!延珠ちゃんもなんか……」

「うるさいぞ牛!!」

「フルボッコ!?まさかの味方なし!?なんで箸折っただけでこうも責められるの!」

『家の箸折る方が悪いわ!!』

「そうですねすみません!!」

まさかの木更のハートをフルボッコ。美織がコロコロと笑いこける。

「ああ……愉悦……」

「もう愉悦部にでも入りなさいよ……」

渡された割り箸を割って肉を食べる木更。

「メシウマやわ〜」

コロコロ笑いながら野菜を頬張る美織。

「えっと、あなたが延珠ちゃんやね?」

「そうだぞ?」

「噂に聞いてた通り可愛いわ〜。どう?あの靴の使い心地は。」

「最高だ!」

「それはよかった。きつくなったら新調してあげるから言うんやで?」

「うむ!」

「それにそっちは夏世ちゃんやね?家のシヨットガンはどうや?」

「グレネードランチャーユニットも含めてリコイルも弾の散らばり方も完璧です。」

「それは良かったわ。今度本来は里見ちゃんにあげるはずだったバラニウム製の散弾あげるからね。」

「それはまた……ありがとうございます。」

「私の時とは態度がえらく違うわね。」

「あなたは箸を折った厄介もの。美織さんは親切にしてくれるいい人。どっちにいい態

度取るかなんて分かりきってますよね？」

「そりゃやで木更？」

「ぐぬぬ……」

「折つたらまた罰金です。」

「割り箸で!?!捨てるのに!?!」

「二本目のお金です。」

「もしかしてさっきのに一本分入ってたの!?!」

「聞かなかった方が悪い。」

「せやで木更。」

『ねー。』

「こんの腹黒共は……」

プルプルと震える木更。その間にウマウマと肉と米を食べる蓮太郎と延珠。

「そういえば、どうして二人はそんなに仲が悪いのだ？」

唐突に延珠が聞いた。

「昔からの司馬と天童の因縁もあるんやけど、その前に木更の事はDNAレベルで嫌いなんよ。」

「貧乳。」

ボソッと呟いた木更だったが、美織は動じない。

「和服はな、胸の小さい人の方が似合うんやで？ 乳が無駄にでかい牛はお呼びでないな。わかるかえ、木更？」

延珠と夏世が全力で首を縦に振る。

そして木更から何かが切れた音が聞こえた。

「そう……雪影、蛇女の血が吸いたいの……わがままな子ね。」

木更が持つていた日本刀を抜刀する。

「里見くん。この鍋、美味しいけど何かが足りないの……なんだと思う？ それはね、美織の血よ。」

ふふふ……と豹変した木更が日本刀を構える。蓮太郎が夏世と延珠に机を避難させろと目で訴える。

「私が瀉血してあげる。あんたの首から上、いらぬ。」

「落ち着け。」

「落ち着いてるわよ!! ものすつごいね!!」

ひっひっふーと出ちやう呼吸法をします木更。駄目だこりやと美織が乗らないことを祈る。

「あんたの会社二階建てにしてカラ売りかけて会社ごとぶっ潰してやるわ!! そんなもつ

てあんたを跪かせて笑い飛ばしてやるわ!!」

「やめときい。司馬重工に売りから入るなんて自殺行為やで? たかが天童の家出娘の資金で何ができると言うん? 買いから入ればたんまり設けさせてあげるで?」

「あんたの会社の株買う位なら舌嚙んで死ぬわ!!」

「引く気はないようやね。」

「当然よ!!」

美織がゆらりと立ち上がり、持つてる扇子……鉄扇を構える。

蓮太郎は溜め息をつく。このままだと敷金帰つてこねえと。だから、

「司馬流二天桶蝶霞獄——」

「天童流抜刀術一の型二番——」

そして振るわれる鉄扇と日本刀。だが、それを阻む者がいた。

ガキンツ!! と衝撃波を巻き起こしながらそれを両手で止めたのは蓮太郎だった。

「里見くん! なんで止めるのよ!」

「せやで! こここで息の根を……」

「出てけ。」

『えっ……?』

蓮太郎がドスの効いた声で呟いたので思わず聞き返した。

「出てけ。」

蓮太郎が俯いてた顔を上げて、何処か凄みのある笑顔で言い放った。

「で、でも……」

「出てけ。」

「せめてここで木更を……」

「出てけ。」

「さ、さと……」

「出てけ。」

「里見ちゃ……」

「出てけ。」

『……はい。』

蓮太郎が日本刀と鉄扇を離す。二人はすぐごと玄関に向かつていく。が、夏世だけがちよいちよいと美織の袖を引っ張った。美織が振り向く。

「司馬重工の株、買います。」

「……大好き!!」

味方(?)となってくれた夏世に抱きつく美織。だが、夏世は今、相当悪い顔をして内心でこう言い放った。

(計画通り!!)

と。

数ヶ月後、ちよつとした小金持ちの通帳と化した自分の通帳を見て夏世は悪い笑みを浮かべていた。夏世は美織が木更に言ったように、本当にたんまりと儲けたのだった。暫くは笑いが止まらなかつたそうなの。これが愉悅とも叫んでいた。このロリ、段々と性格が悪くなつてきている。

ちなみに、その後のすき焼きは三人で仲良く食べました。

イレブンパンチ

「それでは蓮太郎、頑張ってくるのだぞ！」

「頑張るようなもんでもないが……ま、ちゃんと待つてろよ。」

「失礼のないようにしてくださいね。」

「氣いつけるよ。」

リムジンから手を振る延珠に手を振り、夏世の軽口を適当に返して聖天子と共にリムジンから降りる。今日は件の護衛任務の日だ。延珠と夏世は蓮太郎が行ったら携帯ゲーム機の電源を入れて天誅ガールズの格ゲーの通信対戦を開始した。

「……千寿さんの言う通り失礼のないようにお願いします。あなたのせいでエリア間戦争になったら胃に穴があきますので。」

「その時は俺一人で戦争終わらせてやる。」

「地図の書き直して面倒なんですよ?」

「知ってら。一度やらかしたから。」

聖天子が目を丸くして蓮太郎を見る。モノリス外でだけどな。と言うと、モノリス内じゃなくてホツとした感じの聖天子。ホツとしてはいけない事だが、段々と聖天子の中

の蓮太郎のやらかした事に対する内心での対応がインフレしてる。

「そういえば、里見さんは斉武さんの事はご存知でしたね。どうか事前に教えてもらえませんか？ 菊之丞さんに聞くと露骨に不機嫌になるので……」

「ん？ アドルフ・ヒドラー。」

「……すみません、胃の他に耳もやられたらしいですのもう一度。」

「だから、現代のアドルフ・ヒドラー。大阪エリア市民に暗殺を十回以上されかけるのも納得だろ？」

（何ででしょう、もつと強くて敵に回ると死ぬしかなくなる人が隣にいるからアドルフヒドラー程度で恐ろしく感じません。）

聖天子も着々と蓮太郎という理不尽に対応してきてるようだ。対応しちやいけないことナンバーワンだが。

蓮太郎はそれに気付かず話を進める。斉武は重い税金をかけたたりしてるも、たつた一代でエリアを復旧させた優秀な人物だと。だが、東京エリア以外の代表は我こそが日本の代表だと真顔で言える奴等しかない。とも言った。

その中でも斉武は一番ヤバイ存在だから注意しろと言ったが、聖天子は半分聞き流していた。だって、もつと怖いのが隣にいるから。

そして、乗っていたエレベーターが重い音を立てて開く。

「どうも、初めまして。聖天子様。」

目の前にいたのは齊武。そして、蓮太郎に目をやると露骨にトーンを下げ、

「……久しいな。天童の貰われっ子。」

「よっ、まだ生きてたのかジジイ。いい加減死ねよ。」

（あ、終わりましたこれ。）

聖天子の胃が一瞬でキリキリと傷んだ。もう戦争不可避ですなこれと現実逃避し始める。

「ふん、民警風情が。口を慎め。」

「おお、怖い怖い。とても六十五歳にや見えねえくらいの威圧だな。」

「まだまだ現役だ。クソガキ。」

「いい加減定年退職しろよジジイ。」

聖天子が現実逃避し始めてる中、蓮太郎と齊武のマジで危ない会話が続く。

「しかし蓮太郎、風の噂で聞いたぞ。貴様、馬鹿な真似をしたな。天童の娘と共に天童を出奔するとはな。故に、これからはお前を天童ではなく民警として扱う。先程までの暴言は許す。だが、今からは許さんぞ。」

「へいへい、お優しいこつて。だがな、俺が天童じゃなかったとしても俺は俺だ。テメエはとつとと大阪エリアに帰って引きこもってろジジイ。」

蓮太郎と齊武が鼻が接触しそうな程近付いて睨みあう。

不意に、齊武が口元を緩め、蓮太郎から離れる。その隙に蓮太郎が指弾をかなり弱めに放つて聖天子の額に当てる。

「いたっ！と小さな声をあげた聖天子だが、そういえば会合中だったと緩みまくってた気を引き締める。」

「あの仏像彫りは元気か？」

「出来の悪い弟子が逃げちまつてるから彫つてねえんじやねえか？」

仏像彫りとは菊之丞の事である。齊武と菊之丞は仏像彫りのライバルでもある。

ちなみに、菊之丞は最年少の人間国宝でもある。

「里見さん、もしかして菊之丞さんのお弟子さんつて……」

「ご想像にお任せするぜ、聖天子様。」

「お前は誰にでもタメ口だな。立場をわきまえたらどうだ。」

「喧嘩売つてんのか？まあ、敬語なんざ俺のキャラじゃねえんだよ。」

「ふん、人外が。」

「言つてろ。」

「貴様がスコープオンの討伐の際に使ったレールガンモジュール。あれがどれほどの先役に立つかも知らぬガキが。」

「ガストリアを倒すために使つてやつたんだ。テメエの人殺しの目的のために使われなかっただけいいだろうが。」

これは完全に蓮太郎の予測だった。だが、聖天子はその蓮太郎の言葉をそのまま事実と受け取つたらしくえつ? という顔をしている。

だが、蓮太郎の予測は当たっていた。

フン。と齊武は鼻を鳴らす。

「分かつてはいるようだな。だが、貴様のおかげでレールガンモジュールを月に移し敵を殺す計画が水の泡だ。この行為、万死に値するぞ。」

「殺せるもんなら殺してみろ。ついでに髪の毛の成長を再開させてちゃんとカットできるようにしてくださいお願いします。」

さらに聖天子がえつ? と声を出して蓮太郎の髪を触る。齊武が聖天子にハサミを渡す。それで蓮太郎の髪を切ろうとしたが、蓮太郎の髪の毛は切れない。両手で力を込めてうーん! と声を出しながら蓮太郎の髪を切ろうとする。

「……だが蓮太郎。貴様はこの東京エリアに置いておくには惜しい存在だ。俺と共に来い。そして世界を征服しようではないか。」

「悪いな。今の生活が気に入ってるんで、どうしてもつて時は頼らせてもらう。」

「後々土下座してでも俺に仕えさせてくれと頼む時が来るだろう。その時を楽しみにし

てよう。」

「はあ……はあ……こほん。それよりも齊武大統領。そろそろ本題の方に……」
齊武は舌打ちをするとああ、構わんと言った。
ハサミは刃が欠けて使い物にならなかった。

結局会合で分かったのは聖天子と齊武は敵だということだった。

帰りのリムジンの中、聖天子は小型の冷蔵庫を開けると桃のジュースを取り出し、コップに注いで蓮太郎に渡した。

「ああ、ありがとう。」

聖天子は水を取り出して胃薬を服用した。

蓮太郎は初めて胃薬を飲む聖天子を見て流石に今回は自重すべきだったかと桃のジュースを飲んだ。

「……うめえ。」

「おかわりもありますよ。」

「流石にそんなに貰うわけにやいかん。」

だが、美味しいものは美味しいのでチミチミと飲んでいく。

ちなみに、延珠は蓮太郎の膝に頭を預けて就寝。夏世も蓮太郎の肩を借りて寝ている。二時間近く待たせたためか、二人ともリムジンに戻った時には暇つぶしにも飽きてポケーっとしていた。蓮太郎がリムジンに乗ったらすぐに自分のスペースを確保して寝だした。

「……あんま気にすんなよ。あんたのせいじゃないんだから。」

軽く鬱っぼい表情を浮かべていた聖天子に慰めにもならないであろう声をかける。

「……そうですね。」

聖天子は誠意を持って話せばどんな人でも分かってくれろと信じていた。それ故に、今回は落胆も大きかった。

「……優しいですね、里見さんは。無敵だったり仏像を彫つてたり政治家の卵だったり。」

「無敵以外は昔の話だ。」

「今度何か彫つていただけませんか？」

「もう無理だよ。」

クスクスと笑う聖天子。人形のように可憐な彼女の笑顔に思わず見とれてしまいそうだったが、なんとか視線を窓の外に向ける。その時、気付いた。何か、変な物がある。

距離にして1km先。何か、不自然な反射光が見える。

「里見さんは凄いですね。あの齊武さんを前に一步も引かないなんて。だから、私は気に入ってるんだと思います。」

「気に入っている?」

不自然な反射光から目を逸らして聖天子を見る。

「ええ、私に接する人は皆余所余所しいですから。あなただけです。私にこうもズバズバと何か言ってくれる人は。同時に、胃にダメージを与えるのも……」

「マジすんません。」

「ふふふ。」

だが、同時に合点もいった。何故、こんなに失礼な事しか言わない自分がこの依頼をされたのが。

「つてか、なんで護衛部隊に護衛させないんだ? 保協とかは隊長だろ?」

「……なんか、ギラギラして怖いんです。あの人。」

ざまあと内心大笑いの蓮太郎。

気を引くための作戦が裏目に出てるようだった。

その次に出てきたのは齊武についてだった。

彼は聖天子が言うには、外国に武器などを供給してるらしい。何故そんな事をするの

か考えると、齊武は全日本のエリアの統一が目的なのだといきついた。

バラニウムは有限資材。しかも、火山大国である日本に多くある。石油などとは大違いだ。故に、これからは資源の呪いにかかった世界各国の最強の民警がこの日本に集まってくる。そして、バラニウムを得るために国も日本に接触してくる。

「……里見さん。あなたは、証明してしまった。あなたが例えこの世の民警全員を相手にしようとなげは有り得ないと。今の東京エリアには有能な人材を遊ばせておく余裕はありません。あなたにはこれからも継続的に働いてもらいます。私のため、国家のため。」

「随分と勝手だな。」

「承知しています……私はいつ騒動に倒れるか分かりません。故に、もう子供が産める私は側近からいつも後継者について言われます。ですが、私は機械的に産んだ子供よりも愛で産んだ子供が欲しいのです……」

「……あなたの理想か。」

何となくだが、蓮太郎は察した。

彼女は侵略行為などを一切せず、何にも挫けず、この日本の領域を取り戻し、すべてのエリアを繋げる事を理想としている。

「……私はもう、この世界に悲しみの種が撒かれるのは耐えられない……」

「……理想主義者の……早死する人の言葉ですね。」

「夏世……起きたのか。」

目を覚ました夏世が会話に割り込んだ。

「ですが、嫌いじゃありません。」

「……そうだな。俺もだ。だから、頑張ってくれ。俺はこう見えてアンタを支持している。ガストレア新法の件だったりな。」

蓮太郎は寝ている延珠の頭を撫でながら、聖天子に言う。ガストレア新法は延珠のこ
れからの生活にいい影響を与えてくれるかもしれない法律だ。だから、

「何かあったら俺を使え。アンタの理想を俺が手伝う。俺が、俺の力が必要なら迷わず
使ってくれ。」

「……はい。ありがとうございます、里見さん。」

ちよつと顔を赤くする聖天子。

「ひゅー、女誑しく」

「お前後でげんこつな。」

「死ぬといえますか!?!」

「大丈夫だ。頭蓋骨の形が変わる程度に済ませてやる。」

「死んじやいます!!それ死んじやいますから!!」

「うるさい……」

「いっふっー」

叫んでた夏世が延珠の蓮太郎の膝を軸にした回転蹴りをモロにくらった。

ミゾに……つま……いつつ……とよっぽど痛いのか呟きながら椅子で横になつてい
る。

その間に延珠は起きた。

「……蓮太郎は駄目だぞ。」

「……な、なんの事でしょう?」

「蓮太郎はおっぱい星人だから木更よりもおっぱいが小さいと女だと認識されんぞ。」

聖天子が蓮太郎を軽蔑の目で見る。

「里見さん……不潔です。半径二十メートル以内に近寄らないでください。」

「待て。誤解だ。んでもって俺にこの道路の中外に出ると。鬼かあんだ。」

「つまり蓮太郎は妾位のおっぱいがちようど良いのだな!」

「……ロリコン。」

「なあ、聖天子様?頼むからその目だけは止めてくれ。死にたくなる。」

「などと意味不明な供述をしており。」

「夏世、お前は俺に何を望んでいるんだ。」

等と微笑ましい(?)話をしていると、不意に延珠と夏世が視線を窓の外に向ける。同時に、何か虫の羽音のような音が聞こえた。

「蓮太郎……」

「嫌な予感がします……」

蓮太郎も窓の外を……正確に言えば、あの反射光を睨む。

途中で思考を停止したが、あれは予想が正しければライフルの……

そこまで考えた瞬間、リムジンが赤信号に捕まった。

「車を止めるな！ライフルのスコープからの反射光が見える!!」

蓮太郎の人外級の視力が、双眼鏡でも見ることができないであろうほんの僅かなス

コープの反射光を捉えた。

「え?」

瞬間、マズルフラッシュが見えた。

「くそっ!!」

蓮太郎が延珠と夏世をドアの外に無理矢理投げ、運転手と聖天子を抱えてリムジンの外に人間の耐えられる速度で飛び出す。

カァンツ!!と甲高い音。そしてパリーン!!と窓の割れる音。

『いたっ!』

「時間は俺が稼ぐ！延珠、夏世、聖天子様を連れて逃げる!! 相手はアンチマテリアルライフルを使ってきてやがる!!」

再びのマズルフラッシュ。

普通の人間なら反応はできない。だが、蓮太郎の目はしっかりと飛来する弾丸が見える。

「やらせるかよ!!」

ガギイン!!と鉄と鉄がぶつかり合うような音。そして、地面にめり込むライフル弾。

蓮太郎は銃弾に合わせて手刀を振るい、ライフル弾をあろう事かたたき落とした。

あまりの人外技に目を丸くする聖天子。映像で散弾を拳圧で吹っ飛ばしたりするのは見たが、生で見ると信じられないの一言しか出なかった。

「聖天子様をお連れしろ!!」

保脇の遅すぎる指示。延珠と夏世にいざという時は弾丸をどうにかするよう指示して蓮太郎は反射光を見る。

徐々に目が慣れ、相手の姿が見える。見えるのはプラチナブロードの髪の毛。それだけだった。もつと目を凝らす、マズルフラッシュ。

どこに飛ぶかを目で追う。目的は間違いなく聖天子。

時速1000kmを超える戦車の装甲すら貫く弾丸が聖天子に迫る。もう、一秒も経

てば当たる。だが、一秒もあれば十分。

音速で動き、弾丸よりも一步先に聖天子の前にたどり着き、両手をクロスして構える。ドギヤツ!!と蓮太郎の手に弾丸が当たる。

数秒、シウルシウルと音を立てて回転していた弾丸はポトリと地面に落ち、カラン。と音を立てた。

蓮太郎の手には傷一つないが、服が破れている。

「蓮太郎! 妾が追う!」

「いんにゃ、もう逃げたよ。」

蓮太郎は反射光のあつた位置を見る。何も無い。

「……………これで終わりやいいんだがな。」

蓮太郎は、狙撃が開始される前に聞いた虫の羽音のようなものを思い出した。

信じられない信じられない信じられない信じられない信じられない信じられない!

幼き狙撃手、テイナの内心はそれだけだった。

一発目はマズルフラッシュシユを見られてたから避けられたと言われれば納得できる。

だが、二発目三発目は確実に着弾コース。だが、聖天子には当たらなかった。

二発目はここから見た限り手刀で地面に叩きつけられ、三発目はなんとクロスした両手に防がれた。

弾薬を確認するが、ちゃんと徹甲弾だ。

徹甲弾など人間に当たれば人間の体なんて破裂する。だが、それを受け止めたあのプロモーターはその直撃を受けてなお生きており、しかも血の一つも垂らしていない。

余りにも予想外の出来事に爪を噛む。こうでもしないと落ち着けない。

顔は見えなかった。だが、わかった。あのプロモーターはそんじよそこらのイニシエーターなんて目じゃない。それどころか下位序列の民警を山ほど相手したって生き残るだろう。

護衛官は無能だと見ててわかった。だが、あの民警の何処が障害にならないだ。障害にしかない。

対戦車ライフルの弾丸を受けて無傷な化け物相手にどうやって暗殺しろと。しかもあいつ視認不可な速度で弾丸に追いつきやがったぞとなんかもう内心でキャラ崩壊しまくりのティナ。

「……何この無理ゲー。」

正直、荷物まとめてとつとと祖国に帰りたいかった。

せめてこれがただの幻で自分は一発目以外見当違いの方向に撃ってしまったということになってくれと思うのであった。

もう任務を達成できる気がせず、何故か痛んできた胃を抑えながら、対戦車ライフルを片付け、去るのであった。

胃薬買わないと。とも考えながら。

トウエルブパンチ

「ほら、ティナ。」

「ありがとうございます、蓮太郎さん。」

一週間後の休日。蓮太郎はティナと共に行動していた。

あの暗殺事件の後、デブリーフィングと言う名の責任の擦り付けあいが始まった。

蓮太郎はそれを見て聞いた途端、何とも馬鹿らしくなり、その場から出ていきたくなったが、聖天子がこれからの対策を立てるので里見さんも共に。と言ったのだが、頼むから出ていかないでくれと言う視線を悟り、出ていくのはやめた。

防衛隊の保脇や側近が何故今回の会合のルートが漏れたのか等の責任を押し付けあい、最終的に蓮太郎に押し付けてきた。

何とも保脇は蓮太郎が来た途端に今回の件が起きたので蓮太郎が犯人だと思つてるらしく、それを言つた途端にドヤ顔をしていた。勿論蓮太郎はその程度では殴らなかつた。

蓮太郎は当日聖居に来てくれと言われたため今回の件については斉武と会合するということしか知らず、それは保脇の嫌がらせのようなものだったらしいが、保脇はその嫌

がらせのせいで蓮太郎のアリバイを確立させていた。

騙されてはいけなとかこいつは嘘をついているとか喚きちらしていたので流石に黙らせるかと拳を構えた途端、聖天子が蓮太郎は自分が直接護衛を依頼した民警だ。蓮太郎を疑うことは自分の判断を疑うこと。何より東京エリアを救った英雄に何事だと言った途端、保脇は黙った。だが、チラツと蓮太郎を見た聖天子の目は頼むから大惨事だけは止めてくれという意志がこもっていた。流石に手出しはできなかった。

保脇はその後もブツブツ呪詛みたいな物を吐いていたが、例え手を出してきたとしても蓮太郎には傷一つ負わすことが出来ない上に例え戦車なり戦闘機なり持つてきても数秒で保脇をサイコロステーキに変える事が出来るため、特に何も感じなかった。

後で聞くと、保脇は蓮太郎と聖天子の間には民警と国家元首以上の物があるとか。馬鹿馬鹿しいと思えた。

横でジャラジャラと何かを鳴らしていたティナの方を見ると、ティナはカフェイン錠剤を蓮太郎の買ってきたたこ焼きに振りかけていた。

あんぐりとしている蓮太郎を他所にたこ焼きを口に持っていく。

そして蓮太郎は考える。今回の暗殺。その目的は一体何か。

それは分からないが、考えられるのは聖天子の熱狂的ファンであるのは無いということ。今回のスナイプはプロでも外しておかしくない距離だ。それを三発連続で当てて

きた者を市民だとは考え辛い。

もう少して二回目の会合が始まる。その時に再び暗殺者は動く。その時になんとか潰す。

と、考えていたら横でベチャツツという音とあうあつと言う声が聞こえてきた。

横を見れば錠剤まみれのたこ焼きが舗装の上に落ちていた。

「……はあ、貸せ。」

蓮太郎はティナのたこ焼きを奪い取ると、爪楊枝でたこ焼きを刺し、ティナの口を持っていく。

「ほら、食え。」

幸いにもスカートや服にはたこ焼きは落ちていなかった。首を傾げる彼女の口の中にたこ焼きを放り込む。咀嚼するティナを見て二個目を準備する。

「蓮太郎ひゃん、もつとくらひゃい。」

口に物入れたまま喋ったからかそんな感じに聞こえた。上半身を乗り出して目を閉じ、口を開けるティナ。

キスを迫られてるみたいだなと思ったが、何故か小鳥に餌を与えてる感じに似てたので気にせずティナの口の中にたこ焼きを押し込む。

さらに一個、二個と突っ込んでいくと、いつの間にか自分のたこ焼きもあげていたよ

うで、気付けば自分の分のたこ焼きはなかった。

ティナの口元はソースで汚れていたのでハンカチを取り出し、拭こうとする。ティナはされるがままに口元を拭かれる。

拭き終わってよし、いいぞ。と声をかける。

「……私、蓮太郎さんの事、好きです。」

「は？」

あまりに突拍子な事に思わず聞き返す。

「こんなに優しくされたの初めて、かなって。」

ティナは嫌なことでも思い出したのか顔をしかめた。

「両親が死んでから、あまり楽しくない気分です。その後の私の人生は『痛い』だけでした。だから、今、久しぶりに楽しいんです。」

笑いながら言うティナ。蓮太郎は微笑みながら頭にポン。と手を乗つけた。

「痛いってのがどういう事か、両親の事とかは聞かねえ。けど、これから痛くなったり嫌なことがあったり寂しくなったら俺を呼べ。原因をなんとかできるかは分からないが、今日みたいに楽しくさせてやるよ。」

「蓮太郎さん……」

「だからさ、もつと笑えよ。」

ワツシワシとテイナの頭を撫でる蓮太郎。そして無邪気に……けれど、何処か辛そうな顔で笑うテイナ。

今日でテイナと会うのは四度目。蓮太郎の電話にテイナがかけてきて遊園地や外周区をみたいとせがまれた。しかも、自分と会ったことは誰にも言わないでくれという条件までつけて。

だが、せめて、辛くとも、俺と一緒にいて笑うことが出来るなら、楽しくなれるなら。俺はテイナと何度でも、何処にでも行つてやる。紛れもない蓮太郎の本心は口から出ることはなく、決意として胸に留まった。

そして、急に鳴り響く無機質な着信音。自分のではない。テイナのだ。

テイナの顔は着信画面を見ると恐ろしいまでに固まった。

「……すみません、私、行かなくちゃ。」

「……そう、か。」

蓮太郎はテイナの頭から手を離す。

テイナは蓮太郎に礼をすると、走り去っていった。

走つた時に起こる小さな風によりなびくプラチナブロンドの髪は何処かで見たような気がした。

蓮太郎は着信のあつた自分の携帯を見てから立ち上がると、もうテイナは見えなかつ

た。

『遅いぞ。』

「すみません、マスター。少し電話に出れない事情がありました。」

『意識を、会話できる状態まで覚醒させよ。』

「……はい。」

ジャラジャラ、ガリツ、ボリボリ。

「それで。」

『次の警護計画書が流れてきた。』

「早いですね。無能の集まりですね、あそこは。」

『ククク……我々の依頼主は東京エリアに逗留中にカタをつけたいとお望みだ。』

「……あの民警が最大の障害です。」

『奴等の正体もわかった。』

「本当ですか？」

『天童民警会社というらしい。また次の会談で邪魔されては困る。ティナ・スプラウト。』

次の任務を与える。天童民警会社の社長、天童木更を殺害せよ。』
「……はい、マスター。」

彼女の目は、既に暗殺者の目だ。余計な事は、考えない。暗殺の邪魔になるから。

蓮太郎は携帯に來たメールに書いてあつた場所に行くと、そこでは美織が待つていた。その前に扉の前で何処のランボーだとツツコミたくなりそうな程の重装備をした社長がいたが、美織が一瞬で扉の中に引き込んだ。この社長はどうやら蓮太郎が美織の所に行くと言つた時に何処に行くんだとか場所を教えろとか言つており、教えてしまつたがために來たのだと考えた。

最初は扉を蹴破るとか言つてた木更だつたが、美織が請求書突きつけるといふとピタツと止んだ代わりに呪詛が聞こえてきた。

目の前にはホログラムウィンドウが何十もあり、美織が扇子を持った手を動かすと共にホログラムウィンドウが動き、一つのディスプレイとなり、水族館調のスクリーンサーバーが起動し、コポコポと音を立てながら部屋全体を青く光らせる。

美織がディスプレイに扇子を向け、聖天子狙撃事件証拠物件と言ふと、パネルには現

場の写真が次々と映され、美織がその内一つを拡大する

「里見ちゃんが原型を保ったまま叩き落としたライフル弾はライフリングしたけど犯罪経歴なし。クリーンや。」

「そうか。と蓮太郎の返事。それを聞き、今度は美織が現場の3Dモデリング画像が写り、一本の線が引かれている。」

「相手さんが撃つたのはここや。」

「ああ、俺も肉眼で確認したのはここだ。間違いない。」

「視力まで鍛えられるってどんな鍛え方したんや……で、里見ちゃん、狙撃の知識は？」
「ほとんど素人だが……この距離で狙撃を三回成功させるのは神業としか言いようがないねえってのは分かる。」

俺なら一瞬で移動できるが。と心の中で付け加えておく。

その後、美織は狙撃の難しさについて色々と講義してくれた。蓮太郎はスナイパーライフルを持つ事もこの先無さそうだし、撃たれても死ななさそうだしという意味合いで要点を掻い摘んでパパッと説明した。

「なるほど……さんきゅ、美織。所で、お前は保協卓人ってやつは知ってるか？」

「ん……知らへんな。どれ、調べてみよか。」

美織が検索、保協卓人と言うと、すぐに保協のプロフィールらしきものが出てきた。

「保脇卓人、三十二歳男。聖天子様の護衛隊長で階級は三尉やから里見ちゃんの一つ上やね。」

三十二歳……聖天子様の倍歳とつてんじやねえか。完全にロリコンだあの無能。とか最初は考えたがすぐに次の疑問にぶち当たる。

「は？階級が一つ上？つて事は俺は知らねえ内に一曹にさせられてたのか？」

「正確には里見ちゃんのは擬似階級や。民警には皆与えられとるんよ。里見ちゃんの場合は機密情報アクセススキーと一緒に貰ったもんやな。千位やから一曹。」

「その擬似階級つてのは何が出来るんだ？」

「指揮権は無いけど命令権はある。ようするにほとんど役にはたたへんな。まあ、これは民警の気分を良くさせて民警は国の持ち物やと証明させてるような感じやな。」

「民間なのに国の持ちもんかよ。」

まあ、これから先擬似階級なんて使う事はないだろうと擬似階級の事は頭の隅に殴り飛ばしておいた。

「それに里見ちゃんの事を聞くと護衛官達はモタモタしとつたんやろ？その隊長に命令しても拒否られる可能性もあるから氣イつけてな。」

「あいつらノウハウがねえから……護衛官なのに何でたと問いただしてえわ。」

「それはこういう事については耐性が無いからやないかな？今まで肉壁になってただけ

やし。」

「その言い方はどうかと思うぞ?」

それもそうやねところろ笑う美織。

「あと一つ頼めるか? 齊武宋玄について調べて欲しい。あいつが今回の黒幕だ。」

今回の会談で聖天子が死んで得するのは齊武ではないか。蓮太郎の頭にはそんな考えが浮かんでいた。

「ひゅ〜。里見ちゃん言うわ〜。」

「ウラを固めておくだけでいいんだ。出来ないか?」

「それじゃあこの件も含めて取り引きや。今度、里見ちゃんの全力を見せて。ウチの会社のシユミレーターで。」

「会社から先の家と人が消し飛ぶぞ。」

「それじゃあ建物が壊れん程度の力で。」

「そんなくらいなら。じゃ、任せた。」

「任されたで。」

その程度の取り引きであの司馬重工が動いてくれるのなら万々歳だ。

もつとも、相手は大阪エリアの国家元首。そうそう尻尾をつかめるとは蓮太郎も美織も思っていないが。

と、その時扉が爆発四散した。

「もう知ったことですか!!美織!お命頂戴!!」

美織は本当に小さく舌打ちすると袖を口元に持っていき、しおらしいポーズをとった。

「かんにんな、かんにんな木更!」

「え?」

「ウチと里見ちゃんは本当に、本っ当に戸の部屋で何もしとらんかったから!だから誤解せんでな、木更。」

あ、これダメな雰囲気だ。蓮太郎は音速で外に飛び出した。

後で木更の誤解を解くために高めのスイーツ買ってくか。と心に決めて蓮太郎は今日も走る。

と、そこでメール。要件は延珠と夏世を連れて研究室に来いとのこと。蓮太郎は目的地を一先ず家に決め、走った。

「せんせー、来たぞ〜」

「葦、遊びに来たぞー！」

「……なんか薄暗い雰囲気ですね。」

延珠と夏世を連れて葦の研究室に行くと、葦はパリンパリンとピーカーやら試験管を割りながら笑い転げていた。

「落ち着け。」

蓮太郎の指弾。葦の後頭部に当たってあだっ!?!と葦の悲鳴。

「私の頭が可笑しくなったらどうしてくれる。」

「安心してくれ。もう可笑しい。」

蓮太郎は椅子を三つ取ってきて葦の机の横に置く。蓮太郎を挟んで延珠と夏世が座った。

「ロリハーレムは順調なようだね。」

「ぶん殴つぞあんた。」

「やっぱり蓮太郎は妾のような女が好きなのだな!?!」

「はーい、黙りましょうかー。」

「へぶっ!」

「やだ……おまわりさん、この人口リコンです。」

「罪は同上。」

「い、っただあ!？」

延珠は弱めのデコピンだったが、夏世には（夏世にとって）結構強めの拳骨だった。延珠は額を抑えてるだけだが、夏世は頭を抑えながら床を転げまわり悶絶している。

「幼女を痛がらせて楽しいか君は。やはりロリコンだな。」

「くらえ指弾。」

「あまい。」

再び蓮太郎が董に指弾を放つが、スツと避けられる。

「さて、鼻塩塩……ではなく話をしよう。私と他の天才についてね。」

「ほう。」

真面目な話と感じたのか、蓮太郎が軽く気を引き締めるが、横でゴロゴロ転がっている夏世がいるのでどうにもシリラスにはならずシリアルになっている。

「新人類創造計画に誘われた君にも話しておくべきかと思つてね。」

「……そーういや誘われたな。」

「もう今の君には必要のないことだけだね。さて、私の他に新人類創造計画に関与した天才は三人。オーストラリア支部『オペリスク』最高責任者アーサー・ザナック教授、アメリカ支部『NEXT』最高責任者エイン・ランド教授、そして私。これらを統括する最高責任者がドイツの科学者、アルブレヒト・グリューネワルト教授だ。以上が機械化

兵士製造ノウハウを持っている。『四賢人』とか『四天王』とか言われてたのが懐かしいよ。」

そんなにいたのかと正直に思う蓮太郎。横で夏世がビクンビクンしてる。

「まあ、お互いが手を取り合って目覚しい成果を叩き出すことは出来なかったがな。ただの嫉妬でね。」

確かに、今までオンリーワンだったのに、その存在を脅かす者が出てきたら蓮太郎だって嫉妬するかもしれない。今の状態ならそんなことはないと思うが。

「あの頃は恋人がガストレアに食われて周りが見えなくなってたしね。」

ちやうどその時の董に蓮太郎は新人類創造計画に加担しないか……いや、『力を制御しないか』と誘われた。

蓮太郎は断ったが、今ではその選択でよかったと思っている。

その時の董は骨と皮だけで瞳はギラギラしてたように覚えている。

「あの頃の君も色々あっただろう？」

「……ああ。あの頃はこの力が制御できなかったからな。」

拳を振れば目の前が消し飛び、走れば壁があれば壁にぶつかり、無かったとしても何処か見知らぬところまで走っていく。

それが力がついたばかりの蓮太郎だった。

その後も董の話は続いた。自分たちはノウハウを駆使し機械化兵士を作った事。その中には蛭子影胤もいたこと。そして、その計画は呪われた子供たちの戦闘能力の高さに気付き、組織は解散したこと。

「……今じゃエロゲ好きの死体愛好家なのにすげえ人だったんだな。」

「前のやつは余計だがね。私は君達が生きている異性に興奮するように死体に興奮する。あ、そうだ。君は朝昼は学校、夕方は事務所で木更と。夜は延珠ちゃんと夏世ちゃんと一緒に何処で性欲の処理をしているんだ？」

「最高の弄りネタが聞けると聞いて。」

夏世、復活。

「……この世にはこんな言葉がある。『性欲を持て余す』。」

「……つまり？」

「帰らせてもらおう。」

蓮太郎はマジ走りで帰っていった。

人には聞かれたくないことと聞かれてもいいことがある。

「そういえばトイレがイカ臭かったような……」

「よう夏世。データラメ言うなよこの腹黒口リ。」

「げぶあっ!？」

デタラメ言った夏世の頭に一瞬で戻ってきた蓮太郎の鉄拳がめり込む。

頭が……割れる……とビクンビクンしながら悶える夏世を尻目に蓮太郎は本当に帰った。

「で、延珠ちゃん。本当は？」

「さあ……？夏世の言ったことも嘘だぞ？」

「そうかい……？つまらないな。さて、そんな事は置いておくとして、ここからは君達向けの話だ。夏世ちゃんも聞けるのなら聞くといい。」

まだビクンビクンしてる夏世にそれだけ声をかけると、莖は話を進める。

「君達は強いイニシエーターと会ったとき、首の後ろがビリビリとした事はないかい？」

「さあ……？無いが。」

「どう……？じょう……？」

なんとかかかんとか返事は出来た夏世。

「まあ、夏世ちゃんは戦闘向きではないから分かっていたが、そうか。なら延珠ちゃん。君はスピード特化のイニシエーターだったね。そのスピードは日頃延び続けているか？」

「ん……蓮太郎がいるから自分が速くなってるか遅くなってるかよく分からないな。」
「人外と比べちゃだめだ……まあ、もしかしたら君にはもう『成長限界点』が来てるのか

もしれないね。」

「成長限界点？」

「まあ、それを超えると『ゾーン』と呼ばれる物に突入できると言われているんだが……聞きたいかね？」

「蓮太郎に勝てるか？」

「ははは、ご冗談を。まあ、とにかく聞いていくかい？」

「……蓮太郎の足手まといにならない程度に強くなれるのなら。」

「聞いただけでは強くなれないよ。それに彼の足手まといにならないと言うのなら彼と同じ速度で走れないとね。まあ、聞いていくのなら話そう。」

董は『ゾーン』について話した。

ゾーンとは、イニシエーターが修行の果てになれる状態の事をさし、ある日突然なれるようになる物らしい。

超高位序列のイニシエーターの多くはゾーンに到達してるらしい。

「ふーん。」

「無関心だね。」

「……だって蓮太郎には勝てるわけないし……」

「……言うな。」

夢も希望もない少女の肩に手を置いて慰める言葉をかけようとするが見つからず、言うなとしか言いようがなかった。

「でも、辿りつけたら蓮太郎に守られる必要がないのなら、妾は目指してみる。」

「……オススメはしないがね。」

「何か言ったか？」

「いんにや？それで、護衛の方はどうなっているんだ？」

延珠は話していいものかと考えたが、結局話した。夏世はピクリとも動いていない。

「……それはまずくないか？」

「ん？何故だ？」

「つ、つまり、一度目であれだけの事をやってきたのだから、二度目はさらに確実にするため……天童民警会社を機能させなくさせれば二度目は確実な物となる。と、いう事ですか？」

「そうだ。早く二人で木更を何処かに避難させるんだ。木更を殺したくなければな。」

延珠と夏世は立ち上がり、力を開放し走った。

ティナは己のマスターから天童民警会社の情報を貰い、既にハッピービルディングの前にいた。

手には対戦車ライフルの時よりさらに厚いガンケース。力を開放しても重いと感じる。

ここにいるのは社長の天童木更、プロモーターの名前は聞きそびれたが、そのイニシエーターの藍原延珠。そして、居候の千寿夏世。何故居候がいるのか疑問に思ったがこのミッションには関係ない。今いるのは天童木更ただ一人。プロモーターもイニシエーターも居候もないのも確認している。

ティナはガンケースを降ろし、中の銃を持ち上げる。

M134ガトリングガン。バッテリー式のガトリングガンだ。ペインレスガンとも無痛ガンとも言われる程の物で、撃たれたものは痛みにはすら気付かず死ぬという。

通行人がそんなティナを横目で見るが、余りに堂々とするため、何も言わない。

弾薬箱を背負い、天童民警会社のドアの前へ。そして、ノックする。

『さ、里見くんなの!? ふ、ふん! もう何言っても許してあげないんだからね!! 例え何か食べ物持ってきてても……あ、迷うかも。もう空腹で倒れそうだし……いや、でも許してあげないから!!』

里見という名前に蓮太郎の事を思い出したが、同じ苗字なだけだろうと割り切り、ガ

チャツとドアを開ける。

「天童木更ですね。」

「え? つて!」

「お命頂戴。」

迷いはない。ボタンを押し込む。それと同時にシリンダーが回転し、すぐさま弾丸が発射される。

リコイルを制御し、踏ん張り、狙いをつけ続ける。だが、木更は椅子の上から横に飛ぶと、手元にある刀に手を掛ける。

刀如きで。ティナはすぐに狙いを修正し木更を肉塊にすべくボタンを押し続ける。

「シッ!!」

木更の短な声とともにガガガガガン!!と金属と金属が当たる音がする。見れば木更は視認不可能な速さで刀を振るっている。

天童民警会社の人間は化け物しかいないのかと舌打ちしながらもティナは狙いを付け続ける。だが、途中で木更は横に飛び、神速の一閃。

何を空振っているかと思つたのも束の間。ガトリングガンの銃口の一部がゴトツと音を立てて落ちる。

飛距離のある斬撃!? 驚くのも束の間。木更が斬りかかってくる。流石に弾丸を斬り

飛ばす程の速さで刀を振るわれ続ければこっちがやられる。すぐに再びボタンを押し込み、弾幕を張る。木更は自分に振りかかる弾丸のみを切り裂き近付いてくる。

斬られると思つたのは一瞬。木更は何故か腹を抑えて勢いを落とした。

ティナにとつては絶好のチャンス。斜めに切り裂かれ一部尖つた銃口を向けて突撃。

木更は動かさず、腹部に直撃。

「ぐっ!」

壁に叩きつけられる木更。すぐにガトリングガンから手を離し、倒れている木更の首に手をやり、壁に叩きつける。

「いつ!」

「……恨まないでくださいね。」

ギリギリと音を立てて木更の首にティナの指が食い込んでいく。

「がっ………さと、み………くん………ごめん………ね………」

違う。蓮太郎じゃない。蓮太郎はこの事務所の社員じゃない。

「たすけ………て………里見………くん!」

「助けてやるよ、木更さん!!」

後ろから聞こえた第三者の声。背負っていた弾薬箱を放り投げ、横に飛ぶ。

グシャツ!!と音を立て、弾薬箱が変形し、壁にぶち当たる。

だが、そんな事よりもティナの心情は驚きにしか染まっていなかった。

「蓮太郎……さん？」

「ティナ……？お、おい、なんの冗談だ？なあ、木更さん？」

「けほっ……その子が私を殺そうとしたの……」

「っ……」

「蓮太郎さん……話を……」

「フンッ!!」

穴だらけの床を全力で殴る。崩壊する床。

蓮太郎の口は動いていた。今回は逃がしてやると。

ティナはやり切れない気持ちで一つ下の窓から飛び出した。

「嘘だろ……ティナが……」

自分でも気持ちの整理が付けられず、思わずティナを逃がした蓮太郎。

ティナが背負っていた弾薬箱とガトリングガンからティナが元床の惨状を作ったのは理解が出来た。

「里見くん……知り合い……なの？」

「……ああ。」

木更を何故狙った。それを考える。

だが、すぐに答えは出た。

暗殺の邪魔になるから。即ち、ティナは前回の妨害した暗殺をしてきた犯人。

蓮太郎が何とも言えない気持ちを整理していると、上の階からヤクザが雪崩込んできたが、木更がなんとか追い払った。

「……ティナ。お前が相手でも、聖天子様は殺させない。」

せめて、俺の手で暗殺を……

そう思った瞬間、後ろでドサツと人が倒れる音。

「木更さん!？」

蓮太郎が振り向き、倒れた木更を抱き起こす。

何処かに傷を負ったのでは？と服の上から体を見るが問題な

「お腹……すいた……気分悪い……」

病院に送つたら栄養失調で入院した。

節約のために食事を抜いてたら倒れちゃったてへつと言った木更の頭に鉄拳をぶち込んだ蓮太郎は悪くない。

サーティンパンチ

「あんたさ、何倒れるまで断食してんだよ。」

「そうだぞ。幾ら節約とは言え倒れては元も子もないではないか。」

「全くです。あなたが倒れる事で心配する人もいるんですよ?」

「ええ、全体的に私が悪いのは分かっているわ。でもね、これ見よがしにと私の前でお菓子食べるの止めてくれない? 斬りたくなる。」

『だが、断る。』

「マジで斬るわよあんたら!!」

木更が病院に運び込まれて入院決定から病室に送られてから数十分後。

蓮太郎、延珠、夏世の三人は夏世の提案で木更に嫌がらせに來ていた。嫌がらせの方はそれぞれが美味しいと思うお菓子をコソッと持ち行ってその場で木更に喋りかけながらもつさもつさと食う事だった。

断食してまで節約していた木更には効果的面で結構額に青筋が浮かんでいた。

ちなみに、病室は個室ではなく、四つほどベッドの並んでいる場所だが、木更以外に人はいない。

「あ、蓮太郎、それ一口頂戴。」

「なら私も。」

「ほらよ。代わりに貰いっと。」

「……えっと、包丁はっと……」

『サラダバー!!』

「あ、逃げんじやないわよこの腹黒共が!!」

木更が包丁を取り出した所で蓮太郎が超高速でゴミを拾って捨てて三人で病室から出ていった。見事に嫌がらせは成功だった。

なお、三人とも菓子や菓子を勿論持ち帰ったので、マジで嫌がらせに來ただけだった。

点滴で栄養取らされている木更はぐぬぬ……と包丁を握るしかなかった。

そして第二回の会合の車の中。

「と、言う事があつてだな。」

「わ、笑い事じゃないと思うんですけど……」

「いいえ、彼女は私達に愉悦を与えてくれました。」

「何でそんな英語を直訳したような話し方なんですか……?」

と、その嫌がらせの一部始終を延珠と夏世は聖天子に話していた。蓮太郎はいない。が、いきなり延珠の持つスマートフォンに電話がかかってきた。蓮太郎からだった。

『あー、二人共。スコープの反射光を見つけた。バンの天井は延珠なら蹴り飛ばせる程度の脆さだからもしそっちに弾丸が行ったら逃げてくれ。』

蓮太郎の言葉に延珠と夏世の纏う雰囲気が一気に真剣な物になる。

蓮太郎はこの車……黒いバンの中ではなくリムジンに乗っている。

この作戦でのリムジンは囷。聖天子は黒いバンに乗っている。

何故蓮太郎がリムジンにいるのか。それは、聖天子がもしリムジンが撃たれたら、運転手を助けてくれと蓮太郎に頼んだからだ。

勿論了承。イニシエーターの中でも優秀な延珠と夏世が居る時点で聖天子の暗殺はかなり難しいものとなっているため、蓮太郎は了承した。何かあっても蓮太郎なら聖天子を助けられるのもあった。

『奴さんはお前からから見えて右側。これまた1km先のビルの屋上から狙撃の機会を待っている。流石に走行中に撃つなんて事はないと思うが、注意してくれ。特に車が止まった時に最大限の注意をはらってくれ。もしかしたらそっちが狙われるかもしれないからな。』

本当は狙撃なんてしてくれない方が良かったのだが、来てしまったのなら仕方が無い。い。

聖天子の横に夏世がすみませんと一声出しながら移動し、何時でも聖天子を連れて逃

げれるように準備し、延珠が扉か天井を蹴破る準備をする。

延珠と夏世の視線は蓮太郎の言ったビルの屋上に向いている。マズルフラッシュが見えたら蓮太郎がリムジンに向かって撃つたのなら携帯電話を二回叩くことになっている。バンは一回だ。

既に蓮太郎は斉武が犯人であろう事、そしてこの会合は中止すべきだ。そして、聖居内に情報を漏らしている人間がいる等、車に乗り込む前に言ったのだが、聖天子は胸に留めておくただけ言った。

蓮太郎は彼女自身が決めたのなら。とあっさり引き下がり、何があっても守り通すと言った後、リムジンに乗り込んだ。

守ると言ったら守る。それが蓮太郎だ。

その後は何事もなく高級料理亭『鵜登呂亭』についた。

「行きますよ、お姫様。」

「ふふふ、はい。小さなナイト様。」

「ナイトじゃありませんよ。」

夏世が聖天子の手を引いてバンから降りる。延珠はビルを見ながら降りる。

既に蓮太郎は降りて待っていた。

「延珠、後は俺が見る。」

「うむ。」

蓮太郎がビルの方を見てみると、保脇が憤慨の表情を顕にしながら近づいてきた。

「貴様ア！何故聖天子様をこんな車に乗せている!!」

「奇策つつーのは常識の範囲では考えることが出来ないんだぜ？無能。」

「何だ?!死にたいか貴様!!」

「お、怖い怖い。で、撃つのか？愛しき聖天子様の前で撃つのか？」

「このっ……!!」

例え保脇が撃つてきても蓮太郎には傷一つつかない。故に余裕を持って無能の相手をする。

だが、その余裕は蓮太郎から消えた。マズルフラッシュが確かに見えたからだ。
「相手が撃つたぞ!!」

蓮太郎の叫び。延珠と夏世が素早く聖天子の前に出る。だが、狙いは蓮太郎。

「つて狙いは俺かよ。」

蓮太郎がハエを叩くかのように裏拳で弾丸を弾く。

ガアンツ!!と音を立てて弾かれた弾丸は100m先辺りのビルの端辺りを打ち抜いて瓦礫を地面に向けて落とす。

『あ、っ……』

蓮太郎、延珠、夏世のやつちまったと言う感じの声。延珠の顔色がサーッと真つ青になって胃が傷んでくる。すぐにポケットを漁るが胃薬を家に忘れてきたらしい。

「だ、だったらここで仕留めるさ!!」

蓮太郎が指弾の準備をする。準備は一瞬。指が弾かれた瞬間、ドゴオツ!!ともう指を弾いただけでは出ないような音が鳴り響き、圧縮された空気が突き進む。

一秒後、ズガアアアアアンツ!!と激しい音。そして遠目でも分かる砂塵。

蓮太郎と延珠は見えた。ビルの屋上の一部を指弾が破壊し、その二つ下の階までの壁が丸々崩れて地面に落下しているのを。蓮太郎にはティナが足を広げながらなんとか指弾を避けているのが見えた。

「……死人出てないといいなげぼあつ。」

延珠、吐血。

「延珠さん!!里見さんのせいで胃潰瘍再発してるじゃないですか!!」

「……やつべ。」

「もういいです!私が追います!!」

「ちよつと待て!相手は腰を抜かしてるようだし……聖天子様、ティナ・スプラウトつて子について調べられないか?」

「は、はい!」

聖天子は足早に車へと走って行った。

ティナは見る限り対戦車ライフルを抱えたまま腰を抜かしてヘタレこんでいる。暫くして聖天子が戻ってきた。

「分かりました！ティナ・スプラウトはIP序列九十八位の民警です！夏世さんでは勝てません!!」

「きゅ、九十八!!」

「夏世、行つてたら死んでたかもな。」

「全くです……」

ティナは立てないのか四つん這いの状態でビルの上から去っていった。

保脇と言う名の無能はポケーつとしている。護衛官はどうしたものかとオロオロしている。

「……とりあえず相手は腰抜かして逃げた。今日のところは暗殺される事はないだろう。夏世、延珠を病院に送ってくれ。」

「は、はい。」

夏世は一人、時折吐血する延珠を抱えて走った。

結果、延珠は胃潰瘍で一週間ほど木更と同じ病室で入院する事となった。

そしてその翌日。蓮太郎は近場のアニメショップの一角で携帯の画面を見ながら棚

を見ていた。

「えつと……天誅ガールズの……あった、これか。ラスト一戸かよ……あつぶね。」

蓮太郎が手に取ったのはこの日発売の天誅ガールズのゲームの新作だった。

胃潰瘍になり入院した延珠は蓮太郎にかなり謝られたのだが、延珠は自分の代わりにこの日発売の天誅ガールズのゲーム（初回限定生産プレミアムサウンドエディション）を買ってこいと言われた。お金は延珠から受け取ったので蓮太郎は買いに来たのだが、案外買いに来てる人がいたので暫く店の前で待機して空いてきた頃に入店した結果、ラスト一個という所で獲得できた。

付属として何やら色々つついててかなり箱が厚いが気にせずレジに持っていく。

その時店員の発した値段にギョツとしたが、延珠はちゃんと金を渡してくれていたの
で問題なく買う事ができた。

これを知り合いに見られたら自殺物だなど思いながらもレジ袋を受け取りとつとと延珠に届けるかと歩き出す。

「あ、あれ……売り切れてる……」

「ん？何か聞き覚えのある声が……」

蓮太郎が先ほどゲームを買った棚から聞き覚えのある声。誰か知り合いに天誅ガールズが好きな奴がいたかと思いいながら振り返ると……

『あつ……』

夏世がいた。

そして蓮太郎の手にはレジ袋。

「あでゆー。」

「ちよつ!!?」

走り出そうとした蓮太郎の服の袖を夏世が掴む。

「その中身……見せてください。」

「こいつは延珠に頼まれたもんだ!断じて俺のじゃない!!」

「見せないと近所に里見さんが虫オタクのアニメオタクのロリコンだって言いふらしま
すよ。」

「お前ほんと性格歪んでるんじゃないか!?!」

別に虫オタクのアニメオタクとは言われても構わないがロリコンとだけ言われるの
は断じて嫌だったので夏世にレジ袋を渡す。

「ぐぬぬ……延珠さん、確実に買えるように里見さんに頼みましたね……」

「あーもうどうでもいいからそれ返せ。とつとと延珠に届けるんだからよ。」

「私と一緒に後二、三軒ハシゴしてください。じゃないと……」

「分かったよ行けばいいんだろうが!!この腹黒が!!」

どうなったかと言うと、朝から家を出たのに延珠にゲームを届けられたのは夜に近い夕方になったと言っておこう。

と、そんな感じのこの間暗殺の護衛に関わったとは思えないようなのほほんとした日を後一日送った。

二度も聖天子は暗殺されかけたのだ。しかもこんな短期間に。

三度目は無いだろうと踏み込んでいた蓮太郎と夏世は蓮太郎の部屋で特にやることもなくゴロゴロとしていた。

「これでやっと平和になるんですかね〜……」
「だいたいな……」

蓮太郎の脳裏にふと過ぎたのはティナの事。

蓮太郎個人の意見としてはティナは助けたい。こんな、暗殺のような真似をもう二度としなくていいようにしたい。

なんとか捕まえて聖天子に突き出し、蓮太郎が頭を地面に擦りつけて地面を頭突きで割るように頼めばもしかしたら彼女への待遇は本来より良くなるかもしれない。

だが、恐らく彼女の携帯に電話をかけたとしても彼女は出ないだろう。

このまま終わるのはどうにも胸に何か突つかかっているような感じで落ち着かない。

もし、三度目があるのなら。ティナは絶対に捕らえる。そして、あんな腐った仕事を

させないようにする。

「……ティナ・スプラウトさんでしたっけ？彼女の事を考えてるんですか？」

「……一応、知り合いだからな。」

「……次に暗殺の場で会うことになったら？」

「引っ捕える。」

「なら、有言実行と言う事で。」

夏世はそう言うのと夏世のスマートフォンを蓮太郎に投げる。

それを受け取り画面を見ると木更からのメールが映されていた。

『明日、第三回の会談が決定した。時間は——』

蓮太郎はすぐさま立ち上がり、ダラつとした部屋着から制服に着替える。

「……どこに行くんですか？」

「無能に指示を出してくる。」

「お供します。」

「よし、なら行くぞ。」

二人は猟奇的な笑みを浮かべながら部屋を飛び出した。

結果、保脇はニヤニヤしながら黒いベンツで家から出た自分達を尾行していた。

なるべく人に話が聞かれない場所に行くと、蓮太郎は黒いベンツに声をかけ、保脇を表に出させた。探す手間等が省けた。

「第三回の会談が決まった。」

「知ってら。」

「本来のイニシエーターがたかが胃潰瘍で入院とはな。貴様と同じで品の無いクズみたいなイニシエーターだな。」

「……………おい。」

ニヤニヤしながら言った保脇の胸倉を掴む。

「俺の事は何度馬鹿にしようが構わん。実力でモノを言わせれるからな……………だが、俺の身内を馬鹿にするなよ。長生きしたいならな。」

蓮太郎から発せられる圧倒的怒気と殺気。だが、保脇はそれにすら気付かない。

「なんだと……………」

「とつとと警護計画書を出せ。死にたくなかったらな。」

最早話す事は何もない。とつとと目的を果たす事にした。

「貴様……………まだ護衛を……………」

「ありましたよ里見さくん。」

「よくやった。」

「なっ!？」

夏世が黒いベンツに潜り込んで警護計画書をサラッと盗ってきた。

蓮太郎は渡された警護計画書を手に取り速読する。

「……」

蓮太郎は警護計画書を保脇に投げつける。

「貴様……そんなに聖天子様の隣が気に入ったか!!」

「俺の任務は護衛だ。それが終われば元の民警に戻ってやる。だがな、この計画書で本当に行く気か? また情報が漏れるぞ。」

「貴様が情報漏洩者だろうがア!!」

保脇が拳銃を蓮太郎に向ける。

夏世は溜め息をつきながら持ってきたギターケースからショットガンを取り出し、中に何時ものバックショット弾とは違う弾丸を一発装填する。

「ちげえよ。聖居の内務捜査官は情報リーク者について何も掴んでないのか。」

「貴様が当然トップに上がっている! 容疑者も大分絞り込まれたがな!」

「ならそいつらに偽の情報を流せ。」

「僕に指図を……するなああああ!!」

保脇の拳銃を握る手に力が籠る。

蓮太郎は横にいる夏世がショットガンを構えてるのを見てやつちまえ。と視線を送る。

そして爆発音にも似た銃声。吹き飛ぶ拳銃。

夏世が使った弾丸はスラグ弾と呼ばれる巨大な弾丸を発射するショットガン専用の弾だ。

それが拳銃に当たり拳銃を吹っ飛ばした。

「ぐあつ!!こ、この化け物風情が!!僕に向かつて!!」

「……あなた、見てると不愉快なんですよ……殺したくなるほど。」

夏世は何時ものマガジンを取り出し装填し構える。もう撃つ準備はできている。

「別に撃つてもいいんですが……里見さんがブチ切れそうなので生かしておいてあげます。」

「こ、この……!」

「死にたくなければ従いなさい。あなたにそれ以外の道はありません。」

夏世はショットガンを一発上空に発射し、撃てるという事に表してから再びショットガンの銃口を保脇に向ける。

「偽の情報を情報リーク者に流してください。さもなければ、赤色の蜂の巣の出来上がりです。」

夏世はふざけた雰囲気をもっと振り払い、殺気を乗せ保脇を脅した。

「くそっ!! エインめ!! 堕ちるところまで堕ちたか!!」

董の研究室。蓮太郎と夏世はそこに来ていた。

董には木更の暗殺について教えてもらった恩があるので、恩返しと言うほどではないが今回の件について話した。

そして、そのついでにとティナについての情報が書かれた紙を董に渡した。ティナのプロモーターの名前の欄には蓮太郎と夏世も聞いたことのある名前が書かれていた。

エイン・ランド。それが、そこに書かれていた名前だった。

「このエインって人は……」

「ああそうだよ! 私達と同じ四賢人だよ! 信じられないことにな!!」

何故エインの名がティナの情報から出てくるのか。それは、ティナもNEXTの強化兵士である事を表していた。

「先生、なんでそんなに怒っているんだ？」

「……蓮太郎くん、私が君に『新人類創造計画』の兵士とまらないかと誘った経緯を覚えてるのか？」

「……俺が、日常生活すらままならなかったからだ。」

蓮太郎の力はある日を境に突然身についた。

腕から嫌な音が鳴り、足は悲鳴を上げ、もう無理だ。と思つたが、諦めずにトレニングを続けた時。蓮太郎はいつの間にか今よりも数段劣るが、圧倒的な力を身につけていた。だが、いつの間にか身につけたその力は幼い蓮太郎には制御しきれず、走れば音速を超える一歩手前の速さを叩きだし、物を握ればそれが砕け、踏み込めばクレーターが出来上がり、拳を振るえば目の前が消し飛ぶ。故に、日常生活すらままならなかった。

蓮太郎が最初に出会った野良ガストレアを倒すとき何故苦戦したか。それは、力の制御が出来なかったからだ。拳を振るえば見当違いの場所が消し飛び、接近するために走れば壁にぶち当たり、飛べば雲がビルの屋上に到達するほど飛んでしまい、ともに拳を当てることができなかった。

それを聞いた董は一つの可能性を考えた。蓮太郎の脳が蓮太郎の体のリミッターを全て外してしまつたのではと。故に、董は幾らリミッターを外そうが目の前を消し飛ばす程の拳を放てず、踏み込もうがクレーターを作れない義手義足と見えすぎない義眼を

右手右足と左目を切ってつけないかと提案した。勿論、拒否権込みで。

そうする事で力の制御を学び、今までの生活に戻れないかと。董が医師として提案した事だった。

だが、蓮太郎はそれを断り、絶対に今より強くなってさらに力の制御も出来るようにすると宣言した。

「まあ、今となればしなくてよかつたと思ってるがね。」

「お陰で人外になつたがな。」

「……さて、話を戻そう。私達四人は機械化兵士プロジェクト結成時に一つの誓いをした。『我々は科学者である前に医師である』と。蛭子影胤は内蔵に重大な障害があつたが故に機械化兵士となつた。君の場合は生か死かの選択ではなく、日常生活を無理矢理遅れるようにするか、可能性にかけるかだつたけどな。」

あれだけ狂気に満ちた発言をしておいて元病人だつたのかと蓮太郎は影胤に若干聞いた。

だが、董の話でティナについてはだいたい分かつた。

呪われた子供たちは基本的に大病にはかからない。ならば、何故ティナは機械化兵士となつたのか……

「人体実験か……」

「そうだ。エインは健康体である呪われた子供たちを使って人体実験をしたのだ！ 勿論普通の手術器具は使えんだろうから再生阻害の効果があるバラニウム製の器具を使つてな!!」

勿論そんな事したら呪われた子供たちが死んでしまう。だが、ティナは生き残つたのだらう。

痛いだけの人生。その意味が分かったような気がした。それと同時に、ティナがどれだけの死人の上に立っているかと言うのも分かった。

「……しかも、この序列は彼女単体での戦闘能力だ。」

「た、単体なんですか!？」

夏世が驚く。本来は二人一組の民警なのに、ティナ単体で。しかも蛭子親子より序列が上。化け物という言葉が夏世の頭を過ぎったが、隣にそれすら超越したナニカがいるのを思い出し冷静になった。まあ、この人という枠を超えたナニカが負ける筈ないしと。

「そうか。それだけか。」

「ああ、それだけだ。」

「なら楽勝だ。次が決戦の時だ。」

「あと、彼女の狙撃のタネがあるのだが……聞ukai?」

「短めに。」

「彼女はシエンフィールドという小型の……分かりやすく言うところのエ○メスのビ○トのようなもので正確な位置などを特定している。虫の羽音のようなものが聞こえるとそれが動いてる証拠だ。見つけたら破壊するといい。後は腕等にブレを抑える機械等を埋め込んでという事だけかな。」

「それだけか。なら、完封してやる。」

「出来るかい？」

蓮太郎は立ち上がり、葦に向かってニヤリと笑い、

「俺に現代科学の『兵器』は通用しねえよ。」

「……それもそうか。」

蓮太郎の言葉に葦は呆れながらもビーカーに注いだコーヒーを飲むのだった。

その後蓮太郎は美織との、自分の力を見せるという約束を果たすため司馬重工のビルに趣き、最高難易度のインシエーターでもクリアは不可能とも言えるステージを一秒でクリアするという人外つぷりを見せつけた。その後は暇潰しに夏世をそこに放り込み、地獄のトレーニングをさせた。夏世は終始笑いながら泣いていた。

美織は里見ちゃん、あんた鬼やな。と蓮太郎に一言言ったそうなの。

「……無能しかいないんですねあの聖居には。」

ティナは拠点であるアパートの部屋でPDAに送られてきた画像をホロウインドウモードで空中に投影して見ていた。

第三回の警護計画書。それは明らかに馬鹿丸出しの物だった。

だが、これは紛れもなく自分のマスターから送られた本物。聖居には無能しかいないという証明だった。

「罨……という可能性は？」

『有り得ん。どちらにしても、我らが依頼主は既にご立腹だ。失敗は許されんぞ。』

仏の顔も三度までか三度目の正直か。

『ティナ・スプラウト。前は反撃されてムザムザと敗走してきたようだが……』

ならお前があの場合にいてみる!! 不可視の対戦車弾よりも遥かに威力のある何かが飛んできたあの場にいてみる!! 怖すぎて逃げるわこの野郎!! とキャラ崩壊したツツコミを内心でぶちかます。

『次、敗北するような事があれば……自害せよ。』

己のマスターから死ぬという命令。いや、失敗しなければいいのだが、失敗する未来

しか見えない。

『死ね。』

再びの命令。

「……………了解しました。マスター。」

テイナの言葉を聞くとマスター……………エイン・ランドは電話を切った。

「……………はあ、負けたら蓮太郎さんに粉碎されて愉快的肉塊に変えられるんだろうし……………そんな命令いらないよ……………」

テイナは買いすぎた食料に目をやると、最後の晚餐なのかヤケ食いなのか分からないが、いつも食べる量の倍近くの食料をテーブルに置くと……………

「早食いファイト……………レディー、ゴー。」

早食いを始めた。もう、なんか色々と酷かった。そして数分後。

「うっぷ……………た、食べ過ぎた……………」

食べ過ぎで吐き気がするが、抑えてベッドに横になる。

「……………はあ……………蓮太郎さん、お願いだから来ないで……………三百円あげるから……………」

数時間後、そこにはなんと元気に笑いながらガソリンを部屋中に撒いてマツチ十本以上一気に火を付けて放火するテイナちゃんの姿が。

「アツハツハツハツハ!!全部燃えればいいんですよ!!アツハツハツハツハ!!ヒヤッ

ハーーーーーッ!!」

もう、なんか、その……可哀想だった。

フォーティンパンチ

決戦の夜。聖天子は違うルートから会談場所へと向かっている。

自分がやるのは、幼き暗殺者を止めること。

さあ狙撃しろと言わんばかりにルート上にポンとあるビルの上に、ティナはいる。距離は1km。肉眼で確認できている。

驚愕の表情を浮かべるティナの携帯に向けて自分の携帯から電話をかける。ティナは出てくれた。

「よう、ティナ。わざわざ引つかかってくれたな。」

『蓮太郎さん……』

蓮太郎の横には夏世がいる。だが、夏世は今回手を出さない。手を出す必要がない。

『やはりここはスカでしたか。』

「おう、そうだ。」

『……ここであなを殺して私はすぐに聖天子の抹殺に戻らせてもらいます。それに、私がここがスカだと気付かないとでも？』

「まさか。そこまで馬鹿じゃないだろ？」

『……拳銃の一つも持っていないあなたにとってここはまさに地獄。銃撃のオンパレードです。』

そんなのここに来た時から『分かっている』。

もう、何丁か何かに従うように動く対物ライフルが見えている。おそらく、シエンフィールドで捕捉した敵を蜂の巣にするための物だろう。

テイナの考えは一発ずつなら必ず防ぐ術が蓮太郎にはある。だから、全方位からの対物ライフルでの乱射で一瞬で蓮太郎を蜂の巣にするという物だった。

自らの力は分かっている。それなりに白兵戦も出来るが、一番得意なのは狙撃。そして銃火器を取り扱って行う攻撃。

故に、この距離はテイナの距離。

『……なあ、テイナ。なんで、人を殺すんだ？』

僅かに言い淀むテイナ。

『……これしか、私の存在意義はないんです。こうすることしか……』
「……人を殺す事が存在意義の人間か……悲しいな……」

『私は……人間じゃない。』

「人間だ。お前は、立派な人間だ。」

ギリツと齒軋りの音。

『私は呪われた子供たちです……そんな私が人間な訳ありません……私は化け物なんですよ!!』

「違う。お前は本当の化け物を知らない。」

『なら本当の化け物は何だっというんですか!』

「俺だ。」

『……ふざけてるんですか?』

「この戦いで見せてやる。本当の化け物の力……人という粹をぶつちぎった『人外』の圧倒的強さを。」

蓮太郎の目はスコープ越しのティナの目を見ていた。

「お前を助ける。そんな腐った仕事、もう受け入れなくていいように。」

『……無理ですよ。私は敗北したら自害します。それが、命令だから。』

「なら俺はお前にかかった命令全てを実行させない。絶対に助けます。それが、俺の『正義』だ。」

正義という言葉を強調する蓮太郎。

沈黙を保つティナ。

『……なら、やってみてくださいよ。そのちっほけな『正義』とやらで、私に勝ってみてくださいよ!!』

マズルフラッシュ。弾丸が対戦車ライフルから発射される。狙いは、蓮太郎の額。だが、当たらない。蓮太郎は当たる寸前に顔を逸らした。

本来、そんな避け方をしたら頬に傷の一つでも出来るか髪の毛がそこだけ根こそぎ切られるのだが、蓮太郎の体には傷一つついてない。

「断言する。お前は、俺に弾丸の一発も当てられない。そして、一分以内にお前を倒す。」蓮太郎は返事を聞かずに夏世に携帯を投げ渡す。

夏世はそれを受け取り通話を切り、ポケットにしまった。

さあ、始まりだ。助けを求めぬその手を、今から無理無理に引っ張りに行こう。

己の正義を拳に乗せて、走り出そう。

それを執行するためのその言葉。叫ぼう。開戦の狼煙だ。

「正義ッ！執行ッツツ!!」

その道を邪魔をするものはない。

ティナは焦っていた。蓮太郎を殺してしまうのではないかと。

本当は殺したくない。だって、彼は東京エリアにいた自分に唯一優しくしてくれたの

だから。

だが、もう終わりだ。彼は、物言わぬ肉塊となる。

蓮太郎が携帯電話を隣のイニシエーターに投げ渡し、叫んだ。読唇術で読み取ると、正義執行と叫んでいた。

それが開戦の狼煙だと気付いたティナはトリガーに手をかけた。

これを放つと同時に蓮太郎は接近してくるだろう。だが、距離は1km。例え接近を許しても重機関銃で蜂の巣だ。ティナはさよなら。と一言言い放つと、トリガーを引いた。

その一秒か三秒か経った頃か。自分の体は空を舞っていた。

「がはっ……っ？」

口から血が出る。何故。何で自分は空を舞っている。

シエンフィールドは。他の対物ライフルは。

だが、シエンフィールドからの映像は送られてこない。シエンフィールドと連動した対物ライフルも動いていない。

回転する体と視界。そこで捉えたのは拳を上には振り抜き滞空している蓮太郎だった。

「……What?」

思わず母国語が出てしまうほどだったが、ティナは頭から屋上の床に落ちた。

夏世は開戦の後すぐに双眼鏡でティナの様子を確認した。それはまさに馬鹿げていた。

隣から蓮太郎が消えたと思ったらティナの真下の床を殴り砕きながら昇○拳をティナの顎にぶち当てた後の蓮太郎が見えたからだ。

なんかもう、物理法則的に可笑しいが、ハハワロスと真顔で言って完結させた。

さて、蓮太郎に追い付くかとショットガンを担いで歩き出す。

だが、安心しきったからこそ気づけなかった。背後で響く銃声に。

蓮太郎のした事は至極単純。虫の羽音のような音を出すシエンフィールドをソニックブームで地面に叩き付けて、指弾をぶち当て破壊し、見える範囲の対物ライフルを音速で移動しながら殴って破壊し、その最中に見つけた対物ライフルを指弾で破壊し、ティナの真下に潜り込んで、

「○龍拳ッ!!」

昇龍〇と叫びながらアツパーカットを繰り出しながら飛んだだけ。勿論その上にある壁を全て粉碎して。

まさに全てをワンパンで終わらせた。

「がはっ……っ？」

何が起きたか分からないような声を出しながら頭から屋上の床に落ちるティナ。

「はい俺の勝ち〜」

そこまで力を入れてないから顎にヒビは入ってないと思われるが、脳震盪は确实だろう。

「で、どうだ？一瞬で負けた気分は。」

ティナの側に近寄って笑いながら話しかける蓮太郎。対戦車ライフルは遠くに吹っ飛んでる。

「……化け物ですね。ほんと。」

「だろ？」

蓮太郎はティナの髪の毛をわしゃわしゃと撫でる。脳震盪による吐き気やら何やらで思うように立てないティナはされるがまだ。

「さて、お前を聖天子様に引き渡す。大丈夫だ。俺が土下座して罪を軽くするように言っておくから。」

「……なんでそんな私のために土下座を……?」

「俺はこんなに関わった子供を見捨てる趣味はねえよ。」

「……なら、私を助けた責任、とってもらいますからね。」

「とつちやるよ。」

蓮太郎はティナを世間で言うお姫様だつこという持ち方で抱き上げる。

「ひゃっ!？」

「下へまいりまーす。」

そして、自分の開けた大穴から一階へと降り立つ。

その間にティナが言葉にならない悲鳴をあげながら蓮太郎に抱き着いていた。

ドスンツ!!と音を立てて降りた蓮太郎は取り敢えず建物から出た。

「……マジですか。」

「何が?」

「いや、私達でさえあの高さは受身を取らないと足が痺れるのに……」

「ま、俺だからな。」

蓮太郎は建物の壁にティナを寄りかかせた。

「ちよつと夏世を連れてくるから待っててくれ。」

「はい……」

さて、とつと夏世を回収してくるかと思ひをしてから歩き出す。夏世には自分が走つたら歩いてでもいいからこつちに来るように言つてある。

どこらへんにいるかなと思つて歩き出した。思考してたから反応が遅れた。背後の銃声に。

「ッ!」

「……え?」

パアッ!と響いた銃声。蓮太郎はそれに気づくのが遅れ、振り向く。

ティナの胸元が赤く染まっている。そして、自分の真後ろにそいつはいた。

「殺し屋如きが手こずらせおつて!」

後ろにいたそいつはティナに近づくと、ティナを蹴り飛ばした。

横に蹴り飛ばされたティナが力なく倒れる。

「やす……わき………貴様アアアアッ!!」

後ろで拳銃を構え、ティナを蹴り飛ばしたのはあの無能、保脇だった。

ティナは口から血を吐いた。

「全く………会談が終わる頃には戻らねばならんから、こちらも忙しいんだ。」

「貴様!抵抗する気力がないうつに向かつて銃を撃つなんて人のする事か!!」

「ふん、貴様の代わりにゴミを一つ処分してやったんだ。感謝されるくらいだと思つ

ね。」

「……殴り飛ばすツ!!」

「おっと、このガキがどうなってもいいのか?」

保脇が横に向かつて拳銃を向ける。護衛官に両手を拘束されながら連れてこられたのは夏世だった。

両足と両手、そして腹部から血が流れている。

「夏世!!」

「すみません………しくじりました………ふっ………」

夏世の口から血が吐き出される。

保脇は夏世の頭に拳銃を突き付ける。

「れん………たろうさん………はやく………そのこをつれて………」

「ティナ! 喋るな!」

蓮太郎がティナに近付こうとする。だが、後ろから他の護衛官が蓮太郎の両手を拘束する。

「待ってる! 助けてやる!」

「なあ、ここで一つ生体実験でもしてみないか? この化け物が鉛玉何発で死ぬかな。クッククック………ハッハッハッハ!!」

その時、蓮太郎の中で何かがキレた。

「……………やっちまったなあ……………」

「は？」

「やっちまったよ保脇……………お前は俺を怒らせた。」

「ふん、それが何だ。」

「全身粉砕骨折しても……………文句は言わせねえぞ。」

「言っておけ。この化け物を殺したら次は貴様を……………次にこのガキを殺して三人仲良くあの世に送ってやる。」

保脇が他の護衛官からもう一丁拳銃を受け取り、ティナに向ける。

「まず一発目だ。」

トリガーに指がかかけられ、引かれる。

銃声と共に弾丸が発射され、ティナに向かっていく。

だが、その弾丸はガアンツ!!という音と共に弾かれた。

「なっ!?!」

「……………鉄拳制裁タイムだ屑野郎!!」

それを弾いたのはほんの一瞬で拘束を抜け出した蓮太郎だった。

「な、何をしている!取り押さえろ!!」

保協の指示。先程まで蓮太郎を拘束していた護衛官が走って近寄ってくる。
「オラアツ!!」

蓮太郎の気合いの込めた叫びと共に不可視の速度で振るわれる拳。

それは、護衛官二人の人中に当たり、骨が砕ける音を何回も響かせながら吹っ飛ばす。きりもみ回転しながら吹っ飛んだ護衛官二人の顔は拳大に凹み、上顎の歯は全て折れ、鼻の骨も折れていた。さらに、腕と足も本来曲がらない方向に曲がっていた。

それ程威力のある拳。威力を外に逃さず、体全体に響かせる。まさに、人外の技。

「死んじやいねえよ……」

蓮太郎の拳には血は付着していない。血が付着する前に殴り飛ばしたからだ。

「き、貴様!」

保協が二丁の拳銃を夏世に突きつける。だが、その瞬間拳銃は保協の手から吹き飛ばされる。蓮太郎が一瞬で殴り飛ばした。

「テメエらも同罪だ!!」

蓮太郎が夏世を拘束する四本の腕を神速で殴り、叩き折る。さらに、一人に拳をぶち込み、そのまま地面に叩きつける。さらに、もう一人は体を起き上がらせながらアツパーで顎を打ち抜く。

デカイクレーターが出来上がり、アツパーで打ち抜かれたもう一人はグシャツと音を

立てて落下した

「ひ、ひいつ!？」

「デメエは楽に気絶させねえ……」

蓮太郎が拳を構え、保脇に近付く。だが、その時、いきなりリムジンが走って近くで止まった。

「里見さん!これはどういう……」

中から出てきたのは聖天子だった。保脇は助かったという顔をしている。

「……聖天子様……あんたでも今回は邪魔させねえ……こいつはこの子達に銃を向け引き金を引いた……俺は殴らなきゃ気がすまねえ……」

「せ、聖天子様!僕は無実です!黒幕はこいつで……」

「……分かりました。里見さん、殺さないのでしたら私は今回の件について目を瞑ります。」

「なっ!？」

保脇の顔色が絶望に染まる。

聖天子は顔を伏せ、目を閉じている。

「……ありがとう。聖天子様。」

蓮太郎は拳を構え、保脇を睨む。

ゴキバキメシヤツ!!とまた骨が碎ける音。さらに、拳を回転させて振じ込む。さらに、骨の碎ける音。

そして、思いつきり拳を振り抜く。

保脇は地面を何度もバウンドしながら近くの瓦礫に叩き付けられ、クレーターを作つて沈黙した。

腕と足の関節を二つずつ増やし、肺や心臓に刺さらないように肋骨を折り、さらに背骨も折る。そして顔面の骨を粉砕。

「……………ふう……………」

「聞いてない……………私は何も聞いてない……………」

聖天子は目の前の惨状に目を向けず、耳をふさいでいる。

「ま、死なないように殆どの骨を叩きおつた。放置しない限り死なないだろう。」

「アツハイ……………」

蓮太郎の心の中は穏やかとは言えないが、大分スッキリしていた。

「つてかあんだ、なんでここにいるんだ? 会談は?」

「ひつ……………え、えつと……………保脇さん達が居なくなつたので不思議に思つて……………それで他の護衛官の方にここに連れてきてもらったのです。」

聖天子は蓮太郎が本当に敵にならなくて良かったと内心で全力で思いながらも言葉

を絞り出す。

「……すまん、俺がとつと終わらせておけば……」

「いいえ、これも私が彼等の事をちゃんと見ておかなかつたから招いた惨状です。なので、あなたの家族を傷付けてしまった謝罪がしたいのですが……」

「……ならさ、せめてティナが普通の生活を遅れるようにしてくれ。序列剥奪でも何でもしてくれていい！頼む!!」

蓮太郎は地面に両手両足をつけ、地面に額をぶち当てる。

クレーターが出来る程の威力。それは、土下座。

「ちよっ!!」

「あんたを暗殺しようとしたことがどれだけ罪の重いことかくらい俺だつて分かっている!! だけど、こいつは命令されてやらされてたんだ!! 頼む!! 頼むからこいつが日の下でちゃんと歩けるようにしてくれ!! 俺の腕を切り落とせと言われれば切り落とす!! 足を砕けと言われれば砕く!! 目を抉りだせと言われたら抉りだす!! だから、頼む!! 聖天子様!!」

「さ、里見さん!! 私、そんな残虐非道な事はしませんよ?」

「だつたら俺を牢屋にぶち込んでも構わない!! 序列剥奪だつてされたつていい!! だから!!」

「わ、わかりました！こちらでティナさんの事はなんとかしてみます！」
「本当か!？」

「は、はい！だからあんまり近寄らないでください近すぎです!!」

「あ、すまん。」

鼻と鼻が接触しそうな程に一瞬で接近した蓮太郎だったが、すぐに聖天子からの言葉で離れた。

「えつと……今回で暗殺者であるティナさんを捕まえてくれたので、里見さんは私の権限でIISOからの辞令をスキップして序列千番から三百番に序列をあげます。」

「そ、それだけでか?」

「本来あなたは三位だったのを私が私怨で千番に落としたのですから。ちよつとした近道ですよ。」

「……分かった。じゃあ、俺はティナと夏世を病院に連れていく。」

「分かりました。後の事はこちらで。」

「すまない、後始末なんかさせて。」

「いえ。構いませんよ。」

蓮太郎はティナを抱き、夏世を背負って二人に負担のないように病院に向かって走った。

翌日。

「まさか木更さん、延珠、夏世、ティナが全く同じ病室で入院させられるとはな……」
「私だつて意外よ。つてか、子供達はすっかり打ち解けてるわね。」

蓮太郎が運んだ病院は木更と延珠も入院してる病院で、即入院となったのだが、延珠と夏世とティナは同じ病室でバツタリ会つてから数分後にはわいわいきやつきやと打ち解けていた。

「そうそう、里見くん。里見くんが来る前に聖天子様からの使いの人が来て、ティナちゃんは今序列剥奪して私達の方で引き取れつて。」

「知ってる。で、どつちが引き取る？」

「里見くん。」

「知つてた。まあ、あんたと一緒じゃティナが栄養失調で倒れかねん。」

「何ですつて!？」

「現に栄養失調で倒れてるんだからあんた、何も言えねえぞ？」

「ぐぬぬ……」

蓮太郎はふと夏世のベッドに集まっている三人に目をやる。

三人とも天誅ガールズの格ゲーをワイワイと遊んでいる。

「また、騒がしくなるな。」

「そうね。それじゃあ、皆退院したら記念に鍋パーティーでもしない？それぞれで具材を持ち寄って。」

「おつ、いいな。やるか。」

そんな訳でこれにて一件落着。これから天童民警会社はティナを加えてワイワイがやがや。そして蓮太郎の部屋はロリ三人の男一人。ロリコンと言われても何ら不思議ではないだろう。

「さて、俺は部屋の掃除と事務所の掃除してくるよ。」

「頑張つてね〜」

「はいはい。」

蓮太郎はまた賑やかなになる毎日を想像するとちよつとだけ笑って病室を出ていった。

え？保脇？全治一年以上で顔面は整形しないとイケないほどになりましたけどどこか？

フイフティーンパンチ

ぐつぐつと煮えたぎる鍋。そこに浮かぶのは肉、野菜、キノコ等。

そしてまだかまだか箸を構えてじつと待つのは天童民間警備会社の女性四人組。そしてせつせと鍋の様子を見る蓮太郎。

「……うし、そろそろか。食っていいぞ。」

蓮太郎の合図とともに肉が高速で鍋の中から四つ消える。

早速肉かよ……と苦笑いする蓮太郎を他所に次々と鍋の中の具材を口の中に突っ込んでいくのは主に木更。

木更には負けるがいいペースで食べるのは延珠。そしてゆつくりだが肉しか食わないのが夏世で最初は肉だったが後からちゃんとバランス良く食べるのはティナ。

「今のうちに！栄養を！とっておかないと！」

「うむ、やはり蓮太郎のご飯は美味しいな！」

「肉うめえ。」

「美味しいです。」

「俺まだ食えてねえ……」

もっさもっさと五人で鍋を食い終わり、締め雑炊も食べ終わった。

「ふう……妾は満足だ！」

「あく……また暫くはご飯抜きで生きていける……」

「いや、抜くなよ……」

「肉最高。」

「バランス良く食べましょうよ……」

「一応キノコも食べましたよ。」

「一応……」

「そういえば、あのキノコはなんだったの？見たことなかったぞ。」

延珠の一言に五人の間の空気が凍り付く。そういえば、入っていた。キノコが。

「……ええ、すつごく毒々しい紫色のが入ってましたよね……」

確か合計七つ。丸ごとポンツと入っていた。凄い存在感を放っていた。

「……毒キノコ……みたいよね。あれ……」

木更の言葉に再び五人が凍り付く。が、無いな、無いだろ、無いでしょう、無いですね。と否定の声。

「な、なあ、今回の鍋は皆で具材を持ち寄ったんだろ？あの紫のキノコは誰が持ってきたんだ？」

四人全員がブンブンブンと首を横に振るう。

つまり、誰もあのキノコを持ってきていていない……いやいやいや、そんな訳無かろう。歩くキノコなんてある筈なの……ない……

「……人外がいるからもしかしたら……」「ね、え、よ!!」

バンバンバンと机を叩く。机が悲鳴を上げる。

人外はいるが歩くキノコなんている筈がない。つまり、キノコは誰かが持ってきたと言う事だ。

「いや、もしかしたら里見さんが持ってきたのでは……」

「ですよね……蓮太郎さんが持ってきたのなら疑われる事なんてないですし……」

「な、なんだよ、俺は代表して肉買ってきてやったんだぞ!!」

段々と空気がギスギスしてくる。それと同時に胃が痛くなってくる木更、延珠、ティナ。

「わ、わかった!犯人探しはもうやめだ!なんにも起こる気配ないしな!!」

「そ、そうよ!」

「か、考え過ぎですね!!」

「はいフラグ一丁。ってな訳でこの場で私の他に喋っていない延珠さんにフラグ成立です。」

「何言ってるんだよ夏……」

「——どうせ妾がいたって何の役にもたたないのだ……」

『!?!』

「はいフラグ成立。」

突如延珠が豹変。目のハイライトが消えて目が死んでグデーツと地面で寝ている。

「ど、どうしたんだよ延珠。お前らしくないな。」

「あの時も妾が血を吐いて胃潰瘍になって……もう足を引つ張つてしかないのだ……鬱だ死のう。」

『わああ!?!待て待て待て!!』

延珠が何処からかロープを取り出して天井にくくり、輪を作つてそこに頭を通すと、そこで木更が斬撃を飛ばしてロープを切り、蓮太郎が延珠をキヤツチ、夏世とティナが簀巻きにした。

特に延珠は何もせず、地面に簀巻きにされたままピクリとも動いていない。

「……延珠ちゃんに鬱の予兆は？」

『ある訳無い。』

蓮太郎、夏世、ティナが手を横にブンブン振るう。

「と、とりあえず……俺達はキツイ判断をしなきゃならないと思う。」

「ええ……これは明らかに異常なものね……」

蓮太郎は携帯電話をゆくりと取り出し、ある番号に電話をかけた。

数分後、延珠はパーポーパーポーという独特な音を鳴らす赤い十字が書かれた白い車に乗せられていった。

「……なんで延珠ちゃんがあんな事になったのか考えましょ……」

「キノコだろ。」

「キノコです。」

「乗るしかない、このビッググウェーブに。ってな訳でキノコでしょう。」

「適当ね……」

だが、満場一致でキノコという結果になった。

「……そういえば夏世、さつきキノコ食ったって……」

「んなわけないでしょう!!」

「その必死さが物語ってるわボケ!!」

ギヤーギヤーと言いつつ夏世と蓮太郎。そしてそれを呆れて見つめる木更。

だが、気付かない。テイナが横で奇行に走っている事を。

「……ねえ、蓮太郎さん……」

「ん?なんだ、テイナ………テイナ?」

「炎つて素敵ですよね……真っ赤で、何でも燃やして……綺麗で……」
「お、おい、ティナ？」

そういえば、何か変な臭いがする。

ティナの横にはサラダ油の入っていたであろうボトル。中身はない。

そしてティナの足元は何かで濡れている。そして、ティナ手にはマッチ。

「この事務所、燃えたら綺麗だっと思って思いませんか？」

ティナの目は虚ろで何処か遠くを見てるような気がする。

何かヤバイ。それを察する。

「思いませんか？私は思うんですよ。だから、」

シユツとマッチを擦って火を付けるティナ。

「燃やしちやいましょうか☆」

「ウオオオオオオオ!!？」

ティナが地面の水のようなものに向かって火のついたマッチを投げる。これが何かなんてティナの周りを見ればわかる。油だ。

蓮太郎はマッチが落ちる寸前にマッチをキャッチ。そのまま油で滑って外に向かってストライク。

「オオオオオオああああああああああ……」

ガツシャーんっ!!と窓を割りすつ飛んで行く蓮太郎。

ティナがそんな蓮太郎に気を取られているうちに木更が全力でティナに接近しマツチを奪つてそのまま油で滑つて壁に顔から激突。さらに夏世がティナを羽交い締めにし、夏世が足を滑らせ、わたわたと暴れているうちにティナの頭を横から抑えてそのまゝ一緒に滑る。ティナの側頭部が机の角にダンクのように叩きつけられ、夏世がその上から頭突き。

「いっつ……」

額を抑えながらなんとか立ち上がる夏世。真下を見ると白目を向いて気絶しているティナ。

「……証拠隠め……」

「死んでないから!ティナちゃん生きしてるからね!」

ティナを麻袋に入れて証拠隠滅しようとした夏世をpushさえ付けようとした木更が誤つて夏世の頭を机の角にダンク。

「あつ……」

「いっつだああああああああつ!!?」

とても女の子が出すような悲鳴じゃない悲鳴をあげてゴロゴロ転がる夏世。もう油まみれで滅茶苦茶だよ。みんなヌルヌルしてるよ。テカテカしてるよ。

「何するんですかおっぱい星人!!」

「い、今のは全体的にごめんなさい。」

「人の頭をダンクするって殺す気で……うっ……」

額を抑えながら抗議していた夏世だが、突然バタン。と受け身を取らずに倒れた。

「えっ……?」

いきなりの事に疑問の声が出る。

「だ、大丈夫?夏世ちゃ……」

「雑種如きが我わたしに話しかけるでない。」

「ふあ!?!」

声をかけたならなんかドスの効いた声で拒否され、しかも口調も違つて困惑する木更。

「か、夏世ちゃん?一体何が……」

木更が夏世の肩に手を置こうとする。が、手を払われる。

「立場をわきまえろ雑種。貴様のような手で我に触れるでない。万死に値するぞ。」

「か、夏世ちゃんも頭が可笑しく……」

「可笑しい?我がか?貴様、我に向かつてそのような言葉を吐くとは死にたいようだな。」

「……でも何でだろう、いつもとキャラあんまり変わってない気が……」

「ふん、先程の言葉は不問にしてやる。おい雑種。我をもてな……」
 豹変した夏世が歩いた瞬間、足を油に取られて転倒。顔面からいった。鼻血が出てい
 る。

「な、なんだこれはアアアアッ！」

「油よ。」

「くつ、たかが油如きが私の足を取るとは……もういい！床ごと破壊してくれよう！
ゲート・オブ・パピロン
 王の財宝!!」

何か技名のようなものを叫んだ夏世だが、勿論そんな武器が沢山飛んできそうな技が
 発動するわけもなく。

「……なに!?何故何も発動しない!!」

「……ごめん里見くん。私には手に負えない……」

木更はゆっくりと電話に手をかけ、番号をプッシュする。

そして数分後。

「ええい！その雑種！早く我をもてなさ……なんだ貴様ら！くつ、触るでない雑種!!
 離せ！離さんか!!H A ☆ N A ☆ S E !!」

ティナと夏世は救急車で延珠と同じく病院送りにされました。

「……ねえ、これ完全にあのキノコのせいよね……」

「十中八九そうだろ……」

疲れた表情の木更とさつき戻ってきたばかりの蓮太郎。

「……なあ、木更さん。」

「……なによ。」

「実はさ……見ちまっただよ……木更さんが悪い顔してキノコを鍋にぶち込んでるの……」

「……」

「しかもさ、それ、俺も食っちゃまってんだよ……」

「はあ!? 里見くんがあれ食って豹変したら世界が滅ぶわよ!?!」

突然のカミングアウト。だが、これは大体木更のせいである。

「……どうしよう。」

「せ、先生ならなんとかしてくれるわ! だってあれ先生の研究室から持ってきたやつだから!!」

「さらつとあんたはなんてどエラいところから持ってきてんだよ馬鹿か! あの人ゲロツグ錬成して平気で食う人だぞ!!」

「何それ初耳よ!?!」

「聞かれなかったからな!!」

なんかテンションがハイになって叫び続ける蓮太郎と木更。
ギヤーギヤー言い合っていると電話が董と繋がる。

『やあ木更。君からかけてくるとは珍しいね。今日も研究室に来てたが、何か用かい?』
「それが……」

木更は延珠とテイナと夏世が鍋を食った時を境にまるで頭が可笑しくなったかのような言動や行動をとったのを話した。

そして、そのキノコは紫色で毒々しかったのを話した。

『ふむ、それはあたまがおかしくなる茸だな。』

「あたまがおかしくなるだけ?」

『いいや、あたまがおかしくなる茸だ。』

木更の頭が痛くなった。

『あれは症状が出てから一時間以内に解毒薬を打ち込まないと一生頭が可笑しくなったままになるという毒を持った珍種でね。』

「……それを里見くんが食べちゃつ」

『早く延珠ちゃん達の搬送された勾田病院に連れて来い頭がおかしくなったら世界が崩壊しかねんぞ!!』

ブチンツ!!と電話の切れる音。その前にドツタンバツタンと慌ただしい音が聞こえ

た事から本当にマズイ状況らしい。

確かに、頭が可笑しくなつて中二病的な行動を起こしたら東京エリアの壊滅どころか日本、世界が崩壊しかねん。

「里見くん、まだ正気!？」

「ん? ああ。なんか頭がボーツとするけどな……」

「早く病院行くわよ!!」

「別にいいんじゃない? だって面倒だし……」

あれ? 何か変だ。と木更は異変に気付く。

蓮太郎はこんなにめんどくさがりではなかった筈。

いや、その前に正気でない人間に正気かと聞いたところで正気じゃないと答える馬鹿はいないだろう。

つまり、蓮太郎は……

「残り一時間! ええい、とつとと行くわよ!!」

「面倒だぜ木更さん……ここは一度昼寝して……」

ブチン。と木更の中の何かが切れた。

気付いた時には漫画やアニメでよく見る豚を丸焼きする時のように雪影に蓮太郎の手足を縄で括り付けていた。

仕方ないのでこのままえっさほいさと病院に連れていくことにした。

「周りの目が痛いわ……」

ひそひそと近所の人から何か言われてるが気にしない気にしないと自分に言い聞かせて走る。

「キヤー！ガストレアよー！」

「邪魔！里見くんハンマー!!」

なんか途中ガストレアが居た気がするが、蓮太郎を武器にしてガストレアを撲殺。すぐに病院にたどり着いた。

「やあ、やつと来たね、董……ってなんだいそのモザイクがかかっても可笑しくない肉塊は。」

董が指をさす所には赤黒くてグチャグチャしたもの塊が。

「え？なんのこ……きやあキモイ!!」

雪影を壁にぶん投げる。赤黒くてグチャグチャした肉塊は壁にぶち当たり、弾け、中から蓮太郎が出てきた。

「何をしたんだ一体。」

「里見くんがガストレアを撲殺した気がする。」

「彼はハンマーではないぞ。」

董は懐から注射器を取り出し、蓮太郎の額に逆手でぶっ刺して中の液体を注入した。蓮太郎は気絶した。

「これで大丈夫だ。」

「思いつき逆手でぶっ刺してましたけどそれは。」

「彼の腕に注射針が通るとでも?」

「逆になんで額ならぶっ刺さるのよ。」

「さあ? 補正だろ。」

「なんのよ……」

暫くしてから蓮太郎が目を覚ました。

「……え? どこだここ? って何で俺縛られてんだ? ってか血なまぐさっ!? って横に何かの肉塊!」

「君、ここは病院だ。」

「え? 先生? 何で病院にいるんだ?」

「それでは私が引きこもりみたいじゃないか。」

「実際そうだろ。」

「うるさい黙れ生きたまま解剖するぞ!!」

「やれるもんならな!!」

「ぐっ……」

勿論蓮太郎の体にメスは入らないし高水圧のウォーターカッターだつてシャワー程度にしかないだろう。

「つてキノコ!あれどうなつたんだ!？」

「里見くんの胃の中でさつき解毒薬を注入したのよ。」

「なんだ、ならよかつ……」

「れ〜んたろ〜!!」

突如蓮太郎に真横から突進し蓮太郎と共に病院の外にすつ飛んで行く赤い影。

「あ、延珠ちゃんも元に戻つたのね。」

「毒キノコを三個も食つたせいで胃がさらに悪くなつたがな。」

「……ほんとごめん、延珠ちゃん。」

「彼女ももう三回も吐血して胃潰瘍になつてここに運ばれているんだ。いい加減休ませてやれ……」

「でも……あの子、どれだけ里見くと離そうとしても親鳥についてく雛みたいに里見くんの後ろをついていくのよ……」

「……せめてこの先幸せになつてほしいな……」

「健気過ぎて泣けてくるわ……」

「いやほんともう……彼がロリコンにしてもいいから彼女を幸せにしてやってくれ。じゃないと報われん……」

「分かってるわよ……」

木更よりも胃が悪化してる延珠に二人とも涙を流す。

病院の外でロープを引きちぎった蓮太郎と戯れている延珠を見て木更と董は再び涙を流した。

彼女がやさぐれてしまう日も近いかもしれない。

シックスティーンパンチ

「え、今日からお前らの教師を週末にやることになった里見蓮太郎だ。まずはこれを読め!!」

外周区の青空教室。そこで蓮太郎は教師をやることになった。

この青空教室には延珠が所属し、それをきっかけにティナと夏世も通っている。

何故教師をやることになったかと言うと、この青空教室を運営している松崎が蓮太郎と木更に直接頼んできたのだ。蓮太郎は松崎には延珠を一時的に保護してもらった恩もあるのです承。木更も溜め息つきながら了承した。

そして今日はその初日である。蓮太郎は挨拶がわりにと黒板に漢字を書いた。

その漢字は?。

「これ読めるやついるか!」

シーンとする青空教室。

そして十秒後。

「俺も読めんツツツ!!」

ズコーッ!とギャグ漫画の如く転ぶ生徒達。それに反応して寝落ちしてたティナが

よだれを垂らしながら顔を上げた。

「……あ、たいと、ですね。」

「え、マジで？」

よだれを袖でゴシゴシと拭いて答えたティナ。蓮太郎がすぐにスマートフォンの手元を覗き込んで、測変換でたいとと打って変換する。すると発見した。

「参りました。」

「せんせーかっこわる〜」

「黙らっしゃい!!」

夏世が何故知っているのか聞くと、ここに来る前に言語と一緒に漢字もある程度勉強したらしい。ある程度で済むような事ではないと思うが。

「で、一緒に先生をやる天童木更先生だ。」

「えっ、この空気で自己紹介？」

まさかの投げっぱなしにされて困惑する木更。

「え、えっと……天童木更です。これからよろしくね。」

『……………』

「木更さん……もつとハジケろよ……」

「うっさいわよこの阿呆がアアアアッ!!」

木更が蓮太郎の後ろに回り込み、蓮太郎の腰に手を回してそのままバックドロップ。ズガツ!!と聞くだけで痛い音をならして蓮太郎の頭が地面に突き刺さる。

「……はっ!?!」

やつちまつたと思いつながらバックドロップの体勢で、子供達に目を向ける。

子供達は目をキラキラさせていた。どうやら、こういう普通の人がやつたら大怪我間違ったの事は子供達は大好きなようだ。

「え、えつと……普段はこんな事しないのよ!?!」

すぐに立ち上がって弁明する。蓮太郎は犬神家している。

「いや、木更はいつもあんな感じだぞ。」

「延珠ちゃん!?!お願いだから私のイメージを最悪にするのはやめて!!」

頭を抱えて悶える木更。それを見て笑う子供達。蓮太郎はまだ犬神家。

「よつと。まあ、自己紹介も終わった事だしまずは世界史の授業だな。」

ズボツと頭を地面から引っこ抜いて逆立ちの状態から腕の力だけで飛んで体勢を元に戻す。

『おお〜』

呪われた子供たちでもやれるかと言われれば微妙な事を平然とやってのけた蓮太郎に小さな歓声。

「おっと、その前に恒例の質問タイムだ。質問あるやついるか?」

『はいはいはくい!!』

子供たちの手が大量に上がる。

「ならそつちから。順番に答えてやる。」

「せんせーは延珠ちゃんと同棲してらって本当ですか!？」

「本当だぞ!」

「ティナと夏世も含めてただの居候だ。はい次。」

「せんせーの事は里見先生か蓮太郎先生のどつちで呼べばいいですか!？」

「好きなように呼べ。」

「変態!」

「ロリコン!」

「不幸面!」

「虫オタク!」

「KY!」

「人間災害!」

「今言つた奴ら表でろ。ガチンコの喧嘩しようぜ。つてなわけで次。」

「せんせーと木更先生は付き合ってるんですか!？」

「木更さん、答えを。」

「つつつ、付き合っていないわよ!!」

「だそうです。マジへこむ。つてな訳で次。」

「なんでへこむのよ!!」

そんな感じでうだうだとハイスピードに出される質問に答えていく。

「そんなじゃ、質問終わったところで世界史……と、言うか東京エリアについての勉強だ。知ってること知らないことあるだろうが黙って聞けよ」

『は〜い。』

「えつとまず、このエリアは聖天子様が国家元首になって色々な事してるってのは知ってるな?」

「せんせー、聖天子様ってどういう人なんですか?」

「あ、見たこと無いのか……えつと、聖天子様はあの人だ。」

蓮太郎が周りを見渡して蓮太郎は青空教室の横でリムジンを止めてこちらを見ている聖天子を見つけた。後ろで木更と松崎が呆然としている。しばらくして、

「……つてなんでいるんだ!!」

蓮太郎が叫んだ。そりゃあ、国家元首が外周区にいたら誰だって驚く。

「授業は楽しいですか? みなさん。」

聖天子の微笑みながらの言葉に延珠、夏世、寝落ちしたティナを除く全員が無言で首を縦に振る。

「里見さん、天童社長。少しお話が。」

「待ってください！確かに里見くんは私とティナちゃんとおあなたの胃を壊したり延珠ちゃんに血を吐かせたりする程の被害を出してますがなにも檻の中にブチ込むのは!!」

「ち、違います。その件は別件で憂さ晴らげふんげふん……何とかしますので。」

「おい今憂さ晴らしつつたぞこの人。外見真っ白なのに中身真っ黒だよおい。」

「いいから行くわよ里見くん！」

「つてな訳で一時間目は自習だ。しっかり勉強しろよ〜」

耳を引っ張られて引きずられていく蓮太郎を見ながら、生徒達はポカンとする他なかつた。

ティナはやはり夜行性の癖が抜けないよう最後まで寝落ちしていた。

「いい加減起きてください。」

だが、夏世がティナを往復ビンタした事でティナの目は覚めるのであった。

「で、なんで俺達を連れ出した？また何か事件か？」

「はい。また何かの事件です。」

「最近よく起こるわね……で、何が起きたんですか？聖天子様。」

「はい。実は、先日、32号モノリスにアルデバランと思われるガストレアが接触後取り付き、バラニウム侵食液を注入し去っていきました。」

『!?!』

あまりの事に蓮太郎ですら驚く。

ガストレア、アルデバラン。それは、現序列一位の正体不明のイニシエーターにより駆逐されたゾディアックの一体、タウルの右腕として存在していたステージIVガストレアの一体だ。

蓮太郎が数ヶ月前倒したステージIVのガストレアとの戦闘能力の差は分からないが、蓮太郎を抜いた民警が戦えば、かなりの民警が犠牲となるだろう。

「六日後、モノリスは崩壊し、大絶滅を巻き起こすでしょう。」

大絶滅とは、モノリスが破壊された事により起こるとされるガストレアの侵略兼蹂躞だ。日本国外でも大絶滅は何度か起き、大絶滅が起こる度にそのエリアに住む人々は死んでいる。

「……それで、仕事は俺がアルデバランの暗殺をする事か？」

今回ばかりはふざけていられない。もし、大絶滅が起こったのなら、蓮太郎一人では止めることはできない。少数を救えても、大多数を救えない。蓮太郎が守りながら他のエリアに共に避難できるのは多くても五十人程だろう。最悪、東京エリアを必殺『マジシリーズ』、マジパンチで消滅させなくてはならなくなるかもしれない。

「いいえ、今回の件は広く伝わり過ぎました。前回のスコープオンの時はまだスコープオン出現からあまり時間が経ってなかったため、そして里見さんが迅速に消滅させてくれたおかげ、さらに天の梯子があったのもあり里見さんの事を秘匿できました。しかし、今回の件は聖居全体、そして他エリアにも広まっています。ここで里見さんが動いてしまうとあなたの身の回りが危険になります。」

「俺の身の回りが危険になる?」

「あなたはあのアルデバランを単独で、しかもワンパンで消滅させるプロモーターを他エリアが黙ってこの東京エリアに置いておくと思いますか? 答えは否です。どのエリアはどんな大金を出してもあなたを自分のエリアに引き込もうとします。ですが、あなたはお金では動きませんよね?」

「他エリアに移住する気はサラサラないからな。」

「と、なると発生するのは脅迫です。あなたがアルデバランに対して何の対策もせず、何かやらかした際は藍原さん、天童社長、千寿さん、ティナさんが他エリアに誘拐され、

人質にされるというのが大いに予想されます。」

現に齊武も蓮太郎の事を大阪エリアに引き込もうとした。だが、彼は蓮太郎がスコーピオンを殲滅したとは知らなかった。だが、もし彼が単独でスコーピオンを撃破したことを知ったのなら。

序列一位と序列二位のゾディアックを殲滅した経歴のある民警は大抵が素性不明。故に、素性がハッキリとした蓮太郎には様々なアプローチがかかる事だろう。今回の事は聖天子が蓮太郎とその周りの人の事を思つて言つたことだった。

「……そうなるとそのエリアを消滅させかねえな、俺……」

「し、消滅……え、えつと……そんな事件を防ぐため、今回里見さんにはあなたの力を知ってもらつてもいい方とアジュバンドを結成してもらい、アルデバラン殲滅作戦に参加してもらい、最初のコンタクトで素早くアルデバランを殲滅してもらいます。あくまでも、他の民警が他のガストレアと交戦中、目立たぬように殲滅してもらふことになりませう。」

消滅という物騒な言葉に若干引く聖天子。

そして聖天子からの依頼の内容は大多数の民警の中で目立たぬよう行動し、アジュバンドのみにしか見られずにアルデバランを己の拳で殲滅しろという事だった。

「今回の作戦には東京エリアの半分以上の民警に参戦してもらいます。」

「……俺がアルデバランを殲滅するのが遅れたらその分民警が死ぬのか。それに、そんな大勢の中スニークで倒すのか……全力の指弾で脳ミソを消し飛ばせば……」

「手段は問いません。ですが、もし他エリアの重鎮に見られた場合は……」

「そんなヘマはしない。任せろ、聖天子様。俺は例え敵が大量のガストレアだつて負けない。」

「こちらからも情報規制は最大限張らせていただきます。もし、里見さんが全力を出してもいい時になったらこちらからお知らせします。その時は……」

「ワンパンで全て消し飛ばす。」

「はい。期待してますよ、里見さん。」

ふふふ、はははと笑い合う聖天子と蓮太郎。木更は胃が痛まなくてもいいのかとホツとした。

だが、何故だろう。蓮太郎が何かやらかしそうと思うのは。

「では、私はこれで。アジユバンドの件は明日には公表しますので。」

「ま、待つてください。まさか、モノリスの件を公表する気ですか?」

「でなければ今回のアルデバラン殲滅作戦は機能しません。民警だけに知らせたところどこからか情報が漏れるのは確実ですから。市民の方々に不安がられるのは辛いです……ですけど、里見さんがいます。里見さんは絶対にアルデバランを殲滅し、東京

エリアを救ってくれます。だから、私は私に出来ることを精一杯します。」
「……そうですね。」

蓮太郎ならやってくれる。それは、聖天子と木更の心の中では絶対に信用してる事だった。

「代替モノリスの建造まで崩壊から三日かかります。そして、襲ってくるガストレアは二千体。その間に民警が全滅しなければ、私達の勝利です。」

「二千体か。俺を殺したければ世界中のガストレア持つてこいつてんだ。」

「あんた、多分それでも死ねないわよ……ってか、里見くんがガストレアになったらそれは世界の終わりだから気をつけなさい。ホントマジで。」

「でも、里見さんは体内にガストレアの因子に注入されても生きてそうですよね。」

「確かに!」

「なあ、あんたら。俺、人間だからな。あんたらと同じ種族だからな。」

『えっ……?』

「よおし、喧嘩しようぜ? 勿論素手で。」

「殴ったら訴えて牢屋行きよ。」

「私に手を出したら地下送り千五十年ですよ。」

「ちくしょう!!これが男と女と権力の差ってやつかよ!!ちくしょう!!」

その日はしばらく、二人の少女の笑い声と一人の青年の地面を殴ってクレーターを作る音と悲痛な叫びが響いた。

セブンティーンパンチ

『あなたのハートにてんちゅーてんちゅー♡』

帰宅後。蓮太郎は目の前の光景に呆れていた。

帰宅後すぐに玄関で延珠とティナが天誅ガールズのコスプレして延珠が天誅レッド、ティナが天誅ピンクの武器を突きつけてきた。

「命タマぶちまけたるか。」

そして夏世が天誅ブラックのコスプレをして天誅ブラックの武器である銃を忍者の如く天井からぶら下がりながら構えていた。ちなみに、スカートはワイヤーで固定しているのでめくれる事はない。

「はいはい。」

夏世の額にコツンと拳骨をいれて延珠とティナの頭をわっしやわしやと撫でてからちやぶ台を取り出して座る。

ロリコンなら大歓喜の光景を蓮太郎はさらりとスルー。

「なにか反応してくださいよ……って、ヤバっ、体勢固定用ワイヤー引つかかって……ちよっ、痛い痛い痛い!! 絡まった絡まった!! 乙女の柔肌に傷がががが!」

『わーわーわー!?!』

ぶら下がる際に体に巻き付けたワイヤーが体に絡まり結構危険な状態になる夏世。蓮太郎は思わずため息をつく。

これで東京エリア壊滅寸前と言うのだから呆れたものだ。

「……まっ、壊滅なんてさせないけどな。」

ワイヤーを断ち切ろうと対物ライフルを取り出したティナを見て慌てて腰を上げる蓮太郎だった。

「さて、夕飯だが今日はティナが作るんだったか?」

「はい。もう下準備はできてるので暫く待っててくださいね。」

未だコスプレ衣装を脱がずにいる延珠、ティナ、夏世（体の至る所に赤いワイヤーの跡がある。）にもう何も言わずに話を進める。

まだ今回の件については言っていない。飯時に言ったらどうなるか分かったものではない。

ちなみに、現在の里見家で本格的な料理が出来るのは蓮太郎のみだ。延珠は独特のア

レンジ（笑）をするせいで飯マズ、夏世は作れるものの味はなんとか食える程度。そしてティナは今回が初だ。

それから暫く。ティナが香ばしい匂いにする物が乗った皿を乗ってきた。

「どうぞで。」

コトン。と置かれた皿の上にはマルゲリータピザが乗っていた。さらに持ってきた皿にはまた違うピザが置いてあった。

『おお〜』

「やつと家にもまともな料理ができるやつが……」

ほっと一息つく蓮太郎。ティナまで飯マズだったら里見家の料理担当が蓮太郎で固定される所だった。

「さて、手を合わせて。」

『いただきます!!』

蓮太郎の作るピザよりも本格的な作りになっているピザを蓮太郎がイニシエーターズに分だけ少し大きめにしてカットする。すぐに延珠と夏世の手が大きめのピザをとっていく。

「チーズがトロットロだ！」

「お店開けるのでは？」

「うん、上手いな。」

「よかったです。私、ピザしか作れないもので……お口に合って良かったです。」

え？と声を漏らすのは夏世と蓮太郎。延珠は気にせずにはくはくと。

「え？お前ピザしか作れないのか？」

「はい。お恥ずかしながら。」

「逆に凄いですね……」

結果、ティナには蓮太郎が料理を教えることになり、ピザマシンであるティナは他のレパートリーが増えるまで里見家のピザ担当となった。

そして何枚ものピザを平らげたその数分後、蓮太郎は改めてガストレア二千体の方ストレアが六日後、進行して行くことを伝えた。ちなみに、最後に一枚ティナが明日の蓮太郎の昼食用に一枚作った。

「ふーん。」

「大変ですね〜」

「そうですね〜」

「おい、なんでそんなにどうでもいい事のように言ってるんだよ。」

『だってどうせ蓮太郎（里見さん）が単体で全滅させてくれるし（くれるでしょうし）。』

「いや、今回俺は首輪付きだ。俺がやれるのはアルデバランの暗殺だけだ。二千体の相

手は他の民警と力を合わせて目立たぬようやることになっている。」

「まあ、それでも妾達なら負ける事はないな！」

「前衛一人後衛二人ですからね。どんな事が起きてもカバーができます。」

「それなら何とかありますね。」

「ん？前衛一人？」

「蓮太郎は音速で戦地を走りながら戦うんだろ？だから実質妾とテイナと夏世はスリーマンセルで……」

「だから目立った事できねえつつつてんだろ!!」

あはははと笑うイニシエーターズ。まあ、これなら大丈夫か。と笑いながら三人の頭をワシヤワシヤと撫でるのだった。

その日の夜。蓮太郎は唐突に目が覚めた。隣では延珠が、そして蓮太郎の腹を枕にしている夏世が寝ている。だが、いつもなら蓮太郎と共に寝ているテイナがいない。窓の方を見れば、パジャマ姿のテイナが何故かライターをカチツカチツと火をつけては消しながら外を見ていた。

「……髪、燃えても知らないぞ。」

「あ、起きちゃいました？」

蓮太郎が起きたのに気が付いたテイナがライターを弄る手を止める。

「お前のせいじゃねえよ。」

蓮太郎は夏世の頭をそつと持ちあげ、動かさないよう立ち上がってから下に枕を敷き、頭を衝撃を与えないよう落とす。

「眠れないのか？」

「はい。元々夜行性なので……」

ティナはフクロウの因子を持つイニシエーター。羽根は無いが、フクロウの特性である夜目と夜行性の特性を大きく受けている。

「ですけど、今度からは夜に睡眠薬を飲んで、朝は起きるサイクルにしようと思ってます。」

「体壊さない程度にしろよ？」

「はい。」

蓮太郎はティナの手からライターを危険だと言って取り上げる。

「……………なあ、ティナ。お前にはまだ俺達の事、話してなかったよな。」

「何かあるのですか？」

「……………そうさな。俺達の生活は今はこのライターの火のような感じだ。」

蓮太郎はライターの火を灯す。ポウと真つ暗な部屋を小さく照らすそれはユラユラと揺れている。

「アルデバランですか？」

「違う………なあ、ティナ。お前は木更さんをどう思う？」

「優しくていい方だと。」

「そうか………なら、木更さんに過去のことを聞くな。聞いたら……」

蓮太郎はライター火に息を吹きかけ、消した。ティナはそれがどういう事なのか、なんとなく察する。

「何故、ですか？」

「………実はな、木更さんは目の前でガストレアに両親を食い殺されてるんだ………当時の俺が助ける前にな。あの時、俺の力が制御できてたら………っていう後悔は今でも続いてるよ。」

蓮太郎はタンスの上にライターを置き、ティナの隣に座る。

風が吹き、窓と髪の毛を揺らす。

「もしその時、俺に力が無かったら、俺も木更さんも食い殺されてたかもな。木更さんが生き残っても、トラウマで体のどこかに異常が出てたかもな。」

まあ、今こうして生きてるんだからもうそんなことは万一にないと付け足す。

「それで、俺達が天童民間警備会社を始めた理由、わかるか？」

ティナはゆっくりと首を横に振る。

「復讐だよ。木更さんのこの世のガストレア全てを滅するという目的……俺はそのための手段として連れていかれた。俺も木更さんについていこうと思った。そして、俺が民警になって延珠を預かった。」

イビキをかいて寝ているとても淑女とは言えない彼女に目をやる。

「最初、延珠は俺を見て何したと思う？殺そうとして俺に飛びかかってきたんだぜ？」
笑いながら言う蓮太郎だが、それが蓮太郎じゃなかったら確実にそのプロモーターの首は消し飛んで頭と胴体が亡き別れただろう。

「そんな時に思わずアツパー入れちまってな……あの時は殺つちまったかと思った……」
えっと声を出して延珠の方を見るティナ。まさか、同じくアツパーを受けた身であり、さらに条件反射で出たアツパーをくらって生きているとは。と延珠の頑丈さをさらに評価する。胃の頑丈さはもうゼロに等しいが。

「それから延珠が俺に惚れたとか言ってヒナのように後ろにくつついてきてな……」
それ、衝撃で頭が可笑しくなったんじゃないや……と口に出しそうになったが何とか抑える。

ちなみに、延珠は頭は可笑しくなってます。ただ純粹に自分より強い蓮太郎に惚れただけです。そのせいで胃に深刻なダメージが入ってるのです。

「……延珠の目的は両親を探すこと。木更さんは全ての天童を殺す事。」

ティナは思わず身震いした。あの人殺しとは無縁にしか思えない木更の目的が、同じ家系の者を全員殺す事とは。

彼女のような者が本気を出せばそれこそ単体で序列五十位。それ以上を狙えるだろう。その力をつけた理由は。

「そう、全ての天童を殺すため。ただ、それだけに彼女は力をつけたんだ。」

「……なら、蓮太郎さんは？」

「……そうだな。俺の目的は、こんな腐った世の中じゃなくて、ガストレア戦争が起こる前のような世界で、俺達全員が笑顔で暮らす事だ。」

「……出来るんですか？」

「いつかな。大丈夫だ。お前たちは、死なせない。なんてったって俺がいるからな。」

ティナの頭を少しだけ乱暴に撫でる。だが、ティナも満更ではない顔をしている。

「……でもな、もし木更さんと戦うことになっちまった時……この生活は崩れる。それだけは、覚えておいてくれ。」

そんな事、無いのが一番いいのだが。

「……さて、寝るか。お前も寝ろよ、夏世。」

「え？」

「……折角空気読んで寝たふりしてたのに何で気付くんですかね。」

夏世がどうやら寝たふりをしてたようで、起き上がった。

「里見さんが私の頭を動かした時から、起きてましたよ。」

「そっか。すまんな。」

「構いません。」

ティナはいつもならこんなやり取りしたら確実に代わりに蓮太郎に何かしろと言ってくるはずだが。と考えた。

「起きたばかりであのテンションは流石に無理ですよ。最近は起きてから少し経ったらあんな感じですけどね。里見さんの胃痛から逃れるために無理してたらあれが通常になっちゃっただけです。」

人の性格すら捻じ曲げる蓮太郎の与えるストレスとは一体……と思ったが、よくよく考えれば自分も最近では炎を見てるとヤケに落ち着いたり炎を投げて何かを燃やしたいと思う時があるのを思い出した。

放火癖ついちゃってる。と思わず両手で顔を隠して俯いた。

「はいはい。そんじゃ、寝るぞ。」

蓮太郎は夏世から枕をひったくり、延珠の隣で寝る。夏世は延珠の隣に行つて延珠の枕に頭を乗せて寝る。すぐに寝息は聞こえた。

「……腕枕、させてもらつてもいいですか？」

「ん？別にいいが。」

ティナは了承を聞く前に蓮太郎の手を動かして枕にできるようにしてそこに頭を乗せる。

「……蓮太郎さん、これから、お兄さんって呼んでもいいですか？」

「唐突だな……ま、いいぞ。好きに呼べ。」

「なら、そうします。おやすみなさい、お兄さん。」

「ん。おやすみ、ティナ。」

眠気はすぐにやってきて、蓮太郎の意識は段々と沈んでいった。

数時間後。蓮太郎は鳥の囀りと共に目を覚ました。カーテンを閉めなかった窓からの光がヤケに眩しい。

「あ、やっと起きた？」

が、すぐに聞こえたその声に蓮太郎の意識は無理矢理覚醒させられた。声は木更のもの。最近をよく家に不法侵入してくるため、もう慣れている。が、何かくぐもった感じだ。

体を起き上げて見てみれば、木更がピザ片手に新聞読んでいた。テレビもついている。

「……それ、今日の俺の昼食。」

「別にいいじゃない。ケチ臭いわね。」

もっちもちとピザを頬張る木更に何も言う気が起きず、隣で寝ている延珠と夏世の体を揺する。

「なら食費払えよ。ほら、起きろ。」

揺すつてから暫く、大きなあくびをしながら起きる延珠と半目で上半身だけ起こす夏世。

「あら？ テイナちゃんは？」

「そーいやあ……」

その時、もぞもぞと蓮太郎の毛布で隠れている下半身……正確には股間あたりがモゾと動いた。

えつと声を出す木更。サーッと顔色が真っ青になる蓮太郎。

そして、毛布が持ち上がり、そこからテイナが出てきた。何故かズボンを履いていない。

「ふわあ……おはようございます、お兄さん。」

ズボン履いていない。パジャマも結構はだけてる、髪ボサボサ、何故か股間あたりで寝ていた。判決、

『ギルティ。』

「ご、誤解だア!？」

「ティナに先越された……ゴフツ。」

「うわああ!?! 延珠が吐血したア!？」

「里見くん……警察呼ぶから……」

「これは弁明の余地無し。ギルティです。」

「はいティナ! 誤解を何とかしてくれ!」

「……? 私は昨日お兄さんと寝ただけですよ?」

「もうギルティよ! 寝た(意味深)でしょ!？」

「違うっ!! って寝るなティナ!! 頼むからこの誤解を解いてくれ!!」

「zzzz……」

「と、言うか延珠さんがそろそろ死にそうなんですけど。枕が真っ赤な血かいしてるんですけど。」

「さあ木更さん! 早く救急車呼べ! じやないと延珠の未来が鮮血の結末になるぞ!」

「うっさい! あなたはとつとと豚箱にぶち込まれなさい! あ、もしもし、警察ですか?」

「だから誤解だつて……」

『続いてのニュースです。先日、日本純血会東京エリア支部長が呪われた子供たちと思

われる子供たちに殺害されました。これについて……』

その場の全員が手と口を止めてテレビを見た。戸籍剥奪法。そんな法案が既にガス・トレア新法の代わりに衆院を通過したらしい。その法案は可決されれば呪われた子供たち……延珠、テイナ、夏世の人権が奪われ、政府からの最低限の援助すら受けられなくなるという最悪の法案だった。

「……里見くん、マズイわよこれ。」

電話はかけてなかったらしく、ボタンも何も操作せずに木更が携帯電話をしまう。

「ああ……可決されればかなり、な……」

こればかりは、蓮太郎でもどうする事ができない。

なんとかしてくれ。それは、聖天子に届かないにしろ、蓮太郎と木更は聖天子に祈った。

数日後。この日の蓮太郎はテイナと放課後に出かける約束をしている。テイナが蓮太郎と共に出かけたいというお願いと蓮太郎がアジユバンドを組めるといいなと思っている民警に交渉に行くためだ。

一応、前回の聖天子からの依頼で得た報酬（半分以上は木更の食費で既に吹っ飛んで

いる)を木更から少しテイナのためにもらっているためある程度の買い物ならする事ができる。ちなみに、延珠は即日入院の今日退院だ。

あの法案はまだ法案化、施行されてはない。街中の電光掲示板に見えるそれを睨みながら、隣にいるちよつとおしやれしたテイナと共に歩く。

勾田駅から電車に乗り、目的地を目指す。電車の中には『赤目の凶行！彼女たちは突如街中でガストレア化する可能性を秘めている!』という中吊り広告が吊るされていた。目に見えて不機嫌になった蓮太郎を心配するテイナ。そんなテイナを見て蓮太郎は「大丈夫だ。」と一言かけながら頭を撫でる。

暫くして目的の駅に着き、そこで電車から降りる。

「お兄さん、アジユバンドを組む予定のペアはどこにいるんですか?」

「ん? ああ、なんかよくわかんねえから住所を頼りに行く感じだな。」

何度か仕事先で会ったことがある程度のペアなのだが、そのペアは二人とも序列以上の力を持っていると蓮太郎は思っている。それに、予定ではなく組めたらいいなと思っ
ているペアだ。

「まあ、今回はそれ以外にお前に東京エリアを案内しようと思つてな。こんな時じゃないと延珠と夏世がうつせえからな。」

さて、適当に買い物にでも行くか?と言うと、テイナは笑顔で蓮太郎の手に自分の手

を絡み付かせた。「お兄さんとデート……えへへ。」と嬉しそうなティナを見て微笑ましく思いながらも歩行速度をティナにあわせて歩く。

途中見つけたデパートで服を買ったり、美味しいもの食べたりゲームセンターではしゃいだりと金がそれなりにあるため多少贅沢な事ができた。

「さて、どうする？もう行くか？」

「はい。私はもう満足ですよ。」

笑顔のティナが満足だと言ったため、蓮太郎は本来の目的地である片桐民間警備会社へと歩を進めるのであった。

エイティーンパンチ

市街中心部の大きな五叉路。蓮太郎とティナがそこに差し掛かった時、不意に歌声が聞こえてきた。ソプラノの声だったため、女性……それも子供の物ではないかと予測ができた。歌われているのは聖歌だった。

首を音の方に向ければそれは上方の歩道橋からの声だとわかった。

「……行ってみるか？」

「行ってみましょうか。」

何となく、何となくだが気になったので歩道橋の階段を上った。中程のゴザが敷かれているのが目に見え、そこに目を包帯で隠したティナと同年くらいの女の子が見れた。

ソプラノの声で歌いながら、何かの空の缶を持って物乞いをしている。

缶には『私は外周区の『呪われた子供たち』です。妹に食べさせるためにお金が必要です。どうかお恵みください。』と書かれていた。

ティナの方に目を向ければ、ティナは少し厳しい目をしていた。

「……なあ、お前。その目はどうしたんだ？」

少女の目の前に立ち、しゃがんで目線を合わせながら話しかける。

「これ、ですか？これは鉛を流し込んで目を潰してるんです。」

頭を過ぎったのは貧困ビジネスという言葉。目を潰したり手足を切って他人の同情を誘い金を得るといふもの。まさか東京エリアでそんな外道な事が行われてるとは信じたくなかった。だが、少女はそんな蓮太郎の気持ちを感じたのか、首を横に振った。

「これは自分でやってるんです。これ以外、妹を食べさせていく方法がないので。それに、私達のお母さんはこの赤い目が嫌いでしたから。」

ガストレアショック。簡単に言えばガストレア特有の赤い目がトリガーのPTSDだ。ガストレア大戦後に最も蔓延した社会病である。

おそらく、彼女の母もそれにかかっているのだろう。

「……そう、か。」

「……なんであなたは笑ってられるんですか？」

ティナの問い。少女は先程からずっと微笑んだままだった。

「これ以外、どんな表情をしたらいいか分からないんです。」

少女はそう言いながらティナに手を伸ばした。一瞬ビクツとしたティナだが、すぐに敵意はないと判断したため、抵抗はしない。

顔をペタペタと触って首元、鎖骨あたりも触る。

「あなたも呪われた子供たちなの？」

「つ……なんで、わかったんですか？」

後ろを早足で過ぎ去る人達はティナが呪われた子供たちだと言うことは記憶にとどめてないらしい。それはそれで好都合だが。

ティナの問いに深く微笑んで返す少女。

「綺麗な顔してるね。男の子が放っておかないんじゃない？」

ティナは横目でチラッと蓮太郎を見た。が、すぐに「そんな事ありませんよ。」と返した。

「そういえば、最近何かあったんですか？いきなり罵倒されたり殴られる事が多くなりました。」

露出してる肌に傷やアザはない。だが、服の下はアザがあるのだろう。

蓮太郎がここ数日の事を話そうとした時、後ろを通った若者が少女の足元に置いてある缶にプルタブを投げ入れようとした。が、蓮太郎はそれが缶に入る前に殴ってこの世の塵とさせた。

そして、蓮太郎は話した。今、世間では呪われた子供たちの扱いがどういう風になっていっているのかを。

「そうですか……そんなことが……」

少女は神妙な様子で頷いた。

「騒動の収まるまでの暫くの間は外周区かは出ない方がいい。こっちは危険だ。」
「でも……」

考えたのは金のことだろう。蓮太郎は財布から大きめの札を取り出し、手に握らせる。贅沢さえしなければ二ヶ月は食べていけそうな額だった。これで再び財布が冬を迎えたが知った事じゃない。

「約束してくれ。頼む。」

少女は札を擦ったり匂いを嗅いだりすると、驚きに染まった表情をした。

暫くはしどろもどろしてたが、「足りるか？」と蓮太郎が聞くと、小さく首を横に振って「ありがたいございます。」と言った。

「そんじや、俺達は行く場所があるから行かせてもらう。暫くは気を付けろよ。」

「あ、あの、お礼は……」

「いいっていいって。」

蓮太郎は彼女に背を向け手を振りながら歩き出した。ティナもそれについていく。

少女は暫く呆然とした後、再び微笑み、歌い出した。

曲名は、『アメイジング・グレイス』。

「着いたぞ、ティナ。ここだ。」

「……ホントにここなんですか？」

重機を打ち込む工事音が響くなかたどり着いたのは木造の家の前。ポストの上に着いて片桐民間警備会社と判読できる看板がある。ティナの問いには黙って頷いた。自信がなくなってきた。

呼び鈴すら見当たらないのでドアでも叩くかと思いい手を握った所でティナがその手を両手で握って動けないようにした。トドメはいけなないと。

だが、不意に上から声がかけられた。

「あつ、変態の里見蓮太郎!!」

声をかけてきたのは金髪の少女だった。

「よう、スパイダーガール。」

「何処そのアメコミヒーローみたいな言い方すんなロリコン!こっちは来んなロリコン!」

彼女はこの片桐民間警備会社を経営している男の妹、片桐弓月だ。

「ひつでえ言われよう。今回は仕事持ってきたんだが。」

「変態に恵んでもらう仕事なんてないわよ!帰れ!ファックユー!」

蓮太郎は口の悪い彼女に苦笑いしながらも壁の一部を指さした。何かベニヤ板のよ
うなもので穴を塞いでるようだった。

「話だけでも聞いたらいんじゃないか？」

うぐつ！と声を漏らす弓月。暫くしてから弓月が降りてチョーカーから鍵を取り出
し扉の鍵を開け「兄貴、お客さん」と言いながら入っていった。その後を蓮太郎と
ティナがついていく。

「兄貴、起きて。」

「なんだよミススイート……」

机に足をかけて寝ていたその人物は弓月の声で欠伸をしながら起きた。

「よう。」

「うわ……」

男はそう声を漏らすとアイマスク代わりに置いておかれたグラビア誌を再び顔に置
いて寝だした。

「依頼持ってきた奴の前で寝るとはいい度胸だな。」

「うるせえんだよ。起きたら目の前に人外がいたら人生諦めんだろうが。」

「諦めんよ。」

目の前の男、弓月の兄でありこの会社の経営者、片桐玉樹はグラビア誌を放り投げて

から起き上がった。

服装のセンスは悪い。

「繁盛してるみたいだな。」

「皮肉はよせよボーイ。久しぶりだな。何のようだ？」

改めてドカッと椅子に座り直した玉樹は蓮太郎と視線を合わせた。

「実はだな……」

「当てるやろうか？モノリスが崩壊東京エリアが壊滅するクソファツキンなシナリオが迫ってるから仕方なくアジユバンドを探している。どうだ？」

「見事だな。占い師にでも転職したらどうだ？」

「こんなイイ男が占い師なんて似合わねえよ。で、獲物はなんだ？」

「聞いて喜べ。二千体だ。しかもアルデバランのおまけ付き。」

「ヒュ、大特価だなオイ。そんなじゃ、他あたれや。出口はあつちだ。」

「残念だが帰んねえんだよなあ。」

「いいから帰れボーイ。俺に自殺願望はねえ。そんな作戦に参加するんならとつと飛行機の手ケット買って逃げたほうがマシだ。」

睨み合う蓮太郎と玉樹。確かに玉樹の言う事には一理ある。

ガストレア二千体との戦いなんてよく考えれば自殺と変わらない。

「つつーかよ、その依頼を達成したら何がどうなんだ？」

「序列の向上、金。」

「クソフアツキンだ。金とか序列とか、そういう問題じゃねえんだよ。」

「なら、俺の仲間のために戦ってくれ。俺にはやる事があるんだ。」

「やる事だア？」

「単独でのアルデバランの暗殺。」

その瞬間、玉樹が目を丸くする。目の前の男は一体何を言っているんだと。

「お、おいおい、アルデバランがどんなのか、知らねえ訳じゃないだろ？」

「ああ。」

「あのタウルスの右腕だったガストレアだぞ？その暗殺だ？しかも単独で？」

「普通なら無理だな。だが、俺なら出来る。なんとか理由をこじつけて単独行動をして

アルデバランを暗殺。それがプランだ。」

「……ぶつ飛んでんな。俺はそういう奴は嫌いじゃない。だが……」

玉樹は立ち上がり、蓮太郎の肩に手を置いた。

「俺は俺より弱い奴の下にはつかねえ。俺を引き込みたいんなら力づくで引き込みな。」

「そうかい。」

蓮太郎と玉樹は不気味な笑みを浮かべながら外へ出ていった。

「……あんた、苦勞してるんじゃない？」

「約二名胃がやられてる人と性格が変わった人が身近にいます。」

「うわあ……」

弓月は引き攣った笑みを浮かべ、ティナは半ば諦めたような笑みを浮かべて蓮太郎と玉樹の後ろをついていった。

結果、四人はそれぞれのペアと近くにある市民体育館を貸し切っておこなうことになった。そこにいた善良な市民は玉樹に追い出された。

出入り口にはギャラリイ達がワイワイがやがや。

玉樹はフィンガーグローブの上からチェーンの巻き付いたガントレットを装備、腰にはリボルバー。

「名乗るわよ！ 序列1850位、モデル・スパイダー、片桐弓月！」

「同じく片桐玉樹。」

「序列三百位、里見蓮太郎。」

「序列は剥奪中なので序列はありませんが、モデル・オウル、ティナ・スプラウト。」

「序列剥奪!？」

弓月が驚きの声を上げる。

元々民警は気性の荒い物が多いので、ある程度の問題なら序列剥奪されない。つまり、序列が剥奪されるということとはそれ相応の事をしたということ。

蛭子ペアもそうだ。彼等も色んな事をやってきたがために序列を剥奪された。つまり、彼ら並みとは言えないが、かなりの事をしなければ序列は剥奪されないと言うこと。「おいボーイ。お前のペアはあの活発なバニーガールじゃなかったか？即席ペアでどうにかなると思ってるのか？」

「居候と家主ナメんなよ？案外息合うんだぞ。特売とかタイムセールとかバーゲンとか……」

「止めろ、聞いてて悲しくなる。」

「あと、延珠は今日退院だ。」

「は？イニシエーターが入院なんて何したんだ？」

イニシエーターに関しては言わずがな。切り傷程度なら即完治し、肉が抉られたり骨が折れても数時間後には完治する。

つまり、イニシエーターが入院するということはそれなりの大怪我をしたことだが

……

「ストレス性胃痛をこじらせた胃潰瘍です。」

「……ボーイ、一体何を……」

「主に二次災害を引き起こすせいで延珠さんのストレスがマツハという訳です。」

「イニシエーターが胃潰瘍って聞いたことねえぞ……」

ドン引きの玉樹。そして同情の視線をティナに送る弓月。

「まあいい！かかってきな、ボー……」

「うえーい。」

ボーイ！と言おうとした瞬間、風が吹いた。イの発音をしようとした時には玉樹は重
力に逆らっていた。

そしてドゴオツ!!と炸裂音。

「……は？」

弓月が顔色を真っ青にして天井を見る。

天井には顔面を体育館の天井にめり込ませてプラプラしてる己の肉親。玉樹が居た
場所には拳を振り上げた状態の蓮太郎。

「さて、後は……」

「すみません調子に乗りました許してくださいおねがいします。」

弓月、全力で謝った。腰を45度に曲げて誠意を込めて謝った。

兄のような逆生首にはなりたくないし犬神家もしたくないし大の男を数十メートルはありそうな天井にめり込ませる程の拳を受けたくなんてない。

その前に力を開放したイニシエーターの目にも止まらぬ速さで動ける時点で既に勝てる要素を失っている。

顔を真っ青にしてガクガクしている弓月にティナはゆつくりと近付いて肩にポン。と手を置いた。

「……分かりますよ、その気持ち。」

「あんた……」

「あれをくろうとですね、鳥になれるんですよ。飛べますよ。でも、そんな体験嫌ですよ。ね？」

ついでに顎から嫌な音も鳴りますよ。とも付け加える。弓月は無言でティナに抱き着いた。

「……」組確保つと。」

「殺す気かボーイ。」

玉樹が顔を天井から引き抜いて降りてきた。どうやらあれをくらって無事らしい。

「生きてたか。」

「川の向こうで手を振ってるじいちゃんとかあちゃんが見えたわクソボーイ。」

訂正。全然無事ではなかった。渡ってはいけな川が見えていた。

「まあ、ワンパンで終わったのは悔しいが、約束だ。アジユバンドに加わってやる。」

「さんきゅ。」

「しかし、弓月も友達ができそうではよかった。」

「友達いないのか？」

「自分が呪われた子供たちだって事バレないようにしてるからな。人との付き合いも減っちまう。」

「ならティナが最初の友達か？」

「と、言うか被害者の会だぜ。」

玉樹はティナに抱き着いて声を殺して泣き、ティナに頭を撫でられて慰められている我が妹を見ながら苦笑いするのだった。

ちなみに、玉樹は帰宅後気を失いました。復帰までに三時間近く有りました。

ナインティーンパンチ

「本当に来てよかったのか？ ティナ。先生は例に漏れず超が付くほどの変人だぞ。しかも超の前に伝説だつてついていい。」

「伝説の超人つてどこのブ○リーですか……大丈夫です。いつかドクター室戸には会わなければいけないと思つてましたから。」

「本人がいいならいいけどさ……」

董の籠っている大学病院の前。蓮太郎とティナは出かけ帰りにここに来た。辺りはもう暗く、もうすぐ夜になるだろう。

不気味な大学病院の前でティナはポーカーフェイスを保っているが、小さな手が蓮太郎の袖を掴んでいる。

元暗殺者とはいえまだ子供だ。怖いものは怖いだろう。特に研究室の入り口手前になんて悪魔のミニユメントが置かれている。こんなものがある研究室なんてそこら辺のお化け屋敷よりもよっぽど怖いだろう。

大学病院の受け付けを顔パスし進み、悪魔のミニユメントの横を通つてそのまま研究室にそのまま入る。

「せんせー……って誰もいない?」

だが、もぬけの殻。基本的に董は研究室にいるのだが、何故かいない。

世間一般で言う引き籠りに彼女は当てはまるのだが、そんな人が部屋にいない。

天変地異が起こるのではないかと冗談混じりで思いながらも凶々しく部屋で待たせてもらうことにする。

遠慮なく椅子に座ろうと椅子を取り出した時、ティナのヒイツ!?という声が聞こえた。

「蓮太郎く〜ん……」

「きゃわわわわわわわわ!!?」

ジャングルに生息する鳥のような声を出しながらティナが肩にもたれかかった何かを振り払ってかなりの速さで蓮太郎に突っ込む。

ドスツ!と結構痛そうな音がしたが蓮太郎は特に苦もない表情でティナを抱き留める。ベちゃつとティナの肩にもたれかかったそれは倒れた。

「せんせー……何やってんだよ。」

「何か……食べ物……」

ティナの肩に死体のごとくもたれかかったのは董だった。

蓮太郎は溜め息をつきながらポケットを漁るが何も無い。が、ティナが片桐兄妹の事

務所に行く前に買ったポテトチップス（ピザ味）をそつと董の前に置いた。その瞬間、董がポテトチップスをひつたくるように取り、徐に袋を開けてガツガツと食べ始めた。余りの勢いにビクツと驚くティナ。

「……これが世界最高の頭脳の一人なんですか？」

「……残念な事にな。」

信じられない物を見る目で董を見るティナ。ついでに『これ』扱いた事はスルーだ。そして数分後。

「いやあ、食料が尽きてるのに気が付いたのがついこの間でね。君に買い物頼もうと思ったら携帯電話を無くしてることに気付いてね。危うく死にかけたよ。」

「木更さんみたいだな。」

「何を言うか。私は金だけはあるんだよ。外に出ないだけで。」

「ならばぶつ倒れる前に買い物行けつて。延珠と夏世の定期診察の時は出てきてるだろうが。」

「私は半日出るのに護摩を焚いて五体投地した後蓮華座の上で座禅くんだまま二十四時間コーランを読んでやつと出れるのだよ。」

「そこまでして外に出るのが嫌かよ。」

「嫌だね。あんな反吐の出るような匂いしかない世界は。」

董はふう。と一息つくくと、チラッとティナを見た。

「あーあ、やつちまったな。蓮太郎くん。これは長い間ぶち込まれるぞ。」

「攫つてねえ!」

「しかも金髪ロリときた。二人目だぞ。エロゲのやり過ぎだろ。」

「やつてねえわ!!」

あー疲れた。と蓮太郎が椅子に座ってコーヒーを口にする。

「初めまして、ドクター室戸。プロフェッサーから話は聞いてました。」

「ほう、じゃあ君がエインの所の。あいつは私に対して何か言つてたかい?」

「空前絶後の変態、と。」

「……今度あつた時にお前は空前絶後の堅物だと言つておいてくれ。」

「いつになるか分かりませんが言つておきます。」

「つつーことは先生とエイン・ランドは仲が悪かったのか?」

「いいや、仲が良かったさ。顔を合わせる度に拳銃で頭に綺麗な風穴をワンマガジン分開けてやりたいと思うくらいに。」

「あーもういい。大体わかった。」

蓮太郎は半ば諦めたかのような声を出して自分で買ったポテトチップス（ジンギスカン味）を口にする。

「さて、突然だがティナちゃん。私は君が好きだ。解剖室で愛し合わないかい？」
「斬新なナンパですね。解剖室は遠慮します。」

ティナが若干引きながらも返答する。そりや残念。と董が肩をすくめる。

「遠慮して正解だ。先生はネクロフィリアだからな。」
「えっ。」

ドン引きするティナ。

「その内死体調達のために人を殺しかねん。」

「なら君の困った顔が見たいから延珠ちゃんか木更辺りを……」

「それやったらこの大学病院消し飛ばすぞ。研究室ごと。」

「おいやめろ。」

その程度なら文字通り片手間に出来てしまうのが蓮太郎。

「ところでティナちゃん。君は蓮太郎くんにかイタズラはされなかつたかい？主に性的な。」

「されてません。お兄さんはそんな事する人じゃありません。」

少しムツとして言い返すティナ。

「おや、信じられないかい？でもね、彼はすれ違いざまに女兒の尻を撫でること数十回、小学校に潜入して女兒の検便や検尿を盗むこと数百回。毎年のようにバチカンがエク

ソシストを派遣しようか迷つてゐる程だよ。

今度和英辞典を開いて調べてみるといい。

津波TSUNAMIの横に里見SATOMIがある。意味は空前絶

後のロリ専用の変態つて意味だ。」

流石にイラツとして指弾でも飛ばそうかと思つたが、テイナをチラツとみると、顔を真つ青にして蓮太郎から少しずつ離れて行つてゐる。

「そ、そんな恐れ多い方だとは露知らず大変なご迷惑をば……」

「信じるなテイナ!!全部出鱈目だ!」

何故か敬語になつたテイナを説得する蓮太郎の横でゲラゲラ笑いこける董。

ほんつと趣味悪いなと内心毒づきながらもテイナを説得する。

ちなみに、ちゃんと蓮太郎には好きな人がいる。ついでにその人はロリではない。

「あく笑つた……あ、そうそう、蓮太郎くん。つい昨日、彰磨くんがここを訪ねてきたよ。」

「彰磨兄いが!?!」

「ああ。君目当てにここを訪れたらしいが、いないと分かつた途端に連れと一緒に出ていったよ。無口なところと人の話を聞かないところは変わつてなかつたよ。」

「……もしかして、アルデバランの事を知つて?」

「かもしれないね。」

蓮太郎と董が話で盛り上がっていると、ティナが頭にハテナを浮かべたままちよいちよいと蓮太郎の服の袖を引っ張る。

「ん？ああ、そうだった、ティナは知らなかったな。」

「彰磨と言うのは蓮太郎くんの兄貴分に当たる人で本名は薙沢彰磨。私が軽く手術を施した事もある。」

「え？」

「いやなに、昔の蓮太郎くんは力の制御が出来ず色々とやったからね。彰磨くんはたまにそれに巻き込まれて骨折とかしてきたからね。ちよつと骨を超バラニウムに入れ替えて……」

「ふあ!？」

「おかげで彰磨くんが病院に運び込まれる事は少なくなつたよ。半サイボーグになつてしまつたけど。」

驚愕の真実。彰磨は骨を超バラニウムに置き換えていた。何処ぞのアダマンチウムの骨格を持つヒーローみたいな事になっているのだろうかとティナは考えた。

だが、それでも病院に運び込まれるあたり蓮太郎がその頃どんな事をしてそれに彼は巻き込まれたのか、想像したくない。

多分、ティナでも数ヶ月の入院待つた無しの大怪我だったのだろう。

「それと、彼の天童流格闘術の腕は凄かった。何せ、初見でやられて蓮太郎くんがしゃっくりするほどだったからね。」

「えっ!?!」

「彼は内臓にダメージを与えて爆散させる……まあ、ぶっちゃけると北斗〇拳をマジでやれる男だ。」

蓮太郎にしゃっくりを起こさせるほどのダメージを与えるという最早人外の領域に片足を突っ込んだ人間と言う事実にはティナはさらに驚く。

「天童社長もそうでしたけど……お兄さんの周りって人外ばかり……」

「まあ、体の骨格をアダマン……じゃなかった。超バラニウムに置き換えて平然としていたからね。拒絶反応とか出て苦しいだろうなーとか思ってたら手術後一ヶ月後には元気に北〇神拳を使う彼がいたよ。」

「アダマンチウム!?!今アダマンチウムって言いかけましたよね!?!」

「ははは、何のことかな。私は決してそんな蓮太郎くんでは破壊できない金属なんて作ってないよ。」

「作ったんですね、作っちゃったんですね!そんなでもってそれを人の骨と入れ替えちゃったんですね!?!」

「まあ、そのお陰で彼は単体戦闘力で序列80位とかそこらまで上り詰めちゃったた

し。」

「なん……だと……?」

「え、何それ初耳なんだけど。」

「どうやら彼はマジの人外だったようだ。」

「今はペアを組んでやり直したから九百番台だけど、確実にそれ以上の強さはあるね、うん。」

ちなみに、序列百番から上は悪魔に魂を売り渡さないといけない領域とかゾーンに到達したイニシエーターがゴロゴロいるとかそんなレベルだが、そこに人間なのに入り込んだ彼は下手をすると木更並の人外だった。

ちなみに、木更も全力を出せばそこら辺には軽く到達する。もしそこにゾーンに到達したイニシエーターがいわゆるものなら十番台も夢ではないだろう。

「さて、ティナちゃん。君は何の用があつてここに来たんだい?ただの付き添いかい?」「あ、えつと、シエンフィールドのメンテをお願いしたくて。」

「なんだそんなことかい。まあ、お安い御用さ。」

コロコロつとティナが机の上に置いたシエンフィールドを董が確かに。と言つて受け取る。

だが、どこかティナの表情は喉元で何か詰まった感じだ。

「何かあるのか？ テイナ。言いたい事は全部吐き出しとけ。」

蓮太郎は飲み終わったコーヒーの入っていたビーカーを置きながら言う。

テイナはしばらく困惑したあと、口を開いた。

「遠からず、私には追ってが来ます。」

「エインからかい？」

「イエス、ドク。」

「なんだ、そんな事か。てつきりステージⅤが群れをなして突っ込んでくるのかと思っただぜ。」

「……そ、それはもう世界滅亡レベルですよ……私の追っては私よりも確実に序列は上です。私以外の『NEXT』の強化イニシエーター……序列百位『ギガ・ヘッジホッグ』、アシユリー・スプリングステーション、序列九十五位『メテオフィール』、アイリオン・スペンサー、序列八十八位『フェルドランス』、フェイ・クロンミラー、序列七十五位『魔王』、ルイズ・ゼラスニー、序列二十一位『冥王』、リタ・ソールズベリー。このどれかがいずれ私を……」

「ふーん。」

「……なんでそんなに呑気なんですか……？もしかしたら私を住まわせているお兄さんに被害が……」

「はあ……ティナちゃん。彼が『その程度の序列』の相手に負けるとでも？」

「……ですけど、お兄さんは序列百位にも……」

「……言つてやれ、蓮太郎くん。」

「おうよ。俺、里見蓮太郎は聖天子様の私怨により序列向上を無理矢理止められた序列第三位になる予定の男だ。経歴はスコープオンをワンパン。」

それを聞いた瞬間、ティナは一瞬意識がどこかに飛んだ。

が、すぐに戻ってきた。

「……すみません、経歴をもう一度。」

「スコープオンをワンパン。」

「証拠は……」

「これを見るんだ、ティナちゃん。」

モニターに映像が現れる。それは、数ヶ月前のスコープオンが発生したシーンだった。

途端、画面端から何か電撃が走り、スコープオンに直撃。

「ここをアップにしてみよう。」

董がそれをアップにすると、そこにはスコープオンに張り付く蓮太郎が。

「えっ。」

「ちなみに、蓮太郎くんはレールガンの弾丸となって飛んできた。」

そして再生。蓮太郎がスコープピオンの上まで登って拳を振るった。

瞬間、スコープピオンが消し飛んだ。

「……さて、たかだか序列二十一位というステージVすら倒せないイニシエーターとそれ以下のイニシエーター五人程度がなんだって？」

「匿ってくださいお願いします。」

「任せておけ。」

この瞬間、ティナの安全が確立されたのであった。

天童民間警備会社が警備している聖天子に喧嘩をふっかけたエインが全面的に悪い。

そしてティナは思った。よく、自分はスコープピオンをワンパンする人のアツパーを受けて生きていられたな、と。

「それじゃあ、ここからは大人の話だ。ティナちゃんは帰ってくるとありがたい。」

一瞬、ティナが不安そうな視線を蓮太郎に送るが、ああ、蓮太郎に対する不安なんて無いか。とすぐに思い直した。

「二人で帰れるか？」

「はい。余裕ですよ。」

「そんじゃ、先に帰ってくれ。」

それから一言三言話してからティナは帰っていった。

残ったのは蓮太郎と董だけ。

「まったく、君の周りには順調に幼女が増えていくね。」

「否定できねえ……」

「全く、いい加減延珠ちゃんの胃を休ませてやれ。彼女が血を吐く度に彼女が不憫で仕方ないんだが。」

「俺のせいじゃねえ。」

「君のせいだ。全く、これで木更といい霧囲気なんだから延珠ちゃんとはほんと報われない。どうしてこんな男に惚れたんだか……」

「知るか。」

「こんな男に惚れたのが延珠ちゃんの運の尽きか……」

董にしては珍しく、本気で人の心配をしている。

それほど延珠は人から見て不憫だったらしい。

「いつか体内侵蝕率を下げる薬が出来たら、延珠ちゃんと夏世ちゃんとティナちゃんにあげるとするよ。」

「あんがと、先生。」

「まあ、三人とも体内侵蝕率は20%前半後半だからね。抑制剤を欠かさず打っておけ

ばガストリア化はすること無いから気長に待ち給え。」

「それまではあいつらに手は出させねえよ。」

全く、心強過ぎる男を味方にしたものだ。と董は少しだけ微笑む。

「……………まあ、呪われた子供たち繋がりで話そうか。知ってるかい、蓮太郎くん。呪われた子供たちは人間との間に子孫を残せるんだよ。」

「理論上は、だろ。」

「いいや、実証済みだ。」

「……………って事はそういう事が起こったってことか。」

「呪われた子供たちに人権なんて無い。と考える輩は大量にいるからね。現に児童婚、なんていう風習のある国もある。それに、生まれた頃から調教しておけば呪われた子供たちは抵抗しやしない。丁度いい。君に現実というものを教えておこう。」

「……………現実は見てるつもりだ。」

「彼女らを一人の人間として世に送り出したいなら今の世界をちゃんと見ろ。呪われた子供たちなんてレイプしながら切り刻んだところで死にやしないから変態からすれば格好のおもちゃだ。それに、君は見た事あるかい？切り刻まれて吊るされた『子供たち』を。性行為を強要させられ、レイプさせられて内蔵が破裂して苦悶の表情を浮かべた『子供たち』の姿を。まだまだあ——」

ドゴツ!!メキメキツツ!!と炸裂音と何かが割れる音。

蓮太郎が無意識に足を振り上げ、床を踏みつけていた。

それにより床に靴の跡がつき、ヒビが壁にまで入った。

「やめろ、吐き気がする。」

「……これが、今の世界の現状だ。東京エリアは比較的他のエリアと比べて呪われた子供たちへの待遇は恵まれている。だが、聖天子様がコロツと死んでみる。そうしたら他のエリアと同じくらい。下手したらそれ以上に呪われた子供たちへの待遇が酷いことになるかも知れないよ。」

「ケツ、くだんねえ。んな事になったら俺が世界を変えてやらあ。一日で全世界のガストレアを殲滅して一人で全世界に宣戦布告してやる。」

「ははは、大見得切ったね。」

「えっ。」

「えっ。」

『えっ。』

「いやいや、俺たかが兵器じゃしなねえし。」

「そーいやそーうだったね。なら出来るか。」

「核も耐えられるし。」

「えっ。」

「えっ。」

『えっ。』

「それは生き物としてどうかと私は思うんだが？」

「だって俺生身で宇宙行っても平気だし。」

「えっ。」

「えっ。」

『えっ。』

「いや、行ったこと無いだろう君。」

「ひとつ飛びで行ったことあるけど。」

そして沈黙。

「……まあ、何かあつたら君がなんとかするんだぞ。」

「そうする……つて、そういえば先生。俺さ、今外周区で教師やってんだけどさ。」

「ああ、知ってる。」

「それで、生徒達を避難させる場所を作りたいたいんだが……」

「んー……ならこのマンホールの下の下水道の……この壁を壊して空洞にしてそこを居

住スペースにしたらどうだい？」

「あ、いいなそれ。帰りがてらやってくるよ。」

「そうするといい。あ、そうそう。忘れる所だった。君にはこれを見せたいんだ。だが、これはかなりシヨッキングだぞ。」

董はそう言うのとプロジェクターを作動。ノートPCの画面を壁に投影する。

それは2031年から二十年に渡って遡った程度の年表だった。

そこにはかなりの数の黒塗りの項目。それは殆どがガストレア戦争初期から末期までにかけての事だった。

政府のガストレア戦争中の資料は焼失したとの言葉はこれを見る限り嘘だということが分かった。

ダブルクリックすればエラー音とアクセススキのレベルが不足していますというメッセージ。

何故、こんな事を董にさせているのか。それは、蓮太郎が自ら調べるよりも董に調べてもらった方が、より効果的に活用してくれると思っただからだ。

そしてこのアクセスキーを使って蓮太郎は真実が知りたかった。一体裏で何が起きているのか。幼少期に一度だけ乗らせてもらった三輪車が何故『七星の遺産』とやらないでいるのか。

その前に何故七星の遺産でステージVのガストレアを呼び出せるのか。と、言うか

もうぶっちゃけ七星の遺産でステージⅤを呼び出して片っ端から殴り消して平和を取り戻したいというのが蓮太郎の内心だった。あの疫病王、リブラだって病原菌ごと消し飛ばせるだろう。

董のこれを見ろという声を聞き、目を凝らす。マウスで拡大された年表には赤色で文字が反転されてる場所があった。

「問題はこれだ。」

「————こ、これって……」

そこにはこう書かれていた。

『2021年某月某日、七星村消滅』

『七星村』。そんなの、聞いたことがない。何が、どうなっている。

七星村とは。七星の遺産とは。いや、違う。

『消滅』とは何だ。一つの村が消滅。そんなの核やステージⅤかガストレアの大群の進行が無い限り……

「まさか……七星村はガストレアと深い関係でもあるのか……いや、そんなの七星の遺産がある時点で明らかだ……問題は何で七星の遺産がステージⅤを呼び出す鍵になるんだ……」

「そんなの知らん。だが、七星村なんて村はここ以外出てこない。辛うじて……この地

図から見つける事はできた。」

董が2020年の日本地図を取り出すと蓮太郎にあるページを開いて渡した。

七星村は元長野県北部にあったらしい。

「もつとヤバイのは次に私が見せるものだ。これは特殊な経緯で入手した物だが……本来レベル十のアクセススキーがなければ見る事ができない。」

「レベル十……」

それは、序列三十番以上の者しか見ることが出来ない情報。いずれ蓮太郎は見る事が出来る。が、それが何時になるかが分からない。だからこそ、手に入る情報はなるべく集めておきたかった。

「政府の職員が誤って投稿した物だがすぐに消されてね……だが、キャツシユはあったから復元が出来た……見る覚悟はあるかい？」

「……頼む。」

董は無言で再生をした。

それは『アルデイ・ファイル』と呼ばれているらしい。

映像が始まり、画面が真っ暗になる。ザ、ザ。とノイズが響き、やがて映像が画質は悪いものの見えてきた。

獣の呻くような声。

そして、それは見えた。

赤色の目と不気味に肥大した右の瞳。歪な体。それには包帯が巻かれている。さらに足の付け根から三本目の足が生え、栄養を吸われた左腕がしなびて左肩が肥大化している。

気分が悪くなった。死体はさんざん見てきた。なのに、これはそれ以上の迫力があつた。

四肢と体と思われる部位が無ければそれは『ヒト』だと判別出来なかった。

「なんだよ……なんだよこれ!!」

「分からない……だが、これは人間の女性だ。」

「……ああ、分かる。そして、これが『ガストレア』だつて事も!」

画面右下には何時の間にか『Devil virus』という文字。

デビルウイルス。それにかかった人だろう。だが、これは完全にガストレアだ。

「恐らく、これが『アルデイ』なのだろう。」

「アルデイつて何だよ。」

「簡単に言えばイヴと同じく原初の人類として度々比喻される。」

「……なんだよ、それつてつまり……これは……」

「人類で最も最初にガストレアウイルスに感染した女性だ……いや、これが最初の人間

から派生したガストレアだろう。」

最初のガストレア……何故、そんなものが映像に捉えられている。

「……なんで、デビルウィルスのまま伝わらなかったんだ。何で、ガストレアウィルスって名前になったんだ……？」

「世間に広まる時に名称が変わるなんてザラだ。何か理由があるかね？」

董は『Devil virus』については特に疑問に思っていないようだった。

こんな物を隠蔽している政府は一体……どれほど今の蓮太郎の常識を打ち砕く情報を持っているのか……そんなの想像だに出来ない。

だが、その時着信。木更からだった。

「もしもし、木更さん？」

軽く声が震えている。が、木更はそれどころじゃない剣幕で返事をする。

『里見くん！とうとうモノリス白化現象が露見したわ！もう隠しきれなくなったみたい！』

「なにっ!?!先生!」

董はすぐにテレビをつけた。

テレビでは緊急ニュースがやっており、半分程まで白くなったモノリスがそこには写っていた。

大混乱が、始まる。

モノリス崩壊まであと——四日。

蓮太郎がアルデバランを暗殺するミッションが始まるまでの残り時間でもあった。だが、大混乱は免れない。

トウエンティーパンチ

「そんなじゃ、延珠、夏世、ティナ。ちゃんと押さえておいてくれよ。」

32号モノリス数十キロ前。そこは現在、始まるうとしているガストレアとの全面対決の最前線であった。

多くの民警がこの場に集い、アジユバンドを集めたり、既に集まったアジユバンドの仲間と交流を深めたりしている。

蓮太郎もここで仲間を集めるために軽い泊まり込みでまだアジユバンドを組めていない民警に声をかけていくつもりだ。

夏世はプロモーターがいなかったためアジユバンドに加えられないどころかこの戦いに加わる事が出来ないのだが、夏世はどうせこの場の民警全員を把握出来るわけないからコツソリ参加したって問題は無いと言って無理無理に蓮太郎についてきた。

だが、仕事柄顔を合わせたことのある民警がいたらマズイので、何時もの服の上からパーカーを羽織ってフードを被っている。

ティナも夏世と同じ理由で参加したらどうだと夏世と延珠から言われたが、何故か含みのある笑みを浮かべて断った。だが何故かここにいる。

ちなみに夏世は今回のために壊れてもいいように同じモデルのショットガンを二丁、バックショット弾200発、フレシエット弾200発、スラグ弾100発、フラグ弾30発、特製バラニウムバックショット弾を30発という、明らかに個人が所有する量ではない量の弾薬を美織から貰っている。※1

「よし、ホイホイホイっと。」

蓮太郎がテントの杭を手刀で地面に一気に打ち込む。

普通は金槌等でやる物だがそんな物蓮太郎には必要ない。

「つてな訳でテントの完成だ。」

「おおう、ホントに立った!」

「早速弾薬をば。」

「……弾薬がギツシリ詰まった箱なんて私でも初めて見ましたよ……」

せっせっせと弾薬箱をテントの中に運んでいく夏世を尻目に蓮太郎と延珠は二人でアジユバンドの仲間を探しに行く。

『留守番よろしく。』

「えっ、あつ、ちよっ、手伝っ……ああもう! テイナさん、手伝って!」

「ええ!?!」

夏世がテイナに空マガジンの詰まった箱を渡す。その時点でテイナはこれから何を

手伝えばいいのか察してしまった。

この560発の弾薬を詰めれる分だけこの空マガジンに詰めると夏世は言っている。「な、何時間かかると思ってるんですか!？」

弾薬を空マガジンに装填する時の地味な作業はスナイパーライフルで暗殺をしていたティナは一番知っている。

だが、それもほんの十数発。多くて二十発程度だ。

「だって私のショットガン、マガジンでリロードするやつですしおすし。」

「わ、分かりました……で、何発あるんですか？」

「560発。」

（あつ、日が沈むまでに終わるかな？）

そして夏世とティナのひたすら弾薬を空マガジンに装填する超地味な仕事が始まった。

「……ってか何でわざわざこんなに空マガジンを……」

「使い捨てますから……リサイクルしてる暇なんて無さそうですし……」

「……私もバレットライフルの弾薬をマガジンに装填しないと……」

金髪幼女二人は蓮太郎が帰ってくるまでひたすら無言でカチツカチツと弾薬を装填し続けた。

もし、夏世のシヨットガンがマガジン式ではなかったら、こんな悲しくも物騒な光景は見えることがなかっただろう。

数時間前。蓮太郎は一人、耳にインカムを取り付け大きな荷物を持って下水道を一人歩いていた。

昨日、32号モノリスの崩壊がニュースで取り上げられた後、地下シエルターへ避難できる東京エリアの30%の人員がコンピューターで自動的に選出された。

そう、たった30%しか、聖天子の用意したシエルターには東京エリアの住民は収容出来なかった。その30%の住民にはその日の内に通知がいった。

だが、問題なのはそこではない。その30%の中には呪われた子供たちも含まれていたのだ。

それを知った今の東京エリアの住民はヘタをすると呪われた子供たちを殺して避難権を奪い取ろうとする可能性もある。実際、そんな組織も出来ているとか。そして、その30%の中には蓮太郎と木更の生徒もいた。

昨日の内に当選した子達に蓮太郎は会いに行った。当選したのはたった一人だった

が、彼女は「皆と一緒に待ってる。だって、蓮太郎先生がガストレアなんて全部倒してくるから。」と笑顔で言った。

だが、もし避難権が彼女にある事を一般人が知れば、確実に目の敵にもされるし殺されるかもしれない。

だから、一日だけ彼女を他の子供たちと引き離し、天童民警会社で寝泊まりさせた。

そして、まだ陽も昇っていない朝に蓮太郎は董の元へ行き、通信用のインカムを貸してもらい、昨日打ち合わせした生徒達用のシエルターもどきを作るために一人下水道を歩いていった。

『蓮太郎くん、もう少し先だ。』

「分かった。」

嫌な臭いもするしどこかジメジメとしてシエルターなんかにはしたくない場所だが、子供たちはこのような環境の方が過ごしやすい。さらに、こんな場所に人はまず来ないため、大戦の間だけ身を隠すにはまさに打って付けだった。

『そこだ。そこなら誰にもバレないだろう。だが、慎重にやれよ？崩れたら台無しだ。』
「分かってる。」

蓮太郎は入り組んだ下水道の一つの行き止まりの横の壁に向き合う。

拳を握り、軽く壁に向けて振るう。その軽く拳を当てただけで、下水道の壁の一部が

消し飛び、人が何人か過ごせそうな穴が出来上がる。

「もうちよつと、か。」

なるべく窮屈な想いをさせないように、ついでに壁を貫通しないように丁寧に土の壁を崩していく。

「ざつとこんなもんか。」

広さ的には蓮太郎の部屋の二、三倍ほど。十数人がここで三日以上過ごすのは多少窮屈かもしれないが、我慢してもらうしかない。

そして、蓮太郎は背負って……と、言うか引き摺ってきた大荷物を広げる。

それは、大量の木材だった。

「じゃあ先生。梁作るから支持頼む。」

『分かった。まずは……』

蓮太郎が持ってきたのは、天井となっている土が崩れないようにするための梁を作るための木材だった。

土に梁が機能するかどうかは微妙な所……と、言うか殆ど機能しないと思うが、気休め程度に作る。

暫くして梁が完成した。

「食料は保存のきくものを後で持つてくるか。一週間分だから……」

『ああ、それならもう私が注文しておいた。カロリーメイトと乾パン、それと水程度だがな。』

「いや、助かるよ先生。いつ届く?」

『もう数十分程度じゃないかな?』

「それじゃあ今からそつちに取りに行くよ。あいつらも食料持ち込むついでにここに連れてくる。」

『ああ。それじゃあ待つてるよ。』

そして蓮太郎は董の元へ子供たちの食料を受け取りに行き、かなり重いダンボール箱を片手に子供たちを迎えに行き下水道へ案内し、シエルターもどきに避難させた。

その際に電池式のライトや手回し発電のライト付きラジオ等も運んでおいたため、自由はしないだろう。

だが、もしもここまで人が来たらという可能性もあるので、基本的には電気は付けず、入り口もどこから取ってきたのか分からないコンクリの塊（めちやくちや薄くて軽い）で基本的には塞いでおき、用があるときだけ壊さないように退かして出るというようにしておいた。

このシエルターもどきから出て迷ってしまわないように各自に地図も持たせた。これで、彼女達が死ぬ可能性は無くなった。

ちなみに、延珠、夏世、ティナ、木更にもこのことはちゃんと話してあるため、もしもの時はシエルターもどきに避難する手筈になっている。まあ、そのもしもの時はステージV辺りが出て蓮太郎じゃないとどうしようもない時位なのだが。

そして時は戻って最前線。

蓮太郎と延珠は不意に水晶玉を目の前に置いた正しく占い師という風貌の女性を発見した。

話しかける意味はないのだが、何故最前線で最も危険なここにいるのか声をかけたくなつたのだ。

「なあ、あんた。なんでこんなところで占いなんてやってるんだ？」

「なんで、と聞かれましてもこれが仕事ですから。」

「違う、そうじゃない。ここは最前線だ。こんな所にいるよりも避難した方が良くないか？」

もし今この瞬間、何かの原因でモノリスが崩壊でもしたらこの占い師は確実に逃げ遅れる。

「そんなの簡単です。ここにいる民警ではない者達は民警の方々が勝つのに賭けたのです。」

「……そりゃ責任重大だな。」

「はい。ですがそんなプレッシャーをかけないために私は今回限り、占いの結果がいい方向の物しか出ないようにしてあります。」

「……それ、占いとしてどうなんだ？」

「ですが、皆さんポジティブになるでしょう？」

「……そうだな。」

蓮太郎は素直に感心する。

「じゃあ、俺の運勢も占ってくれよ。」

「はい。」

占い師が水晶玉に手を翳してその水晶玉を覗き込む。

そして、顔をあげた。

「今、あなたはアジユバンドの仲間を探していますね？」

「あ、ああ。」

当てられたことに意外性を感じて若干後ずさる。

「大丈夫です。すぐに信頼できる仲間が見つかるでしょう。」

「……そうか。なら何とかかなりそうだ。少し気が楽になったよ。」

「お役に立てたようならなによりです。」

「はいはいはい!!」

延珠が挙手しながら占い師に詰め寄る。

「な、なんでしよう?」

軽く引きながらも占い師が反応する。

「妾も占って欲しいのだ!」

「お嬢ちゃんは何を占ってほしいの?」

「妾のおっぱいについてだ。木更よりもおつきくなりた。できれば120くらいで。」

「ひ、ひやくにじゅう……?」

もう何も怖くないとでも言わんばかりの数字に占い師がドン引く。

「ね、強請るな、勝ち取れ。さすれば与えられん……と、でも言っておきましょうか……」

「つまり?」

「……きつとそこまで大きくなりますよ。」

占い師が目を逸らして延珠の占い結果(?)を話した。

「そうか! 蓮太郎、大きくなったら毎日揉ませてやるからな!」

「………なんかスマン。」

「………仕事ですから。」

蓮太郎は延珠の服の襟足を引っ張って猫を持ち上げるようにして持ち上げると、占い

師に一礼して歩き去っていった。

そして暫く歩くと、おそらくアジュバンドを組んでいないだろう民警がゾロゾロと歩いていた。

軽装な者、重装備をした者、道着を着た者等など。

だが、その中で蓮太郎が自分のアジュバンドに引き込もうと思う人物はいなかった。

「ここなら選り取りみどりだそわ、蓮太郎！」

「……駄目だ。」

「むっ……何でだ？」

「俺がいない間、ここにいる奴らに背中を預けられるか？」

「そ、そう言われると……」

蓮太郎はほら、行くぞ。と延珠の手を握ってはぐれないように歩き出す。

延珠はまんざらでもない……と、言うか満面の笑みで蓮太郎と歩き出した。

暫く歩くと、少し人混みが出来ているのを発見した。

そして、蓮太郎の人外並の嗅覚が血の匂いを嗅ぎとる。

「……ここで待つてろ。」

「えっ？」

延珠の頭を撫でてから蓮太郎が一人で人混みを掻き分けて中の様子を見る。

「……ッ。」

人混みの中心には鋭利な刃物で頸動脈を切られたイニシエーターと何かで押しつぶされて斬られたプロモーターの死体があった。

「……何かあったのか？」

「いや、知らない。」

「そうか……」

隣のプロモーターに聞いてみたが、知らない模様。どうやら、誰も知らないらしい。

蓮太郎は手を合わせて合掌し、せめてもと思い冥福を祈った。

そしてすぐに延珠の元に戻り、再びアジユバンドを組む民警を探す。

そしてしばらく歩いたところで……

「おい、あつちで民警同士での喧嘩だつてよ!!」

「蓮太郎……」

「……ちよつとだけ見に行つてみるか。」

どうするのかとくいつくいつと蓮太郎の袖を心配そうに引っ張る延珠を尻目に蓮太郎はその喧嘩の現場を見に行く。

ドーナツ状に広がった人混みの中は人が薄く広がっていたからか、中はすぐに見えた。

(あの人は……あのモヒカン、喧嘩売る相手を間違えたな。)

片方は何処かでヒヤッハーやってそうなモヒカンのプロモーター。そのプロモーターのイニシエーターは申し訳なきような顔をしている。プロモーターはAN^ア—9^バ4^{カン}、イニシエーターは槍を持っている。

そして、もう片方の民警は片方はサンバイザーを被りロングコートを羽織り、自然体にしており、イニシエーターは「はうあうあ……」と小さな声を漏らしながらプロモーターのロングコートを摘まみながら魔女の帽子のような帽子を目深に被っている。

「デメエー！なんで俺の酒が飲めねえっていうんだ！」

「別にそういうわけではない。」

「なら何で飲まねえんだ！」

「君に奢ってもらう通りはない。それだけだ。」

「何イ!?生意気なヤツめ!!おい、やっちまえ!!」

プロモーターがイニシエーターに指示する。延珠があちやー。と額に手を当てながらも結末を見つめる

延珠も気付いている。両者にはどうにも出来ない実力の壁があると。

「……翠、下がっている。」

ロングコートの男はイニシエーターに一言だけ声をかけると、イニシエーターを下がらせる。

そして、槍を構え並のプロモーターなら一瞬で串刺しになるであろう速度で突っ込んでくるイニシエーターを迎え撃つ。

高速で放たれた突きをヒラリと避け、延珠の目ですら追うことが困難な速度でかかと落としてであろう一撃を槍に向けて放ち、槍を地面に埋める。

それが見えなかったのか、意識がどこかに飛んでいるイニシエーターの頭にゴツンと拳骨。イニシエーターはそのまま目を回して倒れた。

「なっ!？」

イニシエーターに身体能力で勝てるプロモーターなんてそうそう居ない。それこそ、木更や蛭子影胤、蓮太郎のような人間辞めてる連中位だ。

故に、先程の一連の行動は周りの民警からすれば目を見開いて驚くほどの物だった。

「撃たれたら面倒だな……」

ロングコートの男はそうボソツと呟くと、その場から残像を残して消えた。

あの小比奈の動きを目で追ってそれに難なくついていった延珠の目ですら、残像が見える程だった。

そして、衝撃音。

ドゴオツ!!と鉄球をコンクリートの壁に思いっきり打ち付けたような重低音。

ロングコートの男は肘鉄をモヒカンの鳩尾にめり込ませていた。

音もなく倒れるモヒカン。

「れ、蓮太郎……」

今の、見えたか？ そう聞こうとした延珠だが、すぐにそれを中断する。

蓮太郎が、消えていた。

そして、再び次の瞬間、先程の衝撃音よりもさらに強い衝撃音が響く。

文字では表せないその衝撃が振動となり鼓膜を刺激する。思わず耳を塞いで延珠がロングコートの男の方を見れば、そこには右拳を振るつた後の蓮太郎と、それを両掌で防いでいるロングコートの男の姿があつた。

「ぐっ……いきなりは無いんじゃないか？ 里見。」

「へっ、彰磨兄いだからだよ。」

蓮太郎の拳をまさか受け止めるなんていう事ができる男を目の当たりにして延珠が何度も目をこすりながら目が飛び出んばかりに目を見開く。

対して蓮太郎は拳を離す。

「……れ、蓮太郎。その人は……」

「ああ、そういうえば延珠も知らなかつたな。この人は雑沢彰磨。俺の兄貴分だ。」

蓮太郎に兄貴分なんていたんだと言いたかつたが、蓮太郎が元々は天童の家に居たのを思い出し、まあ兄貴分位いても不思議ではないなと思ひ直す。

ギャラリーはもう閑散としている。

「全く、お前の拳はどうなっているんだ。俺の超バラニウムの骨格が久々に悲鳴をあげたぞ。」

「えっ、超バラニウム？」

「そうだ。彰磨兄いは体の骨格を全て超バラニウムの骨格に置き換えているんだ。」

「これで里見の拳一発で悲鳴を上げるんだからまだ俺も半人前だ。」

「いやいやいやいや!!と全力で手を振る延珠。あの蛭子影胤が一撃で池ぼちゃした拳をぐっ……で防ぐだけでも十分凄い……と、言うか人間やめている。」

「それにしても何で彰磨兄いは東京エリアに戻ってきたんだ？数日前から来てるってのは先生から聞いたが。」

「たまたまだ。翠に東京エリアを見せてやろうと思つてここに来たらこんな事に巻き込まれた。お陰でこの件を解決しないと旅に出れない。」

翠、という名前に一瞬間の中に？が浮かんだが、彰磨の後ろで隠れているとんがり帽子を被った少女を見て、この子か。と頭の中で結び付ける。

「翠、挨拶くらいしておけ。」

「あ、あの……布施翠です！」

慌てた感じで名前を言って頭を下げる彰磨のイニシエーター、翠。

「すまん、こいつは極度のアガリ症でな。」

「いや、別にいいよ。延珠、お前も挨拶しておけ。」

「うむ、妾は藍原延珠。モデル・ラビットのイニシエーターで蓮太郎の嫁だ！」

その瞬間、彰磨の蓮太郎を見る目が変わる。

「里見……お前……」

「いや、絶対に彰磨兄いの思ってるような事はしてないからな!?後俺はロリコンじゃねえからな!!」

「そ、そうか……もし本当だったらお前との付き合い方を考える所だった。」

「絶対ねえよ!これから先も!!」

その言葉に延珠がムツとするが、無視して蓮太郎は話を進める。

「なあ、彰磨兄い。もうアジュバンドは組んだか?」

「いや、まだだ。」

「なら俺の所のアジュバンドに来てくれないか?彰磨兄いなら俺がいなくても安心出来る。」

「……ほう、何か企んでるな?里見。」

「ああ。それも聖天子様から直接のな。」

プロモーター二人の顔がいい感じにゲスイ感じの笑顔になった。

そしてイニシエーター二人が軽く引く。

「良いだろう、お前の悪巧みに俺も一枚噛ませてもらおうか。」

「へっ、彰磨兄いならそう言うと思つていたぜ。」

こうして、蓮太郎のアジユバンドのプロモーターは人外を超えた何かの蓮太郎、耐久力と悪運が人外の玉樹、骨格が超バラニウム（と、言う名のアダマ○チウム）でさらに天道式戦闘術（と、言う名の北○神拳）が使える彰磨と言う、人外しかないアジユバンドとなった。

トウエンティーワンパンチ

アジユバンドを組んだ蓮太郎と彰磨はすぐに本部へと行き、アジユバンドの登録を済ませた。

これで完全に人外しかないアジユバンドが完成した。完成してしまった。

テントに戻ると、夏世とティナが葬式ムードで空マガジンにひたすらシヨットガンの弾丸を詰め込んでいた。その不気味とも言える光景に思わず全員でドン引きして後ずさったのは仕方のないことだろう。

その後は全員でテキパキと弾丸を積み込むと、(主に人外二人のおかげで)数十分で弾丸を全て空マガジンに詰め込み終わった。

そしてそれが終わってすぐに遅刻組の片桐兄妹が合流した。

ついでにそこで自己紹介は済ませた。蓮太郎は夏世のせいで彰磨と玉樹にロリコンのレッテルを貼られそうだったが。

途中で何故かティナが退場したりもしたが、その後は7人で親睦を深めるために色々とお話をしていた。

「そういえば、翠のモデルは何なんだ？特徴的な外見でもないし。」

その瞬間、翠がビクツと体を一瞬動かした。

「翠、隠していたって乱戦になればバレる。今の内に見せておけ。」

彰磨は隣に座っている翠にそう言う。すると、翠は観念したのか被っていた魔女帽子を取った。

そして、そこからピヨコンと出てきたのは文字通り猫耳だった。

「ご覧の通り、モデル・キャットだ。」

コンプレックスなのか、翠はすぐに帽子で耳を隠した。

「なあ、蓮太郎。こんな事有り得るのか？」

「ん、まあな。中には因子が濃く出て耳が生えたり羽根が生えたり尻尾が生えたりするイニシエーターがいるらしい。この目で見るのは初めてだがな。」

と、言うかつい先程彰磨が拳骨を落としてノックアウトしたイニシエーターにも動物の耳が生えていたのだが、どうやら眼中にも記憶にも留まらなかったらしい。

そして、そこでイタズラっ子夏世&弓月が何か思いついたのかそそくさと翠の後ろに移動する。

「どりゃっー！」

そして弓月が翠の両脇に手を入れて立たせる。翠はいきなりの事に困惑している。

そこからは早かった。

『そおい!!』

弓月がスカートをズルつと下に下げ、さらに夏世がパンツを掴んでそのまま下ろした。

つまり、翠の下半身は一瞬ですっぽんぽん

「ふにやあああああああああああ!!?」

その瞬間、条件反射だったのか翠の爪が伸び、夏世と弓月の顔をガリつと引つ掻いた。『ぎやあああああああああああ!!』

顔を抑えてのたうち回る夏世と弓月。そしてすぐにパンツとスカートを元に戻す翠。

「……武器は爪か。」

「は、はい……」

顔が真っ赤になっている翠はそそくさと彰磨の後ろに隠れた。

これは全面的に夏世と弓月が悪い。

「つてかお前らは何がしたかったんだよ。」

『し、尻尾は生えているのかな……と……』

「……はあ。」

ちなみに延珠も同じ事をやろうと思ったが、やる前にやられたので引つ掻かれなくてよかつたなあ。と思っていたりする。

『ほら、謝れ。』

『すみませんでした。』

保護者二人の指示で夏世と弓月が同時に土下座をかます。

「も、もうしないのなら……」

『ありがたきお言葉。』

そんな何処かズレてるロリっ子三人を見ながら保護者三人は呆れ混じりの溜め息をついたのだった。

そして、もう陽も落ちて辺りは真っ暗になった。

もう寝る準備もしておくか。と寝袋をテントの中で敷いて残りは自由時間にした。

イニシエーターズが翠の猫耳を弄りまくってまた引っ搔かれたりしてるのを尻目に保護者三人組は近くの川を座って眺めていた。

「賑やかだな、里見。」

「まあな。おかげで毎日退屈しねえよ。」

「俺っちは幼女三人と同居してるお前にドン引きだな。」

「里見、手を出したら俺がお前を刑務所に責任を持って突き出してやる。あ、翠に手を出したら殺す。」

「出さねえよ。あとあんたマジで父親の顔になってるぞ。」

「……まだそんな年じゃないんだがな……」

「そういえば、薙沢の兄貴は何歳なんだ？」

「そうだな……酒はもう飲める。」

「おつ、マジで？なら飲まねえか？結構持つてきてんだよ。」

「なら貰おうか。」

「彰磨兄い、酒飲めるのか？」

「当たり前だ。」

玉樹から投げ渡される缶ビールを受け取って玉樹と飲み始める彰磨。

「んだよ、学生は俺だけかよ。」

「けっけっけ、これこそ大人の特権ってやつだぜ、ボーイ。」

「なに、あとたった四年だろう。そんなのあつという間だ。」

ボーイはこれでも飲んどきな。と玉樹から渡されたのはノンアルコールのビール。

まあ、ノンアルコールならいいか。とプルタブを開けて口をつける。

「うげっ、苦っ……」

「この苦さがたまんねえんだよ！くうくう!!」

「まあ、要は慣れだな。」

「けっ、どうせ俺はまだ16のガキだよ。」

しかめっ面でノンアルコールのビールに口をつける蓮太郎。

横では既に玉樹が二本目のビールを飲み始めている。

蓮太郎が意地でビールを飲み干し、缶を潰して潰してさらに潰して。ほんの数センチまで圧縮する。

「うっわあ……」

「なにドン引きしてんだよ。この方が捨てやすいだろ。」

「いや、普通できねえからドン引きしてんだよ。」

「俺は出来るぞ。」

「薙沢の兄貴、アンタも人外か。」

彰磨が軽いドヤ顔で蓮太郎のそれと同じくらい圧縮したビールの缶を見せ付けてくる。

「彰磨兄い。俺のアップパー受けて体育館の天井に逆犬神家してもすぐに復活したこいつはどうだ？」

「人外だな。」

「うっげえ、人外に人外認定された。」

しかめっ面でそう言いながらも彰磨には二本目のビールを、蓮太郎には缶のコーラを手渡す。

「なんだ、コーラもあるんじゃないか。」

「あいつらとお前用にも買ってきてやったんだよ。これ終われば元取れるんだしな。」
「それもそうだな。」

カシユツと炭酸飲料の入った缶が開く特有音を聞いてコーラに口をつけようとしたが、ひよいつとそれは後ろから伸びた腕に奪われた。

「美味しそうな飲んでるわね。貰うわよ。」

「き、木更さん!!」

コーラを奪ったのは木更だった。

あまりの珍客に蓮太郎が驚く。今回も事務所でふんぞり返っているとすっかり思っていたからだ。

「ぶはあ……おつ、ゼロカロリーじゃない。分かってるわね〜」

「な、なんで……」

「そりゃ私も戦うからよ。」

木更が笑顔で腰に吊るしている刀をトントン。と叩く。

「俺のアジユバンドに入る気か？」

「ええ。もう登録もしておいたわ。」

「俺の許可なしでか……ってかイニシエーターは？」

木更が無言でそこを退くと、木更のいた場所の後ろにはバレットライフルを抱えたティナがいた。

「ティナ!?!お前、序列剥奪中じゃ……」

「こんな緊急事態だしね。聖天子様に直接お願いしてきて特別にライセンスを発行してもらったわ。順位は十万位からだけどね。」

「少しでもお役に立てたら、と……駄目でしたか?」

「……いや、逆に助かるよ。な、彰磨兄い。」

「そうだな。木更がいればかなり楽になる。」

「なら異論は………つて彰磨くん!?!な、なんで!?!」

「たまたまだ。」

「イニシエーターは!?!」

「あそこだ。」

彰磨は翠を指さした。

翠はなんか耳を触られたり喉元を撫でられたり爪を触られたりと軽く玩具にされていた。

『何してんだアアアアア!!』

蓮太郎と玉樹の空き缶（内二つは圧縮済）ぶん投げ攻撃。延珠、夏世が恥も忘れて痛

みでのたうち回る。弓月が軽く涙目になる。翠がホツとする。そして見知らぬ女性木更に
ビクツとする。

「……天使ね。」

「人見知りか酷いだけだ。」

なにやら木更が危ない発言をしているが気にしない。

「さて……里見くん。これからよろしくね？」

「ああ。」

「……ふつくしい。」

「お、おい、片桐……？」

なお、玉樹が一目惚れしたもよう。

その数分後。蓮太郎達はこの何十ものアジュバンドを纏める団長、我堂長正の遣いか
ら招集を食らった。

別段何かしたから、と言うわけではなく、ただの顔合わせというか、鼓舞らしい。

木更にその我堂について聞いてみれば、どうやら序列275位の民警らしい。イニシ

エーターの名は壬生朝霞。人間辞めてない（多分）のにそこまで行くとはそれなりに強
いんだろなあ。なんて思いながら蓮太郎達はノロノロと招集場所に向かう。

途中で色んなアジユバンドに追い抜かれたり追い抜いたりしながらも招集場所につ
いた。

ついてみれば、今まで見たこと無いほど大勢の民警と、ひな壇の上に立つて民警を見
下ろす初老かそれより少し若い程度の、だが幾つもの戦いをくぐり抜けてきたであろう
男とその一步後ろで刀を携え民警達を見下ろす延珠達と同一年くらいの少女が見えた。

二人とも鎧タイプの外骨格エクサスケルトンを装備している。

外骨格だけでもかなりの値段が張るのに、鎧タイプともなればさらに値段が張る。

それほどの金を集めれる程のガストレアを屠ってきたのなら、確かにこの血なまぐさ
い連中も纏めることが出来るだろう。

戦国時代で言うならば正しく將軍。という貫禄を持っている。

「なあ、蓮太郎。妾もあれ欲しい！」

延珠が指さしているのは朝霞の外骨格。

「あれトンでもなくなつたつげえんだよ。だから無理。つてか、あんなの無くたつてお前は
あいつらよりも序列が上の蛭子小比奈と互角、それ以上に戦つてたんだ。あんなの必要
ない。」

「そ、そうか?」

ちよつと大袈裟に褒めてやると、延珠は頬を緩めてえへへ。と声を漏らしている。

まあ、買えないのも事実だが、外骨格が必要ない程延珠は超優秀なインシエーターだと言うのも事実。

人間辞めてる奴等や改造インシエーター、ゾーン突入インシエーター等を除けば延珠のポテンシャルは上位に食い込む程だ。

そんな延珠の頭をちよつと強めに撫でると、我堂が口を開いた。

「よくぞ集つてくれた、勇者諸君ッ!!」

マイクも無しに吐き出された声は場外にも関わらず辺り一帯に響いた。

その声の大きさにおお。と蓮太郎が声を漏らす。

「私が団長を務める我堂長正だ。諸君等はこの東京エリアを救う選ばれし者達だ。君たちと共に戦える事を誇りに思う!」

そこで我堂は一泊置く。

ただでさえ他人を見下しやすい荒っぽい民警すら我堂には一目置いている。そのため、冷やかし等は一切ない。

偶然その場にあつたレールガンでステージVを倒したと思われている蓮太郎ならこ

うもいかなかっただろう。そんな我堂に蓮太郎も一目置いている。

「知つての通り、ガストレアは人を食う事に倍々ゲームで増えていく奴等だが、対処法さえ分かれば我々の敵ではない。この未曾有の危機に瀕している東京エリアを救う方法……奴等を殺せ!! 蹂躪しろ!! 父のため、母のため、兄弟のため、大切な者たちのため! 全てのガストレアを蹂躪し尽くすのだ!!」

我堂が壇上に拳を叩きつける。そして、拳を振り上げる。

「勝つぞ! 勝つて我等が歴史の創始者となるのだ!! 我々は二千ものガストレアを蹂躪し尽くし東京エリアを救った英雄として歴史書に名を残そうではないか!! 散つていった英雄ではなく、生ける英雄として!! そのためにまずは……奴らを殺すぞ!!」

その瞬間、喝采が上がる。

周りの血なまぐさく荒つぽい男達が、その空気に飲まれてテンションが上がった子供達だ。我堂の端的な演説によりその心を燃え上がらせる。

その演説に人外達は舌を巻いていた。この連中を纏めるのが上手い、と。その実力と男達の闘士を燃え上がらせる言葉を単純に、しかし沢山の意味を込めて叫ぶのが上手いと。

そして、その後は今後の作戦についてが告げられた。

東京エリア側は自衛隊と民警の混合部隊が二千のガストレアを相手する事になって

いる……のだが、自衛隊と民警舞台の距離が1キロや2キロではないのだ。

手柄を全部取ろうという自衛隊側の魂胆が目に見えている。

民警舞台は後衛を務め、自衛隊からの支援要請を受けてから出撃、交戦の流れになっている。

だが、この距離で要請を受けたところで辿り付けるのはせいぜい全体的なスペックで人間を辞めている蓮太郎、木更、彰磨、スピード特化の延珠程度だろう。勿論、そんな単体での行進を我堂は許すはずもない。それを抜けばギリギリ、ティナが最前線から脳に負担が掛かるのを覚悟でスナイプ出来る程度だ。

前の大戦で自衛隊はガストレア相手にほぼ完勝とも言っているいい戦果を残している。

航空戦力での地上戦力の一掃。空を飛ぶガストレアはいても戦闘機のスピードには勝てない。故に、自衛隊は圧倒的アドバンテージを持つてガストレアに挑むことが出来た。

今回も戦闘機の爆撃と戦車による遠距離爆撃を主体とした戦いを行う事だろう。

だから、こんな配置にして手柄を全部取ろうとしているのだろう。だが、今回もその戦法が通用するとも限らない。

周りの者も一部が落胆の声をあげている。

我堂の何か質問がある者は？という声に誰も手を挙げなかったため、蓮太郎が手を挙

げた。

延珠と木更が腹に手を当ててるが知ったこっちゃない。

「その君、若いな。何者だ？」

「序列300位、里見蓮太郎。」

周囲からどよめき上がる。

「ほお、君が。歓迎する。今は一人でも力のある者は欲しいからな。」

「ああ、歓迎、感謝する。だがあの作戦はなんだ。あれだと支援要請を受けてからじゃ間に合わねえぞ。」

その言葉に我堂が鼻白む。

「……我々は自衛隊に後方にて陣を築き待機せよと命令されただけだ。」

「なら、10キロ後ろの『回帰の炎』記念碑まで陣を下げたらどうだ。こんな平原よりもゲリラ戦に向いてると思うが。」

「そうなつては迅速に支援に迎えん。」

「そんなの、来ると思ってるのか？」

「……」

我堂と蓮太郎は睨み合う。延珠が口を押さえ始め、木更が延珠を介抱し始める。

周囲の喧噪はもはや収集がつかない程だ。

だが、我堂はふと口元を緩め、翌日のスケジュールを簡単に伝えると、延珠に向けて何かを投げた。

よく効く胃薬だった。

「全く、里見くん。なに私達の胃に負担がかかることをしてくれてるのよ。」

分隊用テントへの帰り道。木更が持参の胃薬を飲みつつ蓮太郎を小突いた。

ちなみに延珠が投げ渡された胃薬は董特製の胃薬よりはまだまだだが、延珠が以前までに使っていた胃薬よりもよく効く胃薬だった。なんで我堂が胃薬なんて持っていたのかは不明だったが。多分、何か苦労する事があったのだろう。

「だけど最もだろ?」

「そうだな。我堂団長の様子は可笑しかった。里見が聞かなければ俺が聞いていた。」

「まあ、それは私も。」

「俺つちもだ。ありやなんか可笑しかったぜ。」

人外共の思考は大体一致していた。

「でも兄貴。あれって自衛隊が全部なんとかしてくるんでしょ? ならいいじゃん。服

汚れないし。」

夏世や弓月辺りはガストレアの体液をモロに被る事も稀にあるのでそこら辺の心配もなくなるし疲れないしでいい事だろう。

「それもそうよね。私も服汚れるの嫌だし。あ、そうだ。里見くん、現担ぎみたいなのやらない？折角みんな起きてるんだし。」

「……それもそうだな。いつちよやるか。」

そうと決まればと、木更が薪を叩つ斬り、蓮太郎と彰磨が組み立て、玉樹が火を放とうとしたらティナが何処からか持ってきた火炎放射機で着火した。

玉樹と一緒に燃えたが、黒焦げになる程度だった。服も髪も無事だ。数秒後には元に戻った。

少し大きめの焚き火を9人で囲む。

「皆、俺の呼びかけに答えて集まってくれてありがとう。俺は……まあ、言ってもいいか。俺は作戦が始まってから機会をうかがってアルデバランの暗殺に向かう。」

「おつ、ボーイ。なんかスツゲエこと考えてんじやねえか。」

「だろ？だから、そのミッシェンを遂行するために力を貸してくれ。」

蓮太郎がその右拳を掲げる。

「勿論だ。ガストレアに一泡吹かせるぞ、里見。」

彰磨がさらに右手を掲げる。

「そうね。私達の力でギャフンと言わせてあげましょうか。」

木更がさらに刀を鞘に入れたまま掲げる。

「やっぱお前について正解だったぜ、ボーイ。派手にやってやろうぜ！」

玉樹がチェーンソー付きの手袋を装着した手を掲げる。

「はい。派手にぶっぱなして蜂の巣を量産しましょう。」

夏世がショットガンを掲げる。

「焼却処分ならお任せください。」

ティナが火炎放射機を背負ったままバレットライフルを掲げる。おい、その火炎放射機何処から持ってきた。

「だったらバーベキューのお肉サイズにカットしてあげるよ。」

弓月も手を掲げる。

「わ、私も手伝います！」

(天使ね……)

邪念が入ったが、翠の手も重なる。

そして最後に延珠がひよいひよいと蓮太郎の肩の上に肩車の形で乗っかり、手を掲げる。

「これだけの人外と優秀なイニシエーターが揃っておるのだ！負けるはずが無かろう！！」

サラッとここのプロモーターズを人外扱いする延珠。だが、人外と言われても最早何も言えないプロモーターズ。

「じゃあ、みんな一緒に頑張るぞ！えい、えい！」

延珠の音頭と共に9つに組まれたスクラム中央が陥没し、大きく天へと弾ける。

『オオ————ッ!!』

9人の大きな雄叫び。そして、笑い声が夜空へと吸い込まれる。
人外達の蹂躪も近い。

トウエンティーツーパンチ

翌日。蓮太郎と木更は延珠、ティナ、夏世と共にあの下水道の隠れ家まで来ていた。理由は単純。今日は授業があつたからだ。

今日の授業は小学校でよくある将来についての作文だった。

この授業はさほど問題なく終わった。ただ、延珠とティナが蓮太郎の嫁になりたいと書き綴っていた。そして意外な事に夏世のテンションがこの日は何故か数ヶ月前の物に戻つたらしく、作文の内容は蓮太郎と肩を並べて戦えるようになること、という蓮太郎にとっては何とも嬉しい作文だった。

そして全員の作文を回収して一通り目を通す。

流石は女の子と言うべきか、将来の夢はケーキ屋さんとか、花屋さんとか、お嫁さんなどなど。夢と希望に溢れた作文だった。

どこかの特撮番組で子供の願ひ事は未来の現実という言葉聞いたことがあつた。これはまさにそれだ。

きつと、この先、聖天子様が呪われた子供たちと人との差別の無い世界を作り上げてくれる。そう信じてる蓮太郎にとって、こんな現状にも関わらず、ちゃんと夢と希望を

持っているこの子達は眩しかった。

「よし、みんな上出来だ。なんつーか、眩しかった。言葉じゃ表せないくらい良かったよ。」

瞬間、子供たちから小さな歓声が上がります。

それを木更と共に微笑ましく眺める。

「なあ、木更さん。財布の中、どんだけある？」

「3。」

「俺もそんなくらいか……」

蓮太郎が急に財布を取り出し札の数を確認する。

「どうかしたの？」

「いや、どうせだし社会見学にでもってな。」

「どこによ。まさか聖居とか言わないわよね？」

木更がぶさけながらもそう聞く。

「帰りの炎だよ。あそこで第二次関東大戦について教授する。」

第二次関東大戦については東京エリアに住む以上、常識とも言える事なので、なるべくこの子達には教えておきたかった。

「別にいいけど……臭うわよ？あの子達。」

下水道に一日中籠っていたのだ。確かに子供たちは結構臭う。

これが毎日風呂に入ってるなら別だが、子供たちが風呂に入るとは稀で専ら水浴び。しかもここ最近はしてなかったらしいのでどうにも臭う。

「……温泉連れてくか？」

「そんなにお金ないわよ。」

だよなあ。と溜め息をつく蓮太郎。

だが、その時、入り口を塞いでおいた岩が音を立てて動いた。

「話は聞かせてもらったぜ、ボーイ、姐さん！」

「うわっ、ホントにいた。」

そしてそこから入ってきたのは玉樹と弓月。そしてその後ろには彰磨と翠もいた。

急に入ってきた人物に子供たちが警戒をするが、延珠、ティナ、夏世が知り合いだと説得する。

「で、何が分かったんだ？」

「だから、社会見学ついでの温泉だろ？」

「温泉がついでだ。で、それがどうかしたのか？」

「金がないんだってな。だったら俺っちと薙沢の兄貴が出してやるよ。」

「……は？何故？」

急な玉樹の提案に思わず何故と聞き返す。

「いや、こういう場なら弓月にも友達はできると思つてな。ついでに男同士の裸の付き合いといこうぜ。安くていい露天風呂のある温泉を知つてるんだ。まあ、今回の件が終れば収入がっばがっばだからその程度なら構わねえんだよ。」

温泉はちよつとした仕事で外周区に行つた時に見つけたんだ。と軽く自慢する玉樹。

「里見。彼女達は女の子なんだ。服やアクセサリーは仕方ないにしろ、せめて風呂くらい入らせてやつてもバチは当たらないだろう。」

「あ、その温泉を管理してる女将は決して差別はしないいい人だ。」

蓮太郎と木更が目を合わせる。

そして、

「なら行くか！ここから近いんだよな？」

「歩いて数十分の森の中だ。ちやつちやと移動したら面倒な事にはなんねえよ。」

「よし、じゃあ今から温泉に行つてから社会見学に行く！それぞれ着替えのある子は着替えを持って地上の青空教室に集合！」

やつたー!!と蓮太郎の指示が終わり次第はしやいで外に飛び出す子供たち。

よつほど温泉が嬉しかったのだろう。いや、もしかしたら温泉自体初めてな子も居たかもしれない。

「んじや、俺っち達は先に待ってるぜ。」

「着替えはどうすんだ？」

「すでに持つてきている。」

と、玉樹が手に持つていた手提げカバンを見せてくる。

彰磨も着替えが入ってるであろうカバンを持つていた。

もしかして、何もしなくてもこの二人が強引に話をすすめて無理矢理温泉に連れていかれたんじや……と思つたが、こっちは奢ってもらう身。敢えて何も聞かずにティナ、夏世を両手で一人ずつ抱えて延珠が前側に抱き着き、木更が後ろから抱き着く。

「着替えとつてくる。」

「お、おう……」

そして数分後。

『おろろろろろろ……』

音速を超えたためか、四人とも仲良く酔つて青空教室の片隅で今朝食べた物をリバーズしていた。

何故こうなる事を予期して自分の足で走らなかつたのか。全くの謎である。特に一度経験している延珠は。

生徒達を引き連れて数十分。森の中を歩き続けると、一軒の木造建築の建物を見つけた。そして、その奥からは湯気が立っている。

「ほら、あそこだ。」

「ホントにあつたよ……」

まさかこんな森の中にあるとは想像もつかなかつた蓮太郎は思わず声を漏らした。チラツと後ろを見ると子供たちはウキウキとして目をキラキラ輝かせている。

松崎も一緒に来ないかと誘つたのだが、都合が合わないとの事で断られてしまった。

他に面倒を見てる子達がやはり東京エリア壊滅の危機という事で軽いパニックを起こしているらしい。

蓮太郎の生徒は蓮太郎、木更が人外でたかがガストレア二千体に負ける訳が無いと知っているのに至って冷静、どころかこの大戦は勝ち確だと思っている。

もしこれで賭けがあつたのなら、人間側の勝利に全財産賭けてさらに倍プッシュしてらるだろう。

そんな事はさておき、建物はどうやら温泉旅館らしく、常連の客もいるそうで、その客は大抵ガストレア因子を宿したことを我が子に持つ家族連れだと言う。

受け付けで先に金だけを払い、生徒達と木更、イニシエーターズを先に行かせた。

「さて……女将さん、熱爛を俺とこの兄貴に。」

女性陣が風呂に行つたのを確認してから玉樹が受け付けで酒を頼んだ。

「あいよ。」

「おい、飲むのかよ。」

「平日のこんな時間から飲めるんなら飲むしかないだろ。」

くいつとお猪口を傾ける動作をする玉樹。

「……玉樹、彰磨兄い……アンタ等まさか……」

「そんなカリカリすんなって。勝ち戦なんだし気楽に行こうぜ、気楽によ！」

「まあ、折角の温泉だ。こういうのも乙なもんだろ、里見？」

「……はいはい。」

蓮太郎が呆れつつも返事だけはする。

そして玉樹が熱爛を受け取ると、そのまま男湯へと向かう。

「里見は牛乳で我慢しとけよ？」

「はいよ。」

そのまま脱衣所で服を脱いで先に体を洗ってから風呂に入る。

「ふい〜」

「ひっさびさに温泉に入ったぜ。」

「俺もだ。何時もは適当に済ませてるからな。」

「まあ、俺つちの家はよく風呂が故障するからたまに来るぜ。」

「それ大丈夫かよ。」

「動けこのポンコツが、動けてんだよ!と言いながら蹴ると次の日には直ってる。」

「なんだよそれ。」

薙沢の兄貴、とつとと飲もうぜ。と玉樹が先に露天風呂に浸けておいた熱燗を彰磨の持つ小さなコップに注ぎ、彰磨もお返しにと玉樹のコップに注ぐ。

「くうくつ!この一杯がまさに生きてるって証だな!」

「露天風呂で飲むのもなかなかいいものだ。」

「だろ!?!こういう場所で知り合いと飲み合うってのがほんと最高だぜ!」

そんな感じで盛り上がっている玉樹と彰磨。置いてけぼりの蓮太郎。

浴槽の淵に手を乗つけて背中に軽く体重をかけてリラックスする。

と、その時、男湯と女湯を隔てている壁の向こうからガラガラツと音が聞こえた。

「里見く〜ん、いる〜?」

と、壁の向こうからいきなり木更に声をかけられた。ちなみに、男湯は貸切状態だ。

「いるぜ〜」

「ちよつとシャンプー貸してくれない？何日もお風呂入ってなかったせいであの子達の髪の毛なかなか泡立たなくて。」

「分かった。ちよつと待ってる。」

蓮太郎は立ち上がって一度室内の風呂に戻って自分で持ってきたシャンプーを取ってすぐに露天風呂に戻る。

「ほら投げるぞ〜」

「は〜い。」

ひゅつと軽く女湯の方に向けてシャンプーを投げる。

「ナイスコントロール！」

「おつ、ピツタリか。」

偶然にも木更の手に収まったらしく、木更は礼だけ言うのと室内の風呂に戻っていった。

ちよつと耳を澄ますと小さくだが子供たちがはしゃいでいる声が聞こえる。

「そーいやここ、あんまり客来ないから男湯も女湯もシャンプーとボディソープはあんまり量がないらしいな。」

「そんなに来ないのか？」

「外周区だしな。来るとしたらたまたまお金の手に入った子供たちと呪われた子供たち

を連れた両親くらいだ……ってのは言ったか。まあ、子供連れの親は大抵シャンプーとボディースーツは持参してくるらしいから段々と置く量が減っていったらしい。」

「そんなんで儲かってんのか？」

「趣味でここら辺で何故か湧いた温泉を買い取って温泉旅館を始めたらしい。」

何故かってなんだよ、何故かかってとツツコミを入れたくなつたがここであれ？と考える。

昔、力の制御のために外周区でたまに地面に拳を打ち込んでその内の一回で温泉が湧いたような……そこで蓮太郎は考えるのをやめた。

空からの太陽の光と温泉のせいで地味に暑かった。

一方数分前の女湯はと言うと。

「はいまだ飛び込まない！先に体洗って髪の毛をちゃんと洗いなさい！自分で洗えない子は私が洗ってあげるから！」

と、木更が子供たちに指示して先に体を洗わせていた。

ちなみに、翠は耳栓のような何かを猫耳に詰め込んでお湯が耳に入らないようにしている。けどたまに入るのでトントン。と頭を叩いて猫耳から水を出している。

そして猫耳を他の子供たちに興味本位で泡まみれにされるのも最早お約束。翠の顔は終始真っ赤だ。

延珠、テイナ、夏世、弓月は先にちやちやつと体を洗って比較的髪の毛の長い延珠は髪の毛がお湯につかないようにして一足先にお湯に浸かって垂れている。

一方木更はなかなか泡立たない子供たちの髪の毛に悪戦苦闘。

手入れをしてないためガツシガシの髪の毛を意地で洗う。よく見れば枝毛もある子が多数居たが、それはまた今度にする。

たまにシャンプーハットを使いつつ洗い続けているととうとう木更の持ってきた元々少なかったシャンプー（詰め替え式特売セール品108円）が底をつきた。

「げっ、シャンプーきれた……えつと、元々おいてあるのは……すくなっ!!」

木更はしばらく黙ったあと、ちよつと待つてね。と言つて露天風呂へ。そしてすぐにシャンプー片手に戻つてきた。

「あつ、蓮太郎のだ。」

「お兄さんに貰つてきたみたいですね。」

「えつ、もしかして混浴?」

「ここ、露天風呂を仕切つてるのつて薄壁一枚だから物の受け渡しはひよいひよい投げればいいのよ。」

「なるほど。」

蓮太郎のシャンプー（延珠達の事も考えて少し高めでいいやつ）で泡まみれになつて

いる子供たちを見ながら延珠達はそんな話を話していた。ついでの翠も洗われてた。主に猫耳を触るといふ目的で。

ちなみに延珠達は小さなボトルで持参したシャンプーを使った。

「露天風呂行かない?」

「そうだな。行こう。」

暫く泡まみれな同級生と知り合いを見届けてから露天風呂に四人で向かう。

流石に外は寒かったが、室内の風呂で大分あったまっていたためか、露天風呂に浸かるまで特に寒い思いはしなかった。

「うくん、やっぱここの露天風呂はいいわね〜」

「妾もたまにお風呂が故障した時は銭湯に行ったが、あそこよりもここがいいな。」

「私のは行ったことがありますでしたが、これはなかなかいいものですな。」

「まあ、裸のつきあいってこういう場から生まれたらしいでぶくぶく……」

と、言おうとしたところで横から弓月が夏世の頭を押さえつけて口元をお湯につける。

「違うから。裸のつきあいの裸の意味は精神的な意味での裸だからね。ティナやん、間違つて覚えちゃダメだよ。で、夏世ちゃん、続きは?」

「まあ、そんな言葉もできた場所だからそりゃ良いところですよって言おうとしたんで

す。」

ぶくぶくぶくと拗ねたように口元までお湯につかる。エラ呼吸は出来ないため一応息をするために鼻だけはお湯の外に出しておく。

「そういえば夏世ちゃん、今日は性格可笑しくない？」

「いつも蓮太郎さんのストレスを受けないためにわざとテンション高めで過ごしてたんです。わざと蓮太郎さんのやつてる事を容認できるくらいおかしなテンションでいけばストレスをなんとかできますから。」

「……大変だったんだね、夏世ちゃん。」

「じゃなければ今頃延珠さんの仲間入りです。」

それどういう事?と延珠が聞くが、夏世はスルー。

「そういえば、なんで夏世ちゃんはプロモーターがいないのにIISOに引き取られてないの?もしかしてプロモーターは引きこもり?」

「……いえ、故人です。ちよつと聖天使様と交渉して蓮太郎さんと一緒に居れるようにしてもらったんです。」

聖天使様と交渉!?!と弓月が驚くが、夏世はそんな弓月を見て小さく笑った。

「夏世は蓮太郎に弟子入りという形で家に来た変わり者なんだぞ。」

「まあ、建前は、ですけどね。」

「え？」

「ぱしやぱしやと顔を洗いながら言う夏世。そして呆気にとられた感じで夏世に聞き返す延珠。」

「好きでもない異性の部屋に居候なんてすると思いますか？ね、ティナさん。」

「え、ええ、まあ。」

「えつ、それって……ええ!？」

「ふふふ。延珠さん、そこはご想像にお任せしますよ。」

き、聞いてないぞそんなこと!!と騒ぐ延珠を夏世が無理矢理お湯に沈めて黙らせる。

と、その時。

『おくい、弓月』

男湯から玉樹の声が聞こえた。

『酒持つて来い』

『いい加減飲みすぎだ馬鹿野郎!!追加注文しまくって熱爛何本あげやがったお前!』

『あく?別に何本飲もうと俺の勝手だろ?』

『飲み過ぎなんだよお前は!!彰磨兄いもなんとか言ってくれ!』

『そうだ。熱爛はそう何本もあけるもんじゃないぞ。』

『……あれ?彰磨兄い、その一升瓶はなんだ?なんでラツパ飲みしてんの?酔ってる?』

まさか酔ってる?」

『ははは……そんなわけ無いだろ?』

『いや、顔真つ赤だぞおい!! 説得力ねえぞ!!』

男湯からの騒ぎ立てる声。殆どの事が玉樹がトリガーになつてようだ。

「……なんか、ごめん。」

弓月はそんな兄のかけた迷惑を考えて両手で顔を覆った。

そして、綺麗に洗われた子供たちと顔が真つ赤な翠、やけにスッキリした顔の木更が

露天風呂に來たのはその数分後だった。

何が起こったかはご想像にお任せします。

「ここが回帰の炎だ。」

数時間後。やつとの思いで酔っ払い二人を風呂から上げてテントに蓮太郎が蹴り届け、社会見学を続行した。

一応弓月と翠も一緒に來ている。流石に酔っ払いに子供を絡ませるのは可哀想だろうという木更の言葉で連れてくることにした。

「今日ここに来たのは授業のためだ。ってな訳で授業すんぞく。」

蓮太郎は周りに人がいないのを確認して綺麗になった子供たちを集める。

「じゃあまず、第二次関東大戦について知ってるやつはいるか？」

翠が手を挙げたが、他は手を挙げなかった。

「翠は知ってるのか？」

「た、旅の途中で知ってた方がいいだろうって彰磨さんが……」

「うん、いい事だ。なら翠には復習程度だが、ここからは第二次関東大戦について教える。」

蓮太郎は一つ咳払いをして授業をはじめた。

「まず、第二次関東大戦の事を話すには第一次関東大戦の事についても知ってもらおうことになる。まず、第一次関東大戦は丁度ガストレアが現れた頃に始まったんだ。その時はまだガストレアに対して有効な戦術が定まっていなかったから、自衛隊は完敗。戦線は旧埼玉県まで押された。」

「バラニウムを使っても勝てなかったんですか？」

と、一人の生徒が手を挙げて蓮太郎に質問をする。

「バラニウムは当時まだ発掘されていなかった。だから、自衛隊は心臓か脳を潰さないで延々と再生するガストレアに負けてしまったんだ。」

もう質問はないかと見渡すが、特に質問はないように見えたため、話を進める。

「で、その後暫くしてから第二次関東大戦が始まったんだ。だが、第二次関東大戦ではバラニウムの有効性、ガストレアの生体等がだいぶ分かっていたから自衛隊は完勝。ガストレアに対しての空中からの攻撃、沖からのミサイル、戦車の砲撃のおかげで人類は戦線を東京まで押し戻してモノリスを建造し、この回帰の炎を建てたんだ。だが、当時はキツかった。何時ガストレアが襲ってきて食われるか分からなかったから皆が皆いつも神頼みをしていた。」

「里見くんや私のようなのを除いてね。」

「でも先生ならガストレアなんてワンパンで倒せたんじゃないんですか?」

「当時の俺はまだ弱かった。力がついたのも第二次関東大戦から数年経ったあとだし、その力が制御できたのも俺が民警ライセンスを取る数ヶ月前の話だ。」

「今思えば懐かしいわね。」

延珠、ティナ、夏世の顔色が真っ青になっている。

まさか数年もあの人が力を抑えれずにこの東京エリアで暴れていたのかと。

だが、延珠と夏世には今思うと軽くだが心当たりがあった。

空から落ちてくる炎の塊とか超スピードでモノリスの外へと突っ込んでいく物体とか地震とか吹っ飛んでくる彰磨に似た少年とか刀を全力で振るって災害から身を守る

木更を小さくしたような少女とか。

「まっ、簡単な説明だがこんなもんか。そんなもって、近々起こる戦いは第三次関東大戦って呼ばれている。」

その瞬間、表情が暗くなる少女達。

「どうかしたか？」

「……私たち、第三次関東大戦の後も生きているのかなって……もしも先生たちが負けたら……」

蓮太郎と木更は顔を合わせる。

これから起こる戦いは子供たちが経験したことの無い、人とガストレアの生死を賭けた戦争だ。

不安になるのも仕方が無い。

「……なんだ、そんな事か。決まっている。人類が勝つ。」

「……なんで断言できるんですか？」

「そりゃあ勿論……」

「妾たちがいるからだ！」

俺達がいるからだ。と言おうとした矢先、延珠が飛び跳ねて蓮太郎の首に手を掛けるとそのままぐるんと回って蓮太郎の背中にへばりつく。

「……そうですね。私達が居る限り、知人は目の前で死なせません。」

「その為の切り札人外もありません。」

夏世とティナも出てきて蓮太郎の横に並ぶ。

「そうそう。だから皆心配しないで待ってればいいのよ。」

「ええ。今回の戦いは私だつて全力を出すわ。ね、翠ちゃん。」

「ひゃわっ!？」

弓月も立ち上がつてティナの横に立ち、木更が翠を抱き上げてそのままぬいぐるみを抱きしめるかのように抱きしめる。

「その根拠は?」

一人が声を上げる。そして、イニシエーターズと木更の視線が蓮太郎に行く。

「はあ……それは俺がいるからだ!俺はゾディアックの一体、スコープオンをワンパンで倒した男だ!そんな男がいるんだ、お前達は大舟に乗ったつもりで待ってればいい!アルデバランがなんだ、ガストレア二千体がどうした!そんな、この俺が全部ワンパンで葬つてやる!」

蓮太郎が拳を空へ向かつて突き出す。その瞬間、下から上へと台風並みの突風が一瞬吹き荒れる。

「そんじゃあ今日の締めの一つ教えておく。第三次関東大戦は人類の勝利で終わる!ア

ルデバランは消滅しガストレア二千体は全て討伐！人類の圧勝で幕を閉じる！覚えておけよ!!」

はい今日の授業終わりイ!!と蓮太郎が追加で叫ぶ。

あー喉いてえ。と呟く蓮太郎。そんな蓮太郎の背中をよじ登って蓮太郎の肩に跨って肩車をする延珠。

「そんじゃ、前祝いでもするか？ここの全員で。」

「いやいやいや、お金ないじゃない。」

「……彰磨兄いかな、ブラックカード持ってたな……幾らでも好きに使えて……」

蓮太郎が懐からあの幻とも言えるブラックカードを取り出す。その瞬間、延珠、夏世、ティナ、弓月の目が飛び出んばかりに見開き、翠のトンガリ帽子が何故か飛ぶ。そして木更が目の色を変える。

翠の様子を見るに翠すら知らなかったようだ。だが、そういうえっいつも結構豪華なご飯とか豪華なホテルに泊まらせてくれてたのっでもしかして……とブツブツ言ってるのを見るに結構使ってたらしい。

「よーし、みんなお肉食べに行くわよ!!今日は人類勝利の前祝いよ!!食って食って食いまくるわよ!!」

何とも現金な。木更がヒヤッホー!!と言いなから走り出す。生徒達が興奮しまくっ

て蓮太郎に抱き着く。延珠が慌てる。もうめちやくちやだった。

そして、蓮太郎と木更、さらに延珠、夏世、ティナ、弓月の心は一つだった。

(久々の肉!!)

(な、なんか皆さんの目がギラギラしてます……)

そんな現金な奴らを見て翠がドン引いたのは言うまでもない。

この後滅茶苦茶焼肉食べた。

トウエンテイースリーパンチ

蓮太郎が生徒達を連れ出して回帰の炎に連れて行つた日の夜。テントの中では既にアジユバンドメンバーがもう寝ていた。

酔つたまま寝付いたらしい彰磨と隣で寝る翠の耳を齧る延珠と夏世、そして耳を齧られて驚かされている翠。片桐兄妹は自分達のテント、木更は蓮太郎のすぐに使わなくなつたテントでテイナを拉致つて寝ている。多分、今頃抱き枕がわりにされているだろう。

蓮太郎は何かすつごいカオスな空間の中、何故か寝付けずにテントの天井を見ていた。

数時間前まで焼肉を遠慮なく食べていたため、満足感と満腹感はある。夕方から日がどつぷりと暮れて子供たちが眠くなるまでいたので大体四時間ほどだろうか。殆ど木更はノンストップで食べていたが、かなり長いこと店の中にいたので、そろそろ夜食を食べてもいい頃なのだが、腹は全く減らない。だが、眠れない辺り今日は寝付きの悪い日らしい。

気分でも変えるために外で夜風に当たろうと音を極力立てずに立ち上がつてテントの外に出る。

「……少し肌寒いか?」

真夏だが、夜だったからか少し肌寒かった。一度テントに音を立てずに戻って上着を羽織り、再び外に出る。

何処か行ってみるか。とポケットに手をつ込んだ所で横から誰かが歩いてくる。

同じ境遇の民警か?と思いい横を見ると、その人物は見知った人物だった。

「あら、里見くん。」

「木更さん?こんな真夜中にどうしたんだ、一体。」

横から来たのは護身用に木刀(何故か柄の部分に洞爺湖と彫つてある土産物)を腰にさした木更だった。何でここにいるかと聞くと、寝付けなかったかららしい。

ティナは?と聞くと抱き枕にしてたらタップしだして次第に大人しくなったからそのまま寝かしてきたという。それ、抱きしめられてその大きな胸に無理矢理顔を突っ込まれて息がでせずに窒息しただけじゃ……と言おうとしたが、何となくやめておいた。

「そうだ、里見くん。散歩に行きましょ?」

「散歩って……まあ、いいけどよ。何処までだ?」

「32号モノリス。」

「分かった。」

そして、蓮太郎の背中に木更がへばり付き、蓮太郎が新幹線真つ青な速さで走り出し

た。

30秒経たない間に32号モノリスの前へと到着した。木更を下ろすと、木更はこつちよ。とだけ言つて歩き出した。蓮太郎はそれについていく。

木更は白化したモノリスの前へ行くと、それに触れた

「触つていいのか？」

「この程度じゃ崩れないわよ。それより……これは酷いわね。ほら。」

木更は蓮太郎に自分の触つたモノリスの一部を見せる。モノリスはパラパラと音を立てて崩れ、崩れた部分が地面に落ちた。

「確かに酷いな……モノリスが倒れるまであと二日か……それまで持つのか。」

「二日じゃなくて三日よ。」

「あと数分のことだろ。細かいな。」

ここで無闇に触つて大変な事になったら極刑じゃ済まないのでモノリスからは一旦離れることにした。

「なんでこんな事になつちまつたんだか。」

「調べるしかないわよね。それにしても、何で32号モノリスをピンポイントで攻めるのかしら。」

「そういえば、他のモノリスはどうもなつてないんだよな……何でだ？」

「……まさか、モノリスを形成するバラニウムに何か異常が……例えば、不純物が入ってるとか?」

「ははは、まさか………まさかだよな?」

蓮太郎は一旦飛び上がり、まだモノリスの無事な部分をコンコン。と叩く。次に、白化したモノリスの少し上のまだ無事な部分を叩く。

「なるほど、分からん。」

「馬鹿なの?」

木更の冷たいツツコミ。だが、蓮太郎は特に気にした様子はない。

「とりあえず、私のツツで調べてもらおうわ。」

「ああ、そうしてくれ。」

その後は特に話すことなく、二人はなんとなくテント近くの河川敷で寝転がっていた。

「星が綺麗ね。」

「そうだな………確か、あれがデネブ、アルタイル、ベガで……」

「えっ、どれ?」

「ほら、アレだよ。」

蓮太郎と木更が自然に顔を寄せあつて、蓮太郎が空に指をさす。

「ほら、あの三つ。そんでもってあれがさそり座。」

「ちよつ、よく分かんないわよ。」

「ほら、あの一際目立つ星だつて。」

「そんなの見当たんない……あつ、あれ？」

「

「そうそう。あの三つ。そしてあれがウ〇トラの星。」

「真面目な顔してボケないの。」

真面目な顔してボケたら木更からツツコミが入った。

バレたか。と、チラツと木更の方を見ると、ほんの数センチ先の所に木更の顔があった。

(近づ!!?)

いきなりの事に顔を真つ赤にしてすぐに元の位置に戻る。多分、今の蓮太郎の顔はかなり赤いだろう。

「よく星座なんて覚えてるわね。」

「ま、まあ……覚えてんのはあんぐらいだ。」

平静を装つて言葉を返す。

何であんなに顔を近づけても気付かなかったのやら。と木更に聞こえないほど小さ

く溜め息をはく。

「……なんか、こういう事してると恋人みたいよね。」

「ツ!?ゴホツ!」

いきなりの不意打ちに飲み込もうとした唾が気管に入りむせる。

「ちよつ、ど、どうしたの!?!顔真つ赤よ?!」

「な、何でもねえ……」

反則だろ木更さん……と内心思いながらもあくまで平静を装って会話する。

「……ねえ、里見くん。里見くんは消えちゃったりしないわよね?」

「いきなりどうしたんだ?」

やっと喉の違和感が収まったところで木更が声をかけてきた。

「私ね、最近思うの。こども何事が上手くいっていたらいつか最悪の事態が起きるん

じゃないかなって……」

「今までのしつぺ返しかな?」

「うん……夏世ちゃんを助けて、スコープオンも倒せて、ティナちゃんの事もどうにか
なって……延珠ちゃんの胃が犠牲になり続けてるけど……でも、いつかとんでもない
しつぺ返しかな……」

「来ねえよ。来ても俺が殴り飛ばしてやる。だから、安心しておけつて。」

木更はそうよね。心配した私が馬鹿だったわ。と言って蓮太郎の手の上に手を置いた。

は!?と出そうになる声を抑えて地面に向けていた手のひらを上に向け、手を繋ぐ。

「あと、1分で日付変更ね……」

「そ、そうだな……」

「……みんな、助けましょう。私と、里見さんと、彰磨さんと、財布げふんげふん……片桐さんなら楽勝よ。」

(片桐エ……)

不憫な扱いの玉樹に向かって内心で合掌する。

そして、秒針はあと少しで一回転する。

「5、4、3、2、1………モノリス崩壊まで、あと二日。」

「二千体のガストレアの命日も、な。」

「……ふふっ、そうね。」

気が付いたら、二人は夜が開ける数分前まで星空を見ていた。

結局、寝付けなかった。

翌日。蓮太郎はとある事が気になっていた。数日前、鉛を目に流し込んだという盲目の少女の事だった。

彼女には数週間は食えるほどの金は渡しておいたが、もしかしたら、という可能性もあつたので行つてみることにした。

あの歩道橋の上にまた彼女はいるのだろうかと民家やビルの上を走つて飛んで。数分後に辿りついた。今日は教師業を休みにしてもらつてるのでイザという時は彼女をあの隠れ家に連れていく気である。

暫くして歩道橋が見えた。そこには、人混みが。

「チツ……来るなつていつておいたのに……」

やはりと言うべきかなんというか。内心毒づきながらひとつ飛び。

人混みの後ろに着地。そのまま人混みを掻き分けて倒れている少女の前に出る。

「止めろ。この子が何をしたつて言うんだ。」

「そいつはガストレアだ！俺達を食い殺す機会を伺つてるんだぞ！」

そうだそうだと男の声に賛同する人々。

「そいつを庇うつてんならお前だつて同類だ！」

「ならどうする？」

「死ね!!」

人混みの中から拳大の石が投げられる。が、蓮太郎はそれを掴む。

かなりの速さで飛んできたのをなんの苦もなく掴みとったのを見てざわつく人混み。

「なあ、お前ら。ここに岩とナイフがあるだろ?」

蓮太郎が目の前の男からナイフを一瞬でかすめ取る。男は手にあつた得物が無くなったことで驚いている。

蓮太郎は見せしめと言わんばかりに岩を握り潰し、ナイフの塚と先端を両手のひらで挟み込むように持って、そのまま圧縮。グシャツと音を立ててナイフはコンパクトになつた。

余りの人外地味た行動にザワザワと人混みが声を上げる。

「これが十秒後の貴様達の姿だ。」

人混みを作っていた者たちは我先にと逃げ出した。

「はあ……大丈夫か?」

蓮太郎は倒れ込んでいる少女に話しかける。体のあちこちに殴られたような跡がある。

「あなたは……あの時の?」

少女は蓮太郎の方を向く。

「何でここに来た？もう来るなっていったらだろ？金はまだあるだろ？」

「はい……でも、この先もつとお金はあつた方がいいと思つて……」

「……馬鹿野郎が。」

蓮太郎は優しく、コツン。と少女の頭に拳骨を落とした。

少女は少しだけ頭を抑えたが、すぐに蓮太郎の顔に向けて手を伸ばした。

特に何もされないと思つていたので、蓮太郎は抵抗しなかつた。

少女は蓮太郎の顔や首をティナにしたように一通り触つた。

「もう顔は覚ええました。私好みの顔です。」

「……お世辞でも嬉しいよ。」

蓮太郎は少女の手を掴むと、一緒に立ち上がる。

「……何処へ？」

少女は蓮太郎が自分をどこかへ連れていこうとしているのが分かつた。

「俺は青空教室で先生をやつてるんだ。その生徒を避難させてる場所がある。そこに行

くぞ。」

あそこには生徒達が一週間は暮らせる位の食料や水があつた。一人二人増えたところ

でも何も変わらない。

「……私はいいです。妹も居ますし……」

「なら妹も連れて来い。食料と水はそれなりにあるんよ。」

「……いいんですか？」

「拒否権はない。来るなって言いつけを破ったバツだ。」

少女の言葉を聞かず、無理矢理おんぶして飛び上がり、ビルの上に着地する。

「わわわわ!!」

「どうだ？ 凄いだろ？」

目が見えてないから怖さ数倍。だが、どこか少女は楽しそうだった。

ビルの上に飛び上がるのは初めての経験だったのだろう。

「どこへ行けばいい？」

「えつと……確かあの場所から……」

少女は自分の住んでいる外周区がどこかを説明した。

東京エリアの南西側の海に近い場所だった。

「よし、ひとつ飛びで行くからしっかり掴まってるよ？」

そう言うのと、蓮太郎は足に力を込めて飛んだ。

きやーと声を出しながらも何処かはしゃいでいる少女を見ると自然と笑顔になった。

「つてな訳でこいつらも今日からこの生徒だ。オーケー？」

「よし里見くん。目え出せ。潰してあげるわよ。」

「解せぬ。」

「解せぬじゃないわよ！何攫つて来てんのよこのロリコン!!」

「違う！俺はロリコンじゃない!!つか攫つてきてもねえよ合意の上だ!!」

「こんな幼女の目を潰しておいて合意の上とかよく言うわよこの異常性癖者!!」

「だあかあら!!違うつてんだろ！」

蓮太郎は授業中の青空教室（地下）へ盲目の少女とその妹を連れてきて懇切丁寧に説明したが、何故か木更と口論になっている。

何故か懇切丁寧に説明したのに攫つてきた扱いにされている。

「あの……天童社長？」

「ティナちゃん、お引越しよ。やっぱり里見くんは危ないわ。」

「おう木更さん。いい加減にしねえと殴るぞゴルア。」

「て、天童社長……彼女はお兄さんの言った通りの子ですよ……そ、それに私はお兄さんになら攫われたつて……」

そしてティナからの助け舟。蓮太郎はほっと一息つく。

「えっ。」

確かに盲目の少女の方を見ると、蓮太郎にかなり懐いてるように見える。妹の方は大人しめの性格だが、すぐに生徒達の輪に加わっている。

ちなみにティナの後半のセリフは全部木更達の耳には届いてなかったもよう。

「木更さん？」

「……め、めんご☆」

「お仕置きのグリグリだ!!」

「ちよっ、やめっ……って夏世ちゃん!?なんで私を捕まえるの!?!」

「絶対そっちの方が面白そうなので(笑)」

「う、裏切り者おお!!」

この後滅茶苦茶グリグリした。

次の日。

他のアジュバンドはピリピリとした空気を醸し出してるが、蓮太郎達人外アジュバンドはのほほんとしていた。

今日は青空教室（地下）はお休みなため、蓮太郎と木更は第三次関東大戦の後の授業を考えていた。

前日の夜に爆弾を投げ込まれたりするような事は起こっておらず、朝、確認しに行つたがみんな無事だった。

二人の後ろでは延珠が靴の裏に仕込まれているバラニウムの板に異常がないか確認、ティナと夏世はバレットライフル、火炎放射機（何処のものは不明）、ショットガンを一度完全に分解して部品の一つ一つを確認してから組み立て直している。

夏世は二つのポーチを用意して一つに通常のバックショット弾を詰めたマガジンを詰められるだけ、もう一つのポーチには半分をフレシエット、もう半分にはスラグ、フラグ、バラニウムバックショットを詰め込んでいる。残り数個ポーチはあるが、それは予備と空マガジン用だ。ティナは火炎放射機の燃料とNATO弾を詰めたマガジン、さらにはRaufoss Mk 211という、焼夷弾、徹甲弾、炸裂弾の効果を兼ね備えた軍事的使用が禁止された弾丸を引っ張り出してマガジンに突っ込めるだけ突っ込んだ。後衛二人はかなり本気だ。

対して前衛の人は外は玉樹のみマグナム銃を装備。それだけ。

前衛のイニシエーターも銃の装備なし。武器は己の肉体。それだけ。

「今日は陣形の確認とかあったかしら？」

「夜中じゃね？」

「それまでは暇だな。」

「なら飲まねえか？」

「明日に響くぞ片桐。」

「うつ……」

決戦前日の会話とはとてもじゃないが思えない。せいぜい日曜日に家で休んでるサラリーマン程度の緊張感しかないだろう。

「そういえば、今日は風が強いわね〜」

「そうだな。こういう日はモノリスが倒れそうだな。」

「里見、それは流石に不謹し……」

その瞬間、外で轟音。

「うるつせええええええええええ!!」

「里見くんの方がうるさああああああああい!!」

「ボーイも姐さんも外もうつせええええええええええ!!」

なんかもう、テントの中はカオスである。だが、彰磨と翠はいち早くテントの外に出た。

「モノリスが崩れている……まだ時間はあつた筈なのに……」

モノリスの外では、モノリスが崩れ、灰が舞っていた。

「……風か。風のせいでモノリスを支えていたバラニウムのブロックが崩れてそこからなし崩しにモノリスが崩れたのか……」

灰は民警達のテントには少ししか届かなかった。だが、自衛隊にはかなりの被害を与えただろう。

暫くして轟音が止む。

「……どうする?」

「どうするって……あんたがリーダーでしょ。」

「じゃあ暫く待機。指示があるまではここで準備だ。」

人外アジユバンドはガストレアを駆逐するために準備を始めた。

アルデバランに悲惨な結末が訪れるまでにそう時間はない

トウエンティーフオーパンチ

結局、民警達が陣形を組み終わったのは三時間後だった。

時刻は夜七時となり、太陽は姿を隠し始めている。そして、灰が舞い上がり雲を作る。世界の終わりとも言えるような光景だが、そんな中でも人外とそのイニシエーターは特に緊張感は抱いていなかった。

アルデバラン暗殺の目処は実は既についている。

そのために美織に連絡を送ったのだが、準備が終わるのは今日の十一時頃になるという。

そのため今日は周りの民警を守りつつガストレアを殲滅してくれと聖天子様より直々の命令を受けている。

命令は一時間前に受けた。

「……始まったか。」

蓮太郎の驚異的な視力がガストレアと自衛隊の交戦開始を目撃する。瞬間、上がる炎。

ティナもバリステイクスコープと呼ばれるスコープで見てるものの、流石に見えな

いようだ。

ちなみに、蓮太郎達人外アジュバンドは我堂のアジュバンドに所属する民警の指示に基本的に従うことになっている。

聖天子もそこら辺は関与できなかつたらしい。

何時間、或いは何分経つたか。銃火がまばらになり、ガストレアの声を段々と聞こえなくなってきた。

だが、蓮太郎は見ていた。自衛隊が負けたのを。

「蓮太郎……ジエータイは勝つたのか？」

「……負けた。ガストレアに噛まれた隊員がこつちに來るのが見える。多分、アルデバランが32号モノリスを攻めたように何かしらの指示を出している。その後ろに……何百匹か増えたガストレアの軍団がいる。」

蓮太郎は自分のアジュバンドにしか聞こえないように言った。

何故自衛隊が負けたのか、そこまでは流石に見えなかったが、負けたのは確かだ。

霧囲気を切り替える人外アジュバンド。

そして、暫くして自衛隊の隊員がこちらに歩いてくるのを、他のアジュバンドが確認した。

他のアジュバンドはおお！と歓声を上げる。だが、よく見れば足元が覚束無いこと

や、何故か四、五十人で来ている事から何かおかしい事はすぐにわかるはずだ。

だが気づいてないのか、八歳位だろうか。イニシエーターの少女が自衛隊に向かって走りよる。

「近づくな!!離れろ!!」

蓮太郎の叫び。少女はビクツとしてその場で振り返る。

その瞬間、自衛隊の隊員の体が内側から破裂。ガストレアが姿を現す。

だが、その瞬間、ドオンツ!!と爆音にも似た轟音。

音源はティナのバレットライフル。ティナが立ったままスコープを覗いてバレットライフルから R a u f o s s M k 211 を放っていた。

ガストレアの皮膚を貫き炸裂。さらに炎上。

しかも炸裂した銃弾の破片が周りのガストレアに被害を与える。

少女の方は延珠が全力で走り回収した。

さらにティナがボルトアクションを終えて二発目を発砲。そこでマガジンを入れ替えてボルトアクション。

二発目もガストレアに命中。そして炸裂。

「発砲用意!!」

「は、発砲用意!!」

我堂の声。そして、我堂の息子であり蓮太郎達の中隊長でもある我堂英彦の声。

ティナはバレットライフルを下ろして背中に向け、援護のため後ろへと走る。夏世も二丁のショットガンの薬室に弾丸が装填されてるのを確認。

そしてさらに我堂の指示。ハンドガンやアサルトライフルを持った民警が一齐に発砲。夏世もスラグ弾をトリガーを引きつばなしにしてフルオートで弾丸を発射する

「ひ、怯まない!?!ショットガンですよ!?!」

ショットガンのスラグ弾を受けたにも関わらず、ガストレア達は怯まなかった。他の民警達も驚いている。

「なうー!」

夏世は空になったマガジンを三つ目の空のポーチに突っ込み、新たにバラニウムバツクショットの入ったマガジンを取り出し、コックキングレバーを引く。それと同時に薬室に弾丸が装填される。そこでタクティカルリロードをして通常のバツクショット弾の入ったマガジンと入れ替え、バラニウムバツクショットをポケットに移す。そして引き金を一回引く。

パチンコ玉よりも少し大きいバラニウムの塊がガストレアを面制圧する。

三匹ほどが脳か心臓を貫かれ死亡。そしてバラニウムのバツクショット弾を受けたガストレアは少し怯んだが、すぐに進行を開始する。

「……結構高いんですよ？あれ。」

貫い物なのでタダなのだが、特製ということもありバラニウム製のハンドガンの弾丸よりかなり高い弾薬で三匹ほどしか倒せなかったのに少しへこむ夏世。

そして、ガストレアは民警からの射撃が無くなった途端、突っ込んでくる。

「戦闘用意!!」

そして、人外が構える。

段々とガストレアが近付いてくる。周りの民警がその迫力に押され息を呑む。

だが、交戦開始の聲が上がる寸前。

「ヒヤッハアアアアアアア!!」

何処かの世紀末で聞きそうな台詞がソプラノボイスで響いた。

そして、青色の外骨格が一つガストレアへと突っ込み、銀色が煌めく。

その瞬間、ガストレアの何匹かが上下に体を両断する。

「逃げるガストレアはただのガストレアだ!!逃げないガストレアは訓練されたガストレアだ!!全くこの世は地獄ですよフォーハハハッ!!」

チラツと蓮太郎が自分のアジュバンドを確認するが皆いる。

誰かと思つて見て見れば、刀をブン回して突貫してるのは我堂のイニシエーター、壬

生朝霞だった。

我堂を見ると胃薬を飲んでいる。恐らく戦闘の時だけ豹変するのだろう。

「……戦闘開始。」

我堂の疲れたような声により、民警達がガストレアへと突っ込んだ。

「それじゃ、気前良く一太刀、入れましようか。」

木更が刀を構え、腰を落とす。

「飛ベツ、斬撃ッ!!」

そして抜刀、一閃。

その一撃で鎌鼬が発生し、ガストレアの体を両断する。

だが、ガストレアは動いている。

「痛みも知らぬまま死ぬが良い……」

チンツ。と刀が鞘に収まる。その瞬間、何十体ものガストレアの体が亡き別れし、血が噴き出す。

「……俺っち、飛ぶ斬撃なんて初めて見たぜ……」

玉樹が感心する。感心してる場合かと弓月がツツコミを入れる。翠は驚きのあまりとんがり帽子が飛んだ。

「なら今度は俺が行こう。」

今度は彰磨が走り出した。勿論、スポーツカーに匹敵する速さで。

「セイヤアアアアアアアアアアッ!!」

彰磨の気合いの咆哮。その瞬間、彰磨の体が残像を残して消える。

玉樹やイニシエーター達から見たら本当の本当に一瞬。音速すら超えていただろう。

彰磨は消えたと思つたら元の場所に戻つてきていた。

「お前達はもう、死んでいる……」

彰磨の声と共にガストレア数十体の体が弾け飛ぶ。

「ほ、北○神拳……だと?」

「……兄貴、なんかもう、怖くなつてきた。」

(テレーツテ。)

片桐兄妹は味方の人外つぷりに顔を真っ青にしてドン引き、翠は何故か某世紀末アーケードの一撃必殺技を叩き込むと流れるあのBGMを心の中で口ずさんだ。ピッタリだった。

「なら最後は俺か。」

そして最強の人外、蓮太郎が動く。

「フッ!」

だが、蓮太郎は動かず、その場で構え、拳を振るつた。

だが、その際に発生した拳圧が正面にいたガストレアを潰し、さらに後方にいたガス

トレアすらも巻き添えにして吹き飛んでいく。

今ので百体は脳と心臓がひしゃげて絶命しただろう。

「あつ……自重したんだけどなあ……」

（あれで!?あれで自重してたのか!?)

（なんでアレに喧嘩売ったんだろ……あの時の私。）

（……うわあ。）

上から玉樹、弓月、翠である。

ちなみに他のメンバーはいつもので済ませた。

「よし、木更さんと彰磨兄いはペアで、他は互いにカバーするように動いてくれ。俺は好

き勝手やる。」

「了解したわ、里見くん。」

「全力で蹂躪と行くか。」

『(〆)愁傷様です、ガストレア。』

そして、この中で最も人外な三人が残像を残して走り去る。

「……取り敢えず妾達も戦おう!」

呆然としてる残りのメンバーを健気な延珠が元気づける。

かなり後ろの方で血を撒き散らして飛んでいるガストレアを見ながら、延珠達も走り

出した。

（私達のアジユバンドはまあ、当たり前と言っちゃ当たり前で無事ですが……他の所はマズイですね……我堂団長と壬生さんは主に壬生さんが暴走してどっか行っちゃって行方不明……頑張っていますけど戦線を押されつつありますね……）

ティナは後方から木の上に登って狙撃をしながらじつくりと戦況を確認する。

流石にここでは火炎放射機を使えないので、護身用に暗器と借り物のアサルトライフルを背負って幾つかの手榴弾をもってきている。

（流石に三人の内外が加減してるとはいえ……マズイですね。）

ドオンツ!!と銃声。肩に響く痛いぐらいの衝撃を全力で抑え、ボルトアクションを行う。

（高台が無いから狙撃も木の上……もう少しゲリラ戦しようっていう考えはなかったの
でしようか……）

ティナは決戦場にケチつけながらも百発百中で弾丸をガストレアへ叩き込んでいく。

だが、スナイパーとは本来こんな戦闘を想定していない役職。既に通常のNATO弾

は半分を切っている。

死にかけているペア襲っているガストレアを優先して撃っているのだが、やられかけているペアが多すぎる。

既に狙撃が間に合わずに命を落としたプロモーターやイニシエーターを何度も見た。

その度に唇を噛み締め、次の犠牲者が出ないようにシエンフィールドとスコープを使って見渡す。

(もつと弾丸を持ってこれれば……ん?)

ティナは不意にスコープから目を離し、上空を見る。

上空には百体程の飛行型ガストレアがティナの隠れている木の後ろ、森へと飛んでいった。

「挟み撃ち……!?!」

何でガストレアがそんな作戦を!?!と驚くのも束の間、すぐにアジュバンド全体へと無線で連絡を伝える。

「こちらティナです! 上空を飛んで挟み撃ちをしようとするガストレアを発見しました! 数は百体程かと!」

『こつちでも確認している! 木更さん、彰磨兄い、戻れるか!?!』

『問題ないわ!』

『こつちもだ。案外大したことないからすぐに戻れる。』

『分かった。延珠達はすぐにテイナと合流して迎撃に回ってくれ！テイナは足止め頼む！』

『了解!!』

『分かりました!』

テイナはアサルトライフル、AN—94とバレットライフルを入れ替え、AN—94の薬室に弾丸が入ってるのを確認して走り出した。

全シエンフィールドを戻して森の中を探索させる。

すぐにガストレアは確認できた。後十秒でテイナからは見える位置に来るだろう。

テイナは手榴弾を取り出し、口でピンを抜く。抜くのに五キロの力があるピンを歯で抜いたからか折れそうになったが知った事ではない。

「Fire in the hole!!」

癖で叫んでしまったが、手榴弾を投擲、頭を抑えて伏せる。数秒後、爆発。

榴弾の名に恥じぬ程の鉛の破片を撒き散らし、ガストレアにダメージを与える。

すぐにアサルトライフルのバイボットを展開。地面に固定しスコープを除く。

フクロウの因子による夜目を最大まで活かしガストレアを発見。すぐに二点バース

トで弾丸を発射する。

タタンツッ！タタンツッ！タタンツッ！と二発ずつ弾丸が吐き出され、全てがガストレアの脳を貫く。

持ってきたマガジンは現在装填しているのを含め四つ。あまり無駄撃ちはできない。十六回目まで弾が切れ、空マガジンを投げ捨て新たなマガジンを装填。後方へと飛びながらコツキングレバーを引く。

ガシヤンツと音を立てりロードが完了。バイボットを元に戻して片手で二点バーストで撃ちつつ、もう片手で二つ目の手榴弾を手に取り、ピンを歯で抜く。

「Fire in the hole!!」

投げられた手榴弾がガストレアの中心に落ち破裂。数匹のガストレアを物言わぬ死体に変える。

「辛いですね……」

幾ら元序列九十番でもこの物量差は弾薬的な意味でもキツイ。

物凄い勢いで突っ込んでくるガストレアを避けて鉛弾を撃ち込みつつ三つ目の手榴弾を手取る。

だが、そこで赤い影がティナの後ろから飛び出し、一匹のガストレアを打ち砕く。

「大丈夫か、ティナ！」

「延珠さん、来てくれたんですね。」

「もうちよつとでみんな来るぞ！」

延珠は突進してくるガストレアを跳躍して避け、木を足場にしてガストレアへと突貫。脳を貫き死体を蹴りとばす。別方向から突っ込んでくるガストレアを地面に手をつき、回転してその勢いを全て利用して蹴り碎く。

「少し数が多くないか……?」

「二人でやるのならノルマ50ですよ。」

ガストレアの口の中に手榴弾を放り込み、下顎を蹴りあげ口の中で手榴弾を爆発させるといふ鬼畜な事をサラツとしているティナがそんなことを言った。

「あ、翠が来たぞ。」

延珠が自分の来た方に目をやると、翠が延珠程ではないものかなりの速さで走ってくる。そして、ガストレアを確認するとそっちへと全力で走り寄り、一瞬だけ爪を伸ばしてガストレアを三枚おろしにする。

軽く跳躍して斬ったからか、帽子がとれかけたが、両手で抑える。

「これが物を殺すということだ……あ、みなさんももう少しで来ます。里見リーダー達はガストレアをひき逃げしてこっちに向かっています。」

『(ひき逃げ!?)』

ひき逃げと言う単語に驚いたが、あの三人の人外なら走るだけでガストレアを殺す事

「だって出来るという可能性を考えるとすぐに納得できた。」

「あと……夏世さんからティナさんに。」

翠がついでに背負ってきていたショットガンと幾つかのマガジンをティナに渡す。

もうAN-94の弾も尽きかけていたので有難かった。

「ありがとうございます。」

薬室に弾が入ってるのを確認してから近づいて来ているガストレアへと発砲。

ドンツ!!という音と心地いい衝撃と共に発射された弾丸から無数の小型の矢がばら

まかれ、ガストレアを襲う。

しかもそれなりの威力があつたため、何本かがガストレアの脳か心臓に当たり絶命さ

せている。

「フレシエツトですか……いいですね。」

カランカラン。と空葉莢が地面を転がる。さらにティナが発砲。

「あ、みなさんも来ました。」

夜目の効く翠が後ろを見てそういう。

ティナが発砲をやめると、後ろからショットガンの銃声。すぐに前方のガストレアが

スラグ弾らしき弾丸で脳を傷付けられ絶命する。

「オツシヤアアアアア!!」

さらに玉樹がいち早く突貫し、ガストレアの一体を殴りつける。その瞬間、手に装着してあるチェンソーが起動。ガストレアの肉を抉りそのまま心臓を抉って絶命させる。

「へっ、どうだ！俺っちだつてこんぐらいはぐぼあつ!!」

カッコつけようとした玉樹だが、横からサイが元のように見えるガストレアが突っ込んできて玉樹を吹っ飛ばし、木に頭からぶつかって横犬神家になる。

「……し、死んだ？」

「それにしては血が……」

延珠とティナと翠、そして後方で見ている夏世の顔が青ざめるが、玉樹の体がピクリと動き、腕が動いて木から顔を引き出す。

「ふはあつ！数秒意識飛んだぞこのクソガストレア!!」

玉樹がマグナムを抜き、ガウンガウン!!と片手で二発。その二発が脳を傷つけ絶命させる。

そしてそんな無傷な玉樹を見て四人は思った。

こいつも人外だと。

「そして俺達参上!!」

「まずは一匹!!」

「ホワタアアアアアッ!!」

そしてお馴染み人外三人の登場。勝ち確である。

「……戻ろっか。」

延珠のそんな声でイニシエーター五人はすたこらさつさと前線に戻っていった。

「テメエら如きに負けるかよ!」

「ここからはファイバーよ!」

「ウオオオオオオオオ!!」

「ボーイも姐さんも薙沢の兄貴も盛り上がったんじゃねえか!俺も負けてらんねえぜ!!」

人外四人がガストレアを倒し尽くすのに一分も要らなかったとだけ言っておこう。

そして延珠達が森から出てきた。

延珠が軽くノビをしてこれからどうしようかと少しだけ考えた。

「さて……適当にガストレアでも殲滅して……」

そう延珠が口にした瞬間、目の前を銀色の何かが通り抜けていった。

服の一部が巻き込まれて消え去った。

サーツと顔面蒼白になってパクパクと口を動かすが、特に声らしき声は出ていない。

「……な、なんですかあれ?」

「し、知らないわよ……」

「……ドーンハ○マー？」

「プランBは？」

「ありませんよ、んなもん。」

上からティナ、弓月、翠、弓月、夏世である。

だが、その銀色の何かは民警達を巻き込み比喻なしで消し去りながら戦場を移動している。

「ど、どうしましょう?」

「ま、まずはドー○ハンマーのレーザー射出機を持っているガストレアを排除して奪うんです! そうしたらこちらでもドーンハン○を……」

「○ーンハンマーはオフラインだから落ち着いてください!!」

バシンツ! と翠の頭を叩いてツツコミを入れるティナ。

「ならここからハツキングしてドーンハ○マーの機能を停止させれば……」

「だから落ち着きなさい!!」

ガツンツ!! と翠の頭に弓月の拳骨。翠は頭を抑えて蹲った。

そして未だにフリーズしている延珠を夏世が斜め45°。チョップを頭に当てて再起動させる。

「はっ!? よ、よし、妾達も戦うぞ! あのレーザーに注意しながらな!」

「だからレーザーじゃなくてドーンハンマ〇……」

「はいはい行きますよ〜」

走り出す延珠とぶつぶつ言ってる翠の尻を蹴って無理矢理走らせる夏世。それを苦笑いで見ながらも後を追う弓月とティナ。色々とカオスである。

「どりやああああ!!」

延珠が突っ込んでガストレアを蹴り碎く。さらにそこに夏世がショットガンを撃ち込む。

「十六分割……!」

(翠さんってもしかしてゲーオタ?)

翠が他のガストレアを十六分割し、ティナは確実にバレットライフルでガストレアの頭を撃ち抜いていく。

「夏世ちくん、こつちかかったよ〜」

「あ、今行きます。」

そして弓月が蜘蛛の巣を張って近付いてきたガストレアを拘束し、夏世にトドメを刺してもらう。イニシエーターだけでも十分強過ぎるくらいのアジユバンドだが……

「風林火山に風林山なんていらねえ!! 火だけで十分だオラアアア!!」

『イエイエイエイエイエイエイ!!』

そこに人外突撃。しかも全員テンションが明後日の方向に向かって色々とかオスになっていく。明日は蓮太郎と彰磨辺りが今日のことを思い出して頭を抱えることだろう。

そしてイニシエーターズは……

『うわぁ……』

ドン引きである。若干一名空を飛んでいるガストレアの中に混じって飛んでいる（飛ばされている）自分達の中隊長を見て腹を抑えている。

人外共はちよつと遠目の場所へと突撃したのだが、四人の世紀末的な声が五人の耳には普通に届いてきている。

ジャイアントスイングされたガストレアが他のガストレアを粉碎してすつ飛んで行ったり、見えない速度で振るわれ続ける刀にガストレアが間違つて触れて一瞬でサイコロステーキになつたり、彰磨に突っ込んで行って逆に粉碎されたり、玉樹と殴り合い（比喩にあらざる）していたり。もう滅茶苦茶である。

「……もう、ドン引きするしかないわよねこれ。」

弓月の言葉にコクコク。と頷く。

だが、そこにあの恐怖のレーザーのような何かが襲いかかる。

「邪魔するなオルアアアアアアア!!」

だがしかし、蓮太郎の拳で粉碎される。

「いつもの。」

「うわあ……」

「あれ、水みたいなの何かですよ?そこら辺濡れてますし。」

「物理法則もあつたもんじゃありませんね。」

「あれ、人一人が消滅するくらいだったわよね?正面から殴りかかって粉碎したわよ?消えたわよ?」

翠の言うようにもう物理法則もあつたものじゃない。仕事をしていない。

「うわっ濡れた……ペロッ。はっ!?これは水銀!?!」

『舐めたア!?!』

しかも舐める。そして一発で水銀(注こめ毒です)だと断定する蓮太郎。なんで分かるんだとさらにツツコミを入れるイニシエーターズ。

これは水銀だから掠るのもアウトだぞと叫ぶ蓮太郎だが、忘れてはいけない。蓮太郎はそれを舐めた。

しかし本人はへっっちゃらな様子。

「……もう蓮太郎達だけでいいんじゃないかな?」

延珠が腹を抑えながらそつと言った言葉にイニシエーター四人が頷く。

その時だった。木々すら振動で揺れるほどの大音量のナニかの鳴き声が響いた。

延珠達は耳を抑えながら声のした方を見る。そこにはステージVには劣るものの、以前延珠の見たドラゴンのようなステージIVのガストレアよりも遥かに大きいガストレアがいた。恐らくあれがアルデバランだろう。その少し離れた場所には、同じくステージIVと思われるガストレアがうつすらと見えた。

おそらくアルデバランの出したのであろう声にガストレア達が反応すると、民警達に興味を無くしたように去っていく。

逃げていくガストレアを数十体消し飛ばしたりした人外共も深追いはしなかった。

そしてガストレア達は土煙を巻き上げながら去っていった。

「……終わった、のか？」

だがこの日、民警達は少なくともは犠牲を払っていた。

数時間に及ぶガストレアとの戦いは、主に人外達のお陰で想定より多くのガストレアを屠り、多くの民警達が生き残った。

だが、戦いは始まったばかりだ。

トウエンティーファイブパンチ

翌日。東京エリアには黒い雨が降った。

どうやら、この黒色の雨はモノリスが倒壊した事により巻き上げられた砂塵とモノリスの灰が雨に溶けた事により降っているものらしい。

だが、その雨は正しく地獄を表現するにはピツタリの色の雨だろう。

蓮太郎達は朝一に自衛隊や散っていった民警の死体を死体袋に詰めていた。数十分前に要救助者の救助という名目で駆り出されたのだが、それが伝染病を防止するためや、遺族の元にするために死体を詰めているのだとすぐに理解できた。

死体の一つ一つにお疲れ様。と労いの言葉をかけて死体袋に丁寧に詰め込んでいく。

最初から協力していればこんなに死ななかつただろうが。とは思っているが後の祭りだ。

ここに女子供はいない。女性やイニシエーター達は怪我をした民警や自衛隊数十人の治療や介護に向かっている。

何故第二次関東大戦で圧勝した自衛隊が負けたのか。それはアルデバランと水銀を発射していたステージIVのガストレアのせいだろう。

アルデバランがフェロモンのようなものでガストレアを指示しているのは蓮太郎は感覚で分かっていた。何やら変な物がたまに蔓延してるのは分かっていたが、フェロモンだと分かっていたのは自分の虫や生き物に関する知識を漁ってからだだった。フェロモンという答えに行き着いたのもモノリスに蟻のガストレアが捨て身で侵入してきたのを思い出したからだ。

ここから行き着く答えは、戦闘機などは全て水銀のガストレアが撃ち落とすし、地上戦は甲殻類や昆虫のガストレアで固め、接近。そのまま戦車近くへと潜り込み、殲滅。

おそらくアルデバランは指示を出したガストレアに追加でどんな攻撃にも怯むなな指示を出していたのだろう。そうなれば歩兵は食い殺され、戦車は無尽蔵に突っ込んでくるガストレアにやられ、戦闘機は全て撃ち落とされる。

そうしたら残るのはこの惨状だ。

だが、この地獄も次の戦いで終わる。

昨日の深夜の事だった。蓮太郎は戦線からかなり遠い場所で待ち人を待っていた。日付が変更する数分前にその人物は来た。

「お待ちせ、里見ちゃん。」

「よお、美織。」

待ち人とは美織の事だった。彼女は頑丈そうなスーツケースを持っていた。

「これが件の物や。一発しかないからな。」

美織は蓮太郎の前で嚴重なロツクを外して中身を取り出し、渡す。

それは、パイプのような形をした物だった。さらにタイマーのようなものがそれにっ
いている。

爆弾。しかも、この爆弾は司馬重工が持てる技術の全てを費やして作った爆弾だ。

「これがE P爆弾か。」

「せや。この赤い目盛りまで本体を捻ると十秒後、爆発する。威力はアルデバランの
中心で爆発させた場合、アルデバランの欠片も残さず粉碎する……筈やったんやけど、
里見ちゃんのを要望通り空を覆う感じのきこ雲を巻き起こす演出用の爆弾や。本当は
威力も追求しなかったんやけど、時間が足りへんかったわ。ただ、爆発もするから半径
十mは吹っ飛ぶで。」

これが蓮太郎がアルデバラン暗殺用に持っていく『目くらまし』だ。

蓮太郎はこのE P爆弾を使い、ガストレアの上で起爆。爆炎に吞まれながらアルデバ
ランを拳で消滅。そして音速で逃亡し、まるで司馬重工製の爆弾によりアルデバランが
消滅したように見せかける作戦だった。

美織もこの計画が成功したら、司馬重工はあのアルデバランを倒して見せるほどの兵
器を作れる会社として世界に名を売れるので、喜んで賛成し、協力した。

まさにwin-win。不満があるのはアルデバランだけという。

「むふふふ……これが成功したら私等はガツポガツポや。あ、もしそうなたら特別手当を司馬重工から出すから、楽しみにしといてや〜。」

「ああ。何としても成功させてやるよ。」

二人はニタア……と悪い笑みを浮かべると握手をしてそれぞれ来た方向に歩いていった。

ちなみにスーツケースはこれからも使えそうなので貰った。

そんな事がつい数時間前にあつたのを知る者はいない。

途中、ヘリコプターで記者が取材に来たが、玉樹がうるせー邪魔だと言って追っ払った。

半日かけて死体袋に死体を詰め終わり、蓮太郎は戦場から近い外周区の街をチラッと見たりしながら木更と延珠が手伝いをしているといふ救護用に宛てがわれた中学校の体育館に来ていた。

ちなみに、外周区のもう使われないコンビニには野生化したヤギがいたので「ジンギ

スカンだヒヤツホオオオオオオオオ!!」と叫びながら喜々として追いかけて回した。流石に狩らなかつた。

体育館の中に入ると、中は野戦病院のようだった。

ベッドやゴザの上に患者は寝かされ、包帯を巻かれたりしている。そしてツーンとくる薬品の臭い。

最早人の声と機材の声のごっちゃになって酷い雑音になっている。だが、その中で蓮太郎はピョコピョコ動く見覚えのある赤色のツインテールを見つけた。

「あ、蓮太郎蓮太郎!!」

すぐにその赤色のツインテールこと延珠がごつちへと走ってきた。頭にはピンク色のナースキャップが乗っている。

多分、今の延珠に犬の尻尾があつたら振りすぎて何処かへ吹っ飛んでいきそうなほどブルンブルン振るわれているだろう。

延珠は勢い余って蓮太郎に抱き着いた。

「おっと。」

蓮太郎は常人ならずつ飛んでいくほどの突撃を軽く投げられたボールを取るかのごとく軽く受け止める。

「頑張ってるみたいじゃないか。」

「そうだぞ、頑張っているんだぞ！」

「そのナースキャップは？」

「お手伝いしてたらくれたのだ。どうだ、可愛いかな？」

はいはい、可愛い可愛いとあしらっていると、今度はナースキャップを被った木更がお湯の入った洗面器を持ってやってきた。

「里見くん、どうしたの？」

「いや、暇だったからな。」

「そう。ここは暇潰せないわよ？」

「わーってるよ。」

撫でられて気持ちよさそうにしている延珠を尻目に木更と会話する。

「そういえば、董先生に挨拶した？」

「え？先生来てんの？」

「ええ。ほら、あなたの後ろに。」

と、指をさす木更。

まさかと思いつつ後ろを見ると……

「うらめしやー。」

「うおわっ!? 本当にいた!?!」

死人のような顔をした董がいた。蓮太郎は割と本気で董の気配を感じられなかったし、驚いた。

「やあ蓮太郎くん。外もたまにはいいじゃないか。」

「先生……なんでここにいるんだ？」

「要請があつてね。医師たちを統率してくれと。まあ、無視するとグググチうるさいから来てみたんだが、案外いいじゃないか。毎日こんな感じなら私も外に出れるだろう。」

「こんな地獄絵図が毎日ある世の中なんてお断りだ。」

「そうかい？ 私は楽しいと思うがね。」

「やっぱりこの人、人としてズレている。と考える蓮太郎。」

「まあ、もうすぐその二人もシフトが終わる。待つているといい。」

「先生は？」

「ここで寝泊りだ。護衛として君もいるし悲鳴を聞きながら寝れるんだ。これほど安心して寝れる場所はないね。」

「あんたまともに死ねないぞ。」

「何を今更。」

んじゃ。と言つて去つていく董。延珠と木更も手伝いに戻ると言つて人混みに戻つていった。

「あ、そうそう。」

「うぼあつ!？」

だが、何故か董がまた背後から声をかけてきた。

「さつきまで居たんだが、彰磨くんのイニシエーターの翠ちゃん、なかなかいい子じゃないから。」

「あ、ああ。ちゃんとしてるしな。」

「ふふふ……私ととある点で話が合いそうだったがね。」

「は!？」

何で話が合うんだと聞く前に董は笑いながら去っていった。

まさかネクロフィリアじゃないだろうな……と考えたが、あんないい子に関してそれはないと割り切つて蓮太郎は外で待つことにした。

外で待つこと数分。延珠と木更が出てきた。

彰磨の携帯から送られてきたGPSを頼りに道を歩くと、ひとつの寂れたホテルにいった。

センチリーハイホテルと言うらしいが、最早廃墟である。

「……本当にここで合ってるの?」

「合ってるだろ。ま、雨風凌げりや十分だ。」

蓮太郎はそのまま中に入る。

「あ、お兄さん。いらつしやい。」

中に入ると、ハタキを持って三角巾を頭に巻いたティナがいた。どうやらさつきまで掃除をしていたらしい。

「おつ、やっと来たか、ボーイに姐さん。もう飯出来てるからさつきと食おうぜ。」

と、今度はエプロンと三角巾装備の玉樹が出てきた。

余りのギャップの差に蓮太郎、木更、延珠が吹き出す。

「……その反応はひどくね？」

割と本気でショックを受けたらしい玉樹は肩を落として戻っていった。よく見るとお玉を持っていた。

玉樹の戻っていった方に行くと、もう翠とティナ、そして今来た三人以外の全員が席に座っていた。

「翠は？」

「部屋で何かやつてるみたいだ。里見、呼んできてくれ。」

「はいはい。」

彰磨に部屋の場所を聞いてそこへ向かう。

結構他の部屋とは離れた部屋が翠の部屋らしい。

部屋の前に立つと何かの音が聞こえたが、気にせずノックする。

「翠く、メシだぞ〜。」

『ひゃいひゃい!?!』

が、直後。ドツタンボタンと何かをひっくり返したりする音が響いてくる。

「何してんだ?」

それに気になり、ガチャッとドアを開ける。丁度その時、何か滑ってきて蓮太郎の足に当たった。

「ん?これは……ゲームの箱?」

「あつ!?!」

蓮太郎がそれを持って表を見ると、そこにはゾンビの絵と散る血の絵。そして右下に

R-118の文字。

エロゲには見えないため、答えは一つ。グロゲーである。

裏を見れば、ゲーム画面のスクリーンショット。一人称視点でゾンビを撃ち殺しているホラー&グロ要素がたっぷり詰まったゲームらしい。

ああああああ……と小さな声を上げる翠。

さらに翠が持っている物に目をやると、そこには携帯ゲーム機や様々なジャンルのゲーム。格ゲーから蓮太郎でも知っている国民的RPG、さらには天誅ガールズのゲー

ムや美少女ゲーや乙女ゲーまである。一応エロゲーらしきものは入ってなかった。

「翠…………お前…………」

「うううう…………秘密にしたかったのに…………」

どうやら、翠はかなりのゲーオタだったらしい。

翠は大きなバッグを二つ持ってきていたが、一つは生活必需品、もう一つは超大量のゲームだろう。

董の話が合うという意味が、ゲームの話が合うという事で合点がつくと、安心したよ
うな、呆れたような溜息しか出なかった。

「…………ごめん。」

蓮太郎は扉をそつと閉じた。

『にやつ!!ご、誤解なんですく!これは、その…………えつと…………趣味なんですく!!』

「翠。それ、自白。」

『ふにやああああああ!!』

ガンガンガンガン!!と部屋から痛そうな音がする。チラツと中を覗くと翠が壁に向
かってヘッドドラムしていた。

血が出ないうちに止めろと言いたかったが、言えなかった蓮太郎だった。

翠が出てきたのは数分後で、顔は真っ赤で額には絆創膏が貼ってあった。多分血が出

るまでヘッドドラムをしたのだろう。

夕食場まで翠と戻る。

「里見くん、なんか凄い音が聞こえたけど……」

「あゝ……色々あつてな。」

翠が帽子を目深く被りなおす。顔は真っ赤。

そしてそれを見て例の勘違い。

「まさか……里見くん……こんな所で幼女を……」

「ちげえよ!!」

蓮太郎、全力のツツコミ。だが、彰磨は翠の様子を見てあつ。と声を出した。

「里見、翠の大量のアレを見たのか?」

「ああ。多分それで合ってる。」

翠はそのまま彰磨の隣に座った。

「彰磨くん?アレって何なの?」

「ん?超大量のゲームの事さ。」

「ふにやつ!?!」

まさかの展開に翠が驚きの声を上げる。

「ゲーム……?」

「ああ。翠は重度のゲームオタクだな。そりゃあもう、グロゲーから恋愛ゲーま……」

「ニャアアアアアアアアアアアアアア!!」

バリイツ!!と翠の爪が彰磨の顔面を引っ搔く。

「ギャアアアアアアアアアアアア!!」

そして転げ回る彰磨。クールキャラが崩壊している。

翠はフー、フーと息を荒らげてる。耳もピーンツと立っていることだろう。

「翠、ゲームが好きなのか?」

「にやつ!?ち、違います!好きじゃないですよ!」

「み、翠は新作のゲームが発売する日は早朝から並んで購入するほどのゲーム好き……」

「フシヤアアアアアアアアア!!」

「うわつ、ちよつ、何をするやめ……」

ザクツ!ザクツ!バリツ!!と痛そうな音が響く。余りの惨状なため、丁度彰磨の隣に座っていた延珠と夏世の目を蓮太郎が塞いでいる。蓮太郎もそっぽ向いている。

反対にいる他のメンバーからは飛び散る血と彰磨の手と血に染まっている翠の爪が見えた。

数分後。

「フー……フー……」

顔を真っ赤にして真っ赤に染まった手を布巾で拭いている翠と顔が見せちゃいけない事になっているため、モザイクがかけられた彰磨が座っていた。

「ま、まあこんな感じだ。重度のゲーオタだが付き合いは変えないで欲しい。」

喉もやられたのか声が酷いことになっていたため、彰磨は現在ボイスチェンジャーを使っている。シールドだ。

「と、とりあえず飯食おうぜ！ほら、手を合わせて！」

玉樹が機転を利かせてまだ湯気の出ている夕食を食べようとする

その声に皆が手を合わせ、

『いただき……』

「失礼します！」

唱和しようとしたところで誰かが入ってくる。

「里見リーダーはいらっしゃいますでしょうか？」

「えー、里見リーダーならこちらでございませう。」

「ぶっふう!?だ、誰っ……」

裏声を使ってさらに顔にモザイクのかけられた彰磨が対応すると、訪問者は吹き出して笑い出した。蓮太郎達もそっぽ向いて口を抑えて体を小刻みに震わせている。

「が、我堂団長からし、至急本部へと来るようにと……」

「すぐに行かせまーす。」

「ぶっはっ!! しゃ、喋らないでくれ頼むから……」

「こちら葛飾区亀有公園前〇出所でございまーす。」

その声でこの場にいる全員の腹筋が崩壊し笑い転げていたのは言うまでもない。

戦犯、彰磨。

「ようやく来たか。」

中学校の本校舎の一室に、我堂は部下たちと共にいた。

赤色の外骨格がガストレアの血で塗られてるようにも見えた。

「掛けたまえ。」

我堂の言葉に従う。が、その時我堂にどこか違和感を感じた。

よく見れば、我堂の足が片方ない。

「あんた、足は……」

「アルデバランにくれてやったわ。」

イニシエーターの壬生朝霞のせいで何処かへ行方不明になっていたと思っていたら

アルデバランと一戦交えていたのか。と呆れたような感心したような感じになる。

「あと、英彦が世話になったようだな。」

と、今度は額に青筋立てて言ってくる我堂。

しばらく考え、わざとらしく思い出した。我堂英彦は蓮太郎がイニシエーター共々轢いていた。

「あゝ……なんか凄いテンションになってたから……」

「お陰で足骨折してこの戦は戦えんわい。」

「ほんとすんません。」

普通に頭を下げて謝る。

「まあ、あいつは本当は画家になりたかったようだし、この際転職させる。」

「サラツと言つても普通はできねえよ。あと、アルデバランについてだが、あいつはフェ

ロモンでガストレアを操作しているのが分かった。」

「ほう？根拠は？」

「現代の生み出した天才、室戸董先生のお墨付きだ。」

「ふむ……」

名前を借りてすんません。と心の中で謝る。何故か報酬は君の体で。とか言っている董が見えたが気のせいだと思う。体を貸したら何されるか分かった物じゃない。

「ならば報酬として私は君に一つ有益な情報を公開しよう。」

その時、周りにいた我堂の部下が話してはいけない、黙っているべきだと声を上げるが、我堂は手で制すだけだった。

「アルデバランの事だ。」

「ほう？」

「アルデバランは不死身のガストレアだ。倒す術はない。」

不死身。その言葉に蓮太郎の心が踊った。

本当に不死身なら、サンドバッグに出来るし、なにより自分の拳で死なないから、久しぶりに全力全開で互角に戦える相手が出来るかもしれないと。

「私は奴の脳と返す刀で心臓を貫いた。だが、奴は死なず、再生した。それに呆気取られている間に足をやられた。恥ずかしい話だ。」

つまりアルデバランが持つてるのは超再生。

不死身ならなあ……とガツクリする蓮太郎。超再生だったら何処ぞのバトル漫画みたいに細胞の欠片も残さず消し飛ばせばいいだけの話だ。

「驚かないのだな。」

「ま、ステージVの中でもかなり厄介なタウルスの軍団の右腕だからな。そんなくらいはあるかなど。」

ただ、驚くに値しなかつただけである。

「んで、あの高圧水銀をぶっぱなすガストレアに関しては？」

「奴に関しては情報がないのでな。つい先程までガストレアXと呼ばれていたが、プレヤデスと呼ばれるようになった。」

「プレヤデスねえ。と蓮太郎はよく星の名前で名付けたもんだと思うが特に関心は抱かない。」

「時に里見リーダー。君は何故ここに呼ばれたか分かっているのか？」

「命令違反だろ？知ってるよそんなくらい。」

蓮太郎は一つ命令違反をしていた。それは、我堂英彦の命令を無視して背後の部隊を叩いた事だった。

軍隊では如何なる事でも命令違反は重罰。軍隊に近い組織であるこのアジュバンド軍団の中で命令を無視したら何かあることくらい分かっていた。

「ほう、自覚はあるか。」

「まあな。で、だ。俺は何らかの罰を受けるだろうな。それが極刑だ。だったら、賭けてみねえか？」

蓮太郎の軽い上から目線の言葉に周りから野次やら何やらが飛ぶが、一度睨んで黙らせる。

「プレヤデスとアルデバラン……邪魔だとは思わねえか？」

ざわ……と周りが騒がしくなる。

「……つまり、君は一人でプレヤデスとアルデバランを倒してくると？」

「そうだ。別にいいんだぜ？あのステージVの一体、スコープオンを倒した俺を使わずに殺したって。そうしたらあの不死身野郎を倒す術なんて……ねえんじやねえのか？」

「だが、君が倒せるとは限らない。」

「いや、倒せるね。」

「根拠は？」

「俺の力だ。」

蓮太郎と我堂は睨み合う。

だが、不意に我堂の頬が少しだけ緩む。

「ならばやってみろ。」

「……長政様、よろしいのですか？」

「構わんさ。元より散る命だ。華々しく散らせるのも良かろう。」

「おい、死ぬ前提かよ。」

「ならば生きて帰ることが出来たのなら……ぱーちーでもするか？」

「長政様、言い方が親父臭いです。」

「ならケンタツキーフ○イドチキン予約しておけよ。俺達は沢山食うぜ。」
「地味に高い……」

「よからう。ケンタツ○ーフライドチキンなりバーガー○ングなり奢ってやろう」
「長政様、バー○ーキングはガストレア大戦のせいでもう絶滅危惧です。」

何気に朝霞がツッコミに入ったが、この二人は聞いちやいない。

「そういえば、あんたのイニシエーター、昨日はエラく暴れてたが今は大人しいのな。」
「ああ……朝霞は剣を持つとかなり野蛮な性格になるようだな。だが、剣を持ってないときはかなりのオタ……」

その瞬間、朝霞の腕が一瞬で伸び、我堂の首を捉える。

「長政様あ？余り口が過ぎると早死にしますよお？」

「い、イエスマム……」

イイ笑顔で言った朝霞に思わず敬語な我堂。

「と、取り敢えずこのPDAにアルデバランとプレイヤーデスの場所の情報は入っている……それと必要最低限の荷物は後で持っていかせよう……」

「分かったらとつとと出て行ってくださいねえ〜？」

「お、おう……とりあえず○ンタツキーとバーガーキ○グは楽しみにしておく。」

蓮太郎が室外に出てから数秒後、お仕置き開始の音我堂の悲鳴が聞こえてきた。

追求しようとしたが、何か飛んできそうなので止めておいた。

だが、蓮太郎はニヤついていた。何故なら、

「計画通り……!」

そう、全部計画の内だったからだ。

わざと命令を無視してさらに我堂英彦を轢き、我堂のヘイト値を上げて極刑ではなくアルデバランとプレヤデスの単独殲滅を命令させる。それが蓮太郎の作戦だった

蓮太郎は校舎から出ると、聖天子に連絡を繋いだ。

『里見さん、どうか致しましたか?』

「いや、俺の建てた計画が上手く行つてな。おそらく、明日中にはアルデバランとプレヤ

デスを殲滅できる。」

『本当ですか!?!』

「ああ。目くらまし用の爆弾も手にある。聖天子様はふんぞり返って俺達の方に賭けてくれればいい。」

『ふんぞり返りはしませんけど……ですが、安心しました。こちらで面倒な事をしなくてもよくなりましたし。』

「そつちが本音だろあんた……まあ、プレヤデスとアルデバランを消し飛ばしたら連絡入れるから。」

『はい、分かりました。朗報をお待ちしています。』

ここでどちらからともなく、通話を切る。

そして、蓮太郎はニヤニヤしながらホテルに戻る。

「あ、里見くん。どうだった?」

「アルデバランとプレヤデスの討伐を命じられた。つー訳で終戦も近いぜ。」

「つて待て待て!!なんでそうなった!?!」

自然にそんなことをいって冷めてしまった夕食に手を伸ばした蓮太郎だったが、この中だとまだ常識人の玉樹がツツコミを入れる。

「いや、なんつーか……わざと命令違反とかして我堂のヘイト値ガン上げして誘導した。」

「うっわあ……」

わざと命令違反してたのかよ……とドン引きの玉樹。

まあ、そんなくらいはするかな。と色々と麻痺してる延珠、木更、夏世、ティナ、彰磨。考えるのをやめた弓月。翠はもう隠すことをやめたのかどうどうと携帯ゲーム機で遊んでいる。

「つてな訳で今日の深夜に出てくから。アジユバンドは解散つて扱いになるだろうから全員好きにやってくれ。」

「サイコロステーキが幾つ出来るかしらね〜」

「北斗神け……あつ、間違った。俺の我流戦闘術が火を吹くな……」

「今北〇神拳つったよな、薙沢の兄貴。間違いなく言ったよな。」

「妾達は……こそこそしてるか……」

「ドーンハ〇マーください。」

「ありません。」

まさに人外アジユバンド。戦場の最前線でもこのほのぼのである。

もう片桐兄妹も翠も感覚が麻痺してる証拠だった。

「ふわああああ……ねっむ……」

蓮太郎は皆が寝静まった夜中にホテルの玄関で一人、我堂の部下を待っていた。

既にアルデバランとプレヤデスの位置はPDAで確認済み。EP爆弾もポケットに突っ込んだ。今すぐに行きたかったが、荷物を渡しに来ら消えていたと報告されて逃げたとか言われるのが嫌だったため、律儀に待つことにした。

ティナから譲ってもらった眠気覚ましのカフェインを二十粒くらいポリポリと咀嚼

しながら我堂の部下を待つ。

大体十分後、我堂の部下がやって来てナツプザックを投げ渡した。

中を確認すると、携帯食料やサバイバルナイフ等、サバイバルするには十分な物資が入っていた。

「健闘を祈る。」

心にもないであろう言葉を吐いた我堂の部下はそのまま去っていった。

蓮太郎はナツプザックを背負って携帯食料であるレーションを味が物足りねえ……とかいいながら器用に食べ歩きしつつアルデバランとプレヤデスの元へと向かう。

何気に5食分程入ったので後先考えずにバクバク食べる。

川沿いの獣道のようなところを粉末オレンジジュースに微妙な顔をしながら歩いていると、横からガストレアの気配がした。

「あつ、ちよつと待て。今飲んでるから。」

ちなみにプレヤデスのいる森は目の前。ガストレアが居てもおかしくはない。

蓮太郎が声を出したためか、横の茂みから狼が素体らしいガストレアが何匹も現れ、蓮太郎を囲む。どうやら餌と認識されたらしい。

ちなみに、レーションに夢中で気付いてなかったが、ここに来るまでにこの狼のガストレアが付けたであろう歯形や食い散らした骨のが散乱していた。

「とりあえずワンパンで片付けるか。」

蓮太郎はオレンジジュースを持ったまま拳を構える。

そして、軽く両足に力を入れた瞬間、ガラツと何かが崩れる音がした。

「は？」

そしてやってくる浮遊感。そして岩の壁。

状況を分析したら、蓮太郎はかなり川に近い場所を歩いていた。しかも雨も降ってたから地面も柔らかくなってただろう。

つまりは。

「水落かがぼぼぼぼぼぼ!!」

ドボンツツ!!とかなり水量や水流が増した川に蓮太郎が落ちる。

「うげっ、飲んじまアバーツ!!」

さらに流され汚い水が胃に入る。なお、腹は壊さない模様。

しかも水中に未開封のレーションが散乱する。

「ガボボボオオオン」

水中で動き回ってレーションを片っ端から回収する。

動きにくい水中でやつとレーションを回収し終わり、近くの陸地に移動する。

「ふう……オレンジジュースは無くなったがレーションだけは回収できた……」

だが、もう夜明けも近い。

一旦寝るか。と思つて近くに隠れる場所はないかと探していると……

『グルルルル……』

「わーお、団体五十名様。」

なんとさつきの狼ガストレア達が群れでお出迎え。

「……まあ、腹ごなしには丁度いいかな？」

蓮太郎はレーシオンをそつと横に置いてトントン。と少しだけジャンプすると、足力を込め、走る。

一瞬で音速を超えた蓮太郎はまず親玉らしきガストレアの前に移動する。

「フツッ！」

そして普通のパンチで後ろにいたガストレア共々親玉を消し飛ばす。さらにそこから一秒もかけずに音速で移動。音速で移動しながらワンパンで全てのガストレアを葬る。

蓮太郎がレーシオンを置いてから大体五秒後。団体五十名様はミンチとなった。

「まあ、腹ごなしにはなつたつちやあなつたが……とりあえず眠てえ。」

流石にここで寝ると偵察にでも来たガストレアに服を食われて（肉体は食われぬ）レーシオンも持っていかれて変態扱いされかねるので流石に安心して寝れる場所は確

保したい。

レーションをナツプザックに戻してどうしようかと思つてると、不意に後ろで人の氣配がした。

相手の反応を待つっていると、十秒ほど経ってから、相手から声をかけてきた。

「やあ、我が友よ。」

「よつ、蛭子影胤。早速だが仮面割らせろ。」

「謹んでお断りしよう。前にも言ったが高いんだよこれ。」

「だから割りたい。」

「君も十分キチガイだよ。」

やって来たのは小比奈を連れた影胤だった。小比奈はミンチにされた狼のガストレアをツンツンつついていた。

トウエンテイーシツクスパンチ

「なるほど。アルデバランとあの水銀のガストレア……アルデバランの暗殺か。実に君らしい。」

「そんな訳でお前らと喧嘩してる暇はない。」

「まあ、私も小比奈も今日はただのピクニックに来たんだ。私が君と会ったのは単なる偶然だし、何より今の私は病み上がり。イマジナリーギミックを使うとどんな悪影響が出るかわからないんで私も喧嘩したくはない。もし顔の骨がまた歪んだらその日の内にゴートウーベツドき。」

蓮太郎と蛭子親子は焚き火を囲んでレーシジョンを口にしていた。

小比奈は日本の、蓮太郎と影胤はアメリカのレーシジョンを食べている。小比奈の背負っていたナツプサックは隅に置かれている。

影胤は仮面を外して蓮太郎に顔を見られないように食べている。

「顔見せねえのはなんでだ？」

「そうだね……君が後悔するからだ。」

「ならやめとく。」

「その判断は上々だ。」

影胤はそれだけ言うのと無言でレーシオンを食べる。

この場所はあまりガストレアがこないらしく、少なくとも陽が昇るまではここにいても襲われる心配はないという。

まあ、寝てる時に襲われても朝起きたら服がビリビリになって全裸か半裸になってるかなので危機感を感じる事なんて服が破られること位しかないのだが。

あと、小比奈の刀は何気にもう二本追加されて四本になっていた。

「ねえ、あんた。延珠は？死んだの？」

いきなり小比奈が話しかけてきた。レーシオンはまだ半分ほど残ってる。

「あんたって……歳上だぞおい。」

「関係ないもん。で、延珠は？」

どうやら蓮太郎の事は一切合切興味無いらしい。

「生きてるよ。殺させるわけ無いだろ。」

「そうなんだあ……」

小比奈が笑顔を浮かべる。

会いたいな、斬りたいなと物騒な事を言っているがこの際無視。何か言ったら物騒な事を叫び続けかねない。

「それで、暗殺はいつ行う気だい？是非とも見てみたいね。」

「ここで仮眠とつたらとつとプレヤデスの心臓ぶっ潰して襲ってくるガストレアを血の霧に変えながらアルデバランに爆弾投げつけて爆発する寸前に連続普通のパンチかマジパンチで消す。」

「全く、キチガイな発想だね。嫌いじゃないよ。」

「いつそ嫌ってくれ。」

暫く無言のままレーシジョンを食べ進め、食べ終わってから数十分経った辺りで小比奈が影胤に寄り添い、影胤の膝に頭を乗せるとそのまま眠りについた。

「懐かれてんな。」

「親だしね。」

小比奈の寝顔は普通にいるそこら辺の女の子にしか見えない。

だが彼女が起きて刀を握れば殺人鬼に変貌だ。

「……お前達、数日前に民警のペアを斬っただろ。」

「はて、そんな事あったかな？」

「とぼけるな。」

「ヒヒヒ……そうだよ。突っかかってきたからついね。」

「……お前ら、彰磨兄いに見つからなくてよかったな。見つかってたら殺されてたぞ。」

「彰磨？聞いたことないね。どんな男なんだい？」

「北斗神拳○承者。」

「おやおや、勝てる気がしないね。」

蓮太郎と影胤の会話はここで途切れた。

二人は睨み合うようにお互いに視線をぶつける。

「……その子、どうやって育てた。」

「どうやって、とは？」

「普通に育てりや殺人鬼になんてなりやしねえ。」

影胤はなに、簡単な事さ。と小比奈の髪の毛を撫でながら話を綴る。

「私は悪魔を生み出したくてね。殺し合いをさせたのさ。」

「悪魔……だと？」

「そうだ。私は五人の女を孕ませてちよつとした事を使って呪われた子供たちを産ませた。そして成長した頃合いで殺し合いをさせたのさ。腹違いの姉妹というのも知らせずにね。死んだ子供と小比奈を産ませた女は既に殺してある。」

その瞬間、蓮太郎が影胤の襟を掴む。小比奈が起きないように振動を与えず、だ。

「お前……自分のしたことが分かってんのか……！」

「分かっているとも。腐れ外道のキチガイがするような巫山戯た行為だとね。」

「分かってて何でやった……!」

「やってみたかったからさ。まあ、その結果生まれたのは天使だったよ。邪悪な、ね。」

パパ、大好きと寝言を言う小比奈がなんだか可哀想にも見えてきたが、蓮太郎は何も言わずに影胤を離して寝転がった。

「明日は早い。俺はもう寝る。」

「もう二時間ほどで夜が明けるけどね。」

「……」

結局寝ましたとき。

起きたのは日が天辺に届きそうな時だった。寝過ぎた……と落ち込む。

寝すぎたのに落ちそうな臉をなんとか押し上げて朝食（昼食）のレーションを食おうと思ったが、最後のレーションが無くなった。ついでに蛭子親子もいなかった。

ナツプサクには特に異常がないため、おそらく蛭子親子がレーションを食ったのだろう。周りを見るとレーションの空箱があった。

「くそっ……」

ナツプサツクを漁ったらあったスナツク菓子を食べながら水を飲む。

E P 爆弾があるのを確認して蓮太郎はもう用のなくなつたナツプサツクを放置してアルデバランの元へと行こうとする。

「おやおや、別れの挨拶もなしかい？」

「……いたのか。」

が、また後ろから影胤に声をかけられた。

振り向かずに会話を続ける。

「小比奈がお腹すいたと言つたのでね。レーションは頂いた。」

「……構わねえよ。食わなくなつてアルデバランとプレヤデスは殺せる。」

「だが、それだとなんだか申し訳ないのでね。ここにカレーがあるが、食べるかね？」

そこで振り向くと、影胤の手にはインスタントのカレーと飯盒があつた。

おそらく、小比奈のナツプサツクに入つていたのだろう。

ここで食わせてもらえば貸しを作ることになると一瞬考えたが、よく考えれば小比奈にレーションを食われているのでイーブンだ。

別に毒があつたところで即死級の毒なら多少胃に違和感が出てくるが、問題はない。

「……貰うよ。」

「これで貸し借りなしだ。」

「知ってんよ。」

数十分後、出来上がったカレーを食べ終えた蓮太郎は立ち上がって歩き出した。

「何処に？」

「俺を待つてるクソみてえに可愛いガストレアちゃん達に拳のプレゼントをしてくる。」

「なら私達も行こう。」

「え、もう帰りたいよ。」

「小比奈、私達はアルデバランとプレヤデスの倒される歴史的瞬間を見れるんだ。この程度で根を上げちゃいけないよ。」

「む………はーい。」

なんか勝手についてくる事になってるし。と蓮太郎は額に手を当てる。

が、何を言っても彼等は頑固な汚れの如くついて来るだろう。

蓮太郎は行くぞでめえら。と声をかけて歩き出した。蓮太郎のナツプサックは投げ渡された。ポイ捨てはいけないと言われて。

まだ霧のかかる獣道を歩き、時々PDAで再び場所を確認しつつ先にプレヤデスの方へと向かう。

プレヤデスは単純に頭を消し飛ばして終わりだ。

影胤が足手まといになり慎重に進むことになったせいとか、ガストレアの声が聞こえた

のは夕方に近い時だった。

別に見つかっても蓮太郎がいるし、小比奈もいるので安心なのだが、蓮太郎達が見つかったせいでアルデバランが動いてしまったら暗殺に失敗する可能性もある。

「パパ、近いよ。」

「そうだね。ガストレアの声が聞こえる。」

「知ってる。影胤、斥力フィールドはどうだ？」

「数回、かな。君から貰ったダメージが大きすぎてね。」

「そのまま死んじまえ。」

数分歩くと、森の中に赤色の光を見つけた。

さらに歩くと崖になっていたが、崖の下に赤色の光を大量に見つけた。ガストレアの軍勢だ。

その軍勢の中にアルデバランとは違う明らかにステージIVと見れるガストレアを見つけた。プレヤデスだ。

「どうするんだい？」

「正面突破。襲ってくるガストレアは皆殺しだ。」

「なら私達はここで待ってしよう。」

「そうかい。連れないな。」

「イマジナリーギミックが使えたら同行するんだがね。」

小比奈はどうする？と影胤が聞くと、パパと一緒にいるという答えが帰ってきた。

蓮太郎は物音立てんなよ。と注意を促すと、走った。

(※ここからはお好きな処刑用BGMを聞きながらご覧下さい。)

パンチ!!と空気の爆ぜる音。力を既に開放している小比奈の目ですら、見えなかった。残像が幾つも残っていた。

「普通のパンチ！」

次の瞬間、ドゴオツ!!とまるで重機が壁に時速何十キロで突っ込んだような轟音。そして、ベチャアツ!!と液体が地面に当たる音。

プレヤデスは蓮太郎のワンパンで脳漿と血と肉と骨を撒き散らして倒れた。

プレヤデスからしたら気が付いたら死んでいたという状態だろう。しかも、普通のパンチでも威力は余剰だったのか、プレヤデスの体は半分が血肉と化していた。

「さて……ガストレア共……全滅だ。」

次の瞬間、襲ってきてもないガストレアへと人外が牙を向いた。プレヤデスの死骸を蹴り飛ばしてプレヤデスを囲っていたガストレアの一部をプレヤデスの死骸で押し潰す。そこでようやく敵がいると分かったのか、ガストレア達が咆哮を上げる。

「うるせえんだよ!!」

そして蓮太郎は真後ろのガストレアへと全力の指弾。

ズガアンツ!!とまるで戦車砲の砲撃音のような音をあげて飛んだ空気の塊はガストレアをミンチへと変え、影胤達のいる崖の下の壁に何十メートルという深い穴を開けた。小比奈がパパ、怖い。と言った。もつともだ。

そして蓮太郎は右のガストレアの軍団へとターゲットを変える。

「必殺『マジシリーズ』、マジちやぶ台がえし!!」

蓮太郎は地面に手をつ込み、地面を一気に持ち上げ、上へ投げる。

地鳴りとともに地面が宙に浮き、ガストレア達が困惑する。

「さらにパンチ!!」

そして蓮太郎の拳が唸る。

シャドーボクシングのように空中で振るわれた右ストレート。そこから衝撃波が生じ、持ち上げられた地面ごとガストレア達を衝撃波で文字通り消滅させる。

小比奈がうっわあ……と年頃のドン引き。

そして蓮太郎は最後に残った(プレヤデスの死体があった位置から)左側のガストレアをロックオン。

今度は小細工なし。ソニックブームを起こしてガストレアへと肉薄。パンチ。

ドゴオンツ!!と炸裂音。拳を当てられたガストレアは余りの威力に破裂。さらにそ

の衝撃はガストレアを破裂させるだけに留まらず、その後ろに居たガストレアを五体破裂させる。

拳を振るつたあとの蓮太郎へカマキリ型のガストレアが接近し、その鎌を振るう。だが、蓮太郎はそれを回し蹴りで蹴り折る。蓮太郎は勿論拳だけでなく蹴りだって強い。バキヤツ!!と折られた鎌は横へ吹っ飛んでいき、進行方向にいたガストレアの脳天を串刺しにする。

そして蹴りのモーションをすぐに解いてワンパン。カマキリ型のガストレアは破裂した。

だが、その瞬間地面が崩れる。

崩れた地面から現れたのはミミズに口がついたようなガストレア。全長はは見えないが、正面から見ただけならステージⅢと思えた。

普通なら死を覚悟する瞬間だが、蓮太郎は笑う。

「オラアツ!!」

真下へと拳一閃。衝撃波が巻き起こり、ミミズ型ガストレアを粉碎。蓮太郎はその衝撃を殺さずに受け、飛ぶ。

飛んだ蓮太郎はそのまま空中で体勢を変え、時に空を蹴って落ちる場所を調整。そして調整が終わったところで空中を蹴り、衝撃で地面へ一直線。

一体のガストレアへと流星となった蓮太郎が襲来。ガストレアを殴り、その勢いのまま地面を殴る。

超巨大なクレーターが出来上がり、ガストレア達の体が浮く。

「連続普通のパンチ!!」

そこで蓮太郎が連続普通のパンチを使う。

視認不可の速度で振るわれたその拳は全てのガストレアを一体一体粉碎。

クレーターが出来、ガストレアの体が浮き、着地するまでの僅か数秒のあいだにガストレアは全て肉塊と化した。

ベチャツ!!と音を立てて落ちる肉塊。ガストレアだった物。

プレヤデスの周りにいたガストレアは大体300。蓮太郎が殲滅に要した時間は僅か1分。

先日の戦いでガストレアは自衛隊の隊員をガストレア化して仲間を増やしたため、残ったガストレアはプライゼロの2000だった。だが、この1分の間に1700に変化した。

その時、蓮太郎が原因ではない地鳴りが起こる。

「なんだ!?!」

「里見くん、どうやらアルデバランが動いたらしい。君が殲滅してる間に逃げるように

移動し始めたよ。」

影胤が移動してきて蓮太郎に説明。影胤が自分の物らしいPDAを出し、蓮太郎に見せると、赤色の光点が東京エリアへと向かっていった。

「……行ってくる。」

「ならこれを持っていくといい。餓別だ。」

影胤はPDAをそのまま渡した。

「私達は後で民警側で参戦しよう。」

「なに？」

「君を見てるとどうも血が騒いでね。久々にガストレアを大虐殺しようと思っただけや。」

「顔は大丈夫なのか？」

「危なくなったら勝手に抜けさせてもらおう。」

「ってか、道中は大丈夫なのか？」

「掃除は任せたよ。」

「くそが。俺はル○バか何かかよ。」

影胤はほら、行くといい、○ンバくと蓮太郎の背中を押した。

蓮太郎は援護感謝するぞご主人様。と言うとアルデバランへと走り出す。小比奈は

ずっと影胤の後ろで人ではないナニかを見る目で蓮太郎を見ていた。

蓮太郎が数十秒、PDAを見ながら走っていると、巨大なガストレアを発見した。アルデバランだ。

蓮太郎は更にスピードを上げる。道中いたガストレアは轢き逃げした。挽肉になった。

そして、アルデバランがEP爆弾を投げて届く距離に見えるようになった。

蓮太郎はニヤニヤしながらナツプサックを一旦置いてEP爆弾を捻る。タイマーに00:10と表示される。

「くたばって俺のボーンナスになりやがれエエエエエ!!」

ぼーい。とEP爆弾が投げられる。

捻ってからきっかり十秒後。ピカッ!!とEP爆弾がアルデバランの真上で光り、炸裂。

爆炎が舞い上がり、アルデバランを包み込む。蓮太郎は爆炎が消えぬ内に炎の中に音速で突っ込む。

アルデバランは炎の中で焼かれながらも再生していた。

「月まで飛んでいけ!必殺『マジシリーズ』!!」

炎の中で蓮太郎は叫び、アルデバランの真横につき、拳を握る。

「マジパンチツツツ!!」

爆発音の中で更なる爆発音。

地面へではなく、空へ向かって放たれた拳はアルデバランを文字通り消滅させ、衝撃波が雲を打ち抜き、進路にあつた人工衛星だつたものを打ち抜き、デブリを打ち抜き、小惑星を破壊し、宇宙のどこかで止まった。

蓮太郎は久しぶりに本気で拳を放つてスッキリした気分になつた後、音速でその場を後にした。爆発を遠くで確認すると、きこの雲が上がっていた。炎は無くなっていたので、本当に爆煙を上げるためだけに作られたのだろう。爆炎があつたのは数秒程度だ。

蓮太郎はすぐにナツプサックを回収し、聖天子へと連絡を付ける。

『里見さん！成功したんですね!』

どうやらきこの雲を見ていたらしい聖天子が興奮気味に蓮太郎に問いかけた。話しかける前に話しかけられた。

「ああ。今アルデバランとプレヤデスの暗殺に成功した。空爆も出来るしガストレアも司令塔を失つて倒しやすくなる。」

『流石です里見さん！すぐにアジュバンドに戻つて戦線に戻つてください！我堂団長には里見さんにより運用された司馬重工の新兵器によりアルデバランとプレヤデスの殲滅に成功したと言つておきます!』

「分かった。」

通話を切って連絡用端末をナツプサックに突っ込む。

ナツプサックを背負い、蓮太郎は走り出した。

民警達は困惑していた。夜になったらガストレアはまた攻めてくるのではないかと震え恐れていた（一部を除いた）。民警達は突如響いた爆音に驚いていた。

アルデバランが居るらしい方向から上がった爆発はまるで核爆弾のようにきのこ雲を上げている。一部の爆煙が何故か吹っ飛んだが、そんなもの誰も気にしなかった。

あれは何だ。新手のガストレアか。ゆるるさん!!等々、民警の反応は様々だった。

我堂も困惑していた。まさか里見蓮太郎があれを?と思うのも束の間、我堂の通信端末に連絡が入った。なんと聖天子からだった。

通信には慎重に出た。

『我堂団長、里見蓮太郎さんが単独でアルデバランとプレイヤーデスを司馬重工の……司馬重工のツ、兵器での殲滅に成功しました。』

司馬重工という単語をヤケに強調してきたので若干引いたが、兵器に頼ったとはいえ本当に倒してくると思わなかった我堂は素直に驚いていた。

聖天子に礼を言つて通信を切つた我堂は未だ困惑しているアジユバンド達へと声をかけることにした。

「聞け！憎きアルデバランとプレヤデスは先程の爆発により倒れた！」

そんな我堂の声にさらに民警達の困惑の声が強まる。が、我堂がそれを声で制する。

「勝機は我等にあり！指揮官を失つたガストレアは最早案山子も同然！この一日でこの戦いを終わらせようぞ!!」

しばしの静寂。そして歓声。何故か少しだけ聞こえる怒声。

勝てる。我堂は確信した。

この勝負は人類の勝ちだ。

「あれ、里見くんのせいよね。」

「……れんたろー、爆発も起こせたんだなあ。」

「延珠さん、遠い目しないでください。」

一方、蓮太郎のアジユバンドは延珠が遠い目で爆発を見ていた。

「じゃあそろそろ帰ってくるかしら？」

「あそこからここまでは十秒つてところか。」

人外が蓮太郎の帰りを待つ。が、噂をすれば影と言うべきか。ガサガサと横の茂みが動いた。

「おい、帰ったぞ。」

蓮太郎の声だった。

「あ、帰ったのね里見く……ひやつ!？」

茂みから蓮太郎が出てきたのだが、木更はすぐに自分の目を隠した。

「どうしたのだ？木更……うおう……」

対して延珠はマジマジと。

「ど、どうしたんだ？」

ちなみに弓月、翠、夏世、ティナは彰磨と玉樹に目を隠されてる。

「なあ、里見……なんでお前全裸なんだ？」

「えっ。」

蓮太郎はそんな彰磨の言葉を疑問に思いつつ、自分の体を見る。

傷はないが確かに全裸だった。

何故かと思つたが、すぐに原因は分かつた。

爆炎に突つ込んだからだ。炎に突つ込めば蓮太郎は無事でも服は無事じゃないだらう。

とりあえずそこらへんの葉っぱで隠さなきゃいけないところは隠した。

「さて……これからどうする？」

「まずは服着てきなさいこの露出狂ツツツ!!」

木更は全力で蓮太郎を斬つてホテルの方向へ吹つ飛ばした。

延珠は顔を赤くしていたが満更でも無い顔をしていた。

蓮太郎は一分後にスペアの服を着て戻つてきた。

「よし、もうすぐガストレア共が来るから……つと。もう来てるじゃねえか。」

蓮太郎の視線の先ニキ口。ガストレアを捉えた。

「ちよつと我堂に挨拶してくる。」

だが、まだ数分はあるので我堂の元へ行くことにした。

スタコラと我堂の元へ行くと、朝霞が幽霊を見るような目で見てきた。

「よつす、我堂。」

「里見リーダーか。よくもやつてくれた。」

「つてな訳でケ○タツキとバー○キング各十人前。」

「分かった。戦いが終わったら天童民間警備会社に私の名義で配達させよう。着払いで。」

「ふざけんな。」

「冗談だ。資金はこちらが出そう。金は腐るほどあるのぞな。」

ハツハツハと笑う我堂にイラツときたが抑える。

「里見リーダー。君は私の手には負えないと判断させてもらった。」

「なに？ どういう事だ？」

「つまり、好きにやれという事だ。アジユバンドの仲間共々な。」

「……話が分かるじゃねえか。」

「君の力の上限がわからん以上、無理に従わせるより遊撃させた方が役に立つ。」

「んじゃ、さつそくあつちにいるガストレアに突っ込んでくるから。なるべく死者は出さないようにしてくれよ。」

「そこは皆の力によるな。」

蓮太郎はスタコラと仲間の元に走り去って行つた。

朝霞はそれを見届けた後我堂に話しかけた。

「……よろしかったので？」

「……胃が痛くなるからな。責任を極力受けない為には好きにさせた方がいい。」

「……なんかすみません。」

「胃が悪くなったのは私の精神の弱さだ。朝霞のせいではない。」

「完全に私のせいですね本当にありがとうございました。」

我堂と朝霞が前方に視線を戻すと、ガストレアが吹き飛んでいるのが見えた。

二人は黙ってガストレアが接近するのを待つことにした。

「つてな訳で遊撃許可とったから俺は突っ込んでくるけどみんなはどうする？」

「突撃ね。」

「突撃だな。」

数秒の間もなく返してくる木更と彰磨。

「いや、俺つちとこいつらはそこまで人外じゃねえから三人で突っ込んできてくれ。」

玉樹の言葉に全力で首を縦に振るイニシエーター五人組。

『なら行ってくる。』

人外三人はガストレアの方へと向き直ると、走り出した。

木更と彰磨は全力で、蓮太郎は二人に合わせて走る。

人外が走り出したのを玉樹とイニシエーターズが把握したその瞬間、爆発音にも似た衝撃と共にガストレアが空を舞った。

一部は空中で破裂し、一部はサイコロステーキになり、一部は粉々になった。

「オラオラオラア!!」

「走れ雪影ひやつほーい!!」

「焰火扇百烈拳!!」

人外共の暴走が始まった。

蓮太郎がひたすらにガストレアを殴りまくり、テンションが上がった木更がテイナでも見えない速度で刀を振るいガストレアを片っ端からサイコロステーキに変え、彰磨が焰火扇をこれまた残像で腕が何十本もあるように見える位の速さで放つ。もちろん当たったら内側から血を撒き散らして爆発。

まさに世紀末。ガストレアはそんな人外共に恐怖を感じたのか三人の人外を避けて民警達へと走ってくる。だが、人外共はそれを後ろから追ってくる。まさに地獄。

大体200体が肉塊に変わったところでガストレアはやつと民警達と接触した。

「よっしゃ!俺っちについてこべらあつ!!」

「あつ!兄貴がガストレアに吹っ飛ばされた!」

『この人でなし!!』

もちろん無傷です。

イニシエーター達はそんな玉樹を放つたらかしにしてガストレアとの戦闘を始める。ガストレアが（人外共のせい）降ってきたり吹っ飛んできたりする危険な戦場だがそれを気にせずにガストレアの殲滅にかかる。

「戦術なしで突っ込んでくるのも面倒ですね！」

「全くだ！」

「あーもう、体液で汚れる……」

「後衛楽ですわー。」

「夏世ちゃん。ほれ、死骸。」

「ぎゃああつ!? 何すんですか！ 汚れたじゃないですか！」

「夏世ちゃんざまあ。」

『なら体液がかかる前に離ればいい。』

「うっさいスピード特化組！」

阿鼻叫喚の戦場の中で人外共に鍛えられたイニシエーター達はそんな漫才に近い事をしながらも着々とガストレアを葬っていく。

そして人外共は。

「マジちやぶ台がえし!!」

「ナイス里見くん！天童式抜刀術三の型八番、雲嶺毘却雄星!!」

「轆轤鹿伏兎!!からの隠禅・上下花迷子!!」

しょうかはなめいし

マジちゃぶ台がえしで打ち上げられたガストレアを木更が見てる者全員が斬られたと錯覚する程の斬撃でガストレアを切り刻み、彰磨が近くの岩を轆轤鹿伏兎で打ち上げてから飛び上がり、隠禅・上下花迷子で岩を蹴り飛ばし、ガストレア共をミンチにする。「連続普通のパンチ!」

そして蓮太郎の連続普通のパンチが地上のガストレアを100体ほど殲滅する。

「もう一度、雲嶺毘却雄星!」

「ならば、雲嶺毘却鯉鮒!」

そして木更の攻撃でガストレアが切り刻まれ、さらに彰磨のアツパーカットで吹っ飛ばされたガストレアが他のガストレアを巻き込んで吹っ飛び、破裂。さらにその吹っ飛んでいたガストレアに触れたガストレアも破裂。

『ハハハハハハハハ!!』

悪役のように笑う人外三人組。だが、止めれる者はいない。

ちなみに、地形は地図の書き換えが必要なくらいに破壊された。

そしてイニシエーターズは。

「全部燃えてしまえばいいんですよアハハハハハハハハ!!」

「ちよつ、ティナやん、その何処から取り出したか分からない火炎放射機で片っ端から放火するのやめ熱っ!? 掠った! 今掠ったよ!!」

「延珠!! やり合おうよ!!」

「なんでここに小比奈がいるんだ!? あぶっ!? ガストレアと小比奈とか無理ゲーだから!! っつて言うかガストレアを斬れ! ガストレアを! 妾も胃が痛くなってきたから勘弁してくれ!!」

「なんか三人抜けて私達ピンチ! 翠さん助けて!!」

「神経毒貰っちゃいました。てへっ。」

「貰っちゃいましたてへっじゃないでしょおおお!! 死ぬ! 私と翠さん死んじやうから!!」

「そこに俺っち参じよごっちはあ!？」

「っつかえませんねあの人外!!」

最早世紀末だった。

ティナは何処から持ってきたのか分からないグラサンかけて火炎放射機を振り回して弓月はそれに巻き込まれかけ、延珠は颯爽登場した小比奈に斬りかかれて応戦、残りの二人は夏世がショットガンでガストレアを殴りながらも奮戦するも前衛の翠が神経毒を貰うというポカをやらかし絶賛ピンチ。ちなみに玉樹は翠。

だがその時。

「やれやれ、仕方が無い。エンドレススクリーム!!」

夏世に迫っていたガストレアが一瞬で切り裂かれた。

「こ、この技は!?まさかあいつが生きているのか!？」

「分かり易い振りをありがとう。確か……千寿夏世ちゃんだったかな?」

「貴様は……蛭子影胤!?バカな!ヤツは池ポチャした筈!」

「もういいからね?」

「アツハイ。」

そんな訳であまりの惨状を見かねて影胤が急遽出てきた。

「そんなのいいからヘルプですー!近い近い近い!!」

一方、翠のすぐ前一メートルにはガストレアが接近してきていた。動けないので何げ

にピンチである。

「ホームレス・スリーパー!」

だが、影胤が扇状に広がる斥力フィールドでガストレアを切り払う。

「た、助かった……」

「大丈夫か、翠!」

ようやくそこで彰磨が駆け付けた。

「彰磨さん！」

「ふむ……神経毒か……ホワタア！」

翠の首筋を彰磨が触ったかと思うと、いきなり彰磨が翠の体を指で突いた。

「にゃんっ!？」

「これで神経毒はどうにかなっている筈だ。」

「え、そんな訳……う、動く……!？」

（これが噂の北斗○拳か……）

彰磨は天童式北○拳戦闘術で翠の体を治すと周りにいるガストレアの掃除にかかった。

「天童有情破顔拳!!ハアン!!」

いきなり座ったかと思うと手からビームみたいなものを出してガストレアを倒したり、

「刹活孔!!」

地中に気みたいなのを送り込んで敵を倒したり、

「天翔百烈拳!!」

飛び上がったって何連発も拳を繰り出したりともう滅茶苦茶である。

「相変わらず人外やってるなあ……」

「あ、蛭子影胤!こいつ何とかしろ娘だろ!!」

翠が手遅れな人を見るような目で彰磨を見てると、影胤の存在に気づいたららしい延珠

(絶賛真剣白刃取り中) が小比奈をどうにかしろと言ってきた。

「はあ……こら、小比奈。今日は延珠ちゃんとは戦わないと……」

その時、影胤の背後から猫のガストレアが影胤に接近し、影胤をくわえて走りだした。

「あつ。」

「パパ!?どこ行くの〜!?!」

連れ去られていく影胤を追って小比奈が走り出した。

延珠は何故か小比奈が手を離して置いていったバラニウムの小太刀を一目見ると、ニヤツと笑ってからブンブン振ってガストレアに向けて走り出した。どうやら借りパクする事にしたらしい。

「ふう、スッキリしました……あれ、弓月さん、どうしたんですか? ヤケに焦げ臭いですし。」

「ティナやんのせいだよ……」

丁度その頃、ティナが世紀末な世界から戻ってきた。どうやら周りを燃やし尽くすことに夢中だったようだ。

「あ、夏世さん、ショットガン一丁貸してください。」

「いいですよ。弾は?」

「貸してください。」

夏世がティナに予備として持つてきていた二丁目のショットガンを予備のポーチと共に渡す。

ティナは火炎放射機を背中に戻してショットガンを構えると一発試しに発砲。感触を確かめてからガストレアの軍勢へと走り出す。が、

「ひゃっほー！ー！！」

何か黒い物が目の前を通り過ぎた。前髪が何本かハラハラと舞った。

「逆刃刀なんて情けよ！ポン刀が一番よ！！」

目の前を通り過ぎたのは木更だった。

木更は高速移動しながら見えない速度で刀を振るい続けている。彼女は自重という言葉忘れて体力という概念を何処かに放り捨ててきたらしい。

流石のティナもこれにはドン引き。

そして蓮太郎は。

「お前達に足りないものは、それは、情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！そしてなによりもオオツ！！パワーが足りないツ！！」

こちらにも色んな概念を放り捨てて延珠と夏世に近づくガストレアを片っ端から排除しながら高速移動している。最早ガストレアの数は目視で100を切っている。

「な、なあ、蓮太郎？そろそろ自重しないと聖天子様の仕事が……」

「知ったことかヒヤッハアアアアアアア!!」

延珠の言葉を見殺しにして殲滅を続ける蓮太郎。

「……チツ。」

「!？」

「夏世、ショットガン。」

「ど、どうぞ……」

「フラグ弾。」

「は、はい……」

急に豹変した延珠が夏世からショットガンとフラグ弾の入ったマガジンをひったく
るように借りると、フラグ弾を装填し蓮太郎に向ける。

そして躊躇なくぶっ飛ばす。

「熱っ!?! 熱い熱い!!」

フラグ弾に当たってやっとなまった蓮太郎を見て延珠はショットガンを放り投げて
歩いて近づく。

「あ、あの……延珠さん?」

「もうそろそろ自重しよう、な?」

「アッハイ……」

(うっわ〜……やあさぐれてる〜……)

夏世は投げ捨てられたショットガンを回収しながら思った。

怒らせると一番怖いのは延珠だと。

それから十分後。自重した人外と民警達によりガストレアは一匹残らず殲滅された。

「この戦、我等の勝ちだ!!」

「今日は祭りですよひゃっほーい!!」

朝霞と共にバラニウムの刀を突き上げ、勝利の宣言をする我堂。それと全く同時に生き残った民警達が地面が揺るがんばかりの歓声を上げる。

散っていった民警は今回参加した民警の約40%。半分も死ななかった。正に快勝であった。

誰も彼もが死を覚悟した今回の戦いは予想をいい方向で裏切る結果で終わったのだ。歴史的快挙とも言える。

だが、地図は書き換えねばならない。しかしそんな事は知ったことじゃないのか民警達は自分達の拠点に戻って酒やら何やらを持ってきて再び集まって宴会を始めた。

無礼講の食えや飲めやのどんちゃん騒ぎ。

そんなお祭りの中、蓮太郎達アジユバンドは河川敷に座っていた。

「いや〜……ガストレアは強敵でしたね。」

「霧が出てきましたね……」

「ま、そんな事はさておきだ。皆あつちに行かなくてよかつたのか？」

大人二人は酒を飲み、他は皆ノンアルコールかジュースを飲んでいる。

「あのムードは苦手でな。里見は分かっているだろ？」

「そうだったな。玉樹は？お前は好きそうだが。」

「俺っちは姐さんの居る所にいるぜ。」

「やだ、ストーカー？」

「愛の尾行者とも言ってください……なんちゃってな。」

「木更さんは……聞くまでもないか。」

「ええ。誰があんなむき苦しいところに行くモノですか。」

グイツと半分ほど残っていたノンアルコールを空にした木更は次の缶を手にする。

「おい、木更さん。それ酒。」

「バレなきやいいのよバレなきや。」

木更がカシユツと開けたビールを飲もうとした時、後ろから伸びた手がそのビールを

奪い取った。

「あつ。」

「子供が飲むものではないぞ。」

そう言つて後ろから来た人物はビールを飲み始めた。

「げつ、我堂。」

木更からビールを奪い取ったのは車椅子でやつてきた我堂だった。

「ふむ……なかなかいいビールではないか。」

「こういう時こそこういうのを飲むもんだろ？我堂のオッサン。」

「その通りだ。」

我堂は隣にいる朝霞の手を借りて河川敷に座り、再びビールを傾ける。

「一体どういう風の吹き回しだ？我堂。」

「なに、私もあの空気には耐えられなかつただけだ。里見君。」

「そうかい。」

蓮太郎はぶつきらぼうに缶ジュースを傾けながら答えた。

「……やれやれ、嫌われたものだな。」

「いや、アンタにや感謝してるさ。初対面だところなるだけだ。」

「私に感謝だと？君を死地に送り込んだのか？」

「こまげえことは言いたくないが、アルデバランとプレヤデスをぶつ殺すために単独行動をする必要があったからな。」

我堂は色々と言いたいが、ある顔をしていたが、ビールを一口飲み、感謝されるならその気持ちは受け取っておこう。と答えた。

朝霞はイニシエーター達と混ざって色々と話している。

「我堂。あなたは足をやられたようだが、これからはどうするんだ？もう民警をやつてはいけないだろう。」

「そうだな……隠居でもするとしよう。そうなると朝霞がIISOに引き取られてしま
うが……どうしようもできん。」

我堂はイニシエーター五人と混ざって楽しそうに話している朝霞を見て溜め息をついた。

「……なら俺が聖天子様に交渉してきてやんよ。」

「なに？聖天子様にだど？」

「あそこに金髪の腹黒そうなのがいるだろ？あいつも本来はIISOに身柄を拘束される立場だけど、ある一件で交渉して俺のところに居候してるんだよ。だからアンタのこのイニシエーターも何とかなる。」

「いいのか？礼は出来んぞ。」

「俺に単独行動をさせてくれた礼だ。遠慮するな。」

「そうか。ならば遠慮はしん。ついでに英彦のイニシエーターも何とかしてくれ。奴はあの子に溺愛していてな……」

「はいはい。任された任された。」

あら、ロリっ子以外の人に親切なんて珍しいわねくと茶化す木更にデコピンを一発入れながら、蓮太郎は缶ジュースを飲み干した。

今まで色々とあつたけどやっとな息つけるなど蓮太郎は呟くと、立ち上がった。「つまみ作ってくるがいるか？」

「おつ、気が利くじゃねえかボーイ。大盛りで頼むぜ。」

「アイアイサー。」

蓮太郎はホテルへと向けて何を作つて驚かせてやろうかと考えながら走つた。

「ええ、そうよ。やっとな息つけるのよ、里見くん。アイツを殺せばね……」

トウエンティーセブンパンチ

第三次関東大戦の終戦から二週間の時が過ぎた。

いち早くガストレアの殲滅が終わり、開戦三日後にモノリスは一定の高さまで積み上げられ、ガストレア除けに十分貢献した。そのため民警達はアジュバンドを解散、再び訪れた平穩を謳歌した。

そして、第三次関東大戦で散った民警達の葬儀は終戦のドタバタが収まった終戦三日後に関係者一同で行われた。

参加した民警の40%、東京エリア全体の約25%の民警が散った今回の戦い。生き残った60%の民警達は皆序列の向上と多額の報酬が支払われた。

蓮太郎達は300位から現東京エリア最高位の250位に、彰磨、翠ペアと木更、テナのペアはガストレアを数百体葬った手柄により彰磨、翠ペアは300位に、木更、テナペアは500位に。そして同じアジュバンドにいた片桐兄妹も800位に腰を落ち着かせた。

我堂、朝霞ペアは大戦による傷により民警を辞め、我堂英彦もこの大戦を期に民警を辞めて画家を本格的に目指す事になった。我堂は元々貯め込んでた金と今回の報酬、外

骨格を売り払った金が朝霞が死ぬまでは食って行ける程の金になり、本格的に隠居をし、我堂英彦も今回の報酬を活動資金に当ててらしい。

さて、この二人のイニシエーターは本来IISOに身柄を拘束されるか、イニシエーターを辞め侵食抑制剤の支給を打ち切られるかのどちらかだったのだが、蓮太郎が秘密裏に決行したアルデバラン及びプレヤデスの暗殺の成功報酬として彼女らをイニシエーターとしての身分では無くして、侵食抑制剤を配分し続ける事を要求した。

結果、蓮太郎は聖天子にどれだけ侵食抑制剤が貴重か説教され、延珠の胃にダメージを与えながらもなんとか要求を飲んでくれた。

そして、彰磨達は元々短期滞在の筈だったが、翠に東京エリアを見せたい、そろそろ腰を落ち着けたいとの事で東京エリアに留まることになった。ちなみに現在は蓮太郎宅に居候中。

蓮太郎、延珠、夏世、ティナは何時ものように四人で、いつも食事を食べる部屋のちゃぶ台を片付けてそこに予備の布団を敷いて彰磨と翠は寝ている。

「なあ、里見。」

「なんだ？彰磨兄い。」

そして次の日で第三次関東大戦から二週間が経つ日。翠が持参したゲームでワイワイとはしゃいでる四人をちゃぶ台で酒（蓮太郎は炭酸ジュース）を飲みながら微笑まし

く見ていると、不意に彰磨が蓮太郎に声をかけた。

「……木更はまだ復讐をしようとしてるのか？」

「……ああ。だけど、まだ尻尾をつかめてないらしい。」

「なに……？ そんな筈は……」

「そんな筈は……どうしたんだ？」

「……いや、なんでもない。多分な……里見、明日、何か用事はあるか？」

「いや？ 仕事が入らない限り俺は暫く暇だよ。学校もまだ一週間程は休みらしいし。」

「そうか……」

「あ、あつたわ。我堂ん家に引越しの手伝いに行くんだ。」

「我堂の手伝いか……」

蓮太郎の作った摘みを食べながら彰磨はそうか。それなら良いんだと言って酒を飲む。

横で格ゲーをやっているらしい子供達とそのコンボ卑怯だとかそれハメですよ、私のシマじゃノーカンなんてとか言ってはしゃいでいる。彰磨は何処か遠い目をしながら最後の一口を煽ると、その場で横になった。

「彰磨兄い？」

「俺は寝かせてもらう。明日は用事があるんでな……」

「そうか。なら片付けはこっちでやつとくよ。」

「すまん。」

「こんくらい何時もの事だしいいんだよ。」

蓮太郎は皿とコップと酒瓶を下げて酒瓶にフタをして（握力で）冷蔵庫に突っ込み、皿を台所のシンクで水につけた。

「さて……彰磨兄いも寝ちまつたし……俺も寝るか？ いや、そんな事したらあいっら何時までも起きてるからな……健康に悪いしあいっら寝かせ付けるまで起きておくか。」

「れんたろー！ 翠を倒してくれ！ 妾達じゃ勝てない！」

「この人ガチ勢なので勝てません！」

「あー……はしゃぐな近所迷惑だ。やってやるから声のボリユームを5段階ほど落とせ。」

蓮太郎はドヤ顔してアケコンに既に手を添えている翠を尻目に延珠からコントローラーを受け取りながら、軽く本気モードに入るのだった。

ちなみに、勝てなかった。

蓮太郎は翌日の朝から我堂の家へと来ていた。彰磨は起きた時には既にドロン、イニシエーターズも揃って用事があるそうで蓮太郎と共に出て途中で別れた。

我堂は外周区にガストレアが出た時のために外周区に近いそれなりの一軒家に住んでいるが、民警を辞めたことでこの家に引越す前に住んでいた少し小さな家に引越すらしい。ちなみに、引越し先は蓮太郎の近所だったりする。

「すまんな、聖天子様にあのような事を頼ませてさらに引越しの手伝いまでさせてしまつて。」

「気にすんなよ、ケンタツキ○とバーガーキ○グの礼だ。」

片足のない我堂と何処かへ出かけたらしい朝霞だと引越しに何時まで時間がかかるとのか分からないので我堂が蓮太郎に頼んだのだ。

「つつか、朝霞の部屋はやらなくていいのか？」

「君は年頃の女の子の部屋に無断で入るつもりか？」

「それもそうか。」

ひよいひよいひよいとイニシエーターでなければ何個も持てない荷物を何個も持つて分別してダンボールにぶち込んでいく。

皿などはちゃんと紙などでくるんでなるべく耐久性を高くしてダンボールに丁寧にぶち込む。

「我堂は義足つけないのか？便利になると思うが。」

不意に昔、董が言っていた超バラニウムの義足を思い出して我堂に問いかけてみた。
「車椅子で十分だ。」

「まあ、我堂がいいんなら俺は何も言わねえよ。」

だが、よくよく考えてみれば董が善意で義足を作るなど有り得ないにも程があるので我堂が車椅子で十分と言ったのにならホツとした。

そのまま我堂宅で昼飯を作って振舞ったりして引越しの手伝いをしてると、
「ただいま戻りました。」

朝霞が戻ってきた。玄関へダンボールを置きに行っていたので丁度出迎える形になった。

「おう、朝霞。お邪魔してる……ぜ？」

朝霞の格好は戦闘時の外骨格を装備してる時とはまるで違った。

普通に可愛らしい洋服を着てるまでなら大いに予想はできたが、何故か眼鏡をかけて髪をポニーテールにして変装してる感じに見えなくもない。

そして、手に持っている袋は、

「……その手の袋の中、天誅ガールズ……だったか？そのコスプレ衣装と……ファイギュアか？」

朝霞の持つてる袋からチラリズムしている物はよく延珠が見てたり買ってきたりしている天誅ガールズ（バイオレット）のコスプレ衣装と天誅バイオレットのフィギュアだった。だが、かなり大きな袋を持つてるのでまだ中には沢山色んな物が入ってるだろう。

「本当に天誅ガールズって人気なのか……俺にはよく分かんねえや。」

「そ、そそそそそそうですか。ででで、では私は部屋に……」

顔色真つ青で靴を脱いで家にかかる……

「あつ！へぶつ！」

が、足を引つ掛けて綺麗に転んだ。その際に袋の中が散乱する。

「うおつ、派手に転んだな……ん？」

散乱した中身は天誅ガールズのグッズが半分を占めていたが、残りは蓮太郎の知らない所謂深夜アニメのフィギュアやらグッズやらカードゲームやら。

「し、しまった!？」

「朝霞、どうやらバレてしまったようだな。」

朝霞がいそいそと袋の中身を回収していると、我堂が松葉杖でひよこひよこことやってきた。

我堂が第三次関東大戦時に言つた朝霞は実はオタ……という言葉と現状から考え

ると朝霞は……

「……ああ、所謂オタクってやつなのか。」

「し、知られたからには記憶がなくなるまで頭を!!」

「馬鹿やめろ。」

力を開放して殴りかかってくる朝霞の顔を抑えつける。

「落ち着け、朝霞。里見君に喧嘩を売るとは死ぬ気か?」

「ぐぬぬぬ……そうですよ! 私はこういうの好きな女ですよ! 悪いですか!」

「いや、悪いとは言っていないし逆ギレすんな。」

さらつと蓮太郎を人外扱いしてくる我堂と逆ギレする朝霞。

「長政様にしか知られてなかったのに……」

「いや、他言する気はねえから……な? 別に俺はいいと思うぜ? 隠れオタクでもさ。」

「どうせ他言されたくなければ言う通りにしろと言うんでしよう! エロ同人みたいに

!

「しねえよ。ロリコンじゃねえんだから。」

『えっ……?』

「おいテメエら壁の染みになりたいのか。」

朝霞と我堂の本心からの言葉にキレかける蓮太郎。だが最近の若者程蓮太郎はよく

キレない。

「はあ……取り敢えず朝霞はとつと引つ越しの準備しろ。オタク趣味は黙ってやるから。」

「絶対ですよ!?!絶対ですからね!?!」

「お、おう……」

今にも掴みかかりそうな迫力を出す朝霞に若干引く蓮太郎。

朝霞は蓮太郎を警戒しつつも自分の部屋に向かつていく。

「そ、そういえばウチの延珠が大の天誅ガールズ好きで夏世とティナもそうだし、翠は重度のゲームオタクだったぞ?」

「その話詳しく。」

蓮太郎が延珠や翠の事を話した瞬間、シュンツ!と効果音が付きそうなほどの速度で朝霞が蓮太郎に接近した。

その行動にまた引きながらも延珠がどれだけ天誅ガールズが好きとか、翠がどれだけゲーム持っていたかとかを話した。

「いい酒が飲めそうですが、あなたの話だと藍原さんと布施さんのレベルがイマイチ……」

「レ、レベル……?とりあえず、今聞いてみるか?」

「お願いします。」

若干分からない言葉に戸惑いながらも蓮太郎は延珠へと電話をかける。

「ちゃんと出るか?」と思つた瞬間、延珠はワンコールで出た。

「はやつ……なあ、延珠。一つ聞きたいんだが……」

『それどころじゃない!木更が……木更が!!』

「延珠……?」

聞こえてきたのは延珠のかなり焦つてるような、泣いているような声。

耳を澄ますと、延珠の声の後ろで金属がぶつかるような音や肉を斬るような音、そして彰磨の声までが聞こえてきた。

明らかに異常だ。

「おい延珠!何が起こつてんだ!!」

『き、木更が復讐だとか何とかで木更のお兄さんらしい人と決闘を……』

「なっ……」

危うく落としそうになるスマートフォンを握り潰さんほどの力で手の中に収める。

『そ、それで彰磨が止めに入つて……』

「……すぐに行く!場所は!」

延珠はゆっくりと現在地を喋った。

蓮太郎は通話を切ると、我堂を見る。

「緊急事態なのだ。早く行け。」

「すまん、また手伝いに来る。」

蓮太郎はそれだけを我堂に言うのと、我堂の家を飛び出し走り出した。

時間は数分前に遡る。

彰磨とイニシエーターズの用事は同じだった。

決闘の立会人として、木更に呼ばれたのだ。

蓮太郎がアルデバランの殲滅のため拠点を出ていった次の日の朝。木更の元には木更のコネで調べられた32号モノリスを作った人物や設計者などが書かれた書類が送られてきた。木更はそれを見た瞬間に燃やしたが、彰磨が一部をサルベージ。そこには天童和光……木更の兄、彰磨にとっても知り合いである男の名が書かれていた。

その時の木更の目は書類を燃やした火のように一瞬だけ燃えたが、すぐに冷水をぶっかけたかのように冷たくなった。

立会人は彰磨だけの筈だったが、木更がイニシエーター達に今回の真相を知らせるた

めにイニシエーター達を呼んだ。

六人が正座して待っていると、もう使われなくなった柔剣道場の前に車が止まった音が響き、玄関から一人の男と女が入ってきた。

「ようこそおいでなさいました。和光お兄さま。いえ……国土交通省副大臣とお呼びしたほうがよろしかったでしょうか？」

入ってきたのは天童和光とその秘書の女だった。

その瞬間、木更から殺気が溢れ出す。思わず翠が彰磨に抱きついた。

「久しいな、木更。わざわざ呼び出して何の用だ。」

和光は腫れ物を見るかのような目で木更を見る。殺気を当てられて尚且つ、だ。

相当肝が据わってるのか、それとも木更の力をナメているのか……相当な馬鹿なのか。

「今回の第三次関東大戦についてです。」

その瞬間、和光が目尻をピクリと動かす。

「ずうっと不思議に思っていました。何で32号モノリスにガストレアが取り付いたのか……それで調べたらわかりましたよ……まさかモノリスに混ぜものをして浮いた費用を懐に入れるなんて……感心しませんね。とつても。」

木更の告げた真実に延珠達が反応し、さらに彰磨すら反応する。

今回全ての黒幕が、目の前にいる。何百人もの人達を殺し、東京エリアを滅亡寸前まで追い込んだ犯人が、目の前にいる。

延珠達は声を出そうとしたが、口は開けど声は出ない。まるで、木更の殺気が口の中に入って文字通り栓をしてるようだった。

だが、彰磨は声を出した。出された。

「……木更……和光さんが、犯人なのか……？」

「ええ、そうよ、彰磨くん。こいつが全ての元凶なの。」

「和光さん……あんた……」

「……くくつ、ああ、そうだとも。で、それがどうかしたか？」

和光の呆気からんとした態度。それに思わず度肝を抜かれる。

目の前の男は私利私欲のために東京エリアを滅亡寸前まで追い込み、平然とした顔をしているのだ。

「……あなたのような人がガストレア大戦で死ねばよかつたんですよ！あなたのような私利私欲で人を殺す悪人が!!」

「ハハハハ！そうだとも、私は悪人だ！だがなんだ？真の悪人は死なないのだよ！」

「なら、私が殺して差し上げます。」

「何……？」

「今、この場で和光お兄さまに決闘を叩きつけます。」

「ほう？木更、貴様が私を殺すと？」

「……で、受けるのですか？」

「……良からう、受けて立つ。」

木更と和光が立ち上がり、彰磨が翠達を下がらせる。

「双方、立会人を前に。」

木更の言葉に、彰磨が、和光の秘書が翠達の一步前に出る。

「……二人とも考え直せ。これは本当にやらなくちゃいけない戦いなのか？」

「当たり前よ。私は死んでいった人達のため……私自身のためにこのクズを殺さなきゃならない！」

「彰磨よ。私はここでこの女の口を封じねばならないのだ。」

和光の秘書が和光に槍を投げ渡す。だが、普通の槍とは違う。

何処か禍々しい装飾がつき、多節昆のようにも見える。

混天截と呼ばれるその武器は刺突、切断、殴打を繰り返すことの出来る槍。それを和光は構える。

対して木更は全く構えない。

「……ナメているのか木更ア！」

それが和光の逆鱗に触れたのか和光が怒鳴る。

「分かりませんか？これで充分という訳ですよ、和光お兄さまあ？」

木更は雪影を片手にプラプラと手を振る。ナメている。

和光は天童式神槍術皆伝。常人とやり合おう物なら文字通り無双しても可笑しくない腕を持っている。

和光は木更の挑発には乗ってはいけなないと心を静める。

ほらほら、かかつて来ないんですか？と挑発をしてくるが、それには乗らない。

「……木更、一つ条件をつけないか？」

「なんですか？命乞いですか？」

「最近私の上司が未開拓地から連れてきた黒人の女に飽きたと言っていてなあ……」

「なるほど、私の手足をもいでその豚に性奴隷として受け渡そうと？別にいいですよ？」

代わりに私が勝ったら殺すも生かすも私次第で。あ、どちらにしても質問には答えてもらいますよ？」

「良かろう。」

木更はヘラヘラと人を小馬鹿にするような笑みを浮かべ背中まで向け始めた。

既に決闘は始まっている。後ろを向いていたから勝てませんでしたは通じない。

和光は駆けた。全力を持って木更を殺すため。

木更が槍での一撃必殺の間に入る。

——天童式神槍術三の型一番、天子玄明窩。

刹那の踏み込み。そして槍が陽を浴びて煌めく。貫った。和光は確認した。

だが、次に見えたのは刺された木更の姿ではなく、天井だった。

「……は？」

「天童式抜刀術零の型四番——ひがんしせん彼岸死閃。」

シャンツ!!と銀が疾走はしった。

そして、真つ赤な、彼岸花のように真つ赤な血が和光の両手両足から花のように散る。

和光は何が起きたのか分からなかった。イニシエーター達にも分からなかった。そ

して、彰磨すら、ギリギリ見える程だった。

走り込んだ和光の振り返りながら木更が足を鞘に入った刀で掬い、塚で鳩尾を殴り

光を浮かせた後、刀が四回煌めいた。その四回の煌めきが和光の四肢を奪った。

余りの神業と美しさに傍観者全員が息を呑んだ。

ドサツ、と和光の体が床に叩きつけられた。

「なっ、何が……」

「足を引つ掛けて四肢をぶった斬っただけですが？」

木更の刀には血が付着していない。血が付着する前に刀を振り切ったという証拠だ。

一方和光は自分の四肢が斬られたことを理解出来ていなかった。

痛みがないのだ。体から何かが抜ける感覚はあるが、痛みがない。

「さて……話してもらいますよ？」

今の木更の顔はどんな者も魅了し虜にしてしまいそうな顔だった。だが、彰磨にはそれが地獄からやってきた悪魔の笑みにしか見えなかった。

木更はゆつくりと雪影の刃を和光の首に付ける。

「や、止めてくれ！話すから殺さないでくれ!!」

余りの痛みには体の神経がイカれたのか、最早何も感じない体で何とか言葉を捻り出す。

だが、木更は何も言わない。とつとと喋れと視線が語っていた。

何を話せばいいのか。第三次関東大戦の事か？今まで何をしていたのか？嫌、違う。少しでも見当違いの事を話せば木更はゆつくりと刃を和光の首へと侵入させ首をゆつくりと断ち切られる拷問に近い痛みを受ける事になるだろう。

「……り、両親の事か……？」

「ええ、そうですよ。早く話してください。」

雪影の一部が少しだけ赤に染まる。

「な、何を話して欲しいんだ？なんでも言ってみよう！」

だが、何処から話していいのか分からなかった。木更はそういうえば行つてませんでしたね。とだけ言うと、質問を告げる。

「何故、私の両親を殺したのですか？」

「わ、私は殺して……」

「そうですかそうですか。首をゆつくりと断ち切られたいと。」

「て、天童の闇を告発しようとしたからだ！だから野良ガストレアと表して捕獲したガストレアで親父殿共々お前達を殺そうとした！」

「……まあ、私と里見くんについてはいいんですよ。生き残れましたしね。それで……その計画の関係者は？」

「天童菊之丞と私と兄弟三人だ……これで充分だろう!?助けてくれるんだろう!?!」

和光が木更のプレッシャーに耐えきれず、とうとう叫んだ。

木更は和光に笑顔を向け……

「駄目です♪」

「えっ……」

木更は今ままで最大級の笑顔を浮かべて刀を振り上げ、和光の首へ向けて振り落とす。

「止めろ木更!」

だが、その凶刀は止められた。

「彰磨くん……う？どうして邪魔をするの？」

彰磨の手によつて。

彰磨の腕は雪影によりザツクリと斬られ、超バラニウムの骨格と拮抗している。それを見た翠が気絶した。

「ぐっ……殺しちゃ駄目だ、木更……戻れなくなるぞ！」

「……彰磨くん、折角親切心で楽に殺してあげようとしているのに邪魔するの？」

木更は雪影で彰磨の手の傷を広げる。

「ぐああっ……殺したらお前も同じになつてしまふぞ！」

彰磨は達磨になつた和光を後ろへと蹴り飛ばし、雪影から逃れるようにバックステツプをする。

すぐに彰磨は服の一部を破つて傷に巻き付ける。

「……まあ、いいわ。邪魔するんなら……退いてもらうから。」

「やってみろ、木更。」

その瞬間、黒と白がブレた。

「ハアアア!!」

「セエエエイツ!!」

ガガガガガガッ!!と木更と彰磨の一撃必殺の技がぶつかり合う。

「滴水成氷!!」

「焰火扇!!」

ドゴオオオオッ!!と爆音。

音速を超えた居合と音速を超えた拳がぶつかり合い、ソニックブームを巻き起こし、衝撃波が空気すら吹き飛ばす。

「ぐうっ!!」

だが、彰磨の腕と体が切り刻まれた。滴水成氷の威力が上だったらしく、焰火扇では相殺が出来なかったらしい。

「彰磨!!」

「延珠! 里見を呼ぶんだ! あいつなら何とかできる!!」

「わ、分かった!」

延珠がスマートフォンを取り出したのを見る暇もなく彰磨は木更の情けなしで放たれた居合を拳で迎え撃つ。

だが、それを読んでいたのか、木更は片手で掴んでいた鞘で彰磨の腹を突く。

「がっ!」

「彌陀永垂剣!」

その隙に木更が一瞬で雪影を鞘へ戻し、音速の数倍の居合。ザシュツ!!と肉を斬られる音が響く。

(強い……!こちらが手加減しているのを除いても強過ぎる!!)

彰磨の技は基本的に一撃で対象を絶命させる技。それこそ蓮太郎しか耐えられないくらいの。

木更に当てれば間違いなく内蔵が破裂して即死するだろう。故に、手加減をするしかなかった。

「終わりよ、彰磨くん。」

木更が雪影を再び鞘へと戻す。狙いは、腹部。超バラニウムに覆われてない部分。

「無影無踪!!」

音速を超える居合。それと同時に発生する鎌鼬。彰磨に相殺する術はない。

殺られる。そう思ったその瞬間、

「止めろ木更さん!!」

切り札は到着した。

鎌鼬は彰磨の目の前に現れた人物の放った同等の鎌鼬に相殺された。

耳障りな音を撒き散らして鎌鼬は消滅する。

「遅かったじゃないか、里見。」

「悪かったな、彰磨兄い。」
蓮太郎、見参。

「木更さん、ここからは俺が相手だ。話は後でゆっくり聞かせてもらう。」

蓮太郎が拳を構える。蓮太郎なら、例え相手が木更でも勝つ事は容易い。

現時点で木更の編み出した零の型の中に、蓮太郎を倒せる技はない。故に、この勝負は木更の詰だ。

「はあ……止めよ、止め。里見くんにこられたら勝てるわけないじゃない。」

木更は雪影を鞘に戻し、手を離すと出口へと歩いていく。

「お、おい……」

「あと……一分くらいかしら？ 私に和光お兄さまの首を落とさせておけばよかった……
そう後悔することになるわよ？」

そう言うと、木更は外へと出て行った。

「……彰磨兄い、一体どういう事なんだ？なんで和光義兄さんが達磨になつてんだ？
後で話す……それよりも和光さんを病院に運ばないと……」

彰磨は和光の四肢を拾いに行く。蓮太郎も和光を拾いに行った。

「和光義兄さん……あんたが、第三次関東大戦を起こした犯人なのか？」

「……そうだ。後で彰磨から聞くといい。あと、私の事は義兄と呼ぶな。」

蓮太郎がどうやって和光を持ち上げようか悩み、和光の体に手を掛ける。

その瞬間、蓮太郎の表情が一転する。

何か、可笑しいのだ。何かは分らない。だが、確実に和光の体が異常なのだ。

一体何が。それを調べようと和光の体を触った。その瞬間、血管が膨張し、肉を押し出し始めた。

「ッ!?!お前ら!外に出ろ!!」

蓮太郎がイニシエーター達と秘書の女に叫びかけた。だが、遅かった。

「れ、蓮太郎……私の体がおか……おか……おか……」

和光が壊れたカセットテープのように同じことを繰り返した。

その瞬間、和光の体がパァンツ!と軽い音をたてて破裂した。

肉と内臓が散乱する。

「な、何が……?」

夏世が思わず呟く。だが、ふと自分の体に何か生暖かい物がかかっていることに気付く。

下を向き体を見ると……

「ヒイツ!?!」

ピンク色の長い管のような物……腸にしか見えない物が夏世に巻き付いていた。

「あ……あ……うっ……」

余りの精神的なダメージで一瞬言葉を失い、すぐに腸を振り払ったが、胃からモノが逆流し、その場で吐き出してしまおう。

「れ、れんたろー……？何が……起きたの……？」

延珠は何が何なのか分からず、片方が真っ赤に染まった視界でゆつくりと蓮太郎へ向けて一步を踏み出した。だが、一步踏み出したところでグチャツと音がした。何かを踏んだ。

確認したくなかったが、確認した。してしまった。

そこにあつたのか、ピンク色の皺くちやな半円だった物。

これは何だと考えた。だが、すぐに答えは出た。

脳みそだ。しかも、考えられるのは和光だったものの……

「あつ……いや………なに、これ………ああつ………うあああああああ
!!」

延珠はその場で錯乱し、正気を失って外へと走り出した。

唯一、ティナだけは錯乱をしなかった。アメリカでエインの元にいた頃、散々人間の内蔵は見えてきた。だが、吐き気はするしクラクラする。

人間が弾けるという光景に言葉が出ない。捻り出そうとしても声帯から声が出てこ

ない。

彰磨と蓮太郎も言葉を失っていた。

子供達よりも凶太過ぎる精神を持っていたからこそ取り乱さなかったが、かなりのシヨツクを受けた。

「……彰磨兄い？これも、木更さんが……？」

「そうだ……多分、最初の一手でこうなるように仕組んだんだろう……酷すぎる!!」

「……こんなの、人間がしていい死に方じゃねえよ!!」

一方、和光の秘書はその場で気絶していた。常人では耐えられなかったらしい。

「……延珠達を何とかしてくる。彰磨兄いは病院に行ってくれ。」

「いいのか？」

「最悪、気絶させて連れて帰る。」

「そうか……すまないな。」

そう言うと、彰磨は血だらけの体で病院へと向かって行った。

「……さて、まずは錯乱した延珠からか……」

蓮太郎は外へ走って行った延珠を追った。

彰磨は一人、血だらけの体を引きずって病院を目指した。

腕の傷と全身の斬り傷が痛み、すれ違う人からギョツとした目で見られるが、気にせず歩く。

まだまだ俺も修行が足りんか。そう呟いた時、チクツと首筋に痛みが走った。が、そこも斬られたのだろうと割り切って歩く。

数分歩いたところで、彰磨の横に黒い車が止まった。

「……何か用か？」

彰磨はその車を警戒し、そう告げた。

車からは一人の男が出てきた。

「はい。ちよつと用事がありまして……ついて来てもらいますでしょうか？」

「……悪いが家に帰ってバルサン焚かなきゃいけないんだ。帰らせてもらう。」

「拒否権があるっても？」

「ならば拒否権の拒否を拒否する。」

「それを拒否させて貰います。さて、拒否のゲシュタルト崩壊もしてきたところで……そろそろですわね。」

「なに？」

その瞬間、彰磨の視界がブレはじめ、体に力が入らなくなる。

さらに強烈な眠気までもが襲ってくる。

「象だつて数秒で寝る睡眠薬をこれでもかど塗りたくつて撃つたのですが……足りませんでしたか。」

「な……なに？」

鉛のように重い瞼。もう四肢は動かない。

「……運び込め。」

男は車へその声をかけると、車から出てきた黒服の男たちが彰磨を車の中へと引きずり込む。

(里見……翠を……頼んだ………多分すぐ帰る………)

彰磨は車に入れられる直前に意識を手放した。

「あつはつはつは!!やったわ!やったのよ!!どうとうやってやったわ!!」

木更は誰もいない天童民間警備会社で一人狂つたように笑っていた。

理由は一つ。天童和光を殺したからだ。自らの手で。

「里見くんや彰磨くんの正義の拳なんかじゃ駄目なのよ！私のような悪じゃないと！」
木更は一人、笑い続ける。

「お兄さま方にお祖父さま！すぐにあの世に送ってあげるわ!!」
木更を止める人は、この場にいなかった。

蓮太郎は錯乱した延珠を気絶させ担ぎ、胃の中のを全て吐き出し気絶した夏世を担ぎ、気絶していた翠を担いでティナと共に帰路についていた。

和光だった物は和光の秘書に任せてきた。蓮太郎が出しやばるような場所じゃないだろうと考えたからだ。

ティナはシヨックで言葉が出せなかったが、一時的な物で、今は少しなら喋ることができる。

『お兄さん、天童社長は……』

ティナが蓮太郎をちよんちよんとつつき、振り向いたところで文字を打ち込んであるスマートフォン画面を見せた。

「……明日には何時もの木更さんに戻ってるよ。」

『ですが、それは解決になってないのでは？』

「そうだ。だから、次木更さんがあんな感じになつたら真つ先に俺を呼べ。次は俺が止める。」

『分かりました。ですが、天童社長の剣術は人の領域を超えてました。お兄さんでも勝てるかどうか、分かりません。』

「勝てるさ。ステージVだつて倒せる俺をあんなナメんなよ？」

『確かに。お兄さんが負けるビジョンなんて思い浮かびませんしね。』

「そうか？」

『そうですよ。』

嬉しいこと言ってくれるじゃねえかと言うと、ティナは微笑んだ。

よおし、なら今日は焼肉だ！肉買って帰るぞ！！と蓮太郎が叫び、ティナがスマートフォンで肉はちよつと……と返す。

その時、蓮太郎と翠のスマートフォンが震えた。が、蓮太郎は気付かなかつた。

スマートフォンが震えた理由はメールを着信したからだ。

そのメールは彰磨からだつた。

蓮太郎の携帯には、『別エリアの知人が助けを求めている。今回ばかりは翠を連れていけない。危険過ぎるから俺も守れる気がしない。数週間か数ヶ月、もしかしたら数年

は東京エリアに戻れない。その間、翠を頼む。』と。

翠の携帯には『すまない、急に用事ができた。今回ばかりはお前には危険すぎる。トラウマを植え付ける事になるかもしれない。だから、里見の家で待っていてくれ。必ずお前を連れに帰る。』と。

その日から、彰磨が蓮太郎の部屋に戻ってくることは無かった。

トウエンティーエイトパンチ

あれから数日が過ぎた。

彰磨は結局帰つてこず、翠は蓮太郎の部屋に居候することになった。

翠は最初悲しんでいたが、彰磨さんなら帰つてくるからここで待つてます。と笑顔で言つた。いい子だつた。

何故か彰磨のブラックカードを翠が所持していたが、それは翠の物と言うことにして食費等は蓮太郎がだし、翠の私物等は全部翠がブラックカードを使うことになった。里見家の食費は一人分増えたが、第三次関東大戦の特別報酬（聖天子によりさらに上乘せ）があるので特に痛手にはならなかつた。

そして木更は。

「里見く〜ん、ご飯奢つて〜。」

「あんたはいい加減家に飯食いに来るの止めろ！第三次関東大戦の特別報酬がまだ残つてんだろうが！」

「ええ〜、だつてあんまり使いたくないんだもん。」

「だから家に来んなよ社長……………」

「だってブラックカードあるんでしょ？」

「あれは彰磨兄いのだ！足りない食費を補う以外に使う気はない!!」

「ぶーぶー。」

あの日以降、あの残酷な木更になることは無かった。が、延珠と夏世と翠に十分なトラウマを植え付けたらしく、三日は木更を怖がっていた。木更は泣いた。

夏世もあの日以来テンションが無理無理にも上げられないらしく、初めて会った時と同じ性格に戻っている。代わりにストレス性胃痛が発生した。

「天童社長……恥ずかしくないんですか？」

「なんかティナちゃん言葉がグサツと……」

「そんなつもりは無いんですけど……お兄さんも天童社長より少し多く貰った程度の報酬で切り盛りしてるので……流石に毎日来るのとはどうかと思いますよ？」

「うう……今日だけ！今日だけだから！」

木更が蓮太郎に頭を下げる。

本当に今日だけだからな。と言うと、蓮太郎はもう一人分を追加で作り始めた。今日はまだ肉がまともに食べれないイニシエーター達のために野菜炒めだ。

「計画通り……!」

「やっぱ無しで。」

「すいません調子に乗りました。」

そんなやり取りからちよつと離れたところでは……

「あ、そこですそこ。そこで天誅レッドの追加コスチュームをゲット出来るんですよ。」

「えっ、ここはもう調べたぞ?」

「私もここは何度か調べましたけど……」

「そこに天誅ブラックをリーダーにして武器は天誅ピンクの物で行ってみてください。」

あと、レッドはパーティから外してください。」

「ブラックを? しかもピンクの武器はステータス的にも合わないぞ……ってほんとにゲットできた!」

「これ、かなりの隠し要素で天誅ブラックと天誅レッドの好感度が一定以上で尚且つ、天誅ピンクの武器をブラックが装備してさらに天誅レッドがパーティにいない状態ないとゲットできないんです。ほら、アニメでもレッド不在の時にブラックがピンクと共に戦ってたじゃないですか。なので、ここはピンクがブラックの武器を持つてもいいんですよ。」

「よく分かりましたね……こんな要素。アニメをよく見て場所を特定しないとこんな発見できませんよ……しかも武器を持たせるつても……」

「ゲームマーですから! あ、あと闇堕ちピンクも使えるんですよ、このゲーム。ほら。」

「えっ!？」

「ほんとにパーティにいる……」

「えっとこれはですね……」

一方、延珠達はい先日格ゲーが出たばかりなのに発売された天誅ガールズのRPGで各々のデータを見せ合っている。

あまりゲームをやらない延珠と夏世は結構試行錯誤してストーリーをクリアしたのだが、翠は一日でパパッとストーリーをクリアした後、隠し要素の発掘に力を注いでいた。ティナはまだストーリーをクリアできていない。ゆっくりとやりたいらしい。

その中でも翠は延珠と夏世とは比べ物にならないほどゲームが進んでいて、隠し要素もネットの情報無しで幾つもの隠し要素を発掘している。と、言うか最早翠がネットの攻略サイトに書き込んでいる程だった。

「おっ、ゲームもその辺にして飯にすんぞ。」

出来上がって盛りつけも終わり、ティナに配膳を手伝ってもらいながら三人に声をかける。既に木更は待機済みだ。

ゲームのセーブをして電源を切った三人が座った所で、

「いただきます!」

『いただきます!!』

食事開始。

木更がいるせいかわからないが、何時もよりもかなりのハイペースでちやぶ台の上の飯が減っていく。だが、蓮太郎はそれを見て満足したような顔を見ると、全部食べられない内にと野菜炒めを食べる。

「はあく……やつば美味しいわ、里見くんのご飯。」

「木更さん、料理作れないもんな。」

「失礼ね、作れるわよ。」

「ただしポイズンクッキングだな。」

「延珠ちゃん!？」

「まあ、私達もまともに作れないので何も言えません。」

延珠と木更はポイズンクッキング、夏世はサバイバル料理と言う名の男の料理、ティナはピザマシーンなのだが、翠は料理自体をしたことが無かった。

彰磨が健康を考えて一食一食作っていたらしい。彰磨に翠と会った時のことを聞いたことがあったが、翠はガリッガリに痩せていたという。

「木更さん、そういうえば最近、仕事は来てないのか?」

「ええ。全くと言っていいほど。里見くんがやり過ぎたせいで東京エリアの周りのガストレアの殆どが消滅したらしいから暫くは安心じゃないかしら?」

そして第三次関東大戦の後の東京エリアは平和そのものだった。

人外がやり過ぎたせいで東京エリアの周りに存在し、アルデバランの軍勢に入ったガストレア達はその殆どが消滅。現在、モノリスから三キロ程外に出た程度ならガストレアに会うことはないとも言われるくらいだ。

そのお陰かモノリス建造は順調。残り数日で新32号モノリスは完成すると言われている。

「まあ、血なまぐさい話が入ってこなくていいな。」

「私達の収入源潰れてるけどね……」

とほほ。と言う木更だが、収入がなくても一人でなら数年は過ごせるほどの金があるのを忘れてはいけない。

「……そういえば。」

ふと、蓮太郎はとある事を思い出した。

「どうかしたの？」

「いや、小学校の頃に友達だったやつが今民警やってるらしいんだけど、そいつは無事かなと。」

「里見くんの知り合いなら大丈夫でしょ。」

「いや、あいつは人外じゃないから。最初民警になったって聞いた時はビックリしたさ。」

あいつは呪われた子供たちの事で色々であったからな。」

第三次関東大戦中には見かけなかったので、少し心配しつつも箸を進める。

途中、木更が蓮太郎のおかずを盗もうとしてきたが全て防いで夕食を食べ終わった。

「ふう……ごちそうさま。それじゃ、私は帰るわね」

「マジで飯食いに来ただけかよ……」

もう財布としか見られてないんじゃないかと内心涙を流しつつ帰っていく木更を見届けた。

「はあ……風呂洗うか……」

軽く憂鬱になった蓮太郎は気を紛らわせるために食器を水に浸けて風呂を洗いに行くのだった。

サササツと洗って食器もパパッと洗ってテレビはちびっ子に占領されてるので適当な本を読んで時間を潰し風呂に入って。気が付いたらもう寝なければいけない時間だった。

「もう寝んぞ。明日は学校だからな。」

終戦後でも青空教室は普段通りだ。生徒の子供たちは授業を受けたがってるので、そんな期待を裏切る訳にもいかない蓮太郎達は休日出勤だ。

「え、もうちよつと!!」

「別にいいけど居眠りしたら拳骨だぞ。」

「大人しく寝るに限るな!」

蓮太郎の拳骨と聞いたちびつ子たちがすぐに布団に潜り込んだ。流石に蓮太郎の拳骨だけは受けたくない。特に一度アツパーを受けている延珠とティナはそう思った。

ちなみに、彰磨が居なくなつてから、蓮太郎は延珠、ティナ、夏世に言われて一緒に寝ることになっている。

ついでに、ティナは完全に生活リズムを逆転させて夜はちゃんと寝れるようになった。暫く夥しい量の睡眠薬の箱がゴミ箱に投げ込まれていたが。

布団に入るとすぐに延珠達は寝息を立て始めた。蓮太郎の両腕に頭を乗せて幸せそうにしている延珠とティナ、腹に頭を乗せている夏世と延珠の抱き枕にされて猫耳を齧られている翠。いつか猫耳が欠けないか心配だった。

そんな延珠達を溜め息をつきながら暫くボーっとしてそろそろ寝るかと目を閉じた時、もぞもぞと翠が動いた。

トイレにでも行くのだろうと放っておく事にしたが、何故か部屋に置いてある翠の力バンからゴソゴソと何かを漁る音が聞こえる。そしてその音が止まると今度はウイイイイ……とパソコンの起動する音が聞こえた。パチパチパチッとキーボードを押す音が聞こえる。

(何してんだ……?)

驚かしても悪いので、片眼だけを開けて音源を見る。

翠は壁に背をあずけて座り込み、猫耳専用のヘッドホンを装着して膝にノートパソコンを乗せている。

「えへへ……昨日は直前で時間が来ちゃったけど今日は……」

そして翠の顔はだらしなくニヤけていた。

流石にここまでされると気になって仕方が無い。蓮太郎はそつと延珠とテイナの頭の下にある腕を開放し、夏世を抱き枕を探して手をあっちこつちにゆつくり動かしている延珠に渡して物音を立てずに翠のパソコンの画面を覗き込んだ。そして、思わず吹き出しかけた。

パソコンの画面には、一枚の絵と文が。その絵は、二次元の女の子があられもない姿になっている絵だった。確実に小学生の子供がニヤニヤして見るような物ではない。流石にこれは看過出来ずに翠のヘッドホンを外す。

「あれ?ヘッドホンが……はにやつ!!」

「よおう、小学生。それをやるにはあと八年は足りねえんじゃねえか?」

翠のやっているゲームは一目で俗に言うエロゲーだと言うのが分かった。

顔を真っ赤にして信じられないといった顔で蓮太郎を見る翠。

「え、えつとですね、これは……その……」

「……あのさ、俺彰磨兄いからお前を預かってる立場だからエロゲーやってるお前を見られて疑われるのって確実に俺なんだわ。何か刷り込んだだらうって。」

「いや、エロゲーやってる事はもう彰磨さんにバレて……」

「どつちにしろアウトだボケ。」

「にやつ!？」

思わず口走ったらしく、口を抑える翠。

「……何となく先生が翠と話が合うって言ったの、分かる気がする……」

蓮太郎は董の部屋にあった数々のエロゲーを思い出して溜め息をついた。

「まあ、俺は誰にも言わねえから別にいいが……延珠達には見せんなよ?」

「てつきり没収されるかと……」

「彰磨兄いはしたのか?」

「可哀想な子を見るような目で見られました。正直言つてちよつとゾクツとききました。」

あ、この子もう手遅れ気味だな。と蓮太郎は悟った。

「そ、そうか……そんじゃ、俺は寝る。翠も早く寝ろよ。」

蓮太郎はそれだけ言うと、再び布団に寝転がり、本当に寝付いた。

そして翠がその後何をしてたかは秘密。

里見家の夜は大体こんな感じで過ぎていくのであった。

とある外周区で、一組の民警が戦っている。

「そっち行つたわ!」

「わかつた! 仕留める!」

イニシエーターの方は靴に安定性を上げたローラーズスケートのような物を装着し、それを電気で動かしながらガストレアをフォアグリップと呼ばれるアサルトライフル専用のグリップを横にして両手で弾丸をばら撒きガストレアを追う。

そして、プロモーターがイニシエーターから逃げるように攻撃してくるガストレアの真つ正面に立つ。

「コオオオオ……震えるぞハート! 燃えつきるほどヒートツ!!」

プロモーターは深呼吸をしてゆっくりと構える。そして、ガストレアが食らいつこうとしたその瞬間。

「波紋疾走!!」

稲妻のような物が腕を走り、その腕がガストレアを殴り付ける。その瞬間、ガストレ

アは感電したかのようにビクンと体を震わせる。

「離れて！」

そして、移動してきたイニシエーターがアサルトライフルから弾丸を放ち、ガストレアを蜂の巣にする。

「ふう……夜だから少し時間がかかっちゃったわね。」

イニシエーターは足のローラーを止めて靴から外す。

「そうだな……まあ、これでやつと帰れる。」

プロモーターは欠伸をしながら携帯電話を取り出し、依頼完了の連絡をササツと済ませた。

「それじゃあ、帰って寝るか。火垂。」

「ええ、鬼八さん。」

鬼八と呼ばれたプロモーターと火垂と呼ばれたイニシエーターは二人で手を繋ぎ、帰路についた。

トウエンティーナイパンチ

第三次関東大戦から一ヶ月。蓮太郎達は蛭子影胤事件が始まる前のような穏やかな時を過ごしていた。

蓮太郎と木更は学校に行つてゐるため、平日は一日おきに玉樹が授業に行き、祝日や土日は蓮太郎と木更が授業をして、時たま平日にガストレアが出たからと嘘をついて早退して授業に行く。ちなみに、木更と玉樹が来た時よりも蓮太郎が行つた時の方が生徒達が楽しそうなのは気のせいではない。

盲目の少女は蓮太郎と木更と玉樹が全力で点字を覚えて少女に教えこんだ。それと、杖も買つてあげた。

そんな感じの緩い日常を謳歌していた。そんなある日。
「なんかこの一週間でガストレア出没件数が右肩上がりよね。」

「けど俺達の所には依頼あんまり来ねえんだよなあ……」
蓮太郎と木更は天童民間警備会社でダラリとしていた。延珠達は片桐民間警備会社に遊びに行つてゐる。

「……そういえば、私、お見合いする事になったのよ。」

「へえ……」

木更からの話題を適当に返してお茶を一口。いい感じにあつたかいお茶が喉を通つたところで。

「……はあ!?!お見合い!?!」

やつと事態に気がついたのか湯呑みをテーブルに叩きつけるように置いて叫ぶ。ガチャン。と音が響く。

「料理はポイズンクッキングで人から金を搾取することしか考えずにほぼ自堕落の塊とも言える木更さんにか!?!」

「ぶっ殺すわよこの人外!!」

ハッ!?!と思わず言葉を発していた口に手を当てるが時既に遅し。木更は猛獣のようにガルルル……と蓮太郎を威嚇している。

「あ、すまん……つい本音が。」

「やっぱりそう思ってたのね!?!」

「だって人の給料ちよろまかしたり自分も金あるのにたかりに来たり、ふかし芋だつてまともに作れないんだし……」

「うっ……」

「それに自分が楽しみたいからってひとにばかり働かせて自分は事務所で威張ってるって

……腎臓とかに障害があるんならまだ分かるけど、健康そのものなら完全にアウトだと思うぞ。」

「げふっ!」

グツグサと心を抉ってくる蓮太郎の言葉に木更が吐血（イメージです）をする。

「け、けどあなたのをいで私は関係者に平謝りしてるのよ……」

「それは悪いと思ってる。特に延珠に。それで給料下げられるのもまあ、まだ納得できる。けど人に働かせてがっほがっほ儲けようとか思っているのは変わりないと思うが？」

「がはっ!」

なんとか言い換えそうとしたが、事実を突きつけられて木更はKO。ソファに倒れた。

「ぐぬぬ……つまりそんなこと思ってた里見くんは私がお見合いで櫃間さんと結婚してもいいって事ね!」

「それは困る。」

「えっ?」

「えっ?」

どうやら今日の蓮太郎の口はかなり尻軽らしい。またもや本音が口から飛び出した。

木更と蓮太郎が言葉の意味を理解するのはほぼ同時。二人の顔が一気に真っ赤になる。

「そそそそそ、それってどういう事よ!?!」

「な、何口走ってんだ俺!?!こんなこと言うのは片桐の野郎のキャラだろうが!?!」

その頃、玉樹がくしやみをしていたのは知るよしもない。

そして、ギヤーギヤーと顔を真っ赤にして掴みかかる木更とそれを必死に落ち着けようとする蓮太郎をドアから覗いている集団が。

「うっわあ……大胆ですね、蓮太郎さん。」

「ぐう……天童社長には絶対に渡しません……」

「わあ、カオス。」

「こういうのを修羅場っていうんでしょうか?」

特にやることがなかったので天童民間警備会社に襲撃しに来たのだが、ついてみたら木更と蓮太郎がいい雰囲気である。

だが、その割には延珠が静かだ。

「どうかしたの?延珠。」

それを見てこの中で唯一の常識人にして一般^{逸般}人である弓月が延珠に尋ねる。

「?別に何もないが?」

「いや、聞いてる限りじゃこういう時あんた、突っ込んでつて場を引つ掻き回すつて。」
「いや、別に蓮太郎が幸せならもういいかなって……」

その瞬間、全員が顔を見合わせ、延珠を担ぎあげてそのままドアの中にぶん投げた。

「ふえ？」

『末永くお幸せに!!』

パンツ!!とドアを閉めるイニシエーターズ（延珠抜き）。健気過ぎてもう蓮太郎とくつつかないと報われなれないと思つた四人の措置だつた。

「……つて、ティナやんと夏世ちゃんはいいの？」

『……もうどうしたらいいのか自分でも分からない……』

「Oh……」

「……これ、なんてエロゲ？」

とにかく、今日も東京エリアは平和だつた。

「ふう……今日も特売は戦場だつたぜ……」

蓮太郎は両手に特売の戦利品をぶら下げて帰宅する所だつた。

蓮太郎でさえダメージを負い、気を抜いたら危ないおばちゃん達の戦場を生き抜いた蓮太郎はかなり満足気だ。

「……あつ、民警ライセンス忘れてら……」

と、ここでいつもポケットに突っ込んである民警ライセンスが無いのに気付く。先日の延珠まで乱入してきた騒ぎの時に事務所にも落としたのである。ついてねえと頭をガシガシと掻きながら天童民間警備会社に向かう。

木更のお見合いには蓮太郎も同行することになった。何が悲しくて好きな人のお見合いの保証人にならにやあかんのだと思つたが、木更の人脈には蓮太郎ほど信用できる人はいないと分かつてるので、渋々了承はした。

ちなみに、蓮太郎は気付いてなかったが、その時の木更の腹の中は真っ黒だったりする。

ハッピービルディングの前に辿り着くと、階段の前をウロウロしている人物に気が付いた。しかも、その人物には見覚えがある。少し前にメールで見たような……

「……水原？」

無意識に出てきた名前と脳内の人物像をウロウロしている青年と合わせる。

「………ん？蓮太郎？」

そして、あちらも蓮太郎に気が付き、声を上げる。それで疑問は確信に変わった。

「お前、水原か？水原鬼八！」

「つて事はお前は蓮太郎か！久しぶりだな！」

「ああ、久しぶり！」

どちらからともなく歩み寄り、ハイタッチをして握手をする。

水原鬼八。かつての蓮太郎の同級生で、蓮太郎からして見れば唯一人外ではない蓮太郎の友達だ。

「一体どうしたんだ？こんな寂れたビルに。」

まさかゲイバーやキャバクラや闇金に用があったわけでもあるまいし。と言おうとした時に鬼八の表情が変わる。

「蓮太郎、ここじゃマズイ。事務所に入れてくれないか？」

「……分かった。何かあったんだな。」

蓮太郎はすぐに了承。何もなかったかのような雰囲気醸し出しながら事務所の中に鬼八を入れる。民警ライセンスは無かった。

「……俺は今、狙われている。」

「なに？何かやらかしたのか？」

「やらかしていると言った方がいいな……蓮太郎、お前は『新人類創造計画』の関係者

……なんだよな？」

懐かしいその計画の名前に被験者じゃないけどなど言いながら首肯する。

「じゃあ、『新世界創造計画』と『ブラックスワン・プロジェクト』については？」

「……なんだそりゃ。世界中の白鳥に片っ端から黒いペンキ変えて世界の白鳥の概要を変える計画か？黒鳥にでも名前を変えるつもりか？」

「なんだそのくつだんねえ計画……いや、俺も知らないんだ。今、調べているところだ。」
だが、それについて蓮太郎を訪ねたということは……

「危ない橋、渡ってんのか。」

「一歩間違えりゃ死ぬ。だから、最低でもパイプを確保したい。天童菊之丞閣下や聖天子様との……」

この二人の名前が出るといふこと、それはつまり、東京エリア自体に危機が迫つているとも言つても良かった。

そして、鬼八は木更等の天童と関係のあるものとは何の関係も持っていないし、聖天子様となんてもつての外だ。

「何か証拠みたいなのはあるのか？あつたら先に届けておくしそつちの方が話をつけやすい。」

「あつたが、盗まれた。」

「盗まれたあ？空き巢にか？」

「違う、奴等にだ。」

「……けど、それだとあの爺さんや聖天子様は信用してくんねえぞ。」

「だから、俺が生き証人になる。だから、頼めるか？」

鬼八の言葉に今すぐにも首肯をして菊之丞と聖天子の元に連れていきたいところだが、菊之丞との関係は蛭子影胤事件以来悪化したまま、聖天子様とはアポを取らなければ面会は出来ないだろう。

「……すまんが、時間はかかる。」

「それでいい。だけど、なるべく早くしてくれ。いつ殺されるか分からないんだ。今にでも、奴等は俺を狙っているかもしれない。」

「それは言い過ぎじゃないか？」

「いや、それでも足りないくらいだ。」

「……なあ、お前はなんでそんなヤバイ奴らに追われてんだ？」

「……言ったら、戻れないぞ？」

「俺が誰かに殺されるかよ。」

「……それもそうだな。けど、誰かに聞かれたらまずい。明日の夜に市役所近くの建設途中の新ビルに来てくれ。そこで話す。」

「分かった。」

鬼八は長居をするのもマズイから俺はそろそろ行く。と言うと、天童民間警備会社から去っていった。

その後、蓮太郎は民警ライセンスを探してみたが、何処にも無かった。だが、民警ライセンスを使う事はそうそう無いので、出てくるのを待とう。と気楽にする事にした。

翌日。蓮太郎は木更のお見合いについて行つた。行く時は終始不機嫌だったが、それはなるべく表に出さないように頑張つた。

ティナの聖天使暗殺の時に行つたことのあるあの高級料理亭、鵜登呂亭だった。

ついた後も適当な挨拶をしたら不機嫌オーラを仕舞いつつ出歩いた。

「くっそ……櫃間の野郎といい空気になってねえよな……」

蓮太郎は木更の事が気が気では無かった。何故なら、櫃間は木更の初恋の相手だからだ。蓮太郎は、それを知っている。

一方木更は、実は蓮太郎がその無敵さで見合いをぶち壊してはくれないかと内心期待していた。

櫃間は確かにいい男だとは思う。警視で真面目をそのまま現したような人物だ。だが、木更は彼と結婚する気なんてサラサラない。本当は、見合いの話を切り出し時、蓮太郎が乱暴にでも止めろと言ってくれるのを心のどこかで期待していた。だが、蓮太郎は延珠が投げ込まれた後、なんやかんやで木更が色々と説明をしてから蓮太郎は特売に行つてくると逃げていった。

その後、特売に行つて自然を装つて見合いには賛成か反対か聞こうとしたが、見事に話しかける前におばちゃん達にKOさせられ、気が付いたらスパーの前で気絶していた。

そしてそのままお見合いである。

着物を羽織り、いつも以上にお洒落をして来て、顔を合わせた櫃間は五年前よりも精悍になっていた。

だが、何か足りない。木更が櫃間に熱を向けるには、何か足りない。

憂鬱さに少し惚けている内に櫃間の父母と今回の縁談を組んだ柴垣仙一と蓮太郎が部屋を去る。ここで蓮太郎が何かアクションを起こしてくれるのを期待したが、彼は不機嫌なまま、無言で去っていった。去って行ってしまった。

「すみません、家の父母が舞い上がってしまった。」

「お久しぶりです、櫃間さん。」

「ええ、五年ぶりですね。」

櫃間は蓮太郎よりも遙かに性格がいいのは知っているし、部下で民警である蓮太郎よりも立場は上でしかも警視。さらに、不幸面と比べて遙かに精悍。他の女性からしたら超優良物件と言つても過言ではないだろう。

だが、木更は二人きりになった時、何か違和感を感じた。まるで、櫃間の精悍さが仮面であるかのような違和感が。

木更の勘はよく当たる。だが、その勘は信じられなかった。

「警視に昇進されたんですね。」

「はは、五年間でここまで上がったのは右も左もわからなかった私を導いてくれた方々のお陰です。君も、五年前と比べて可愛いよりも美しいが合うようになった。」

「おだてても無駄ですよ。」

と、言うがここまで直球に言われたことは無かったので、思わず恥ずかしさに顔を赤くする。

「でも、櫃間さん。どうして急に……」

「と、いうと……」

「櫃間さんには申し訳ないと思っています。私は天童一派を出奔し、離反したせいで天童からは勘当同然の扱いを受けています。そちらには破談状も届いたでしょう。です

から、お分かりでしょうが、私と結婚しても天童との橋渡しにはなりません。名字こそ天童を名乗っていますが、私自身、私を天童だなんて思ってはいません。」

出来れば、この体を流れる血を全て他の血と入れ替えてしまいたいという言葉を呑み込む。

「別に私は天童とのコネクションが欲しくて柴垣さんに一席を設けてもらったわけではありません。」

「じゃあ、どうして？ 親は警視総監、櫃間さん自身も警視となれば、おモチになるのでしよう？」

「あなたを一目見て、心を奪われたという理由では駄目でしょうか？」

再びのド直球の言葉に顔を赤くする。

「お戯れを。」

「冗談ではありませんよ。」

「なら、なおさら恥ずかしいですわ。」

ここまでド直球にくると、相手は本気だと考えてもいい。なら、突き放した方がいいだろうと戦法を変えることにした。

「私は天童に復讐するために生きています。」

天童はまさに政財界の巨人ガリバー。これに楯突くことは国家に楯突く事と同じ。

そのために生きている木更に協力するということは、国家に楯突くのと同じ。
「知っています。」

「え？」

「なのだが、櫃間はこの一言を聞く限り、それすら理解の上でこの見合いを組んだという。
う。」

「これを考えなしで行ったとなればただの間抜けか馬鹿か阿呆だが、目の前の彼はそうとは思えない。」

「あなたは菊之丞一派の首を狙ってるのでしょうか。ならば、私を利用してください。」

「……その対価は？」

「私をおかしくした、あなた自身です。」

「シェイクスピアの劇の見すぎでは？」

「そうかもしれません。けれど、これは私の本心です。」

「櫃間が木更を抱きしめる。急な事に声が漏れそうになる。」

「蓮太郎がこんな事をしてくれたらと思うが、すぐにそんな考えは振り払う。」

「櫃間はポケットを漁ると、木更の手に何かを握らせた。」

「懐中時計？」

「それは、黄金色に輝く円状の綺麗な懐中時計だった。長針と短針も金であしらわれ、

文字盤にも宝石が埋め込まれている、一目で豪華な物だと分かる代物だった。

しかし、どこか可笑しい感触があった。しかし、それもすぐに気にならなくなった。

「これを私に？」

「もらつてくれると、無駄にならなくて済むんですけどね。」

トントン。と懐中時計を叩いてみる。何か、空洞のようなものがある気がする。が、懐中時計なんてお洒落なものは使ったことがない木更はこれが普通なのだろうと割り切った。

「もう、私たちは許嫁じゃないのよ？」

「そんなの問題じゃない。私は君が好きなんだ。」

「……私も、あなたのような人にそんな事を囁かれたら、ガラスの靴を履いてみたくなるのかしら？」

「試してみましようか？」

木更の顔に、段々と櫃間の顔が近づいてくる。

木更は全てを委ねるように瞳を閉じ……

蓮太郎は池を見つけると、そこで泳ぐ鯉をじつと見つめていた。

「はあ……お前らは呑気でいいよな……」

ぽいぽいつと料理の中からかつきらつてきたパンをちぎって池に投げる。すると、鯉が我先にとパンを食べようと迫ってくる。

だが、その中に見向きもしない鯉が一匹いた。気付いていないのだろうか。

「そりゃあそうだよな……木更さんの事故放っておく男なんてそうそういないよな……」
パンをまだぽいぽい投げていると、ふと背後に嫌な雰囲気を感じた。急いで隠れると、すぐに櫃間と木更がやってきた。

何か櫃間と木更が話し込み、急に櫃間が木更を抱きしめた。思わず出て行って壁のシミに変えてやりたくなかったが、なんとか抑えた。

何か櫃間が木更に渡した後、櫃間の顔が木更に近づく。木更は何も抵抗せずに瞳を閉じた。

（なんで抵抗しないんだよ木更さん！）

そして、もう鼻先数センチになったところでもう見ていられず、蓮太郎は逃げ出した。「見てられつかちくしょうがアアアアアアア!!」

蓮太郎の魂の叫びは櫃間と木更には運良く聞かれることはなかった。

「ごめんなさい。いまは、離してください。」

木更は唇が重なる寸前、掌をシキリ板よろしく顔のあいだに挟み込み、櫃間の胸板を押しした。

「……わたしは、あなたを利用するだけ利用してもいいんですか？」

「そうとつてもらつて、構いません。」

利用し、利用される。そんな関係ではなく、ただただ、利用し続け、利用し続けられる関係。なんて素敵なのだろうか。

蓮太郎や延珠達を気にすることなく、ただひたすらに櫃間を利用し続け、復讐をしていく。そんな関係。

そんな関係なら、櫃間を好きになれるかもしれない。もう、蓮太郎に頼ること無く、生きていけるかもしれない。

(これが恋……なのよね。)

彼女の問いに答える者は、何処にもいない。

サーティーパンチ

「はあ、つまり、木更がお見合い相手とちゅっちゅしてるのが嫌で逃げてきたとね。」

「言い方がアレだけど大体あつてるから何も言えねえ……」

蓮太郎は走り去った後、行く宛もなく董の研究室に来ていた。理由は特にない。

蓮太郎はビーカーに入ったコーヒートを苦そうな表情でグイッと煽る。

「ま、諦めることだね。君にとつて彼女は高嶺の花だ。むしろ、今まで誰にも取られなかったのが奇跡みたいなものだ。とつと君はロリコンを自覚して延珠ちゃんを幸せにしろ。してください。」

「いや、ロリコンじゃねえから……」

ガブガブとコーヒートを次々に胃にぶち込んでいく蓮太郎を見て駄目だこりやと溜め息をつく董。

「君がロリコンじゃなかったにしても、私は君が木更を押し倒して警察沙汰になるのを期待してたんだがね。」

「あんたほんと最低だよ……」

「ありがとう、最高の褒め言葉だ。」

董はふふん。と自慢気に鼻を鳴らすが、蓮太郎は口から溜め息が漏れる。

「……そういや、先生。『ブラックスワン・プロジェクト』について知ってるか？」

「……聞いたことないね。世界中の白鳥を真っ黒に染め上げる計画かい？」

「それ本気で言ったらあんたの頭を疑うぞ。」

「おや、君が真っ先に言いそうなことを言った迄だがね。」

うぐつ……と呻く蓮太郎。確かに蓮太郎は冗談で鬼八に殆ど同じことを言った。

「まあ、ブラックスワンと名が付くところを見るに、『ブラックスワン理論』が関係して
るだろうね。」

「ブラックスワン理論？」

「まあ、長くなるから簡潔にまとめめるが……」

「本来、白鳥は白色しかいなかった。ですけど、黒色の白鳥が発見された事で学者に激震
が走った事が由来したため、今までの常識に囚われている時に予想不可能な事が起こっ
た場合、対応が後手に回って大ダメージを与えることです。里見さん。」

びよこん、と蓮太郎のすぐ横にとんがり帽子が現れた。

「翠か？」

「はい。ちよつと先生に用事があったんです。」

「おや、翠ちゃん。君がここに来たつてことはあれはもう終わらせたのかい？」

「はい。泣きゲーでした。」

と、翠が持ってきた鞆からゲームの箱を取り出し、董に手渡す。チラツとR—18のマークが見えたのは華麗にスルー。

「私はもつとヒロインがぐつちよぐちよにされる展開が好きなんだがね。」

「うーん、私はこういう展開が好きですね。」

「まあ、君は子供だからね。こういう恋愛漫画的なストーリーの方が好きなのだろう。」

最早蓮太郎には何を言っているのか分からないが、ただ一つ言えることがある。

まだ十歳の子供にエロゲーを貸すんじゃない。

「それで、なんでブラックスワン理論の話なんてしてたんですか?」

「いや、大人の話しさ。それで、蓮太郎くん。何か予想はついたかな?」

「ん? ああ。とても嫌な予感がするって程度にな。」

そうかい。と董は言うのと、スツと翠にヘッドフォンを着けると、ノートパソコンを手渡した。

「……彼女に聞かれたくないこと、あるんだろう?」

董は手に持ったエロゲーを棚に運ぶためによっこいしよと声を出して立ち上がる。

「ああ……『新世界創造計画』。これについて知ってる事は?」

「……驚いた。何処でそれを?」

「依頼人からだ。」

「……君も関係者と言っているから一応話しておこう。」

葦はエロゲーを棚に置くと、そつと翠の持つてるパソコンの音量を上げた。

「さて、鼻塩塩……ではなく話をしよう。」

「この流れ数ヶ月前に聞いたな……」

ドカツと音を立ててパイプ椅子に座り、葦は話を始める。

「簡潔に言おうと、新世界創造計画は新人類創造計画の完全版だ。」

「完全版？」

「新人類創造計画は体の一部を機械化することで呪われた子供たちに匹敵する力を手に入れる計画だ。蛭子影胤は内蔵。ティナちゃんはシエンフィールド。そして、本来君に取り付ける筈だった超バラニウムの義肢と義眼。だが、新世界創造計画はゆくゆくは脳以外の全てを機械化するのも視野に含めた計画だった。」

「なんだって？新人類創造計画は成功率の低いモンじゃなかったのか？」

「ああ。だが、好奇心は科学者だって殺す。子供だろうが大人だろうが何だろうが殺すさ。」

「……けど、先生の話聞くに、それは実現しなかったんだろ？」

「そこが私も気になっている……が、もしかしたらあの事件が関わってるかもしれない

ね。」

「あの事件?」

「この前、新国立劇場で一人の男が殺された。芳原健二、三十五歳。趣味のオペラ鑑賞中に胸をナイフのようなもので一突き。同日同時刻、高村莢、二十八歳の家は何者かが侵入し、ショットガンのような武器で射殺。さらに同日同時刻。海老原義一が新幹線での移動中に狙撃されて死亡している。」

「一日に三件も……?」

「それだけじゃない。三人とも、少なからず新人類創造計画に関係している。」

「なんだって?」

「高村莢と芳原健二は私の元患者で君とは違い、ガストレア大戦を戦った。二人とも、その後は戦いが嫌になって手を引いたんだけどね。」

蓮太郎が言葉を失う。

「彼等が平穩を望むのなら、私は祝福するつもりだったんだが……どうやらそんなアダムとイブをそそのかした蛇が居たらしい。それがこの海老原義一だ。彼はどうやら二人に諜報員のようなものをやらせていたたらしい。」

「……それで、知りすぎてしまったと。」

「まあ、そうなるな。」

一体何を？と思うが考えたところで調べなくては答えは出ない。

邪魔したな。と一声かけて出ていこうとした蓮太郎だが、木更がそれを止める。

「まあ待て。木更の事はどうするつもりだ？他の男に取られても、君は切齒扼腕して見ている気かい？」

「……別に、どうもしねえよ。」

腰を浮かせていた蓮太郎はドカッと再びパイプ椅子に座りなおす。

「……なあ、先生。木更さんが和光義兄さんを殺したのは話したよな？」

「ああ……」

「俺は、その……木更さんの事が好きだ。愛してる。木更さんのためなら何だってしてやりたい。けど、木更さんをこれまで動かして、人外化までさせてきたのは、天童への復讐心なんだよ。」

木更の両親が目の前で殺された後、木更は蓮太郎に負けず劣らずの訓練をした。

毎日剣を振り、ただ剣を振り、蓮太郎を的にしても自らの腕を磨き続けた。

もし、蓮太郎も目の前でやられていたら、木更はきっと、今でも何かしらの障害を負っていただろう。

だが、木更は両親の死を受け止め、復讐心を胸にただひたすら剣を振った。

気付いた時には蓮太郎には程遠いが、木更も彰磨に引き続き人外になっていた。

「天童民間警備会社を始めて楽しい日々が続いていたから、忘れていたのかと思ったけど、違った……」

蓮太郎は俯く。

「十年前、俺が木更さんと初めて出会った時、ああ、この人は守りたい。俺の両親みたいに、殺されたくないって思った。だから、俺が鍛えればガストレアを駆逐できる。その結果、木更さんを守る。木更さんを幸せに出来る。そう思った。だから鍛えた。」

「……君が人外になった経緯、初めて聞いたよ。」

「俺、あの人が幸せになるためならなんだってやるよ。復讐以外にも生きるに値するものは何だつてあるんだつて。何処かに行きたいなら俺が連れていく。木更さんを狙う敵がいたら真っ先に排除する。世界が敵に回ったなら、世界を壊す。隕石が落ちてくるなら殴り壊す。宇宙人が地球を破壊しにきたら一人で倒す。」

「……つまり、君は木更の幸せのためなら、自分の幸せを諦めると?」

木更に言われてハツとした。自分の言ったことは、即ちそれに繋がると。だが、
「……ああ。」

蓮太郎は頷いた。

「……馬鹿だね。君は。」

「生憎、殴るしか能がなくてな。」

「……まっ、君が何かしでかす時は声をかけるといい。延珠ちゃん達の安全は確保しよう。」

「延珠達には迷惑かけねえよ。」

「次に延珠ちゃんが血を吐いたら殺されても可笑しくないよ。」

蓮太郎は立ち上がり背を向けると手を上げて去っていった。

「はあ……壁は大きいよ、延珠ちゃん。」

董は董のノーパソでニヤニヤしながらエロゲーをしているロリっ子を見て溜め息をつきながらそう呟いた。

建設中の新ビルで鬼八は一人佇んでいた。

腕時計を見れば、もうすぐ集合時間だ。ビルの中にはもう誰もいない。

が、コツン、コツン。と足音が響いてきた。

「蓮太郎、早く来い。」

鬼八が声をかけると、足音が早くなった。

そして、足音の持ち主が突っ込んできた。

「っ!？」

その人物は真つ黒なパーカーのようなものを目深に被り、拳を構えている。

不意打ち気味の拳を避け、鬼八は己が特訓した呼吸法を使う。

「コオオオオ……」

キイイインと何かが響く音が体内に木霊する。それと同時に、体全体をバチバチツと音を立ててエネルギーが包む。

「波紋疾走!!」

カウンター気味で放たれた拳は襲撃者の手に阻まれた。だが、襲撃者はすぐに手を引つ込めると、バックステップで距離を取った。

襲撃者の手にはまるで電撃を受けたかのような感覚が走っていた。

「悪いが、ただで殺されるつもりはないんでね。」

波紋。鬼八が幼い頃、蓮太郎とつるんでは大怪我を負っていた時期、公園でボーっとしていたらシルクハットを被った真つ白なスーツのようなものを着たちよび髭のおじさんが「君には波紋の素質がある。どうだ？ワシと共に来て波紋の特訓をせんか？」と言われてホイホイついていき、この不思議な力、波紋を手に入れた。

鬼八はその波紋による治療により、蓮太郎に負わされる大怪我もすぐに治療できるようになった。

「仙道波蹴!!」
せんどううえいぶきつく

後退した襲撃者の顔に向けて、飛び膝蹴りに波紋を乗せて放つ。が、襲撃者はそれをあつさり避け、拳を繰り出した。

もちろんそれは鬼八が受け止めた。が、その瞬間、腕の肉が弾け、骨が砕けた。

「ぐああつ!!」

さらに拳の威力で吹き飛ぶ。

「くつ……な、何なんだあいつの腕は……」

すぐに波紋を呼吸で練り直し、腕にエネルギーを送り込んで治療をする。

血は止まらないが、骨は治った。が、襲撃者はそれを見てすぐに突っ込んでくる。

「させん!床を伝わる波紋疾走!!」

が、すぐに波紋を地面に流し込み、襲撃者へと向ける。

波紋は襲撃者の足に当たり、足を一瞬痺れさせる。その一瞬の間に再び波紋を練り、腕を人を殴れる程度に治す。

「くらえ、ズームパンチ!!」

そして、少し離れた襲撃者相手に関節を外して射程を長くした拳を放つ。関節を外した際の痛みは波紋で和らげる。

「っ!!」

襲撃者はそれに驚きつつも痺れた足で避ける。

「震えるぞ！ハート！燃え尽きるほどヒート！刻むぞ、血液のビート!!」

が、鬼八は既に次の攻撃を構えている。

外した関節を戻しながらも鬼八はもう片方の腕に波紋を乗せる。

その色は太陽と同じ山吹色。正しく、太陽のエネルギー。

「山吹色の波紋疾走!!」

サンライイトイエローオーバードライブ

バチバチバチツ!!と音を立てながら鬼八の拳が襲撃者の胸部を捉え、吹っ飛ばす。

襲撃者はビルの中にあつたダンボールにぶち当たり、埃を舞いあげる。

「……勝ったか。」

鬼八が腕時計を確認すると、もうすぐ蓮太郎が来る時間だった。

これで仕留めきれなくても蓮太郎が来る。そう安堵しきつたその瞬間、襲撃者は埃

の中から姿を現し、鬼八へと突っ込み、拳を振るつた。

「なっ!!」

急いで回避行動を取るが、そのせいで体勢が崩れてしまう。それを襲撃者は見逃さな

かった。襲撃者のもう片方の拳が鬼八の胸部を捉える。

「ガッ!!?」

グチャツ!!と胸の中で何かが弾けたような音が響く。そのまま吹っ飛ばされ、地面を

転がる。

(は、波紋を練らねば……ッ!?!い、息ができない……!?!)

胸を抑えてのたうち回る。それもその筈。鬼八は先程の一撃で灰と心臓を破壊されている。

(うそ……だろ……)

意識が段々と遠ざかって行く。そして、脳裏に楽しかった思い出が蘇る。

(火垂……)

重くなる瞼に耐え切ることができず、鬼八は瞳を閉じて意識を手放した。パタン、と何かカードのようなものが落ちる音が聞こえた。

新ビルについた蓮太郎はすぐに待ち合わせの四階に行き、中を見る。

「っ!?!」

四階の中は物が散乱しており、鬼八が倒れていた。

名前を呼んですぐに安否を確認しに行こうとするが、鬼八の胸部はピクリともしていない。息をしていない。

(救急車……つて何だあれは?)

現場を荒らすのを覚悟で蓮太郎はそれを拾い上げる。

(これは……俺の民警ライセンス……!?)

落ちていたのは何処かに置いてあるはずの民警ライセンスだった。

なんでこんな所に?と思つたのも束の間だった。

「容疑者確保オ!!」

「なっ!?!」

男の声が響き、警察らしき者たちが侵入。蓮太郎を取り押さえる。

「ち、違う、俺じゃない!!」

現場には蓮太郎のみ。そして、落ちていた民警ライセンスとそれを回収する本人。

本来、民警ライセンスは肌身離さず持っているもの。それを落としているということ

は、ここで何かしたという証拠。つまり、この場での容疑者は蓮太郎のみ。

(クソがつ!!嵌められた!!)

蓮太郎はこの日、水原鬼八の殺人容疑をかけられた。

サーティーワンパンチ

「だあかあらあ！俺はやつてねえつつつてんだろんが！俺は嵌められたんだ！」

「匿名の通報人からはガイシヤの側にお前の民警ライセンスが落ちていた。そしてお前はそれを回収しに戻ってきた。もうネタは上がってんだよ！」

「だからそれは誰かが俺を陥れるための罠だつつつてんだろんが！話聞け!!」

駄目だ、話になりやしねえと蓮太郎はドカツと決して座り心地の良い椅子に座り込む。

ここは取調室。コンクリートで打ちっ放しの壁がヤケに部屋を狭く感じさせる。

既に取り調べが始まり二時間が経っている。小耳に挟んだところ、鬼八は董が回収しづらい。おそらく、今頃は董が延珠達に事情を説明してるだろう。

「もういい、多田島って警部を呼んでくれ。あの人とは顔見知りだ。」

「俺がどうかしたか？」

もう顔見知りの警察官に事情を話してとつと返してもらおうと思った矢先、件の多田島は部屋に入ってきた。

「よっ、多田島のおっさん。」

「退け、俺が取り調べをする。で、こんな所にぶち込まれるとは、東京エリアの救世主様も落ちぶれたもんだな。」

取り調べをしていた警察官を退かして多田島が蓮太郎の真つ正面に座る。

「里見蓮太郎。事件当夜の行動を話してもらおうか。」

「ああ。」

おそらく、アリバイがある事を聞くためだろうと蓮太郎は喋る。

朝起きてからすぐに木更のお見合いに行かされたこと。その後何時間も走り回って知り合いの部屋に行き、話をした後に鬼八との約束を果たすためにあのビルに行ったところ、嵌められたという事を。

「なら、なんで民警ライセンスが落ちていた。」

「……恥ずかしながら、盗まれた。昨日、水原と会ったときに無いって気が付いて、放っておけば出てくるだろうと思ったらあんなところに湧いてやがった。」

「なんで盗まれたってわかったんだ。何処かに落としたりかは考えなかったのか？」

「一昨日には確かにこの服の内ポケットにあった。けど、一昨日にちよつと大騒ぎしてな……その時に事務所に落としたんだらうと思つて水原の話を聞くついでに事務所を探したけどなかったんだ。それで、罪の擦り付けに使われたって分かつて盗まれたのが分かったんだ。」

「ふうん、随分と都合のいいもんだな。ガイシャと会ったときに思い出すなんてよ。」
「偶然だ。」

多田島からは疑惑の目が向けられる。こういう事なら金にかかるが、IISOに行つてライセンスの再発行を頼めばよかつたと後悔する。

「多田島警部。あいつは俺と会つた時、殺されるかもしれないと怯えていた。その俺がどうしてあいつを殺さなきゃならん？」

「それを知つてるのは？」

「どういう事だ？」

「俺がここに来る前に天童民間警備会社の人間に話を聞いてきた。」

つまり、蓮太郎が冤罪で捕まつたのはもう延珠達には知られているという事だった。

また延珠が血を吐くんだらうなああと自然に考えてしまうあたり、延珠にはかなり苦労させてるなあと実感させられる。

「お前のアリバイは昨日から証明されていない。家に帰つた夜以外な。」

「……は？ いやいや、そんな事は……」

と、言いかけたが、昨日、蓮太郎が外で出会つたのは水原のみ。アリバイの証明が容疑者の証言のみだと、それはアリバイとは言えなくなる。

「……で、そこから俺達は考えた。」

「な、何をだ……」

先行きが不安になってくる。

「お前がガイシャと会ったのは事実だろう。お前はその時、何をタネにされたのか知らんが、金を強請られたんだ。お前とガイシャは幼馴染だしな。タネはいくらでも有るだろう。お前は東京エリアの救世主様だからな。大量にふんだくれると思つた訳だ。そしてカツとしたお前はそのタネの口封じとその怒りの矛先として、ガイシャを呼び出し黒いフードを着てそのまま撲殺。クレーター作れるお前なら人間の心臓と肺を破裂させるなんて朝飯前だろう。」

「ふざけんな！水原はそんなクズ野郎じゃねえし俺だつてその程度で人は殺さねえ！その程度なら殴つて記憶吹っ飛ばす！それでもつて殺るんだつたら遺体も目撃者も徹底的に消すね！比喻じゃない、物理的にだ！それでもつて警察にだつて真正面から喧嘩を売つてやる！こんなコソコソとした事なんてする訳がねえだろうが!!」

「……つまり、お前はあくまでも犯行を否定すると。」

「ああ。徹底的に否定させてもらう。」

多田島は冷たい視線を蓮太郎に向けてると、口を開いた。

「里見蓮太郎。お前を拘留する。裁判所にも交流期限延長を申請するからしばらくは留置所暮らしになるな。」

「……災難だね。蓮太郎くん。」

「全くだ……クソが、犯人見つけたらボッコボコにして警察に突き出してやらア。」

蓮太郎はアクリル板の向こう側にいる董に愚痴を吐いた。

冤罪で豚箱にぶち込まれたのだ。愚痴だつてしたくなる。

「君が捕まるとしたら幼女のお尻をペロツとやってそのまま襲つて逮捕になるのかと思つてたけどね。」

俺はロリコンじゃねえと言いつ返すのも何時もの事なのであーはいはい。と適当に返した。董はつれないね。と呟くと差し入れとしてコッペパンを蓮太郎に渡した。

横にいた警察官が止めようとするが、別にいいじゃないか。と董が言うとスゴスゴ引き返した。どうやら董の権力はここまで通用するらしい。

「おい、止めてやれよ。」

「君は優しいね。なら漫画をやるよ。」

「そっちの方が嬉しいよ。俺は食わなくても餓死しねえし。」

「人外め。」

「知ってら。」

その後は弁護士についてや裁判についても軽く話し合った。

そして出たのは、勝率はかなり低いという事だ。

「あゝあ、先生、弁護士してくれよ。」

「悪いが、ライセンス取るのに時間足りなかったよ。」

二人して背もたれに腕を乗せて溜め息をつく。

「……ティナは？」

「……このままだと君が海老原義一殺害の主犯でティナちゃんが実行犯になること間違いない。」

「クソつたれな世の中だぜ。」

「全くだ。」

ティナは蓮太郎が捕まってからすぐに捕まった。

警察は走行中の新幹線から人の頭を狙撃できるスナイパーをティナしか発見できなかったのだ。しかもティナは蓮太郎と関わりが深い上に前科もある。

「……まっ、これからどうするかはその漫画を見て考えたまえ。」

「そーするよ、先生。」

そして、蓮太郎は折の中に戻って漫画の中を見た。

すると、中からは一枚の紙が落ちてきた。それを見て、蓮太郎はほくそ笑むと、その紙を見られないよう、飲み込んだ。

さらに二日後。蓮太郎は被疑者から被告人となった。

「……遅くなってごめんなさい、里見くん。」

「愛想尽かされたかと思っただぜ。」

蓮太郎が被告人となつてから、木更はやつと面会に来てくれた。

延珠と夏世はよく来てくれるし、翠も二人より頻度は少ないものの話相手として来てくれる。だが、木更だけは来てくれなかったのだ。

「……で、お見合いはどうなつたんだよ。」

聞きたくないが、聞かなければ何となくだが気分が悪い。

「ええ、櫃間さんはいい人よ。警察の人だから、里見くんの事にも相談に乗ってくれるし。」

だが、木更はとても惚気けるようには見えない。まだ、付き合っているという訳ではなく、ホツとする自分がいた。

「そっか……」

「……ねえ、他に聞きたいこと、あるんじゃないの？」

「と、言うのと？」

「なんで今まで来なかったのか……とか。」

「別に？忙しかったんだろ？」

櫃間と一緒にいたから。そう答えられるのが何となく嫌で、話題を切るためにわざとぶっきらぼうに返した。

「……里見くん。私、考えたの。ちゃんとした答えが出るまで、里見くんには合うべきじゃないって思ってたから。でも、やっと答えが出たの。」

木更の真面目な雰囲気には押しされ、自然気持ちが引き締まる。

「私、里見くんのためなら何でもやるわ。最高の弁護士を用意してあげる。お金は心配いらぬわ。ティナちゃんも絶対に……」

「駄目だ！」

思わず木更の言葉を遮った。木更もいきなりの事に口が開いたままになっている。

何故木更の言葉を遮ったのか。それは、木更が言ったことが蓮太郎が決めた事とほとんど同じ事だからだ。

「……あ、ごめん……でも、気にしないでくれ。俺じゃなくてティナに全力を尽くしてく

れ。」

「里見くん……?」

「木更さんの気遣いが迷惑って訳じゃないんだ。」

なんて言い訳をしようか。そう考える前に口が開いた。

「俺はワンパンマン、里見蓮太郎だ。そんな俺がこんな所で終わる人間か? 仲間を終わらせる人間か? 違うだろ? 俺は何がなんでもここを抜け出し、堂々とお天道様の元を歩いてやる。だから、木更さん。待つてくれ。あんたは天童民間警備会社の社長席にドカツと腰を下ろして待つててくれたらいいんだ。絶対に、また俺と、延珠と、夏世と、ティナと、翠で。木更さんの無理難題をどうにかしてやるよ。だから、待つててくれ。社長らしく……そして……」

——俺の、希望^{太陽}らしく。

最後の台詞が口から出たかは分からなかった。だが、木更は暫く呆気にとられていると、クスツと笑った。

「あなた一人でどうするっていうのよ。」

笑いながら、木更は言った。

「そりゃ……どうにかするさ!」

蓮太郎も、笑いながら言った。

「この猪頭。」

「どーも。褒め言葉だ。」

暫くの沈黙。そして、どちらからともなく、笑い出した。

「帰ってこなかったら、地獄の果まで行って殺しに行くわよ?」

「へっ、その準備も杞憂で終わる程度にしてやるよ。」

「それじゃ、私は里見くんの言った通り、天童民間警備会社の椅子に腰を下ろしてじつくり待ってあげるわ。でも、何もやらずに人を待つのは私、苦手なの……だから……」

——櫃間さんからは搾り取れるだけ搾り取ってあげるわ。

「ヒイツ?!」

「ちよっ、ど、どうしたの!」

「い、いや、なんか一瞬寒気が……」

木更の言った言葉が気のせいでありますように。蓮太郎はここ最近、久しぶりに神に願った。

「それじゃあ……待ってるから。」

「ああ、待っててくれ。」

木更は面会室から出て行った。

既に、董達は動いている。

次に外に出た時。それが、反逆の始まりだ。

「うお〜い、何処連れてく気だ〜。死刑はまだ決まってる筈だぞ〜」

「うるさいそろそろ口を閉じろ。閉じてくれ。二日酔いで頭が痛いんだ……」

「あ、すんません……って仕事前日に飲むなよ……これからは気をつけるよ?」

「ああ……そうだな。(なんで俺、殺人犯に体の心配されてんだ……?)」

蓮太郎は護送車にぶち込まれ、そのまま何処かに護送されていた。

何事かは分からないが、誰かが蓮太郎を呼び出したらしい。

もし、呼び出したのが黒幕でどうだね負け犬の気分はハーツハツハとか言ってきたらフルボッコにして警察に差し出す気満々である。

だが、そんな蓮太郎の心境とは裏腹に、護送車が到着したのは、なんと聖居の前だった。

「……道、間違えますよ〜」

「いや、合っている。これを持っていけ。」

護送官の一人が蓮太郎に突き出したのは証拠品として押収された民警ライセンスだ。

「……」

何が起こるのかわからず、取り敢えず手錠に繋がれた両手でライセンスを受け取る。そのまま腰に繋がれたロープを引っ張られ、蓮太郎は抵抗せずに前を向き歩く。

そして、扉の前に連行されると、手錠に鍵を突っ込まれ、手錠を外され、腰のロープも外された。

「何のつもりだ？」

蓮太郎は自由になった手を摩りながら護送官に聞いた。

「聖天子様がお会いになられるそうだ。」

「聖天子様が？」

何故かと思つたが、蓮太郎に返された民警ライセンスで何をするかは分かつた。

だが、何時も通りにポケットに手を突っ込む。

そして、重い扉が重々しく開かれ、聖天子が身を現す。相変わらず綺麗な人だと蓮太郎は感心する。

聖天子は蓮太郎をサンドイッチしてる護送官に向けて手を横に振つた。

「いけません、聖天子様！お二人になられるなど……」

「私の言うことが聞けないというのですか？」

護送官は渋々といった表情をして扉の向こうに消えた。

残されたのは蓮太郎と聖天子の二人のみ。

「……久しぶりだな、聖天子様。」

「こんな状況でなかったらティータイムと洒落こんだ所です。」

聖天子の雰囲気は、何時もより固いように思えた。

「……で、何のようだ？」

「……今、世論がどうなってるか、ご存知ですか？」

「生憎、留置所にはなんにもなくてな。」

「前回の第三次関東大戦で一番の功績を上げた天童民間警備会社を見直す動きが出ていましたが、里見さんの現行犯逮捕により待ったがかかりました。」

「やってねえんだけどなあ……」

「私はそれを判断できる立場ではありませんので。」

「知ってるよ。そこまで無知じゃない。」

「……里見さん、今回の件は私にも責任があります。三回に渡って序列向上を手伝いました、私も同罪なのです。」

聖天子の表情は真剣そのもの。本当に、聖天子は自分も同罪なのだと考えているのだろう。

優しい人だ。と蓮太郎はやはり感心する。

「ですが、今回は里見さんに辛い報告をしなければありません。」
「なんだ。と蓮太郎は聞く。」

「里見さんの民警ライセンスを剥奪します。」

「……そうかよ。」

蓮太郎は聖天子に民警ライセンスを渡した。

「……素直ですね。」

「どうにもできねえんだよ。聖天子様に言われちゃあな。けど、無罪だったら返してくれよ？貸すだけだ。」

「その時は、必ず。」

聖天子は蓮太郎から民警ライセンスを『借りた』。

そして、何を思ったのか、聖天子はライセンスを手にしたまま、蓮太郎に抱き着いた。
「なっ!?!」

いきなりの事に蓮太郎から驚きの声が漏れる。が、聖天子はそのまま蓮太郎に囁いた。

「実は、護送官は護送中に居眠りさせる予定なのです。正義の民警である里見さんなら、起こしてくれませよね？」

聖天子の言葉に一瞬、は？と声が出そうになるが、すぐに言葉を飲み込む。

「…………『正義の民警』の俺ならな。」

「はい。」

聖天子はそつと、蓮太郎を離れた。

——信じてますから。

そう、呟いて。

蓮太郎は護送車に再びぶち込まれ、護送官にサンドイッチにさせられていた。

「…………これから俺達は聖天子様の命で居眠りする予定がある。『正義の民警』の里見蓮太郎。無事、起こしてくれるよな？」

『正義の民警』の俺なら起こしてやんよ。」

そして、護送官二人は臉を下ろした。

——延珠ちゃん達は私がかしよう。だから、君は思う存分暴れるがいい。

董の、漫画に挟まっていた紙の内容を思い出し、蓮太郎は手錠を引きちぎると、護送官の扉の前に立ち……

サーティーツーパンチ

何でこんな事になったんだろう。ティナは一人、留置所の中で頭を抱えていた。

ティナも今回は全くの無実だ。だが、ティナは狙ったかのように捕まった。

暗殺者時代なら暗器の一つや二つ仕込んでとつと抜け出すのに、平和ボケした自分が初めて恨めしかった。

そして、蓮太郎の有罪が決まった瞬間、ティナは銃殺刑となる。これはもう分かりきっている。

「あくあ……お先真つ暗ですね……ッ!!」

ドンツ!!と壁を蹴る。完全な八つ当たり行為だ。こうでもしないと収まらない。

今すぐ蓮太郎に罪を擦り付けた馬鹿をぶつ殺したい。自分の事はどうでもいい。蓮太郎だけはどうかして無罪を証明させたい。そう思う。

けど、道具が無ければ脱獄は出来ない。完全な手詰まりだ。

「くそっ、くそっ、くそっ!!」

いつもは使わない汚い言葉が出るのも気にせず壁を蹴り続ける。

力を開放しても、壁はビクともしない。

「……チツ。」

舌打ちをして備え付けのベッドに横になる。

弓月戦の時に使ったあのワイヤーが備えられている手袋があればと思うが、それを着ける前に連行されてしまった。

最早やる事が最近は壁ドンしかない。何とも生活感のない生活か。

「はあ……なんかこう、誰かが地面を掘って来てくれないかな……なんて、ある訳がありませんよね。」

諦めに近い溜め息を吐いたその時だった。

ボゴツ!!と床から何か鉄で出来た物が生え、そこから穴が空いた。

「フアッ!？」

まさか言ったことが現実になるとはと、衝撃の現実には思わず声が出るティナ。

「うう……ぺっぺ。土が口に……あ、ティナさん発見。」

「か、か、か、夏世さん?」

「は〜い、そうですね。皆のアイドルイルカ、夏世さんです。」

そう、地面を突き破ってきたのはなんと夏世だった。

夏世の手には手回しドリルらしき物が握られており、頭にはライト付きヘルメット、目にはゴーグル、服装はジャージに靴は長靴。さらに背中にはツルハシまである。

「な、何でここに?」

「何って……脱獄ですよ。何言ってるんですか?」

「え……? 脱獄?」

「ほら、早く我等がお天道様の元まで行きますよ。看守が来てしまいます。」

夏世はティナの手を引つ張ると、そのまま穴の中に入って行った。

「狭っ!」

だが、穴は非常に狭く、子供が四つん這いで移動するのがやつとな広さだった。

「手回しドリルで掘るのはこれが限界だったんです。しかも時間的にも案外キツくて

……もう翠さんも動いています。」

「翠さんも……? 何故?」

「そりや勿論、復讐ですよ。蓮太郎さんを陥れてティナさんを銃殺刑にしようとし、延珠

さんを相方殺しの元に送り込もうとしたクス野郎共へのね。」

「ちよっ、延珠さんのは初耳ですよ!」

「ウチの天才が本気出した結果です。あの人は私達の味方ですから。」

小さな抜け道を四つん這いで全力で移動する。

今まで移動してきた距離的に、明らかに手回しドリルで掘る距離ではないのはすぐに

分かった。

「……何故、こんなに必死に……?」

「私、ちよつと前に相方を殺されましてね。それが原因で蓮太郎さんの家に転がり込んでる訳ですが……知人が死ぬのはもう嫌なんですよ。何もせずに死んでしまうのは。」

「けど、こんな事したらあなたまで……」

「捕まる前に無実を証明したらいいんですよ。人外がいなくなつて、こつちには天才がいます。何とかありますよ。」

と、そうこう話している内に出口が見えた。

「……第三次関東大戦の時に皆が避難した……?」

その出口は、蓮太郎が掘ったあの子供たち収容場に繋がっていた。

ここからティナの部屋まで掘ってきたらしい。

「すぐにここは放棄します。ここは囿です。」

夏世は空洞の外に顔を出し、誰も居ないのを確認するとリモコンを取り出して前方の壁に向けてスイッチを押した。その瞬間、壁が無くなった。

「は?」

「大声出さないでください。3Dモニターの応用です。行きますよ。」

下水を飛び越えて無くなった壁の内側に入り、夏世はすぐにリモコンを取り出して再びスイッチを押し、壁を展開する。

「で、ここの壁もそうなんです、本命は……」

夏世は一度真横にある壁に触れて、実在する壁ではないのを示すと、自分の真上にある土の壁の一部に手をつ込み、外した。

「見事なもんでしよう？」

外された後には上へと続く梯子があった。

そこに先にティナを行かせると、すぐに夏世も後に続き、壁を元に戻す。

少し梯子で上がると、また四つん這いで行かなければならないほど狭い通路があった。

「ゴー。」

夏世の言葉に従い、ティナは前に進む。

そして数分進んだあたりで、ようやく立てるほどの空間が出てきた。が、出口はなく真つ暗だ。

「えつと……行き止まりなんですけど。」

「いえ、違います。ここら辺に……」

夏世が地面を照らして、一つの石を見つけると、あった。と声を漏らして押し込む。すると、がこつと音が鳴り、壁が少し回転する。

そこに二人同時に入る。

「やあ、やっと来たかい、夏世ちゃん、ティナちゃん。」

『作戦その一、完了やな。』

そこで待つていたのは董とモニターに映された美織だった。

「……………へ？」

「ここは董先生の研究室ですよ。流石の私もここまで寝ずの作業だったのでもう疲れました。」

「うん、ご苦労だったね、夏世ちゃん。ゆっくり寝るといい。」

『作戦その二はまだ決行の時間やない。けど、仕込みは万全やで。延珠ちゃんにも仕込みは完了しとる。』

「良かったです……………すみません、もう倒れそうなので寝かせてもらいます……………」

夏世はツルハシ、ドリル、ヘルメット、ゴーグルを外すと、片付けられていたベッドの上に横になり、そのまま眠りについた。

「……………あ、あの、何がどうなってるのか分からないんですけど……………」

「時間は惜しいから簡潔に説明させてもらうよ。ここは夏世ちゃんと翠ちゃんの頼みによつて貸している。目的は蓮太郎くんを陥れ、延珠ちゃんとティナちゃんを殺そうとした馬鹿への復讐さ。まっ、豚箱にぶち込むだけだけどね。」

「……………」

あまりの事に脳が追いつかない。

「けほつ、けほつ、か、開通しました!」

と、今度は違う方向の壁がひっくり返り、翠が現れた。翠も夏世と同じ格好をしている。

「ま、間に合いましたか?!」

『ギリギリセーフや!そんなじゃ、お迎え頼むで!』

「はい!」

だが、すぐに翠は壁の向こうへとんぼ返りしていった。

「あそこはどこに?」

「彼女の作った道は二つあってね。一つは蓮太郎くんの部屋の真下の部屋を借りて畳返しの要領で入れる通路。そしてさらにその隣の部屋から下水道を通ってここまで繋がる通路さ。しかも、蓮太郎くんの真下の部屋から繋がるのは外周区さ。」

「……よく、こんな短時間で……」

「彼女はよくやってくれたよ。」

ゲームの知識も無駄にはならないもんさ。と葦はコーヒーを飲みながら空中投影されたモニターに目をやる。

ちなみに、蓮太郎は現在民警ライセンスを取られている。

「I I S Oの者だ。藍原延珠、君をペア不在のためこちらで保護する事となった。」

蓮太郎の部屋で、延珠はI I S Oが派遣した男達に囲まれていた。別に彼等はロリコンではないため、エロ同人的な展開は起こらない。

「れ、蓮太郎はまだ生きていないか！」

「知らん。そんな事は俺達の管轄外だ。だが、聖天子様から民警ライセンスを剥奪されたと聞いた。」

「……はあ、そつかあ……蓮太郎、そんなに迷惑かけたのかあ……」

延珠はその場でポケーっとしだして、天井を見始めた。

どうもその様子が可哀想で、I I S Oの男達は無理矢理連れていくのに抵抗を感じた。

「はあ……ごほっごほっ……」

延珠が口元を抑え、咳をしだす。そして、

「いっほっいっほっ……がふっ！」

吐血した。

手の間からかなりの量の血が溢れ、畳に染みを作る。そして、延珠はそのまま倒れた。「と、吐血した!?!」

「い、いや、藍原延珠は少し前から胃潰瘍を患っていると聞く。ストレス性だそうだ。」
「……苦労してたのか。」

まさかストレスでこんな小さな子が血を吐くとは……と思っっている時だった。

「油断したな!!秘技、畳返し!!」

口元を血に染めた延珠がいきなりバツク転よ要領で起き上がり、なんとも古風な畳返しを披露した。

『うおっ!?!』

しかも四方向同時に。なんとも器用だ。

「アデュー!!」

IIISOの男達が襲いかかってきた畳を退かした時には、延珠の居た部分の畳が消え、その下にはポツカリと穴が空いていた。そこを覗き込むと、その真下の部屋の床に穴が空いていた。そこから逃げたのだと男達は察した。

「追うぞー!」

男達は一度部屋を出て一階に行き、蓮太郎の部屋の真下の部屋の扉を開け放ち、延珠が逃げたであろう穴に入ってしまった。

「……………行つたな。」

「行きましたね。」

そして、隣の部屋とその部屋を隔てる壁が回転し、延珠と作業服の翠が顔を覗かせた。

「完全にリハーサル通りですね。なら早く行きましょう。」

「そうだな。忍者みたいにコツソリとだ。」

延珠はブーツを回収してとつとと翠と共に隣の部屋の床の一部を外してその下にあるカモフラージュの土の壁の計二枚を外して穴に飛び込んだ。

「ふう……………完全勝利だ、美織！」

『いや、よく吐血するからこそその迫真の演技やったね！』

「もう眠いです……………」

「夏世ちゃんと寝るといい。」

「はい……………」

そんな中、ティナはポケーつとしていた。

作業服姿でお互いにお互いを抱き枕代わりにして寝る夏世と翠。そして、口元真っ赤

な延珠とカラカラ笑う美織。そして、何時も通りな董。

「……あのく、何で延珠さんが吐血したのにあんなに元気そうなんですか？」

「この血はこれだ。」

と、延珠は真つ赤な手を見せる。が、よく見ると手には何か透明なものが引っ付いている。

「……ビニール？」

「血糊を細長いビニールに入れて袖の下を通しておいたのだ。そして、咳をするフリをして途中でこれを噛み切つて吐血したようにみせたんだ。おかげで口の中片栗粉を溶かした液まみれだ……」

『血糊つて片栗粉溶かした水に食紅入れるだけで出来るんやで』

「……用意周到ですね……」

「練習もしたからな。ちなみに、作戦の提案は翠だ。」

「さて、これからは蓮太郎くんの動き次第だ。蓮太郎くんが黒幕との決戦に入る時、私達も作戦その三に移ることとなる。御令嬢、君のところはどうだ？」

『人工衛星から里見ちゃん動きはバッチリ監視しとるで。警察の動きは誤魔化せても司馬重工は誤魔化せへんで！そんなでもって、『装備』の方も準備できとる。』

「流石天下の司馬重工だ。私も株を買おう。」

『おおきにな。がっぼがっぼ儲からせてあげるで〜』

「金があつても困らないからな。」

どうやら、テイナが捕まつてる内に色々とあつたらしい。

とりあえず、もう少し自分が落ち着いたらこの状態の原因を片つ端から聞いていこうとテイナは決心したのであつた。

サーティースリーパンチ

木更は一人、天童民間警備会社の社長席で座っていた。

やる事が、極端に無いのだ。櫃間から大切にされていると言えは聞こえはいいが、こ
うまで暇だと体が鈍ってしまいそうだった。

「……はあ。」

溜め息をついて、木更は櫃間から貰った懐中時計を手取る。

かなり金がかかっているこの時計も、貧乏人の木更にとつては重すぎる物だ。

だが、どうにも違和感はある。何か、異物が中に入ってるように感じるのだ。

「分解するわけにも行かないし……って、あら？こんな所に分割線？」

だが、よく見てみると、分割線のようなものが見えた。勿論、常人には見えない本当
に極わずか、隙間も0.1mmも無い程の、顕微鏡を使ってやっと分かる程度の分割線
なのだが。

「爪だと引っかからないし……カッターナイフの刃を紙並にペラッペラにしてみたらイ
ケるかしら……？」

だが、それでも表面を傷つけてしまいそうで、どうしようかと考えた。

どうせなら時計屋に持って行こうかと結論着いたのは、十分後だった。餅は餅屋、だ。「櫃間さんから貰ったお金もあるし……ちよつと行ってみましょうか。」

と、財布を手にして席を立った時、木更のスマートフォンが着信音を鳴らす。が、本来設定していたクラシックの曲ではなく、天誅ガールズのOPだった。

「……延珠ちゃんか夏世ちゃんね……」

溜め息一つついて木更はスマートフォンを手に取り、画面を見る。

発信元は公衆電話からだった。

「……?間違い電話かしら?」

木更は画面をタップし、電話に応答する。

「はい、もしもし。」

『木更さんであつてるよな?俺だ、蓮太郎だ。』

「はあ!?!えつ、ちよつ、まっ……」

すぐに周りを確認する。焦っているが、視界の中には誰もいないのを確認する。

「ど、どうしたのよ!?!あなた、今は刑務所じゃ……」

『チャンスが舞い降りてな。待っててくれって言っただけ、協力して欲しいんだ。駄目なら一人でやるけど……』

「全然よ!今どこ?すぐに行くわ。」

『俺も良くわかんないんだけど……勾田プラザホテルの一階のカフェまで来てくれないか？そこで落ち合おう。』

「分かったわ、すぐに行く！」

木更は通話を切ると、雪影をカモフラージュの竹刀入れに突っ込み、天童民間警備会社を飛び出す。が、

「悪いけど、君を行かせるわけにはいかない。」

「ッ、櫃間さん……」

外には櫃間が待ち構えていた。何故と聞こうとしたら、櫃間の方が口を開いた。

「里見くんは護送車をひっくり返して逃亡した。それで、誰に協力を仰ぐかと考えたら、君に当たってね……ビンゴだったよ。」

「……なるほど、いい推理で。」

ここで櫃間を吹っ飛ばして蓮太郎との落ち合い場所に行ってもいいが、すぐに木更には監視がつき、蓮太郎と共に行動しても木更は警察を引っ張ってくるお邪魔虫にしかない。

今ほど、櫃間を利用してやろうと思った自分が恨めしかった。

「教えてくれないかな、彼の居場所を。僕なら、まだ権力でどうにか出来る。」

「ここで蓮太郎の居場所を言ったらどうなるか、考える。」

(……………、今度こそ確実に死者が出る!!絶対に教えない!教えたら確実に里見くんが殺人者になる!!)

当たり前な考えが出た。

「お、教えられません。」

「僕達を信用できないのかい?」

「いや、警察は信用できますよ?けど、相手が人外だしプツンしたらどうなるか分かりませんし何より人命が大切です……」

おそらく、蓮太郎がプツンしたらこの世の如何なる物でも静止は出来ないだろう。核を撃ち込もうが、この世の軍隊と呼べる軍隊全てを総動員しようが、木更と彰磨と玉樹の人外トリオで戦いに行こうが、止められないだろう。

と、木更は考えているが、実は木更や延珠辺りの親しい人が止めに入ったらすぐに止まったりする。

結局、木更は数時間の間、櫃間を誤魔化し続けるのであった。

蓮太郎が木更に電話をかける数十分前。蓮太郎は聖天子の命令で居眠りの予定が

あつた護送官が居眠りしたのを確認してから、手錠を引きちぎり、いざ扉を慎重に蹴破らんとした時だった。

「うおっ!?!」

キイイイッ!!と強烈なブレーキ音が響き、護送車がスリップ。片方の車輪が浮き、車体が斜めになり、ひっくり返ったのか天地が逆転する。

「……俺じゃなかつたら気絶していた。」

が、勿論蓮太郎は無傷。だが、護送官は結構怪我をしていた。

「よつと。」

ドンツ!!と軽く扉を蹴破り、ドライバーや護送官を外に出す。

骨折した手を固定したり、流血してる部分に護送官の着ていた服を破いて包帯を作り巻いたりするなど。

治療が終わり、さて逃走だと走ろうとした時、後頭部に筒状の物が突き付けられた。

「動いたら懺悔の前に吹っ飛ぶわよ。何が、とは言わないけど。」

「残念だけど、俺、懺悔する予定なんてないんだが?」

後頭部に突き付けられた物を振り払い、ステップで距離を取る。

「おっ、子供……?」

「チツ……逃げがさないわよ。」

蓮太郎の背後にいたのは子供だった。大体延珠と同年くらいだろう。

振り払った時に持っていた銃を落としたのか、腰からハンドガンを取り出す。どうやら、蓮太郎に突き付けられたのは見たことの無いアサルトライフルだったらしい。

「俺、子供に殺される程恨み買った覚えはないんだが？」

「……鬼八さんの仇よ。死になさい。」

蓮太郎の軽口に何も返さず、少女はハンドガンから弾丸を発射する。

「いや、死なねえから。」

それを顔を逸らす事で避ける。普通のハンドガンと比べて大分スピードのある弾丸だった。

「ッ!? 避けた!？」

「いや、そりゃ避けるさ。」

目の前にボールが飛んできたら避けるだろ?と言う前にさらに二発。

それを素手で掴んで握り潰す。

「……鬼八さんの言った通り人外のようなね。」

「なんで皆俺の事を引つ切り無しに人外と……ん? 鬼八さん?」

鬼八とは水原の事で間違いないだろう。と、言うか蓮太郎が見てきた名前の中に鬼八という名前を持つ者は一人しかいない。

「まさかお前……」

水原のイニシエーターなのか？と聞こうとしたその時、パトカーのサイレンが小さく響いてくる。

「時間切れ……」

少女はハンドガンを腰に戻してアサルトライフルを回収すると、何がどうなってるのかそのまま足を地につけた状態でスイーツと去っていった。

「……何だありゃ？」

新車の新兵器かと考える前にパトカーのサイレンが響いてくる。

「えっと……まだ居眠りしてるんなら言っても無駄だろうけど……お大事に。」

「……頑張れよー。」

まずは木更とコンタクトを取ろう。蓮太郎はそう考えると、一瞬で消え、公衆電話へと向かった。

こんな所を待ち合わせの場にするんじゃないかった。

蓮太郎の心境はこれで一杯だった。

勾田プラザホテルは少し洒落たホテルで、そこにあるカフェも勿論洒落ている。

そんな中、薄汚れた制服で腕と足を組んで目を閉じている蓮太郎の姿はかなり目立っているだろう。

変装用に何か買うかとも考えた。

聖天子は脱獄のチャンスをくれた。だが、その後に警察は確実に追ってくる。警察を権力で職務怠慢させてしまったら色々とマズイからだ。

警察よりも木更が早く来てくれないと色々と面倒な事になる。早く来てくれとソワソワする蓮太郎はかなり目立っただろう。

「すみません。」

「……なんだ？」

だが、声をかけられた。警察かと思ったが、とてもそんな服装には思えない。

「今、暇でしょうか？」

「かなりな。けど、人待ちだ。」

「ならば丁度いい。ブラックジャックでもしませんか？」

「しない。そんなに暇じゃ……って、返答聞く前にカード並べるのを見るに俺の意見なんて聞く気無いな。」

「はい。」

蓮太郎の前にはカードが二枚。聞く耳持たずだ。

蓮太郎は仕方なく配られたカードを確認する。

Aとキング。ブラックジャックの役が揃っていた。

「これはこれは。運がいいですね。」

「最近運が悪いがな。」

「では、運が悪いまま死んでもらいましょうか。」

刹那。蓮太郎の手の中には男の拳が入り込んでいた。

急に殴られ、蓮太郎はそれを防いだけ。だが、それは一般人から見れば瞬きの間よりも短く、逸般人から見れば瞬き並に短い時間の応酬だった。

「何すんだ。」

「あなたを始末するだけです。里見蓮太郎。」

「なら地面舐めてもらおうか。」

蓮太郎が組んでいた足で机を蹴り、浮かせ、仕切りにする。

流石にホテルの備品は壊せまいと思つたが、男の拳が机を突き抜けてくる。お構いなしかよと椅子から一瞬で飛び下がる。

「お前の拳なんて見てから回避余裕なんだよ。昇竜決められてえか？」

「小足見ってから昇竜余裕とはナメてくれますね。」

男の拳が机から引き抜かれ、机が無残に床に転がる。それを見てようやく他の客が逃げ出す。

「自己紹介がまだでしたね。僕は『ダークストーカー』、巳継悠河。『新世界創造計画』のあなたの後輩になる予定だった男です。ついでに天童木更なら来ませんよ。」

「ほお、テメエが『新世界創造計画』か。ついでに木更さんになんかしたと。」

「そうですか?」

「潰す。」

蓮太郎の一瞬での肉薄。そして一撃で相手を仕留める拳が振るわれる。

が、悠河はそれを紙一重で避ける。

「ッ!?!」

「潰されるのは貴方だ!」

そして返して振るわれる拳を蓮太郎が余裕を持って回避する。

「……なるほど、先生の義眼か。いや、見たところそのバージョンアップか。」

「ご名答。義眼を付けていないあなたには分からない世界ですが、僕は半分未来予知をしているものです。例えば一撃当たれば終わったとしても、当たらなければ別に何てことありません。」

「……なあるほじ。」

そして、二人の姿が消える。

刹那の間に二人は一気に接近しあい、拳を振るった。

空気を切る音が何度も響く。

十秒経った辺り、ドゴツ!!ととても人間を殴った時の音とは程遠い音が響き、悠河が吹っ飛び、壁に激突する。

「がはっ!？」

「まっ、所詮こんなもんか。未来が見えても反応出来なきや意味ねえだろうがよ。」

蓮太郎は悠河の反応速度を超えた速度で拳を振るい、振り抜いただけ。

悠河としては完全に予想外の展開だった。

幾ら蓮太郎であれ、自分の反応速度を超え殴ってくるとは思わなかったからだ。

今頃は蓮太郎を圧倒して余裕綽々とそのまま蓮太郎を殺す予定だったが、大いにその予定は狂った。

悠河は頬を殴られた拍子に折れた奥歯をそのままに立ち上がった。

「……俺の拳を受けて倒れなかった奴を見るのは何人目だったか。まっ、片手で数えられる程度だから誇っていいぜ。」

「なるほど。末代までの自慢にします……よー!」

悠河が折れた奥歯を蓮太郎に向けて吐き捨てる。

蓮太郎は反射でそれを跳ね除ける。

その隙に悠河は蓮太郎に一気に接近。拳を蓮太郎の胸に当てる。

(勝った!!)

そのまま自身の腕に仕込まれている超振動ヴァイロ・オルケステレーションデバイスを発動する。

どれだけ丈夫な人間でも内蔵は鍛えようがない。これで胃か心臓、肺を潰してジ・エンド。の筈だった。

「何だこりゃ? くすぐつてえな。」

悠河は悟った。自分に絶望しか残っていないのを。

「う、ウオオオオオオオオオ!!」

さらに連打。二発、三発、四発と次々に拳を打ち込み、蓮太郎の内蔵を破壊しようとする。が、蓮太郎はビクともしない。

「……もう終わらせるわ。」

ドガツ!! と蓮太郎の拳が悠河の腹に食い込み、さらにメキメキツと余りの衝撃に背骨が悲鳴を上げる。

「ぐっ……!!?」

「壁ドンだオルア!!」

そのまま悠河の顔を掴んだ蓮太郎は壁まで運送。そのまま悠河の頭で壁ドンを決め

る。

「ぐあつ……」

「さあて……答えてもらおうか？」

悠河はそれでも拳を蓮太郎に打ち込むが、その威力は先程よりも全然弱い。

「俺を嵌めたのはお前か？」

「ぐつ……そうだと言ったら？」

「まだ何もしねえさ。お前らのバックにいるのは？水原を殺した理由は？何故俺を嵌めた？『ブラックスワン・プロジェクト』はなんだ。一体お前らは何を企んでいる!？」

「教える訳……無いでしょうが!!」

悠河が腰から拳銃をマウント。ガウンガウン!!と蓮太郎の眼球に向けて弾丸を放つ。

蓮太郎の眼球に弾丸は当たった。が、蓮太郎にとつては風が目当たった程度。だが、蓮太郎の目に涙を浮かべるのは十分で、蓮太郎が手を離して目を擦った瞬間、悠河は抜け出して蓮太郎の背後に回って距離を取る。

そのまま蓮太郎に弾丸を放つが、蓮太郎の裏拳一つで弾丸があらぬ方向へ吹っ飛んでいく。

「()は逃がさせてもらいますよ!」

「馬鹿だな……逃す訳ねえだろうが!」

蓮太郎が足に力を込めれば一瞬で悠河の目の前に現れる。

「ッ！」

「お前達は喧嘩売る相手を間違っただよ、バアカ。」

蓮太郎が悠河の足を蹴り、悠河を宙に浮かせ、そのまま悠河の手を掴んで背負い投げを決め、悠河の頭が地面に接触する前に悠河の頭を蹴り飛ばす。

「まっ、こんな所か。」

さて、とつとつこいつを連れて逃げて尋問するかと思つた矢先、足音が複数聞こえる。恐らく警察だろう。

「ここぞ人攫いの罪を着せられたらマズイし残念だがここはスタコラサッサだな。」

木更に連絡を取れないと分かつたため、蓮太郎は一人での戦いを決意しサッサと逃げるのだった。

「突入!!」

蓮太郎がスタコラサッサした後、SATが突入してきた。が、中にいるのは蓮太郎ではなく、ボッコボコの青年一人。

「だ、大丈夫か!？」

一瞬協力者かと思つたが、このやられ様は明らかに元協力者とは思えない。

「ん?………民警か?」

青年のすぐ側には民警ライセンスが落ちていた。

「がはつ………はい………死ぬかと思ひました………」

「これは本音だ。」

「そうか………里見蓮太郎は?」

「すみません………今さっきまで気絶していたので………」

「そうか………すぐに救急隊を呼ぶ。」

青年はすぐにやってきた救急隊に運ばれていった。

そしてS A T が辺りを散策した所、蓮太郎の物と見られる制服の上着と遺書が川の近くに置いてあつた。

その川はガストレアが居るモノリス外の海に近いため、S A T 隊員の安全を考慮し捜査を断念。蓮太郎はモノリスの外に出てガストレアに食われたという扱いになつた。

サーティーフォーパンチ

「さ、里見くんが入水自殺?! しかもガストレアに食われたあ?!」

「残念だけど……そうみたいなんだ。」

櫃間の悲壮感に満ちた顔。だが、木更の内心はいやいや、ねーよ! で一杯だった。

蓮太郎の事だから一時間以上入水しようが死ななそうだしガストレアに食われたところで消化すらされないだろう。

「……そ、そうですか。」

木更は困惑した顔で答える。

「これが現場の写真だ。」

と、櫃間が写真を見せる。それは、蓮太郎の上着と手紙が置かれている写真と手紙……遺書を写した写真だった。

遺書を見ると、自分は周りの人に多大な迷惑をかけ、苦しみ、傷付けてきたので、その責任を取るために自殺しますという旨の内容が書かれていた。

だが、蓮太郎はそんな事で自殺するようなメンタルではない。最早アダマンっぽいチウムな金属製で出来ているメンタルとも言ってもいいくらいだ。

しかも遺書にしては文字がだだくさに適当に書いたような感じだ。

さらに斜め読みでよく見れば死ぬわけ無いだろうと平仮名で書いてある。警察の捜査ガバガバ酔ぎい！と思つた木更だった。実は警察もこれには気付いていたが、たまたまだろうとスルーしていたりする。

「……………ああ……………そう……………」

最早無関心な木更。だつて蓮太郎が死ぬなんて想像もつかないし、入水した程度で死ぬわけが無いし。

だが、そんな無関心を通り過ぎて無表情な木更を見て櫃間は悪い笑みを浮かべるのだった。

(……………うつわ、櫃間さん悪役の顔してるう……………つてあれ、そういえば私、櫃間さんに何も言つてないのにS A Tが出動したのよね……………？つてかなんで脱走犯程度にS A Tが……………つてよく考えると天童民間警備会社、私を残して上手い具合に社員は処分されようとしているのよね？里見くんは下手すりや死刑だつて聞いたし、ティナちゃんは少年法を超えて処刑されようとして、延珠ちゃんは相方殺しの所に行かされかけて……………つて考えると権力を持つてる人が黒幕……………ん？権力？)

木更はチラッと櫃間を見る。何処ぞの新世界の神みたいな顔していた。

(あ……………これは黒ね。流石に今までこんな黒い笑顔作つてる人沢山見てきたし分かる

わこれ。明らかに自分の計画が上手くいって笑いが堪えられない人の顔ですわ。」

だが、黒だと断定する材料が余りにも少ない。しかし、ふと櫃間に貰った懐中時計が頭を過ぎった。

（これ、私や里見くん、彰磨くんのような人外にしか分からないけど、明らかに中に異物入ってるのよね……この中に自分の汚職とか不正の証拠を入れたとしたら……バレるわけないわね。だって、私の手に渡ってるんだから、櫃間さんを調べても証拠なんて出るわけない。とりあえず、時計屋に行きましよう。）

木更は無気力な演技をしながら、フラフラと玄関へと向かう。

「どこへ行くんだい？」

「……なんだか、懐中時計が可笑しいので、時計屋に……」

「……そうか、最近は大変だからすぐに帰ってくるんだよ。」

木更はそのままフラフラと外へと出る。

背後に気配無し。尾行はないが、監視カメラはある。あまり大っぴらな行動をして櫃間に軟禁でもされたら目も当てられない。

そのまま木更は時計屋に入る。

「すみません、なんかこの懐中時計、中に何か入ってるみたいで……」

「おや、この懐中時計は……彼から渡されたのかい？」

「どうやら、時計屋の店主はこの懐中時計について知ってるらしい。」

「……へ？彼？彼って櫃間さんのことですか？」

「いや、確か……水原鬼八って青年だよ。最近死んじゃったって聞いたが……これ、彼がほぼ全財産だと言ってだした金でオーダーメイドで作った時計なんだよ。」

「……水原鬼八。」

蓮太郎が殺したと言われている青年の名前だ。何故、彼の名前がここででてくるのか。

「あれ？知らないのかい？」

「……すみません、この時計について詳しく。」

「でも……」

「でもデモムービーもないの。これは恐らく私の手に渡っていい物じゃない。」

「わ、分かった。この時計には特注のギミックが一つ付いていてね。特定の日付の日付変更ピツタリにオルゴールが鳴って、ここが開くんだよ。ちよつと待っててくれよ……」

時計屋の店主が工具箱のようなものを取り出し、懐中時計を弄ると、懐中時計の一部が開いた。

そこに入っていたのは……

「……メモリーカード？」

極少のメモリーカードだった。

「……これがプレゼントとは、彼は一体何を……」

「ありがとうございます。私はこれで。これ、お礼です。お釣りはありません。」

「あ、ち、ちよつと!?!」

木更はメモリーカードを制服のスカーフに巧妙に隠すと、懐中時計をポケットにし
まつて外に出た。

(おそらくこれは水原鬼八からのメッセージ。もしもハッピーバースデー!とこだわった
ら申し訳ないけど、貴重な証拠よ。会社に隠しカメラが無いか確認してから、じっくり
と見させてもらうわ。)

木更はこの東京エリアで何が起こってるのか、検討もついていないが、真実に一番近
付いた。

そして、董の研究室では……

『なんか里見ちゃんが死んだってデマ流れとるけど、あれ嘘やから。』

『知ってた。』

『ですよー。』

蓮太郎が死んだ事なんて話のネタにもならなかった。

「……君は行かないのかい？……まだその時じゃない？そんな事言ってる場合なのかい？……彼なら心配ないだつて？まあ、そうなるな。なら、時が来るまでここに居るといい。私もこの一件が解決するまでは君をここに置いておこう。そんな訳で今日の飯だ。バレると計画が狂うのだろう？だから私はあつちに戻るよ。ではな。」

サーティーファイブパンチ

「おいおい、遺書まで書かせて上着捨てさせて攫つてきた人間に手錠を繋いで風呂場に監禁なんて普通、するか？お嬢さんや。」

「黙りなさい。とつとと喋らないと本当に餓死させるわよ。」

「生憎、1ヶ月飲まず食わずでも死ねない体なんで。昔に餓死は試みたよ。」

「人外め。」

ダークストーカー、已継悠河をフルボッコにした後、蓮太郎は一人スタコラサツサとその場を後にした。が、その後すぐに護送車横転事故の場所にいた少女に見つかり、銃を突きつけられて連行された。逃げようと思つたら逃げれたのだが、その少女には見覚えがあつたので、逃げる気はしなかつた。

既に連行から監禁までの鮮やかな手順を披露させられる二日程。蓮太郎は飲まず食わずで熱したフライパンを突き付けられたり爪の間に針を刺されたりしたが、全然堪えた様子はなかつた。

それもその筈。熱したフライパンはジューツと音を立てるだけで何の意味も成さず、針は爪の間に刺さる前にバキツと折れたからだ。

結果、何も飲ませず食わさずの拷問に入ったのだが、勿論この人外は体が生物を辞めてるらしく、1ヶ月飲まず食わずでも無事らしい。

「……もう二日も経つけどよ。よく飽きねえな。」

「鬼八さんを殺した理由を言うまで飽きる事はないわ。」

「鬼八さん鬼八さんつつてるけどさ。まずお前は誰なんだよ。」

だが、そろそろ好き勝手されるのにイラついてきたのは事実。ちよつとキレ気味で少女に尋ねる。

「紅露火垂。鬼八さんのイニシエーターよ。」

「へえ……水原の………つてマジで!？」

ブチツと勢い余って手錠の鎖がちぎれる。

「あつ。」

「逃げ出そうと思えば逃げ出せたか……ナメられたものね。いつでも私を殺して口封じできるつて。」

「いや、殺さねえよ。」

今まで拘束されていた手を摩る。全く問題なし。

「あいな、火垂。」

「馴れ馴れしい。」

「んな事言われても。まあ、水原の事だが、俺が行った時には死んでたんだよ。」

「信じられるわけ無いでしょう？あなたが殺人者のレットルを貼られてる以上はね。」

火垂はアサルトライフルを蓮太郎へと突き付ける。

「んな物騒なもん向けんな。」

「いつ強姦されてそのまま口封じに殺されるか分からない以上こうするのが手っ取り早いよ。」

「いや、ロリコンじゃねえから……なあ、俺ってそんなにロリコンに見えるか？」

「ええ。それはそれは。」

「……」

蓮太郎は深い溜め息をつきながら、浴槽の淵に両手を乗せて天井を仰いだ。

もうそういう星のもとに生まれたのだから諦めようかとも一瞬思ってしまった。

「ってか、小学生が強姦なんて言葉使うんじゃねえよ。どこで習った。」

「いつ鬼八さんに迫られてもいいように知識だけはつけておいたのよ。無駄になりそうだけど。」

進んでんなら、最近の小学生はくと自然と漏れた声。ついでにゲームをしている翠の姿が浮かんだのは仕方が無いことだろう。

「そーいやあお前、水原の野郎が何で殺されたのか知ってるか？」

金を出せと言われた程度で殺す程だったら今頃俺は重犯罪者だよと言うために話を振った。だが、

「鬼八さんに金を出せと言って出さなかったから殺したと聞いたわ。ほんとクズね。」

「……ん？おい待て。水原が金を出せと言ったんじゃないのか？水原に金をせびられたから俺が殺したってことになっている筈だぞ。」

「……そんな馬鹿な。」

「いいや、大マジだ。なら多田島って警部に聞いてみる。俺はその人からそう聞かされたんだ。」

火垂の表情に動揺が現れた。これならこつち側に引き込んで仲間に出て来そうだと思った蓮太郎はさらに手を打つ。

「俺とお前の言葉から察するに、敵は警察にいる。裏で繋がってるのかどうなのかは分からないが、明らかにこれは可笑しい。何かこの事件に違和感を感じなかったか？」

「……」

「それに、俺はお前に謝らなきゃならないことがある。俺の力があれば水原を家で匿って情報を確かな物にしてからあいつと俺の知り合いの人外と共に組織を壊滅させられたけど、俺はしなかった。あの時、無理にでもあいつから話を聞いて協力したら……」

「やめなさい。」

タアンツ!!と銃声が響き、蓮太郎の顔の横を紙一重で通り、浴槽に弾丸が当たる。

「……チャンスをくれ。俺があいつを殺していないという証拠を集めるための……そして、あいつが無駄死にじゃなかったという証明をするための。」

「やめろつて言ってるのよ!」

火垂が蓮太郎の顔をアサルトライフルで殴り付ける。が、蓮太郎の顔には傷一つできていない。

「やつと見付けて監禁した仇なんだ。今すぐ殺したいのは分かる。そんな仇が言うのもなんだが、協力してくれ。俺は逃げない。」

「信用できる訳がないでしょ!あなたは鬼八さんの仇!ただそれだけなのよ!」

「思い当たる節があるんじゃないか?水原の最近の動向を振り返ってみろ。あいつは、何かお前に隠して……!」

再び、銃声。

今度は蓮太郎の額に命中した。が、勿論のことながら傷なんて出来る訳が無い。

「あるんだろ?だったら、あいつのその行動が無駄だったと証明させないために、俺に協力してくれ。俺なら、水原の無念を果たしてあいつの仇を見つけることが出来る。お前は俺を利用するんだ。俺は道具だ。水原の本当の仇を見つげるための。俺はお前を利用しない。だから、信用してくれ。」

火垂は俯き、齒を食いしばった。そして、壁を蹴って壁の一部を崩し、アサルトライフルを投げ捨てた。

「……私は協力しない。ただ、あなたを利用するだけ。そんなに言うんなら砂漠の砂の一粒並のスケールで信じてあげる。それに、私じやあなたを殺せない。だから本当の仇を見つけるのよ。分かったらそこで靴履いて待つてなさい。」

「……ありがとう。」

「感謝しないでよ。私は今この瞬間、殺す方法があればあなたを殺してるところよ。」

火垂は恨めしそうにそう言うと、机の中から何かを取り出し、蓮太郎に投げ付けた。

それは拳銃、ベレッタが収まったヒップホルスターと折り畳み式のナイフだった。

「それしかないわよ。」

「いや、いらねえ。そもそも俺は射撃武器は使わないタチなんだね。」

「ここにあつても使わないから持つときなさい。」

「はいはい。」

蓮太郎は初めてヒップホルスターを装着し、ナイフをポケットにしまった。

上着がないので、その下に着ていたシャツの裾をズボンから出してヒップホルスターを隠す。

今現在プロモーターではない蓮太郎が拳銃を持っていたら、普通に捕まるからだ。

「上着ないならこれ着なさい。」

ギターケースを背負った火垂が蓮太郎に黒い上着を差し出してくる。

「なんだそのギターケース。」

「カモフラよ。まさかおおつぴらにヘヴィマシンガン持ちながら歩く訳にもいかないでしょう。」

蓮太郎は上着の袖に手を通し、着心地を確認する。

大分制服に近い感じの素材で動きを阻害するような事はなかった。

火垂がブーツを履き、玄関のドアを開ける。まだまだ外は暑い。

ふと火垂の方を見ると、何センチか身長が上がつてるように見える。

「なんだそのブーツ。シークレットブーツってやつか？」

「別に身長に悩んでるとかじゃないわ。このブーツに機械が仕込んであるだけ。元々使ってたのを鬼八さんの部屋に置いてきちゃったからこの予備のブーツでやるしかないの。全く、バッテリーが心許ないわ。」

「取りに行けばいいじゃないか。」

「IISOの職員や警察がいる中で単独で突っ込んでブーツを回収して逃げ出すのは嫌よ。そんな国家が認めたヤクザ共に喧嘩売りたいくないわ。」

「おいおい、中にはちゃんと正義感持つてる人だっているんだぞ。」

「大抵そういう組織の上層部は汚職バリバリよ。」

「最近の子供って歪んでるな〜」

「歪んだ時代を生きたらそりゃあ歪むわよ。」

ウチのイニシエーターズはそんなこと無いんだがと言おうとしたが、延珠は時たま蓮太郎でも正座するほどのキレ方を見せる上にストレス性胃痛持ち、ティナは元殺し屋、夏世も命令で人殺しの経験アリ&腹黒ドSの毒舌、翠はゲーマー（エロゲもばっこい）。なかなか歪んでたので何も言えなかった。

「で、どこ行くの？」

「そうだな……なら水原の殺害現場に行こう。」

「そこで私を殺そうって？ 鬼八さんを殺した場所で殺してくれるなんて優しいこと。」

「殺さねえから……別にここで待っててもいいんだぞ。」

「逃げるつもりでしょ。」

「ならついて来い。手をだしやしねえよ。」

蓮太郎は火垂の返事を聞かず歩き出した。火垂も少し迷った後、蓮太郎を追いかけた。

「……で水原は死んでいた。」

「……」

新ビルの中。警察は既に撤収した後で血の跡が生々しく残っているだけだ。

火垂は唇を噛み締めてその血の跡を見ている。

「……犯人の目星はついている。巳継悠河つて男と……櫃間つて警視だ。」

蓮太郎は辺りをガサリながら火垂に話しかけた。

「……警察が？何で？」

「俺は木更さん……まあ、俺の所属してる会社の社長んだけど……電話をした時に少し……ほんの少し。気の所為と言えるほどの声で櫃間が俺の場所をリークしてる声が聞こえたんだ。」

「……なら気の所為じゃない。」

「木更さんが俺の居場所を吐くとは思えないからだ。そうすると、櫃間が俺の居場所をリークしたと考えるからだ。」

「なんであなたの所の社長がゲロしないって保証があるのよ。」

「俺が警察と戦闘になれば……まあ、あのホテルが崩れるほどに暴れちまうかもしれないからな。木更さんはそれを分かっているからな。」

「……まっ、今度その已継悠河って男に遺言として言ってもらうだけよ。」

「いや、殺さない。豚箱にぶち込んでNDKする。」

「私は嫌よ。ぶつ殺すわ。」

「おつかないこと言うなよ。」

「想い人殺されたのよ？死んで償ってもらおうわ。」

「……気持ちは分かる。けど、落ち着け。そんな事しても水原は喜ばない。」

「分かっているわよそんなこと。ただのエゴだったのよ。」

「後で後悔するぞ。」

「やらずに後悔するよりもやって後悔した方がいいって何処ぞの眉毛が言ってたわ。」

「なんの話だよそれ。」

「たまたま深夜に再放送されてたアニメよ。今なら全面的に同意するわ。」

「まあ、もし本当に殺そうとしたら俺が止める。」

「そうしたらあなたも殺すだけよ。犯人の断定の時間が省けるだけよ。」

「殺せるもんならな。そんな事より、あつたぞ。確認してくれ。」

蓮太郎は無造作に積まれたダンボールの中から目的のブーツを取り出す。

「これ……鬼八さんのスマホ？」

「よしっ、ピング。警察のガバガバな捜査じゃ見つからなかったみたいだな。」

「うわっ、この中廃材しかないじゃない……この中から電源のついてない携帯を見付けろってのが無理な話よ。」

蓮太郎はスマホの電源を入れるが、一瞬ついただけですぐに消えてしまった。ホーム画像が火垂の写真だったので、確実に鬼八の物だ。

火垂は少し照れくさそうにしている。

「よかつたな、両想いだ。」

蓮太郎は赤面した火垂に思いつきり脛を蹴られた。が、足を痛めたのは火垂の方だった。

サーティーンシックスパンチ

『新世界創造計画』に『ブラックスワン・プロジェクト』ねえ……そんなものが本当にあるのなら、もしそれが危険な物なら、確かに鬼八さんなら私を巻き込まないために黙っておくでしょうね。」

「その手がかりを得るための水原の携帯だ。だけでもまあ……なんも手がかりないとはな。」

鬼八の携帯電話を見つけた二人は文字通り漫画喫茶に転がり込み、水原の携帯を充電して遠慮なく履歴やメールを片っ端から見つめた。が、手がかりと言えるものはなかった。

「しつかし……こうも何もないと手詰まりだな。水原が盗まれた証拠品があれば……」

「なにそれ？」

「こつちが聞きたいと言いたかったが、言う必要もないだろうとおさえて水原の携帯を火垂に投げ渡す。」

「……そういえば、この人。」

火垂が何か思い出したかのように蓮太郎に水原の携帯を見せる。

「駿見女医？」

「駿見綾芽女医。ガストレア解剖医よ。プライベートの付き合いは無かったのにこんなに連絡を取っている。」

一番多いのは火垂だが、この駿見女医は火垂の次くらいに連絡を取っている。

「水原の不倫相手じゃね？」

「口の中にソリッドシューターぶち込まれたくなかったら黙れ。」

(こわっ……)

まったく、ソリッドシューターさえあればこの男を殺せたかもしれないのにと物騒な事を咄く火垂。軽くキャラまで崩壊している。

「とにかく、聞いたら何か分かるかもしれないわ。行くわよ。」

「不倫相手の元に？」

「おい……マジで黙れ。」

「あ、すみません。弄りすぎました。」

「チツ……」

(おーこわ……)

ガチギレした火垂の後ろを飄々としていく蓮太郎であった。

「は？ 欠勤？」

「そうなんだ……理由はわからない。」

齒朶尾大学病院の一室。蓮太郎と火垂は駿見女医について明るい医師を捕まえたのだが、どうも駿見女医はここ何日も無断欠勤を決め込んでいるらしい。

「おかげで僕がピンチヒッターで駆り出されてね。参ったよ。」

対応した医師が少し膨れた腹をさすって少し愚痴る。

「ガストレアは最近多いのか？」

「多いなんてものじゃないよ。異常だね。一部では建て直した32号モノリスに異常があるのではと言われてるよ。」

蓮太郎達の元にモノリスが建て直されてから依頼が来たことがない。

実は英雄である蓮太郎に依頼をするとトンでもなく高い依頼費を払わされるのではと危惧した人達が片桐兄妹や他の民警の元に行っているだけなのだが。

もちろん、モノリスは不純度0%なのは蓮太郎が触って確認済みだ。異常があるなんてことはない。

だが、モノリスにガストレアが入ってくるパターンは幾つかある。磁場が弱くなる高

高度を移動してきたり地中を潜ってきたり、磁場の間を通ってきたり。

一度モルフオ蝶らしきガストレアが高高度から鱗粉をまき散らそうとしてきたのだが、それは蓮太郎が未然にワンパンで仕留めた。

「……お姉ちゃんについて他に何か分かることはありますか？」

火垂は今、駿見女医の妹として通している。その方が話が進みやすいからと言っていた。

「うーん……もうこのまま無断欠勤が続くと自然消滅になるくらいかな。もう四日も休んでるし。」

「自然消滅？ 退職じゃなくて？」

「この仕事は離職率……ああ、お嬢ちゃんには分かりにくかったかな。この職業から退職する人が多くてね。たまに退職届も出さずに失踪する人もいるから自然消滅って事になってしまっただ。」

「そうですか……」

「君達は駿見くんの元に行くつもりなのかい？ なら、この小包を運んでもらえるかな？」

「あ、でも住所を知らなくて……」

「いいよ、教えてあげる。この間荷物を転送する時に聞いたからね。」

何とも気前のいい医師だなど蓮太郎は思った。

「それと、一ヶ月前に彼女が解剖したガストレアの情報が丸つとデータベースから消えているんだ。それについても聞いて欲しい。」

「分かりました。」

蓮太郎と火垂は立ち上がって礼をすると、そのまま立ち去ろうとする。が、その直前呼び止められた。

「君達は『ブラックスワン』について何か知ってるかい？」

『ッ!』

蓮太郎と火垂はポーカーフェイスを保っているが、内心驚き一色に染められた。

「彼女はこの前から『ヴィニヤードを焼かない』って何度も言ってたんだよ。」

「ッ……いえ、何も。」

「そうかい。なら、この件は頼むよ。会えなかったら、置き手紙でも残しておいてくれ。」

「ビンゴ……これはあなたを信用するしか無さそうね。」

「水原と連絡を取り始めた時期、失踪時期、ブラックスワン……こいつは大物だ。だが

……」

「同時に既に抹殺されている可能性もある。」

「ああ。一ヶ月……お前と水原が倒したステージIIのガストレアが鍵を握っている。ここからは真相に近づいていくだろうが……それを阻止するために確実に俺を狙って刺客がやってくる。お前も危険に晒される。それでもついてくるか？」

「これが鬼八さんの仇を取るための運命とあれば、心を決める。明日に繋がる今日を断ち切ろうとする奴と違って戦ってみせる。」

火垂はギターケースの取っ手を握り締める。

「……なんか、子供とは思えねえ発言だな。」

「……地獄を見れば、心なんて乾くものよ。行きましょう。」

蓮太郎と火垂は並んで歩き始めた。

監視カメラに、その黒幕の一人に見られているとも知らずに。

「まさか奴は外周区に逃げずに内地を堂々と歩いているのか？」

黒ビルと呼ばれる中央制御開発機構により建てられたビルの中、櫃間と多田島を中心とした警察が監視カメラの映像を覗いていた。

齒朶尾大学病院の前の監視カメラ。そこに蓮太郎と火垂はバッチリと映っていた。その様子を見て多田島は呆れ半分で口を開いた。

「ダークストーカー……奴は生きていたな。」

「そりゃあそうでしょう。あの程度で自殺する男ではありません。」

櫃間は壁の端で座り込んでいたダークストーカー、巳継悠河に話しかけた。彼は今回の事件の協力人としてここにいる。

「……ハミングバードを使う。」

「僕で事足りません。僕は所詮天童式戦闘術も習っていない里見蓮太郎程度、封殺できるレベルです。」

「そんな里見蓮太郎にボコボコにされて壁ドンされたのは何処のどいつだ。」

「くっ……」

何も言い返せない悠河であった。

そして、また一人犠牲者が増えようとしていた。南無。

サーティーセブンパンチ

「……どうやら、遅かったようだな。」

「……知人の死を見るのも複雑なものね。」

アパートの管理人から鍵を借り、駿見女医の部屋まで辿りついたのはいいものの、中に入って感じたのは冷気と腐臭。蓮太郎はすぐにこれは人の死んだ後に発する腐った臭いだと察知したが、僅かな希望を持つて中に入り、バスルームを覗けば、なみなみと水が張られた浴槽に顔を付ける駿見女医がいた。

肌は青白く、爪は三枚、床に落ちていた。

拷問されたのだとその爪の様子から察したが、同時に三枚も耐えたのかとも思った。

「……仇を取るのが増えたわ。」

「そうか……」

蓮太郎はバスルームを出て物色。レジャーシートを見つけて彼女の遺体を丁寧に浴槽から出してレジャーシートの上に置き、両手を胸の上で重ねさせたあと、レジャーシートを重ねて合掌した。火垂も隣で合掌していた。

二人は無言で洋室の物色を開始した。

墓荒らしをしている感覚に襲われたが、これでは駿見女医も報われないだろう。だから自分達がその無念を晴らすんだと心に訴えかけて物色を続ける。

パラパラとファイルを見てみると、ふと机と壁の間の隙間に、写真が落ちているのに気が付いた。

「こいつは……？」

蓮太郎はそれを引っ張り出し、見る。

それはガストレアを解剖した時の写真だった。

「火垂。」

「なによ？」

「これ。」

「……私達が倒したガストレアよ。」

そのガストレアの爪には、五芒星が刻まれていた。頂点の一つには羽根が刻まれていた。さっぱり分からないが、これが何か重要な意味を持つということは分かった。

「……さて、これだけじゃ分かんないわね。」

「だが、こいつが何か意味を成す事は確かだ。とりあえず、こいつを見た事で俺達も真実に一歩近付けた。と、同時に……」

「刺客が来るわね。特に、私は最優先で殺されるわね。だって、鬼八さんが私に何かを

喋ったという可能性があるから、奴さんは私を最優先で殺したい筈よ。」

「ならその刺客をシメて情報を得るだけだ。」

「出来たら、ね。」

蓮太郎は写真を戻すと、火垂と共にアパートを後にしようとする。が、違う洋室から呼び出し音が響いた。

蓮太郎が火垂と共にその発信源を見ると、そこには携帯電話と衛星電話に客を取られながらも細々と生き残っている固定電話があつた。

「無用心に出るつもり？」

「出ても問題ない。それで刺客が来たら万々歳だ。」

「あなたの思考回路は既にぶっ壊れてるのね。」

「知ってる。」

蓮太郎は電話を取った。

『里見くんだね？』

その電話はなんと蓮太郎に向けてかけられた物だった。

確実に、蓮太郎の事を監視している敵だ。

「……誰だテメエ。」

『元新人類創造計画の芳原健二を殺した新世界創造計画のハミングバードがそつちへ向

かっている。』

「……おい、マジで誰だ。」

『私の事より目先の敵を気にしなくてもいいのかい?』

「……」

『ハミングバードの能力を教えよう。ハミングバードは……』

ブツン!と音を立てて電話が途切れた。その後、何の音も鳴らないことから電話線が切られたのだとすぐに分かった。

「……朗報だ。刺客がこっち来てる。」

「携帯電話も圏外だから警察呼べないわね。」

「俺ら警察から逃げてるんだぞ?」

「悪人は警察にしよつぴかれるべきよ。」

「なら俺は悪人じゃないから呼ぶな。」

「逮捕された時点で悪人よ。」

その瞬間、蓮太郎の耳に人が斬られる時の断末魔と血が弾ける音が響く。

「……もう来てる。」

「好都合。」

火垂はギターケースを開けるとヘヴィマシンガン改式を取り出した。

「待て、何する気だ。」

「迎撃よ。」

「それは俺がやる。」

「馬鹿言わないで。鬼八さんと駿見女医の仇が来てるのよ。」

「二人を直接殺した奴じゃないかもしれないぞ。」

「その組織に属するなら誰でも仇よ。」

火垂はそう言い残すと、蓮太郎を置いてブーツを履いて外に飛び出した。蓮太郎の静止の声も聞かずに。

「……絶対に殺す。」

ペンタトルーパーもある。ヘヴィマシンガンも換えのマガジンもちやんとある。ソリッドシューターが無いのが残念だが、そういう言ってられない。

その時、上から断末魔の悲鳴が聞こえる。非常階段で二回をすつ飛ばし、十三階へ。十三階は阿鼻叫喚の地獄が終わった所だった。

床には血がこびり付き、無残に引き裂かれた人間の死体。

「……人間のやることじゃないわね。」

ヘヴィマシンガンを構えて先を見る。

車のエンジンのような音が響いたそこには、黒色と赤色のナニかがあった。

まるでゴーカートよりも少し大きめのタイヤにノコギリ状のナイフを取り付け、バイクのマフラーをつけてみましたと言わんばかりの殺戮機械。

「……で、私はあれを見て人間だけを殺す機械かよとでも言えはいいのかしら？」
それが肯定か否定か。その殺戮機械が動き出す。

「ツー」

車のようなスピードを出して突っ込んできたそれをヘヴィマシンガンで盾にして受け止める。

ギヤリギヤリギヤリギヤリ!!と嫌な音を立てるヘヴィマシンガン。

「どうやって動いてんのよ……このタイヤお化け!!」

そのタイヤお化けを受け流し、地面を蹴り、壁を蹴り、距離を取る。

そして、片手でペンタトルーパーを抜き取り、撃つ。

が、タイヤお化けは六発放たれたそれをジグザグに動いて避ける。

「くそっ!」

マガジンを抜き取って投げ捨て、腰にマウント。すぐにヘヴィマシンガンを構えるが、タイヤお化けは目の前。

横に飛んで避ければ、つい先程まで火垂のいた場所は面白おかしく挟れていた。

足がダメになるのを覚悟で思いつきそれを蹴り付ける。

「いッ!!」

ナイフが足に刺さり、短な悲鳴が口から漏れる。

イニシエーターの渾身の力で蹴り飛ばされたタイヤお化けはスパークを上げ、痙攣する。

「鬼八さんへの嫁入り前の体に消えない傷がついたらどうすんのよ!」

怒り任せにトリガーを引く。

ダダダダダダダン!!と音を立ててヘヴィマシンガンから弾薬が飛び出し、タイヤお化けに穴を開け、エンジン部を貫通する。

「……鬼八さん、もういないんだっけ。」

咄嗟に出てきた言葉があれなんて、かなり依存してたんだと自傷気味に笑いながら、足が治ったのを確認する。

「……こんなのがハミングバードな訳がないし、本体はどこかしら?」

火垂はタイヤお化けを突つつきながら周りを見渡す。蓮太郎は来ていない。逃げたか本体を見つけたか。どの道、もう会うことは無さそうだ。

「もつと利用しとけばよかったかしら。」

その時、鳴き声が火垂の耳に入った。

どこからだと思渡せば、廊下の隅に麦わら帽子を被った子供が顔を伏せて泣いてい

た。その側には死体が転がっている。

何とも言えない気持ちになりながらも火垂はその子に近づく。

「大丈夫？」

「ひつく……ぐすつ……」

「ほら、立って。もうあのタイヤお化けは倒したから。」

女の子の手を強引に取って立ち上がらせる。助けられる確信などないが、単なる自己満足だった。

「お姉ちゃん……」

「ほら、泣かないで。」

ヘヴィマシンガンを床に置いて自分が敵ではないこともちやんと表す。

さて、ここからどうしようか。歳相応に泣く目の前の少女を差し置き考える。が、それがアダとなった。

少女はぬいぐるみの中から黒いナイフを取り出すと、一瞬で間合いを詰めて火垂の左胸に突き刺した。

「ッ……ガハッ!？」

口から逆流した血が飛び出す。ビクンと手足が一瞬痙攣し、動かなくなる。

目の前が暗くなる。

(まさか……この子が……)

盲点だった。あんなタイヤお化けが暴れ回ったのにこんな無力な少女が生き残れる事なんてない。そして、自分が確実に相手を殺すなら。それは、自分の容姿を利用して無害な子供を演出し、相手の気が緩んだところで一突きで殺すだろう。

薄れゆく意識の中、してやられたという感情で一杯になる。

「バアゝカ。」

意識が途切れる前に聞いた言葉は自分を馬鹿にする言葉だった。

「全員乗り込め。」

蓮太郎は一人、拳銃を手に住民達を脅して避難させようとしていた。

拳銃は駿見女医の部屋にあった物だが、弾は入っていない。脅し用に拝借した物だ。

「あ、待て。俺も乗る。」

上の階からの悲鳴と銃声を聞いて、相手は民間人だろうとお構いなく殺すというのは把握している。

火垂なら大丈夫だろうと心の中で信じた蓮太郎は先に住民達を避難させて、思う存分

戦おうと思つて、行動に移した。

「待つて!!助けて!!」

エレベーターが閉じようとした時、火垂よりも少し歳上に見える麦わら帽子を被つた少女が走つてきた。

蓮太郎はエレベーターのドアを手で押し戻して少女をエレベーターに入れた。

「なあ、ここに来る前にお前と同じ年くらいの少女を見なかつたか?」

少女はゆつくりと首を横に振つた。どうやら、火垂はこの少女と接触してないらしい。

無事で居てくれよと願いつつ、エレベーターの扉を閉める。

少女の痛恨な様子から、住民達も何か可笑しいと思ひ始めている。

「……このまま何も起こらずに済めばいいが……」

そう眩いた後、エレベーターは一回にたどり着いた。そして、ドアが開こうとした時、ガツンツ!!とエレベーターに何かが当たる音が響く。

そして、ドアの隙間からナイフのようなものが飛び出した。さらに、それが回転を始める。その様子から、相手は円形の物の外周にナイフを取り付けているのだと分かつた。

そして、その瞬間エレベーターの中がパニックになった。蓮太郎は閉ボタンを連打し

つつ、叫ぶ。

「落ち着け!!」

蓮太郎の怒号。そして、蓮太郎が片手でそのナイフを受け止め、回転を止める。

「まずは押し出す!」

そして、掌底をナイフに叩き込む。

ナイフは外へ飛び出し、ドアが開く。反対側の壁にはナイフの生えたタイヤ。それは、今にも動き出そうとしていた。

「……シエンフィールドみたいな自律兵器か。タチは悪すぎるけどな。」

新人類創造計画の完成版の新世界創造計画。その一人、ハミングバードがこれを使っているのだとしたら、ハミングバードはテイナの上位互換の能力を持っているのだろうか。察しがついた。

だが、相手が悪すぎた。

この男に兵器なんてものは通用しない。

タイヤお化けが蓮太郎へと突っ込んでくる。が、蓮太郎も勿論タイヤお化けへと突進する。

「助走付き普通のパンチ!!」

ズドンツ!!とまるで大砲でも直撃したかのような轟音。タイヤお化けは蓮太郎の一

撃で塵と化した。

「……全然頑丈じゃないな。」

こんな人外にとつての頑丈は人間にとつての破壊不可能だ。

タイヤお化けが塵と化した事を驚く前に飛び出す住人達。

「さて、次はお前だ。ハミングバード。」

ぬいぐるみを持った少女は驚いた顔をした後、チツと舌打ちをした。

「なんで分かったのかしら？」

「その甘ったるい匂いに加えて微かな血の匂いがする。」

「……なら、紅露火垂と同じように死体にしてあげるわ。」

少女、ハミングバードがぬいぐるみの中から拳銃を取り出し、引き金を引く。

蓮太郎はそれを余裕で避ける。

「当たるかよ。」

「当たるのよ。」

背後でチュイン！と音が響き、小さな風を切る音が聞こえる。

「跳弾か。器用な真似するな。」

その弾丸を掴んで握り潰す。

「器用ね。」

「お前がな。」

さらに引き金が引かれる。が蓮太郎はそれにより発射された弾丸を避けて一瞬で肉薄。

「なっ!!？」

「今流行りの壁ドンだ!!」

そしてハミンググバードの首に手を当て、さらに走り、エレベーターの壁にハミンググバードをめり込ませる。

「ア……ッ!!」

首を圧迫され、声が出ないハミンググバード。しかも壁に綺麗にめり込んでいる。

「フンッ!」

さらに鳩尾に気絶する程度で一発。ハミンググバードは血を吐き、気絶したのかそのままだ動かなくなった。

「……さて、後は火垂の所に行つてこいつの尋問か。殺すのはちよつと気が引けるしな。」

流石に敵とはいえ子供を手にかけるのは少し気が引ける。火垂がそうそう死ぬとは思えないので、早く回収しに行こうとエレベーターを操作。が、その瞬間、銃声。

閉めるを押して扉が閉まりかけている中の発砲。避けるとパネルが破壊され、エレ

ベーターに閉じ込められた。

「あつ。」

「忌々しい……死になさい！」

ダンドンダンドン!!とさらに発砲。

「馬鹿ッ！跳弾したら……」

蓮太郎の言葉は全て出てこず、跳弾した弾丸がハミングバードの腹部に直撃する。

「あつ。」

「ガッ……」

ハミングバードの腹部から夥しい量の血が流れ出す。

「バツカ野郎！」

上着の下の服を大きめに破ってハミングバードを壁から引っこ抜く。

「バカは……あなたよ……」

「黙ってろ！死ぬぞ!!」

ワンピースを脱がす訳にもいかず、ワンピースの上から破いた服を巻く。

「あなたも……道連れよ……ぬいぐるみを見てみなさい……」

澁々ぬいぐるみの中を見てみると、何か時計のような物があった。

「……時間厳守な奴だな。」

「馬鹿なの……………」

「違う。時限爆弾だろ？言つとくが、俺はこんなもんじゃ死なないからな？」

「ふふふ……………起爆スイッチは私の歯に仕込まれてるわ……………最も、押してから逃げたんじゃ間に合わないくらい時間の猶予しかないわ……………」

「……………自爆用かい。」

「道連れ用とも……………言うわ……………」

「まつ、抜け出すんだけど。」

エレベーターの天井板を殴つてぶち抜く。

「ほらな。」

「……………」

啞然とするハミングバード。

「よつと。」

蓮太郎はハミングバードを背負うと、そのままエレベーターの中なら出た。

「……………何する気？」

「尋問相手を殺すわけにもいかんだったら。」

蓮太郎が背負ったハミングバードから片手を離して広げる。

すると、そこにストーン。と落下してきた火垂が収まった。

「……離しなさい。」

「あいよ。」

蓮太郎は火垂から手を離す。ハミングバードはさらに呆然としている。

「よう、ゾンビ。」

「ドーマ、人外Ⅱサン。つてな訳でフアック。」

火垂は蓮太郎からハミングバードを引つpegすと、ゲシツ！と蓮太郎をエレベーターの中に落とし、近くの階の扉に飛び上がり扉をぶち破ってブレーキを破壊してエレベーターを落とす。そして爆発。一階から火垂の目の前まで炎が迫ってきた。おそらく、下の階は何階かが炎の海だろう。

まさかの仲間割れにハミングバードが目を白黒させている。

「……仲間じゃ？」

「どうせ死んでないわよ。」

「服は燃えたがな。」

蓮太郎が下から飛び上がって来た。全裸で。

「ヒイツ!?!露出狂!!」

「酷くね？」

せつかく飛び上がってきた蓮太郎を蹴り落とす火垂。勿論隠さなきゃいけない部分

は隠していた。

「……………えっ?」

怒涛の展開にさらに目を白黒させている。

「さあて……………」

火垂は軽く死にそうなハミングバードを地面に下ろして手足をどこから持ってきたのか分からない手錠で動けないようにして、ナイフを取り出し、その中から針と糸を取り出す。

「ちよつ……………それだったら死なせて……………」

「情報吐かせるまでは死なせる訳にはいかないのよねえ……………」

火垂がサデイスティックな笑みを浮かべて針に糸を通し、ハミングバードのワンピースを脱がしてからナイフを構える。

「さっさと弾取り出して縫うわよ?大丈夫。あなたに刺されてから知人の部屋から持ってきたナイフだから消毒もしてあるわ。ついでに自分で弾を取り出すのは経験した事あるから死にはしないわよ。」

「お、お願い……………やめ……………」

「はいガバツと切開。」

ツツツツ!!

その日、ハミングバードは初めて言葉にならない悲鳴をあげた。

「……」

「おい、何をした。」

「麻酔無しのおペ。ピンセット無し。直接まさぐった。」

「殺す気か。」

「消毒はしたわ。」

「痛みで死ぬわ。」

「ついでにこいつの胸に仕込まれてる意味分かんない機械破壊しといて。」

「あいよ。」

数十分後、血まみれのハミングバードと火垂が服をどこからか持ってきた蓮太郎と合流した。

そんでもってハミングバードの胸に仕込まれている、おそらくは心音をモニターするための装置を拳の衝撃をその機械にだけ当てるといふ北斗神〇もどきで破壊した。

「途中で白目向いて気絶したし尋問は後でね。」

ハミングバードは顔は女がやってはいけない表情をしている。

「お前性格悪いな。つつーか、お前大丈夫なのか？」

「ナミウズムシっていう因子持つてるのよ。」

「切ると増えるのか？」

「それだったら今頃私が増殖してるわ。ただの再生強化よ。」

「ただの再生強化？」

「まあ、死んでも首落とされたり焼かれたりしなかつたら生き返る程度の再生力は持つてるらしいけど、一度も死んだ事はないわ。」

さて、そんな事よりとつとと逃げるわよ。と火垂がどこからか持ってきた服を羽織り、ハミングバードにフード付きの大人用のコートを着せて警察の集まっている玄関ではなく、屋上に行くのと、そこから蓮太郎につかまって屋上から飛び立った。

誰かに見られる前に途中でタクシーを拾って火垂の隠れ家まで向かった。

サーティーエイトパンチ

「生体ノリをペタリっと。」

火垂の隠れ家の中。ハミングバードは火垂の変えの服に着替えさせられ、椅子に拘束され、少しマシな治療をされていた。勿論気絶中。

下着が見えない程度に上げられた上着の下の傷跡は、もう弾痕ではなく大型ナイフで二回に分けて刺されたような傷になっていた。

「しかし、ざつつな縫い方だったなおい。」

「死にはしないわよ。ってか、こんなもんよ。医師じゃないやつが縫うと。」

「全部終わったら俺の先生に診てもらおうよ。」

「んじゃ、後は包帯巻いてつと……ほら起きなさい。」

火垂が傷を軽く蹴る。

「ひぎっ!？」

「おっ、起きた起きた。」

「やっぱこいつ悪役より悪役らしいな。」

火垂はハミングバードの腹をかつ捌いたナイフを取り出して目の前をチラつかせる。

「さて、あんたの組織の事喋ってもらうわよ？」

「ふ、ふん。誰が……」

火垂が無言で傷を撫でる。それだけで激痛が発生するが、ハミングバードは悲鳴を上げない。

「あら、拷問に慣れる訓練でもされてるのかしらね？」

さらにツンツンと傷をつつく。ハミングバードが唇を噛み締めて悲鳴をこらえる。

「そうそう。縫った糸はとつとと抜糸したから傷が開いた時には……ふふふ。あ、勿論殺さないわよ？また縫ってちよつとくつついたらすぐに抜糸してを繰り返すだけだし。」

「ひっ………」

(うつわあ………)

最早尋問ではなく拷問に変わっている。

もちろん、糸は抜糸してないから傷が開く確率は低いが、開いたら大惨事になる。回復を促進する生体ノリパットがあっても流石にキツイだろう。

「そうそう。殺される時は楽に殺されると思わないで？そうねえ……腹をかつ捌いて内臓引きずり出して殺すのもいいしかつ捌いたらガストレアの軍勢のど真ん中に放置して内臓を食わせるのもいいし……」

ハミングバードの顔色はただでさえ血を失って白かったのが、もっと白くなっている。

もういつそそのナイフで首を刺して殺してくれとも思ってるかもしれない。

「聞く意味ないけど……そうね……まず、あなたの名前は？」

「……」

「言えつつつてんのよ。」

火垂が問答無用でナイフの底部を使って傷を殴る。

「アガッ………久留米………リカ。」

「そう。久留米リカね。じゃあ、次に………あんたの太腿にある五芒星のマークと羽根。

このガストレアの写真と同じよね？これは何なの？」

「……」

「あ、そうそう。自決用に口の中に青酸カリ仕込んでたの知ってるから。勿論口に手を突っ込んで取り出したわよ。あと下着の中に仕込んであった蓮太郎曰く致死量の毒が入った小型注射器も取ったし胸に埋め込んであった機械は壊したから死ねないわよ？」

「………」

「あつそ。」

火垂は無関心気味にリカの傷口を蹴る。

「イギツ!!」

「……」

今度は、火垂が引き出しの中からパンチを取り出してリカの爪を挟む。

「火垂。流石に爪は止める。」

「お断りよ。」

蓮太郎が止めるが、火垂はそのままリカの爪を剥ぎ取る。

「イツ………アアアアアアアアアアツ!!」

「おい火垂!」

「………駿見さんの分よ。」

「………やつちまったもんは仕方ないがもう止める。流石に拷問は見てられない。」

「尋問よ。」

「間違いなくこれは拷問だ。」

蓮太郎はすぐにリカの指を治療する。

火垂は気に食わない顔でパンチを投げ捨てた。

「で、いたぶるの無しでどうやって吐かせるのよ?こいつ、ある程度の訓練は受けてるから餓えや脱水症状くらいじゃ吐かないわよ?」

「んな事言われてもなあ……」

「ここに電撃棒があるわ。」

「馬鹿野郎。」

火垂がどこからか持ってきた拷問用の電撃棒を即没収する。

電気の流れる部分をガツチリ触ったが、蓮太郎には全然通じない。

「まっ、吐かないなら吐かないでいい。」

「それだつたらここで殺すわ。足手まといは増やさない。」

「助けた意味が無いだろ。」

「逆に聞くわ。口を割らせないなら助けた意味はないわ。」

「いつか吐いてくれるのを期待しよう。」

「ふぎけないで。そんなの気長に待つのなら殺したほうがマシよ。」

火垂がペンタトルーパーの銃口をリカへと向ける。が、リカはとつと殺せといった

顔をしている。

「……やっぱダメ。そんな顔するんなら殺さないで……」

ペンタトルーパーの空マガジンをリカの傷口へ投げぶつける。

その瞬間、リカの顔が苦痛一色に染まる。

「ふふふ……こつちの方が断然楽しいわ。」

「火垂！」

「チツ……」

火垂はつまらないと言った顔をしてソファーに寝転がる。

蓮太郎も特にやることはないのか、リカをそのままにして椅子に座って目を閉じた。

「……メモリーカード。」

リカが呟く。

「メモリーカードに、重要な事が書き込まれているって言ってたわ。」

「……火垂。」

「知らないわね。」

「そんなわけ無いわ。」

「事実、知らないわ。」

「……そう。」

「他は？」

「私は実行部隊よ。」

つまり、リカは下っ端で、何故蓮太郎と火垂を殺すのかは知らされていないという事だ。

「そんなじゃま……とりあえずやる事にはメモリーカードの事を加えておくとして……明日になったらこのガストレアの死骸を探しに行こう。まだ焼かれてなければ手がかり

になると思う。」

「無駄足になんなきやいいけど。」

蓮太郎と火垂は目を閉じ、暫しの休息を堪能する事にした。

のだが、

「なあんで警察に囲まれるのかしら？」

「タクシーの運ちゃんが言ったんだろ。どうしようもない状況だったんだろ。」

「そう。これも全部こいつの属してる組織の仕業ね。」

「どうする？」

「逃げるわよ。警察とやりあって公務執行妨害で捕まりたくないし。」

「そうかい。と蓮太郎は短く返事し、リカの手錠を一旦外して椅子から離れた後、もう一回つけ直し、抱える。」

火垂もヘヴィマシンガンとペントトルーパー、着替えと必要最低限、生活に必要な物を入れた鞆を持った。

「アテは？」

「プランB。」

「ないって事か。」

「よく分かったわね。」

「家にゲーマーが居候しててな。お前は？」

「鬼八さんのプレイを横で見てたわ。」

蓮太郎は火垂も抱えた後、一般人には知覚できない速度で窓から飛び出した。リカの傷に響かないよう、衝撃はなるべく殺しながら。

「あーたーらしい朝が来たつと。」

「ぜーつぼーのあーさーだ。」

「おいこら。」

「希望なんてこの腐りきった世界にあると思う？」

「それもそうか……」

少し遠くの彫刻工場だったらしい建物で一晩明かした蓮太郎達。付近には毛布が三つ散乱している。

「おい元気か、リカ。」

蓮太郎は廃材に手錠を括り付けられたリカに声をかける。

「名前で呼ばないで……」

リカは蓮太郎がかけた毛布が暑苦しかったのか、蓮太郎が起きた時には毛布を床に落としていた。

蓮太郎と火垂が起きるよりも早く起きていたが、意識は朦朧としてるようで、脂汗もかなり浮かんでいる。さらに顔色もかなり悪い。

「……火垂、鎮痛剤あるか？」

「嫌よ勿体無い。」

「そうよ……別に、いらないわ……」

「無茶いうな。お前、その様子だと昨日の夜からずっと痛みを我慢してたろ。火垂、ここで痛みで足手まといになられても困るだろう。」

「……チツ、今回だけよ。」

火垂は舌打ちしつつも鞆の中から救急箱を取り出し、注射器を蓮太郎に投げ渡す。

それが鎮痛剤だと確認すると、リカに注射する。

暫くすると、リカの顔色は幾分良くなった。少し荒かった呼吸も大分安定している。

「俺はリカの包帯を変えたりして居るから、火垂は自分とリカの分の飯を買ってきてくれ。」

「蓮太郎は？」

「要らねえからその分腹一杯食べ。って、そういえばリカの内蔵は大丈夫だったのか？」

「ええ。奇跡的に内蔵には傷一つついてなかったわ。」

「一応、消化にいいものを買ってきてくれ。」

火垂ははいはいと二つ返事で財布だけ持って彫刻工場の外に歩いていった。

蓮太郎もリカの服を下着が見えない程度に上げて少し赤く染まった包帯を取って新しい包帯に変える。

後数日もしたらこの御時世のため魔改造された生体ノリで傷も塞がって抜糸が出来るだろう。

「……言つとくけど、まともな情報は知らないわよ。」

「知らないなら知らないでいい。ただ、目の前で死なれると気分が悪くなるだけだ。」

「命を狙ったのよ?」

「核でも俺は死なねえよ。」

はい終わり。と言って服を元に戻すとリカの手錠を外した。

「……何のつもり?」

「もうすぐ飯だし手錠あつたら不便だろ。」

「逃げるかもしれないわよ?」

「逃げれるもんなら逃げてみる。」

ふわああ……と欠伸をする蓮太郎。

そんな間抜けヅラの蓮太郎を見て、リカは地面に散乱していた粉を掴んで蓮太郎に向けて投げる。

「うおっ!!」

まさかいきなりやってくるとは思わなかった蓮太郎はこれに驚く。

リカはその隙に傷に手を当てながら出口へと走り出す。が、

「言つたろ? 無駄だつて。」

一歩踏み出した所で羽交い締めにされて持ち上げられ、無力化された。

「…………どうやらそのようね。」

「流石に外を出歩く時に幼女に手錠かけてたら通報されかねんからな。ついでに、逃げるのはやめてくれ。手間が増える。」

「誰が幼女よ!!」

「十二歳児相当の身長しかない奴がいう事か?」

「ぐぬう…………」

リカを下ろすと、蓮太郎は毛布をちやちやつとたたむ。リカも近くの壁を背につけて座り込む。

暫くすると、寝息が聞こえてきた。昨夜は痛みで眠れなかったのだろう。蓮太郎はたんだばかりの毛布をかけると、手持ち無沙汰のまま、火垂を待つ。

「戻ったわよ。」

十分程して、火垂が戻ってきた。手には食料が入ってるらしい袋が下げられている。「はい、蓮太郎の分。」

火垂が蓮太郎に袋の中から取り出したサンドイッチを手渡す。

「いいのか？」

「私達だけで食べるのも悪いと思って……って久留米の手錠、何で外してるのよ。」

「あいつに逃げる意思は無いよ。逃がさないしな。」

「……まつ、それならいいわ。」

火垂も自分の分のパンを取り出すと、蓮太郎の横に座って食べ始めた。

「……そういえば、火垂って刺されたんだよな？」

すぐに食べ終わった蓮太郎がまだ食べている火垂に尋ねる。

火垂の服にはナイフ大の穴があいていたし、血も滲んでいた。

「ええ、そうだけど？」

「気を付けろよ？流石に心臓とかやられたら死んじまうだろ？」

「心臓やられても首が繋がってれば生き返るわ。それに、私は絶対に死ねないから。」

「……どういう事だ？」

パンを食べ終わり、指についたパン屑やジャムを舐めてとる火垂。

「異能生存体っていうやつなのよ、私。」

「異能生存体？」

「例えどんな時でも、死ぬ事がないの。目の前で銃を撃たれても不自然な軌道で顔の横を通って行ったり、目の前に迫ってきた車も急に真横に逸れたりね。死神に嫌われてるのよ。」

火垂は懐からナイフを取り出すと、真上に投げた。

ナイフは確実に火垂の後頭部に刺さる軌道だったが、何故かナイフはクルツと半回転し、底部の部分から火垂の頭に落ちた。

「何度やっても同じよ。」

その後、五回やったが、火垂の頭にナイフが刺さること無かった。

「けど、撃たれる時もあれば刺される時もある。油断したら酷い目にあうのは確かね。」

「なるほど……」

「例え死んでもすぐに蘇生するから、寿命で死ぬ以外は死ねないのよ。」

「難儀な体質だな。」

「私という異能生存体を生き残らせるため、無意識にいろんな事が起きているって駿見さんは言ってたけど……鬼八さんが殺されたのも、もしかしたら私がこうして生き残るために起こったのかもしれないわね……」

「……」

「……って、何で会ってから数日の男にこんな事話してるのかしら。」

やめやめ。と火垂は言うのと、ゴミを袋に突っ込んでリカを叩き起した。

「……まあ、水原の忘れ形見のお前が自分は傷ついてもいいって思っても、俺がそんな事させないけどな。」

早く行くわよと火垂に急かされ、蓮太郎は二つ返事で腰を上げるのだった。

「えっ？もう回収された？」

「ああ、三十分前に来たばかりでねえ……いやあ、残念だったね。」

リカを連れてガストレアの死体を收容する施設にやって来た蓮太郎と火垂は火垂のイニシエーターという立場を利用して中に入った。リカは蓮太郎の親戚の子で今日は親がいないため、預かっているという設定で連れてくるのに成功した。

シヨッキングな死体もあるので民警の仕事とは関係が無い設定のリカは目隠ししているが。

ちなみに、蓮太郎は100円シヨップのサングラスを買ってつけている。

「一步遅かったわね。」

リカの言葉。蓮太郎と火垂は舌打ちをする。

「……………ん？可笑しいな、回収日は今日じゃないぞ？」

係員である柴田の言葉に蓮太郎と火垂が反応する。

「おい、もしかして……………」

「久留米リカ。どうなの？」

「……………」

「言うのよ。」

「……………ええ、そうでしょうね。間違いなく私達の組織の人間だわ。」

リカの言葉に火垂が小さくガッツポーズをする。

「じゃあその回収に来た人達は違う業者の人だったりする？」

火垂が柴田に質問をする。

「いや、何時も通り永原運輸さんで同じ人だったよ。違う人が来たら怪しんで止めるだろうしね。」

火垂の顔が一気に不機嫌に変わる。

「……………殺されたい？」

「息がかかっているとは考えないの？それに、殺してくれるなら本望よ。」

小さな声でボソボソと話す火垂とリカ。

火垂が舌打ちをしてリカの傷口を叩く。リカが傷口を抑えて蹲り、柴田が心配するが、持病の突発性腹痛だと火垂が説明した。

「けど、呼び出した方がいいかもしれないわよ？ いったつつつ……」

「……ここはリカの言う通りにしよう。捕らえたら有益な情報を聞けるかもしれん。」

「……そうね。でも、どうやって？」

「適当なガストレアにペンタグラムでも書けば？」

「そうね。シンプルにそうしましょう。」

ボソボソと相談し、作戦を決める。

「ねえ、ちよつと私達に協力してくれない？」

「な、何をする気なんだ？ 君達は。」

「何も聞かず協力して。じゃないと口封じに殺されるわよ。」

「き、君達は何に首を突っ込んでるんだ？」

「少なくとも一人の冤罪晴らし。多くて東京エリアの破滅を防ぐ事になるわ。」

「……分かった。君達に協力しよう。そうした方がいいのだろう？ 東京エリアの救世主

君？」

柴田の言葉に蓮太郎は肩をすくめるのだった。

「さて、餌は撒いたし後は待つだけ。」

適当なガストレアに油性ペンで五芒星のマークを書いて柴田に五芒星の書かれたガストレアがまた運ばれたと連絡してもらい、再び回収者に来させる事にした。

ちなみに、收容所が見えるファミレスに蓮太郎達はいる。

「間違いだったらどうするの?」

リカが皮肉混じりにジューズを飲みながら話しかける。

「その時はごめんなさいだ。」

「お気楽者共め。」

蓮太郎と火垂が同時にブラックコーヒーを飲み干す。火垂が涙目になる。

「大人ぶるなよ。」

「黙りなさい。」

はいはい。と蓮太郎が返事して外に意識を注目する。

雨がシトシトと降っていた。だが、その中で無骨なトラックが收容所の前に止まった。

「……行くぞ。」

蓮太郎の言葉に火垂が頷き、リカが溜め息をつきながら立ち上がる。

そして、外に出て蓮太郎の上着を傘替わりにトラックからは見えない位置でトラックが出るのを待つ。

そして、トラックに落書きしたガストレアが運び込まれ、トラックが動き出した。

「蓮太郎、タクシー拾って……」

「お前らはここにいろ。」

「なんで？」

「ミニガンがあった。」

「ッ!？」

蓮太郎はトラックの二台を隠す覆いの中から確かに蓮太郎はミニガンを見た。もし、火垂かりカが撃たれれば一瞬でミンチになって死んでしまうだろう。

「……なら、あなたが私を守って。」

「正気か？」

「傍観者出来るほど大人しい性格じゃないのよ。」

蓮太郎が溜め息をつき、リカを抱える。

「着いてこれるか？」

「時速130kmならこの靴で出るわ。ゴーグル欲しいけど。」
「ならいい。行くぞ！」

トラックが見えなくなつたところで蓮太郎が火垂に合わせて走る。

火垂のブーツがギューイイイインツ!!と音をたて、火垂の体が一気に引つ張られ、走り出す。

「これ、目立つわね。」

「どうせタクシーで尾行しても目立つき。サングラスかけるか？」

「あなたの顔が割れるのも駄目でしょ？付けときなさい。」

「予備があるが？」

「新車の馬鹿ね。私達。」

火垂が蓮太郎の予備のサングラスをかける。完全に怪しい高速移動するキチガイの完成だ。

そんなキチガイに気が付かない訳もなく。

「トラックが速度を上げた。気付いてるな。」

「最高速度でやっとなつてとこね。行くわよ!!」

「は、吐きそう……」

口元に手を当ててるリカを無視し、走る。

ETCがあつたが、そこは蓮太郎が火垂を抱えて飛び越えた。

「こんな事したら逮捕されそう。」

「グラサンあるからバレねえよ。」

「おぶっふえ……」

蓮太郎ならすぐに取り付けるが、火垂がいるため、どっこいどっこの速度でしか走ることが出来ない。

そして、不意に覆いがとられ、中からぶつとい黒い物が現れる。

「わお、ミニガン。」

「なら俺がかく乱する。」

蓮太郎が不意にトントントンと走りながら反復横跳びを開始する。そして、

「マジシリーズ、マジ反復横跳び」

「や、止めてええええええええ!!」

蓮太郎が何人にも分身した。

火垂が唾然とし、ミニガンの照準も完全に忘れ、ミニガンを構えている人物も開いた口が開いて塞がらない状態だ。しかもそのままトリガーが押されて他の乗用車が巻き込まれる始末。

これが反復横跳びと言うのなら、全国の反復横跳びを得意としている人物に真っ正面

から喧嘩を売っている。しかも蓮太郎はムカつくほど真顔だ。

「このまま突っ込んで占領するわ。」

「え、ええ……」

そのまま反復横跳びしながら蓮太郎は進んでいく。正直言つて気持ち悪い。

そして、トラックがトンネルに入ったその瞬間……

「お邪魔しマンモス。」

荷台に蓮太郎が侵入。そのまま流れるようにミニガンを破壊し、乗り込んでいた二人を無力化。指弾で前方の運転手を気絶させ、すぐに運転手を退かしてブレーキをかける。

「よし、無力化完了。後はガストレアの付近の細胞を切り取つて……よし、終わった。」

「蓮太郎！すぐに警察が来るわ！逃げるわよ!!」

「よし、全速前進だ！ドライアイス買って帰るぞ!!」

そのまま蓮太郎と火垂は鮮やかに離脱した。

サーティーナインパンチ

「だからとつとと言えつていつてんだよ！お前さん等が乱射したミニガンのおかげでホトケこそ居なかったが重傷者が出てんだよ！」

「黙秘させてもらおう。」

「ふざけんなー！」

多田島が叫び、取り調べ室そのものが振動したかのようだった。

多田島が取り調べしてるのは蓮太郎が一発で気絶させたガトリングをぶっぱなした男だ。

「なんであんなモン持つてやがったんだオイ！どこから手に入れた!!」

「弁護士を呼べ。そうじゃなければ話さん。」

「ほお、ならしばらくはシャバの空気を吸えないと思え。」

多田島の額に青筋が浮かぶ。街中でガトリングをぶっぱなして黙秘するいい度胸をした容疑者は流石の多田島でも初めてだった。

その時、取り調べ室の扉が控えめに二回ノックされる。

誰だ一体。と多田島が半ギレでそれに答えると、控えめな刑事がいや、そのと中に

入って口を開いた。

二人は何か話したと思うと、そのまま外に出て見えなくなり、話し声も聞こえなくなった。

そして、代わりに入ってきたのは櫃間だった。それに容疑者も少し警戒する。が、櫃間は徐に袖をまくって腕にあるタトウーを見せる。

「安心しろ、君を守りに来た。」

そのタトウーは五芒星マークに、その頂点の内三つに羽根が刻まれている。

「失礼しました！まさか『三枚羽根』が来てくださるとは。」

「櫃間篤朗という。安心しろ、この部屋には監視も盗聴もない。」

「仲間は？」

「病院でナースと監視員とお友達だ。状況は？」

「例のガストレアは焼きました。ですが、サンプルを取られました。」

「何処へ向かった？」

「ガストレアの細胞を調べられる高度な施設かと。」

高度な施設で思い当たるのは一つ。

「司馬重工か。」

「本庁で預かるだど!？」

「総監命令です。」

「櫃間さん……私もよく命令無視はやるから煙たがられてましたがね……アンタがやつてるのは捜査妨害だッ! アンタは総監と謀って何を……頼むから、私にアンタを信用させてください。」

多田島は櫃間の放った言葉が信じられず、さらに琴線に触れた。

多田島の正義の心に櫃間の言葉が火を付けるのは十分だった。

「……もういい。私は一人でやらせていただきます。」

「勝手な真似をすれば本部に報告させてもらいますよ。」

「先にやったのはあんただ。もし気に入らんのならなんでもしてください。」

多田島は踵を返して去っていった。

多田島が消えたのを見て櫃間はやれやれとばかりに首を振った。

「今消さないとマズイですよ。」

何時の間にか隣にいた巳継が満身創痍の状態で櫃間に話しかける。壁ドンされた時の衝撃と痛みが残ってるのは頭を抱えている。

「殺つたらパートナーの私の責任が問われる。」

「そこら辺はエリートで貫くんですか。で、今度ばかりはどうするんですか?」

「二人は心臓麻痺、一人は首を吊る予定がある。」

「嫌な予定です。」

「失敗した罰だ。」

「里見蓮太郎を倒すには僕を使うべきです。」

「ソードテールを使う。」

「ハミングバードが死んだのを知って分かったでしょう?僕じゃなければ倒せない。」

「ハミングバードが死んだのはアイツの慢心ゆえだ。ソードテールなら問題ない。」

「……そういえば、ハミングバードに似た何者かが里見蓮太郎と紅露火垂と共に居ると

聞きましたか?」

「他人の空似だろ。ヤツの心臓は一度止まった。そして機械も破壊された。今頃ミンチの仲間入りだ。もう死んだ人間のことは話すな。」

「おろろろろろろ………うえええええ………」

「女の子吐かせるなんてサイツテー。」

「悪かったよ……常人じゃマジ反復横跳びは耐えられないって忘れてた。」

「常人でもイニシエーターでも異能生存体でも無理よボトムズ野郎。」

「最低野郎とは言うじゃねえかマセガキ。」

「なに？異能生存体に喧嘩売るつもり？死なないわよ？とことんしぶといわよ？」

「俺にかかれば異能生存体だろうが何だろうが知ったこっちゃねえよ。」

「そこうるさい……頭ガンガンする……おええええ……」

コンビニの裏の隅で火垂は先にドライアイスを買ってきて、細胞が劣化しないようにした。

そしてリカは予想通りゲロイン化した。ジェットコースターの何百倍もの速さで反復横跳びする男に抱えられたら吐くどころか気絶したって可笑しくないが、気絶しなかったのは訓練の賜物かそれとも根性か。だが、気絶した方が良かったのかもしれない。だってそうしたらゲロイン化しなかったのだから。

「ぎもぢわるい……」

「今回ばかりは同情するわ。ほら、吐きなさい。楽になるから。」

「うえええええ……」

悪い事したかなあと蓮太郎が気ままずく後頭部を搔く。

「はあ……はあ……大分収まつ……うぷつ……」

「ほら、無理しない。」

「……リカが落ち着いたら司馬重工に行くぞ。知り合いがいる。」

「へえ。どんな人？」

「社長令嬢。」

「ちよつと菓子折り買つてくる。」

「通報されるわボケ。」

「ジョークよ。」

ゲロゲロ吐いてる横でのジョーク。正直、リカにとつてはたまつたものじゃない。

「おえつ……も、もういいわよ……傷も痛んできたし……」

「ほら、立つて。口ゆすいで来ましょ。」「うん……」

蓮太郎は申し訳ない気持ちを隠すために隠し芸でもしようとしてドライアイスを口に含むのだった。

「あ、あんた、何時まで口から煙吐き続ける気よ……いい加減シユール過ぎて笑つちやい

そう……」

「ドライアイス、案外多く飲み込みすぎたからあと数十秒。」

「……ッ！……ッッ！」

「とっ、とっ々と行くわよ！」

見事に蓮太郎の口、鼻、目、耳から煙を吐き続ける芸が二人にバカ受けして火垂は釣り上がる口角を抑えるのに必死で、リカは笑いすぎて最早声が出ていなかった。

誰だつてちよつと席を外して戻ってきたら知り合いが顔の穴という穴から煙を吐いてたら不意打ちで笑うに決まっている。

何故口に繋がっていない目と耳からも煙が出たのかは永遠の謎である。人外の神秘だ。

さて、そんなシユールな状態の蓮太郎は特に急ぐ訳もなく、時々休憩を挟んでいた。日が暮れたが、美織の家にたどり着いた。

完全に武家屋敷なそれを見て、火垂とリカはエラいところに来てしまったと実感したらしい。

「The ☆不法侵入。」

『この人外、躊躇ゼロ!?!』

大きな扉を開け放ち中に入ると、番犬がバウバウとお出迎え。

蓮太郎は番犬たちを優しく（当社比）気絶させると、そのまま中に堂々としていく。

この人外は既にどこに美織がいるのか、気配を察知している。

申し訳なきさそうについてくる火垂とリカを気配と足音で確認しつつ、蓮太郎は美織の元へ向かう。

射場。そこに美織は弓を構えて的を見つめ立っていた。

「よっ、美織。」

「あら、幽霊がロリっ子連れて来おったわ。」

「おいおい、足はまだあるぜ?」

「冗談や、里見ちゃん。」

弓から手を離し、どこからか取り出した扇子で口元を隠しカラカラと笑う。

「そっちのロリっ子は誰なん? 一応自己紹介してくれん?」

「あ……紅露火垂よ。いつも司馬重工の製品にはお世話になってるわ。」

「ヘヴィマシンガン改式、ペンタトルーパー改式、ソリッドシューター改式、ログガン改式に起動用外付けローラー、ローラー内蔵ブーツを使ってくれとる子やね。おおきな。」

美織の言葉に目を見開く火垂。流石に社長令嬢ともあろう者が関係無い人間の買った武器を把握してるとは思わなかったからだ。

「会社のことは何でも把握しとるのが社長つてもんやで。」

いやいや、それはないと心の中で火垂がツツコミを入れる。

「そつちの子は？」

「……久留米リカ、よ。」

「と、なるとその子がハミングボードか。えらく可愛い顔しとるやん。」

瞬間、リカの顔が驚愕の一角に変わる。何処から本名が割れたのだ、と。

「……監視してやがったな？俺に気付かれないとなると、衛星か？」

「せやで。監視とは言つても、里見ちゃんが何処にいるかとか、何と交戦したかとか位しか分からんかったけどな。」

「……あんま知りすぎるなよ？」

「そんなへマせんわ。それより、五芒星ガストレアの細胞解析やろ？早速本社に行つて始めるで。」

「専用の機器がいるんだろ？今から行つても使える奴が残つてるのか？」

「言つたやろ？会社のことは何でも把握しとると。私に司馬重工の所持する機械が使える何てことはあらへんで。」

ほな、着替えてくるから待つてな。と弓と矢を片付け去つていく美織。火垂とリカは呆然としている。

「……すつごい人ね。」

リカがポツリと呟いた。

「そりゃ天下の司馬重工を仕切ってる若社長だ。あいつも、そう言う事に関しちや、人外の領域に入ってるよ。」

「つてか、悠長に車で移動してていいのか？俺、世間一般からは殺人者と思われてるんだぞ？」

「大丈夫や。デコイは回してあるで。」

蓮太郎が結構荒い運転をする黒いワゴンの中で美織がカラカラと笑う。

火垂とリカは蓮太郎の運転に結構酔っている。

「そういえば、董センセから伝言があるで。」

「先生から？」

「延珠ちゃんとテイナちゃんの保護は完了したし、一ヶ月は見つからないだろうからゆつくりと黒幕探せと。」

延珠はIISOに捕まる筈だったし、テイナに至っては檻の中なのによくそんなことが出来たなど呆れる。

「……あの人、ウチの子供達にはホント甘いな……」

「子供には皆甘いもんやで。」

酔った火垂とリカを膝の上に乗せて頭を撫でる美織。蓮太郎はそれをバックミラーで見ても何かと微笑ましい気持ちになる。

「あ、ちよつと通信………警察が見事に引つかかったで。時間稼ぎするから早目に終わらせへんと面倒なことになるで。」

「了解。スピード上げるか？」

「スピード違反で捕まったら元も子もないしこのままでええで。それに、囷に使ったドライバーはそうそう警察に勘づかれるような真似はせえへんから大丈夫や。」

「了解。」

蓮太郎はスピードを維持してそのまま走る。

こんなに警戒するのなら蓮太郎が担いで行けばいいのではと言われるが、ワゴンを使って従業員のように見せないと、警察に移動してる所を目撃されれば鑑定する時間もなくなるので、蓮太郎もなるべく変装してのワゴンでの移動になった。

「さて、そろそろ着くけど、二人共大丈夫か？」

大丈夫だという事を見せるために二人が手を上げる。が、グロッキーなので本社ビルの中まで蓮太郎が抱えていく事になりそうだ。

火垂とリカは乗り物酔いしやすい訳ではないが、久しぶりに運転した蓮太郎のスピンド直前のカーブなどで撃沈した。

「さて、着いた。」

キキイイイイっ!!と蓮太郎が急ブレーキをかけ、火垂とリカが座席の間に転がり落ちる。

「もう、急ブレーキはあかんぞ?」

「民警ライセンス取った以来だから仕方ないだろ。」

蓮太郎が火垂とリカを抱えて、先に車から降りた美織が社員用の入り口へ向かうのについていく。ロリっ子二人を小脇に抱えているグラサン装備の蓮太郎を見て何人かが携帯を取り出したが、美織を見てああ、この人の知り合いかと携帯を仕舞われる。

誘拐されてるように見えても仕方ないのだから、蓮太郎は何も言えない。

顔パスで受け付けやら何やらを素通りし、とある部屋の前でパスケースを翳す。

扉が開き、中に入ると自動で電気が付き、かなりの広さの部屋が姿を現す。

「さて、やるぞ。試料は?」

「はいっつだ。」

美織がそれを受け取り、機械やらピーカーやらの前に立つ。

「本当に出来るのか?」

「愚問やで。」

「なら、俺は……そこら辺で仮眠してるから後は頼んだ。終わったら起こしてくれ。すぐに起きるよ。」

「任せとき。」

美織はウイंकを一つすると、作業に取り掛かる。

蓮太郎はそれを邪魔しないように音を経えず部屋を出て、火垂とリカを並んで廊下に寝かせ、その横で蓮太郎は立ったまま背中を壁につけて仮眠を取るのであった。

「なにい!?!社長令嬢に逃げられたあ!?!」

多田島の叫びに電話をかけた部下、吉川の弱々しい声が帰ってくる。

『は、はい……リムジンを尾行していたらかなり蛇行して、勾田高校の前で止まって……社長令嬢が出てこないから中を覗いたら……』

多田島は最後まで聞かずに電話を切り、上着をとって仮眠室から出た。

蓮太郎に一杯食わされたと歯噛みし、しかし闇雲に探しても見つからないともなり、思わず壁を殴りたくなる。

「ちよつと待つてくださいい！」

だが、殴ろうとしたところで歳若い婦警に止められた。

殴ろうとした事に謝ろうとしたら、別の事で怒られた。

「一体いつから仮眠してないんですか!?!」

「三つ数えた辺りから数えてない。」

「倒れますよ!?!」

「犯人確保と同時に倒れるからいいんだよ。」

婦警が呆れ混じりに溜め息を吐く。

さて、何処に行こうかと考えた時、ふと疑問が過ぎつた。

「なあ、ウチも司馬重工の世話になってるよな?何を世話になってるんだ?」

「そうですね……銃器は勿論、科研、弾道分析、血液検査、DNA鑑定を手伝って……」

「それだ!」

「ひやいつ!?!」

多田島の叫びに思わず飛び上がる婦警。

「奴は司馬重工の本社ビルにいる。大量の応援を寄越すように言ってくれ。」

「あ、あの……」

「いいな!?!」

「い、イエッサーー!」

多田島は不敵に笑うと、そのまま警察署を飛び出し、車に乗ってアクセルを吹かした。

リカは隣で眠りこけてる蓮太郎と、可愛らしい寝言を時々呟く火垂を見て軽く呆れていた。

いつ、元自分の仲間……五翔会が攻めてくるのも分からず、こんなところで眠りこけるなんてどうかしてるのではないかと。

自分が倒された時、応援も超越さなかった薄情な組織だが、無残に死に絶えるしか無かった自分を拾ってくれた最低限の恩返しとして組織の事は殆ど口には出さなかった。

が、五翔会が確保していたであろうガストレアを調べられたなら、何れは組織について知っていくことになるだろう。

(……これが終わったら、真つ当な道を進んでみるのもいいかもしれないわね……)

ヒーローみたいな男と恋するちよつとませた少女に感化されたのか、そんな事を考えるリカ。

既に真つ当な道は諦めたつもりだが、ちよつと人外と行動しただけでこれだ。拷問に

耐え、尋問にも口を割らず、無感情に人を殺す訓練は何だったのかと自虐したくもなる。が、胸の内にある機械はどうやったのか分からないが壊され、組織は自分はもう死んだものだと思っているだろう。

組織の中で自分の顔を覚えているのは本当に僅か。櫃間にダークストーカー、そしてソードテールと自分の部下くらいなものだ。ちよつと髪型を変えればそう見つかる事もない。

(……もしかしたら、死んじやうよりもこつちの方が良かったかもね。)

あれ？これって死亡フラグ？なんて考えながらも美織が出てくるのを未だ倦怠感が伴う体で待つ。

そのままボーつとしてると、ふと階下から叫び声が聞こえてきた。

警備隊が喧嘩でもしたのだろうかと思つてると、今度は銃声。しかもハンドガンの暴発などでは無く、狙つて撃つたかのようなアサルトライフルの音。

(……ちよつと見てきましょ。)

音は一階に近い場所からだった。

非常扉から階段へ行き、一回近くへと向かう。

そして、音のする階へと着いた頃には、完全に銃声と叫び声は止んでいた。

リカが恐る恐る扉を開くと、見慣れた、しかしもう見たくなくなつた光景が広がった。

「ッ!?!」

警備隊は数人を残し血を流して倒れ、血が体から流れ、通路を真っ赤に染めている。「な、何があつたの!?!」

生き残つて警備隊員の元へと駆け寄る。警備隊は外部骨格を身に付け、数人の襲撃者相手なら完封出来るほどの練度もあつた。

「な、仲間が急に血を流して倒れて……つて、お嬢ちゃん!?!早く逃げるんだ!?!ここは危険だ!?!」

急に血を流して倒れる。ましてや透明人間がいるとは思えない。

(……ん?透明人間?)

いや、いる。透明人間になれる人物が仲間に一人いた。

(まさか……!?)

その瞬間、リカの背後にいた警備員が首から血を流した。

「ヒイツ!?!」

警備員がアサルトライフルを捨てて逃げ出す。それも仕方ない。リカはすぐに蓮太郎に知らせようと走ろうとするが、逃げ出した警備員の前に大型ナイフが現れた。

「なっ……ぐぐっ!?!」

ナイフが刺さつた警備員はそのまま倒れた。

間違いない。このインチキ地味な能力を持つ人間は一人しか知らない。

「まさか生きていたとはな。ハミングバード。」

「え、ええ……あなたもお元気のようね。ソードテール。」

見えない場所からの声。だが、それが誰かは一瞬で分かった。

ソードテール。かつての同僚で、光学迷彩を使ったかのように姿を消すことが出来るとても厄介な男だ。

「里見蓮太郎に寝返ったか。」

「寝返ってはないわよ。」

「なら寝取られたか。」

「私はまだ処女よ！」

リカが自分の中のスイッチを切り替え、近くに転がっていたアサルトライフルへと飛び付き、すぐに声のした方へとトリガーを引く。

だが、血は吹きでない。ハズレだ。

舌打ちをして一瞬でマガジンの中を確認。数発撃ってあったのか、もう五、六発しか入っていない。

すぐにマガジンをセットすると、目の前に大型ナイフが姿を現す。

背筋がヒヤリとすると同時にアサルトライフルを盾にしてナイフの突きをガードし、

引き撃ち。だが、アサルトライフルは当たらない。

すぐに弾が切れてただの鉄とプラスチックの塊となったそれを投げ捨て、近くのアサルトライフルを拾い上げ、構える。

蓮太郎に知らせないと。自分では勝てない相手だとすぐに自覚はした。

あの殺人タイヤ、死滅都市の徘徊者《ネクロポリス・ストライダー》があれば話は別だが、今のリカはティナよりも格段に劣る戦闘力しか持ち得ていない。

「……………」

暫くの静寂。それを破ったのはリカのアサルトライフルだった。左から右へ薙ぎ払うように銃弾を放ちながら非常扉へと走る。

弾が切れたところでアサルトライフルを捨てる。

「逃がさん！」

ソードテールの声が響くと同時に銃声。それを気にせずリカは走るが、背中に強烈な痛みと熱。

「いッ……………」

撃たれたと自覚するも、痛みを無視して走る。

時々足がもつれそうになるが、それをなんとか気合いで抑えて蓮太郎と火垂の元に辿り着く。

「お、起きて！敵よ！」

リカの叫びに蓮太郎と火垂が目を覚ます。そして、背中から血を流すリカを見てすぐに敵が来たのだと理解する。

「み、美織さん！針と糸その他簡易応急キット！」

「あいよ！」

「V R 訓練室の鍵を開けておいてくれ！そこでリカの治療をしつつ迎え撃つ！」

「分かったで！」

美織が消毒済みの針と糸、そして応急キットを火垂に投げ渡し、蓮太郎はV R 訓練室の扉を開けるよう伝えると、リカをおぶって火垂を小脇に抱え、非常扉から飛び出し、V R 訓練室のある階まで一気に行き、そのままV R 訓練室に入る。

「火垂！」

「……内蔵はやられてない。ホント、悪運いいわね。」

火垂を下ろすと、すぐに彼女はリカの容態を確認する。

『手術室を出すから待って！』

美織の声がどこからか響くと、一瞬で部屋の中がよく漫画などで見るような手術室に早変わりする。

『そこなら変な菌とかで炎症起こすとかあらへんで！』

「ありがとう美織さん！」

すぐにリカを台に乗せてナイフを取り出し、リカの服を裂く。

「麻酔してる暇も無いから痛いわよ。」

「もう……慣れた……」

「なら結構！」

火垂が躊躇なくリカの肌にナイフを突き刺す。リカの悲鳴が響くが、蓮太郎はすぐに部屋を出る。

流石に治療中の部屋で戦うわけにもいかないからだ。

「……透明人間さんよ。俺はあんまり気が長い方じゃない。早く姿を表せ。」

蓮太郎が部屋を出てすぐに虚空へと話しかける。

他人から見れば虚空だが、蓮太郎にはしっかりとソードテールの輪郭が見えていた。

「……新世界創造計画、ソードテール。貴様を殺す。」

「ケツ、卑怯者め。卑怯者は……」

ソードテールが突っ込み、ナイフを構え、蓮太郎も拳を構える。

ソードテールのナイフが突き出される。が、蓮太郎はそれにコンマ一秒以下で反応。ナイフを殴り砕く。

「ワンパンでオシマイだ!!」

蓮太郎が虚空へと降ったボディブローが虚空へ突き刺さる。

当たった瞬間、ソードテールの透明化は解け、血を吐き、吹っ飛ぶ。

壁に大の字でめり込んだソードテールはそれっきり動かなくなった。

「……これぞ壁ドンってな。」

(人を殴り飛ばして)壁(に)ドン(とめり込ませる)をした蓮太郎はヤケにスッキリとした顔をしていた。

そしてリカの悲鳴をBGMに待つこと数分。

「終わったわ。当たった弾が一発だけでよかった。そっちは？」

「ワンパン。」

「……ホント滅茶苦茶。」

蓮太郎がVR訓練室に入り、リカに自分の上着を羽織らせる。

腹の傷と背中への傷が痛々しいが、あまり長居すると美織に迷惑をかけてしまう。

「大丈夫か？」

「……しにそ。」

「隠れ家に戻ったらゆっくり寝かせてやる。だからちよつと我慢しろよ。」

蓮太郎がリカをおぶり、VR訓練室を後にする。

ふとソードテールがめり込んだ壁を見ると、ソードテールは居なくなっていた。が、

周囲に気配はない。

逃げたと理解し、すぐに美織の元へ向かう。

「美織。」

「里見ちゃん、結果はもう出たで。あと、これ。」

美織が数枚の紙と注射器を蓮太郎に渡す。注射器の中身は痛み止めだった。

「リカちゃん、麻酔無し手術されたんやろ？無いよりはマシやと思うで。」

「すまん、恩に着る。」

「ならばよ無罪証明してくるんやで。」

「ああ。」

「あの襲撃者は多分中庭から逃走する気や。捕虜にするんならとっ捕まえてき。」

蓮太郎と火垂は頷き、ソードテールを捕まえて尋問するため、中庭へと向かった。

ソードテールこと鹿嶽十五は腹を抑え、荒い息で司馬重工本社ビルの中庭へとたどり着いた。中庭から脱出しようという魂胆だが、蓮太郎の一撃は頑丈さは人並み外れていた十五を一撃でほぼ再起不能へと追いやった。

ショットガンを受けようがハンドガンの連射を肩にくらおうがここまでのダメージは受けなかつただろう。意識は途切れかけ、子供に押されただけで転んで意識を失いかねん程だった。

「随分あつさりやられたものですね。」

ふと、前方から声が聞こえた。目を凝らすと、そこには見知った顔がいた。

「ダ、ダークストーカーか？」

それは微笑を浮かべたダークストーカーだった。

「た、助けてくれ！ 奴は俺一人には手が負えん！」

光学迷彩を見破り、一撃で自分を再起不能に出来るとなると、十五にはかなり相性が悪い。いや、蓮太郎に相性も何もあつたものじゃないのだが、それを知らない十五はダークストーカー、悠河の力を借りれば蓮太郎を倒せると思ひ込んでいた。

「それは無理な相談です。」

「なにっ!？」

「略式ですが……」

悠河は一瞬で十五の懐に潜り込み。

「処刑の開始です。」

そして、悠河の掌底が十五の胸に当てられた瞬間。

内蔵が焼き切られたかのような痛みを一瞬感じた後、十五の意識は永遠の闇に囚われた。

ソードテールを追ってきた蓮太郎達が一瞬見たのは、ダークストーカーがソードテールを殺している所だった。

たどり着いた時にはソードテールは血を吐き、地に伏せていた。

「デメエ!!」

蓮太郎が怒り任せに悠河に殴りかかろうとしたが、背中にリカが居るため、自由に動けない。

「どうも、お久しぶりです。」

「待つてろ。今すぐ壁ドンをまたやってやるよ。」

「そんなお荷物がいては出来ないのでは?……おや? そのお荷物はまさかハミングバードでは?」

蓮太郎の背中でリカがピクリと動く。

「まさか生きていたとは。これは処刑しないといけませんね。」

「……そろそろ止めとけよ？俺がブチギレてお前を殺す前にな。」

蓮太郎の額には既に何本も血管が浮かんでる。

「なら、殺し合いと処刑はまた今度にしましょう。それまではハミングバードの事には死んだ事しておきます。どっち道死ぬんですしね。」

「……」

「そうそう、そろそろ新世界創造計画について答え合わせでもしますか？答えれたら少しヒントをあげますよ。」

悠河の挑発するような口調には蓮太郎は怒っていない。怒っているのは、リカを殺すという事を言ったことだった。

「んなもん答え合わせするまでもねえ。お前は先生の義眼、リカはティナのシエンフィールド、ソードテールは名前も知らない誰かさんの力の上位互換を持っているんだろ？」

「流石にわかりましたか。そうです、僕は室戸董の義眼の上位互換の義眼を。そのお荷物はシエンフィールドの上位互換を持っています。そして、そんな僕達が所属する組織は『五翔会』。以後、お見知りおきを。」

悠河がおちよくる様に礼をする。今すぐ撃つてやろうかと火垂が銃を構えるが、蓮太郎が視線で制す。

「この通り、五翔会には五芒星と羽根があります。そこのお荷物にもあったでしょう？」
悠河が制服の袖をシャツごとまくり、五芒星と羽根を見せる。

悠河の羽は四枚だが、内二枚はぐしやぐしやに塗り潰したようになっている。

「階級か。」

「その通り。」

これだけ聞けばもう用はなかったが、もう二つ聞くことがあった。

「お前らのトップは四賢人の一人、アルブレヒト・グリューネワルトだろう。そして、ボイスチェンジャーで俺らにリカの襲撃を知らせたのはお前だろう。」

「……里見くん。君は世界の美しさに泣いたことがありますか？」

「世界の醜さなら現在進行形で泣いてるさ。」

「僕は母親が妊娠した時に病気にかかり、生まれた時から目が見えなかった。でも、グリューネワルト教授のくれた義眼で見えるようになった。機械化兵士になって僕は春に、夏に、秋に、冬に泣いた。もうそれだけで十分だった。だから強くなり、四枚の羽根を手に入れた。けれど、たった一度の失敗で二枚を失い、教授に失敗作の烙印を押されてこんな薄汚い殺し屋稼業の仲間入りです。それと、君達に通話したのは、君がそこのお荷物やソードテールのようなブリキ細工に殺されるのが気に入らなかつただけです。」

喋り終えた悠河は一息ついた。

「グリューネワルト教授は君を倒せば四枚羽根に……いや、五枚羽根にしてくれるときえしてくれると約束した。五枚羽根になれば、僕はまた教授に奉公できる。」

「お前に暗殺を強いるグリューネワルトが正しいとでも？」

「正しいかどうかなんて関係ない。僕が信じるか否だ。」

悠河はそれだけ言うと、背を向ける。

「最終決戦の場で待ちます。」

蓮太郎に吐き捨てると、そのまま悠河は歩き去っていった。

それと同時に、多数の足音が響いてくる。

「蓮太郎。」

「ビルの屋上から飛ぶぞ。」

蓮太郎の言葉に頷いたのを確認して、蓮太郎は屋上へと向かった。

フォーティーパンチ

「着いた！リカの様子は?!」

「呼吸や脈拍は問題ない。とつとと痛み止め打ってやりたいが……」

リカの呼吸は多少荒いものの、命に別状はない。だが、傷が痛むのか時々苦しそうに呻く時がある。

屋上のヘリポートはライトアップされ、地面にはパトカーが多数見えた。あまり悠長にしてる時間はない。

「あ、これ渡しておくわ。途中で落として重要アイテムでした。とかだったら困るし。」
火垂はポケットからとある物を投げ渡す。

「鍵束か？」

それは幾つもの鍵が纏まった鍵束だった。

「ソードテールの近くに落ちてたのをドサクサに紛れて取ってきたの。さ、行くわよ。
衝撃を出さずに飛べる？」

「愚問だ。」

「なら急ぐわよ。」

火垂が足を力を込め飛ぼうとした時、屋上に繋がる扉が乱暴に開け放たれた。

「動くな！ 妙な真似をしたら撃つ！」

そこから入ってきたのは、拳銃を構えた多田島だった。

火垂は構わず飛ぼうとするが、蓮太郎がそれを制す。

「なんで？」

「あの人とは話をしておきたい。」

蓮太郎は片手でリカを落さないように支えてもう片方の手を上げ、振り返る。

「悪いけど、撃たれた仲間がいるんだわ。見逃してくれねえかな？」

「だったら尚更だ。お仲間がお陀仏して欲しくなければお前らごと身柄を引き渡せ。」

「命に別状はないから見逃してくれるだけでいいんだよ。」

「ここで拳銃を下ろしてくれればと思ったが、多田島は拳銃を向けたままだ。」

「俺は法の番人なんぞな。法と秩序がなければこの世は世紀末だ。混沌が待つだけだ。」

「なら正義はおざなりか？」

「お前は自分が正義だと言うのか？ この事件の裏では何が起こっている。お前はそれを

知ってるのか？」

「取り調べで言っただろ。ハメラれたと。」

「すると何だ？ 巨大な組織があつてお前らはそれを壊滅させようとかいうお決まりの妄

想でも言う気か?」

「現に起こっている。」

「頭やられたか? 人外よ。」

「組織がやつてるのは秩序の破壊だ。アンタはそれに手を貸している。アンタが知らないのはアンタの責任だ。」

蓮太郎はそれだけ言うと、背を向けた。

「行かせるか。」

「櫃間篤朗は警察に侵入したスパイだ。」

「嘘だ!」

だが、多田島は思うところがあつたのか、拳銃が震えている。

「……そんなのは、嘘だ。」

「なら撃てよ。俺を撃つて逮捕して俺が死刑になって、さらに延珠は殺され、ティナも死刑。木更さんも奮闘するもどうにもならず組織が東京エリアを壊滅させてハッピーエンド。実にいいシナリオなんじゃね? いやー、感動の雨あられだなあ。」

蓮太郎が煽るように拍手をする。

「ほら、撃てよ。そんでもってあんたの法とやらを守れよ。そんでもってこれから先クソの役にも立たない賞状もらえよ。」

「……被告の擁護はする。」

「テイナが少年法吹っ飛ばして処刑されそうになつてるの知らない？ ああ、アンタらにとつてはその程度で済む問題か。」

「……なに？」

「……おいおい、知らないのか？ 俺は聞かされたぞ。テイナは間違いなく銃殺刑にされるつてな。だから脱走したんだろ。まっ、所詮アンタらの擁護なんてそんなもんだ。冤罪の少女一人救えない程度のな。」

蓮太郎はリカの手を自分の首周りを掴むように固定して、落ないように支える。

「櫃間篤朗の事、少しは可笑しいと思つたんだろ？ 可笑しいと思いつつも何もしないのなら、それは上の人間にへつらつてるだけだ。」

最後にチラツと多田島を見た。多田島の拳銃を持つ手は震えていた。

「……撃たないなら行くぜ。」

蓮太郎は火垂に向けて頷くと、ビルの屋上から飛び立った。

銃弾は飛んでこなかった。

「……………くそっ!!」

蓮太郎のいなくなつた屋上で多田島は空へと発砲した。何故撃てなかつたという怒りを見せてだ。

それでも怒りは収まらず、拳銃を床に投げ捨てた。

撃たなければならなかつた。法の番人である多田島は、蓮太郎を撃たなければならなかつたのだ。だが、出来なかつた。

蓮太郎の迷いのない目、呪われた子供たちすら助ける優しさ、それを垣間見た事のある自分の中の蓮太郎が犯人では無いのではという疑問。そして、櫃間への疑惑。

だが、これは多田島の言う、法の敗北だ。

多田島の法はあの青年の正義に敗北したのだ。

「……………正義、か。」

なら、少し青臭い正義を信じてみるか。もしも、あの青年が言った通りのことが起こつてゐるなら、見逃すわけにはいかない。

(櫃間さんに最も近く、そして連絡の取りやすい人物か……調べてみるか。)

「……ねえ、蓮太郎。」

「ん？」

「あなた、あの警察官の事、結構買ってるのね。」

「……そりゃ、あの人程警察にふさわしい人はいないだろ。」

蓮太郎はスヤスヤと眠るリカに毛布をかけ、自分も少し離れたところで寝転がる。

「いつまでここでゆっくり寝れるか分からない。今の内に寝とけ。」

「……そう、ね。」

蓮太郎は火垂に毛布を投げ渡し、瞼を下ろす。

リカの近くで衣擦れの音が少し聞こえ、規則正しい呼吸も聞こえてきた。

蓮太郎は今日、寝る気はない。もし、何かあつたらすぐに行動できるようにするためだ。

「……ねえ、蓮太郎。」

「なんだ？」

寝たと思っていた火垂からの会話。蓮太郎は勿論寝てないので、すぐに返事した。

「もうすぐ、誕生日なの。」

「そうか。」

「だから……鬼八さんみたいになくならないで。」

「おつ、デレか？」

「違うわよ。ただ……もう一人は嫌なの。」

「……あつたり前だ。お前こそ居なくなるなよ。」

「勿論よ。私は異能生存体よ。」

「俺だって人外だ。」

「なら、よろしく。パートナーさん。」

「……この歳でパートナー掛け持ちするとは思わなかったよ。」

「いい人が見つかるまでのつてのがパートナーの前につくわね。」

「はいはい。とつと巢立ちしろよ。」

「その後寂しくて泣くんじやないわよ。」

「お前がな。」

カツン。と蓮太郎の頭に空マガジンがぶつかる。

「おやすみ、人外。」

「ああ、いい夢見ろよ、異能生存体。」

翌日はリカの傷の治療に専念した。

火垂りによってザツクリやられた部分はもう傷が塞がったらしくリカが寝ている内に抜糸し、問題ないことを確認した。

特に痒いとかはないらしく、痛み止めを打って体を動かさないようにするという事だけでリカは一日過ぎ、蓮太郎とはある人物へと連絡を入れていた。

そんなことはさておき、董の研究室。

「あーここにいましたよ！」

「えっ、どこ?!」

「ほらそこ……あ、死んだ。」

「ぬがー! どうしても一人倒したところで死んでしまうう!!」

「じゃあ、今度は私ですね。兵科を偵察兵にしてつと……」

「プロの暗殺きますよ！」

「よし、まず一人です。次に……よし、倒した」

「百発百中ですね……」

「なあ翠! 蹴れる兵科とかないのか!？」

「残念ながらw」

「笑いながら言うなあああ!!」

何とも賑やかなことになっていた。原因は翠が持ってきた戦場で銃を撃ち合うオンラインで戦えるゲームなのだ。

そんな四人を遠目に董は死体らしき物が乗っている台で、死体の横に座っている。

「君はまだ動かないのかい？」

コーヒーを飲みながら呷く董。

「まあ、好きにするといい。私は口出ししないさ。君が行くよりも蓮太郎さんと一緒にいた方が一億倍安全だろうしね。」

董は液体の入っていたらしい注射器を片手で弄びながらスクリーンを見る。

「……あいつらが本拠地に乗り込む時に教えてくれ。」

「分かったよ。多分、明日には君を送り出すだろうね。さあて、伊達に引きこもりしてないゲーマーの力でも思い知らせてやろうかね。」

董は肩をグルグルと回しながら、ワーワーはしゃいでいるロリっ子四人組の元へと大人数ない事をするために向かった。

翌日。蓮太郎は生体のりのお陰でもう抜糸が出来たり力を連れて浜辺に来ていた。

火垂は初めて見る海に興奮してはしやぎ、リカも初めて海に来たのかウズウズとして
いる。

「ここはモノリス内部なのでガストレアが来る心配もない。」

「しよっぱー!」

「お前なあ……塩水舐めたらしよっぱいに決まってるだろ。」

「初めてだから仕方ないでしょ?」

「……リカ、暫く引率を頼む。」

「何だよ。」

「やる事あるんだよ。好きにしていいいから頼んだぞ。」

リカの頭を潰すようにグシャツと押し撫でて蓮太郎は去っていったが、すぐにひやつ
ほー!!と誰かが海に飛び込む音がした。

呆れたように溜め息をつくど、蓮太郎は指定の場所に向かう。

「よう、連れとの戯れはもういいのか?」

蓮太郎の行った先にはヤクザと思わしき者が立っていた。彼が、蓮太郎の目的の人物
だ。

「心配だからなるべく早く済ませたい。」

「話は聞こう。」

「要件は一つ。トリヒュドラヒジンの流通先……どこに運ばれているかを知りたい。」

蓮太郎の要件にやれやれと首を振る。

「この職業は信用が大事だ。信用がなくなれば潰れるだけだ。」

「俺が言わなきゃいいだけだ。俺もあんたらから何か買う以上、信用が大事だからなで、いくらだ？」

「……相場はこんなもんだ。」

男は指を三本立てた。

「二倍出す。ただ、金はすぐ払えない。」

「出口は真後ろだ。」

「まあ待て。俺が逃げたら天童民間警備会社のテナントビルにあるゲイバーとかに俺がゲイになったとでも言えば恐るべき速度で東京エリアに広まるし俺は掘られる。あの人達マジで殴っても復活してくるから。」

ちなみに、ゲイバーの奴等は蓮太郎の連続普通のパンチすら致命傷で済ませる人外である。

「そりゃあ社会的にも人間的にも死ぬな。面白い。乗ってやろう。」

「金は阿部さんに渡しておく。」

「渡さなかつたらゲイになるからな。さて、詳しい事だが俺もわからない。」

「おいゴルア。」

「ただ、トリヒュドラヒジンはいつも指定の場所に置いている。かなり妙な場所にな。」
「それは？」

「外周区のモノリス近くにあるマンホールの直下だ。そこから妙な場所に繋がってるが……それが奴等の本拠地だ。」

「……なるほど。」

蓮太郎が地を思いっきり踏む。その瞬間、軽い地震が起きる。

蓮太郎はその振動で地下のマンホールが何処に繋がってるかを確認する。確かに、マンホールの下の坑道が一つ、モノリスに繋がってるのを確認した。

「……情報は確かだな。」

「……阿部さんの言う通り人外だな。」

「すまない、助かったよ。」

「いい商売だったと言える事を期待するよ。」

蓮太郎と男はそれぞれ別方向へ歩き出した。

「おい、あんまり動きすぎて体力使い過ぎるなよ〜」

キャハハとはしゃいでいる火垂とリカを見て、蓮太郎は溜め息をつくのだった。

黒ビルの休憩室の中。苛立ちのオーラを醸し出す櫃間と悠河はいた。

「ソードテールも破れたか。」

「残念ながら。怒っておいでで?。」

「怒ってはいさ。ただ、それよりも里見蓮太郎、紅露火垂、裏切り者のハミングバードの首を取るのが先決だ。」

声色も表情も怒り一色の櫃間を見て、嫌な上司を持った物だと悠河は溜め息をつく。

「紅露火垂の能力については調べはついています。奴の能力は再生強化です。心臓や頭をバラニウム弾で撃たれた位では死にません。」

悠河はポケットから一つの弾丸を取り出す。それは、一見ただのスナイパーライフル用のバラニウム弾だった。

「これがどうした?。」

「この弾丸は当たった瞬間弾け、標的の体の中で液状バラニウムを体内に広げ、再生レベルⅢまでのガストレアを殺害します。紅露火垂は多く見積もってもレベルⅡです。」

ちなみに、アルデバランはレベルⅣ。細胞全てを消滅させないと倒せないレベルで、レベルⅤにもなれば、実質的に殺害は不可能なレベルだ。マグマに落とそうが宇宙に放

りだそうが殺すことは出来ない。

なのだが、蓮太郎のマジパンチなら一撃で殺すことが出来る。やはり、あの人外は何処かぶつ壊れてる。

「まあ、その用意も無駄になるだろうな。」

「何故。」

「民警をぶつける。もうすぐ奴の寢床が判明する。」

「……ああそうですか。どうせ全滅ですよ。」

「何だと?」

「ご勝手に。僕はあの場所で待つことにしますよ。」

不機嫌な悠河はそのまま去っていった。

櫃間も何とも言えない気持ちのまま、配置に戻った。

「お前らなあ……水着でも無いのにはしやぎすぎだ。」

『はい、すみません。』

ポタポタと水が彫刻工場の床に落ちる音が響く。

結局帰ってくるのが夜になった訳だが、その理由は夕方までずっと火垂とりカが海で遊んでいたからだ。

しかもそのせいで全身ビショビショ。シャワーなんてある訳もなく、ついさつき服ごと二人の頭から買ってきた飲料水を被らせたところだ。

海と飲料水でビショビショになった服を二人は絞って水分を飛ばそうとし、蓮太郎は服を脱いだ二人を直視しないよう、反対を向いて目を閉じている。

「乾かないから他の服着ましょ」

「そうね……」

そんな会話が聞こえるが、蓮太郎は無視。

「明日は早目に行動するからもう寝ろ。明日疲れて昼過ぎに起きたとか洒落にならないからな。」

「分かってるわよ。」

「くれぐれも私達が起きないからって襲ったりしないようにね。」

「安心しろ。そんな日は永遠に訪れない。」

「ゴゴゴそと背後で音がした後、二人の規則正しい寝息が聞こえてきた。

そして二人が寝てから暫くして、蓮太郎は一人で立ち上がり、彫刻工場の外に出ようとす。

「おーい、一人で子供でも襲いに行く気？このロリコン。」

「流石にそれは容認しかねるわよ。」

「……なんだよ、寝たふりか。上手いもんだな。」

だが、二人は起きていたようで、外に出ようとした所を呼び止められた。

「つたく……いいか、お前らはすぐ警察に行つて俺に脅されて一緒に行動していたんだと言え。俺は一人で馬鹿共をとつちめてくる。」

これから先、地雷でもあろうものなら蓮太郎なら無事だが、火垂とリカは死ぬかもしれない。それに、もしかたソードテールのような暗殺を得意とした敵が現れ、敵の本拠地内部ではぐれた所を襲われたら二人は殺されてしまうかもしれない。

蓮太郎の側は少なくとも危険が付き纏う。だから、火垂達は警察に任せておいた方がいいと判断したのだ。

「馬鹿ね。警察なんかよりも蓮太郎という方が安全に決まつてるでしょ。私は死ぬほど痛い目に自らあいに行く馬鹿じゃないわよ。」

「私に至つては警察に行つて素性が知られたら尋問は確実だし知られなくても確実に暗殺されるからこつちにつく方が安全なのよ。」

「……何も言い返せねえ。」

なのだが、はぐれたとしても蓮太郎を呼べば蓮太郎は壁越しだろうが聞き取つて壁を

壊して来るし、何よりはぐれたとしてもすぐに合流できるし、下手なシエルターよりも安全だし。警察に行くよりも確実に安全だ。

確かに、命の危険には晒されるが、晒されるだけで別に奪われはしない。火垂に至っては何が来ようが異能生存体なので絶対に死なない。死ぬほど痛い目には合うかもしれないが。

「分かつたら行くわよ。もう警察にこの場所は割れてるかもしれないし。」

「そうね。逃亡生活するんなら寝床はちよくちよく変えないと。」

「いや、俺はこのまま五翔会の野望を潰して俺の無罪を勝ち取って水原の敵を取るつもりだったから寝床を変えるつもりは無かったんだが。」

「そうだ。もう寝床を変える必要なんかないぜ。」

蓮太郎の言葉に同意したのは、火垂とリカの少女特有の高い声ではなく、男特有の低い声だった。

蓮太郎はその声に聞き覚えがある。と、言うかつい最近聞いた声だ。

「……つたく、依頼されたのか？警察に。」

「前金たんまり貰ったから行くつきやないだろ。俺だつて来たくなかったぜ、ボーイ。」

「何で私達が自殺未遂させられなきゃならないのよ……」

「この間から特番で深夜アニメの時間ズラされて特番を録画してしまった私は怒っても

いい。」

「いや、知らんがな。」

物騒な物をぶら下げて（約一名変な事言いながら）やってきたのは片桐兄妹と朝霞だった。

フォーティーワンパンチ

深夜。既に時刻は日付変更数分前まで来ている。そんな中で多田島は一人天童民間警備会社のドアの前に来ていた。

蓮太郎の言った事。櫃間が正体のわからない敵のスパイなら、もしかしたら結婚予定の彼女なら何か知ってるのではと淡い希望を持って来たのだ。

多田島は気分晴らしに吸っていた煙草を携帯灰皿に突っ込んでインターホンを押す。

「誰よ……慣れないパソコン使い過ぎで目が痛いのに……あら？ 確か……多田島……警部でしたっけ？」

「すみません、少し里見蓮太郎について……」

「何も言うことはありません。お帰りください。」

蓮太郎の情報を洗いざらい吐けと言うのだろうと思った木更は問答無用でドアを閉めようとする。が、多田島は靴と手をつ突っ込んでそれを防ぐ。

「ちよつ、何するんですか!? 警察呼びますよ!？」

「私が警察です! 大丈夫です! 里見蓮太郎の事について尋問しようだなんてこれっぽっちも思いませんからお願いなので中に入れてくださいだだだだだだ!!」

人外の力でドアを閉めようとする木更だったが、多田島の表情は嘘をついているようには見えなかったので、力を緩めてドアを開けた。

「どうぞ。」

「すみません、夜分遅くに。」

天童民間警備会社の中は聞いてた通りで机とソファ。ソファの上には誰かの毛布と枕。そして質素な内装に似合わない薄型テレビとゲーム機、さらに天誅ガールズのグッズ。

「これはあなたの趣味で？」

「ウチの子達の趣味ですよ。すみませんが、やる事があるのでそつちをやりながら聞かせてもらいます。」

木更は社長用のデスクの上に置いてある、恐らくブルーライトを遮る効果のあるメガネをかけて少し古いノートパソコンの前に座るとマウスを操作し始めた。

「失礼ですが、何を？」

「関係ありません。」

冷たい声でパッサリと話題を切られてしまった。

「……さ、里見蓮太郎についてですが、彼は生きています。」

「知っています。彼はマグマの中にアイルビーバックしようがライトセーバー的な何か

で斬られようが真空パックでお片付けされて一ヶ月経とうが生きてますから。」

ああ、あいつは人間辞めてるんだなとこの時初めて多田島は蓮太郎の事を理解した。

ただ、怪力なだけとか丈夫過ぎるだけで済ませてきたが、木更の言っていることに嘘は含まれてるようには聞こえなかったもので、信じる他なかった。

が、なかなか本題に入るための話題を作れない。

「ところで、何をしに来たんですか？ここ数日寝てないので苛立ってるんですけど。」と、思ってたら助け船を出された。剣山並に針がぶつ刺さってたが。

「櫃間さんについてです。」

木更がピクッと反応を起こした。

「里見蓮太郎から彼は敵のスパイだと聞きまし……」

その瞬間、木更が残像を残しながら多田島へ接近し、口を手で抑えた。

「っ!？」

初めて見る人間の残像に驚き、さらにいきなり口を塞がれたのにも驚いた。

「死にたいんですか!?!消されますよ!?!」

木更が多田島にしか聞こえないように小さな声で叫ぶという器用な真似をする。

木更の相当焦った顔を見るに、どうやら蓮太郎の言ってた事があながち嘘ではないと言っているのが嫌でも分かった。

「……監視カメラと盗聴器があるかもしれないんです。私は発見できませんでしたからあまりこの事を喋らないでください。」

辺りをキョロキョロと見回し、再び社長席にドカッと座り込んでマウスを手を持っていた。

多田島は見てもいいですか聞き、と了承を得てから画面を覗きこんだ。

「はいっはっ。」

画面に映された内容ははつきり言つて、最初から見えてないと分からない物だった。

「……多田島警部。あなたは私についてくれますか？」

「……」

「私が見てるのはかなり危険な物です。そして、里見くんの敵について書かれています。今の彼は凶悪犯罪者。そんな彼に味方する度胸はありますか？」

パソコンから目を背けずに、しかし力強く木更は言った。

これは警告だろう。下手すると、死んでしまうかもしれないぞ、という。

木更が本当に人を殺して逃亡している蓮太郎の肩を持ち、多田島自身をこちらへ引き込もうと計画しているのかもしれない。だが、蓮太郎は本当は人を殺しておらず、蓮太郎が警察署で話した妄言が実現している物で、木更は自由に動けない蓮太郎の代わりに情報を集めているのだとしたら。

櫃間は怪しい。だが、彼も多田島と同じ警察だ。法を守る正義の味方だ。だが、

「分かりました。私も覚悟を決めましょう。」

蓮太郎を信じてみることにした。彼の目には、揺るぎない決意と正義があった。

その決意はただ単に俺をハメた奴らをぶつ殺すという決意なのだが、多田島はその決意は正義を守るといふ決意なのだど勘違いしていた。

しかし、それは都合な事だった。

「……わかりました。なら、見ましようか。」

木更は振り返らなかつたが、横顔から見える口角は上がっていた。

一方董の研究室。

『そろそろあの子達を出しても問題はない筈や。』

「そうか……流石に何日もゲームざんまいだと彼女達も一人を除いて飽きてくる頃だからな……」

『せやで。子供は外で遊ばんと。』

「私みたいにはなつて欲しくないからな。彼女達と彼を出そう。」

『さよか。なら、私はもう用済みやな。』

「同時に、私もだ。暗躍もなかなか楽しいものだったな。」

『今度も何かあつたら暗躍するとしよか。』

「そうだな。ではな、社長令嬢。株はたんまり買わせてもらおう。」

『通帳見たら驚くぐらいの金儲けさせたるで、博士さん。』

「で、邪魔するには覚悟は出来てんだらうな？」

そしてさらに蓮太郎と片桐兄妹&朝霞。蓮太郎は最早悪役の顔をして指をポキポキと鳴らしている。

片桐兄妹&朝霞をポキポキ（何処をとほわない）する気満々のようだ。

「お、おい、待てよボーイ！」

「辞世の句は終わったか？」

「まだ辞世する気ないからな！ 違う違う！ 俺っち達はお前と手を組みに来たんだ！」

「……はあ？」

片桐兄妹と朝霞は己の武器を地面に置き、手を上げる。

「あんたと一戦交えたら骨どころか細胞の一片すら残らないでしょ。そんな自殺嫌に決まってるでしょ。」

「そもそも、貴方が殺人をするなら細胞の一片すら残さず、目撃者も現場も残さない筈なのに捕まるという事はハメられたとしか考えられません。」

蓮太郎を知るからこそその言葉だった。

朝霞の言葉に二人が首を吹っ飛びそうな勢いで縦に振る。

そして火垂とリカはそんな様子に開いた口が塞がっていない。

「仮に捕まったとしたら警察署消し飛ばして逃走するでしょ。」

「それどころか東京エリア消して大々的な証拠隠滅だつてするだろ。」

「……否定は出来ないな。確かに、やるんならそれくらいはやるさ。」

「なので、私達は知人をハメた馬鹿共と戦うために依頼の前金パクってここまで来たわけです。なので、パトカーは包囲していますが、私達の後ろにはパトカーが来ないように言っております。」

朝霞は蓮太郎をハメた者と戦うと言っているが、本当は蓮太郎の被害を少しでも減らして本当に蓮太郎が犯罪者となる事を防ぐ為に来た。玉樹なら蓮太郎の連続普通のパンチ一回なら耐えることは出来るため、肉壁になれる。

さらに、もしも蓮太郎が誰かを殺して豚箱にぶち込まれた場合、下手したら玉樹の言った通りに東京エリアを消して大々的な証拠隠滅をしかねないからだ。

そして、後ろにパトカーが来ないようにしたのも、問答無用で殴り飛ばされた際に余計な犠牲が出ないようにする為だ。

「……なるほど。なら、力を借りるぜ、片桐兄妹、朝霞。」

その瞬間、三人はふう。と一息ついて武器を回収した。

「さて、ボーイ。警察達が来る事はないが万が一という事もある。場所を変えないか？」
「そうだな。そこら辺のビルの屋上に行くか。」

そんな訳で、仲間を得た蓮太郎は弓月の糸で全員を一まとめにして担ぎ、その場から常人の認識速度をぶつちぎって去った。

完全に、五翔会は人選を間違え、敵に塩を送る真似をしてしまったのだった。

そして数分後。そこら辺のビルの屋上で初対面のモノもいるので軽く自己紹介をしてから、玉樹達にはもう自分達は殴り込みに行くのを残すのみになってるのを説明した。

「ほんと、五翔会だったか？そいつらは最後の手段として俺達を送ったつぽいが……」

「人選をミスった訳ね。それにしても、ほたるんもリカつちも災難だったね。」

「あ、あはは……」

ちなみに、リカの事は五翔会に体を改造されたが、命からがら逃げ出してきたという設定を使っている。

「それより、どうしますか？もう殴り込みに行きますか？行きましょう。深夜アニメ見たいんです。」

そして完全に私情をぶち込んでくる朝霞。

だが、早く終わらせたいたのは蓮太郎も、火垂も、リカも同じ。

「そうだな。場所はもう割れてるんだ。行くつきやない。」

「なら善は急げだ。いつ警察が嗅ぎ付けてくるか分からねえからな。とは言いたいが……また仲間が増えるっほいぜ。」

玉樹の言葉に、蓮太郎を除く全員の視線が玉樹と同じ場所を向く。

その瞬間、四つの着地音がビルの屋上に響いた。

『私（妾）達、参上！』

無駄に決めポーズを付けて登場して来たのは、延珠、ティナ、夏世、翠だった。

なお、翠は恥ずかしさで顔を真っ赤にしてる模様。

「よっ、おひさ。」

「おひさ、じゃないのだ！全く、蓮太郎は最近トラブルを引き寄せる病気にでもかかったのか!？」

「あはは……トラブル持ち込んだ事あつてすみません。」

「まあ、そんなこたあいいんだよ。お前らも来るのか？」

「当然です。少しおいたが過ぎる人達には誰に手を出したのか思い知らせませんと。」

「そ、そうです！」

どうやら四人ともヤル気満々らしい。

これで人数は十人。数分前までは三人だったのに、何とも大所帯になった物だ。

だが、この戦力は恐らく、木更がない事を除けば東京エリアの最高戦力だろう。蓮太郎一人で最高戦力なのだが。

五翔会は喧嘩を売る相手を完全に間違えたのだ。そして、もう撤回するには完全に遅い。五翔会壊滅は近い内に行われるだろう。南無。

「さて、全員揃ったことだし、殴り込みに行くか。」

「おっと、もう一人追加させてくれないか？」

玉樹の言葉に、誰かが一言付け加えた。

声のした方は延珠達が来た方から。足音はしなかったが、確実に誰かがいる。

その方を見た蓮太郎とリカははあ!?!と声を漏らし、火垂は暫く放心した後、目に涙を溜めて、口元を抑えた。

「おっと、初めましての奴もいるから自己紹介が先だな。俺の名は水原鬼八だ。俺の敵

「討ち、一緒にやらせてくれないか？」
死人が、地獄の底から舞い戻った。」

フオーテーター。パンチ

「おまつ……水原!? 死んだはずじゃ!？」

「残念だったな……トリックだよ……つと、まあそんな冗談はさておき、だ。」

まさかの人物の到来で蓮太郎と事情通のリカは開いた口が塞がらない。

鬼八は殺人現場で倒れていた時と同じ服を着て、リュックを背負って確かに目の前にいた。

蓮太郎が最後に見た鬼八は呼吸が出来ていなかったし、最後に聞いた情報は董の所に回されたと聞いた。

そしてリカも彼は処分済みだから事情を知ってるかもしれない紅露火垂を殺してメモリーカードを奪えとだけ聞いた。

そのため、確実に鬼八は死んだものだと思っていた。

だが、蓮太郎は董の所というのに突っかかりを感じた。

「……………?」

「まあ、早速ネタバレすると、最後に練った波紋で無意識に生きながらえている時にAG V試験薬っていう薬をブスリと事後承諾でやられてな。そうしたらあら不思議。潰さ

れた心臓と肺が元通りになって復活したんだ。で、俺はまた表舞台に戻って蓮太郎の足を引つ張つてもマズイからそこのお嬢さんらのいる研究室で死体に扮していた訳だ。」
鬼八の言葉で延珠達が思い出したのは、何故か触られもしなかった、全身をビニールシートで覆われた死体だった。

特に腐敗臭もしないから何も聞かなかったが、まさかそれが生きた人間だとは全く思っていないかつたらしい。

「蓮太郎、火垂。すまなかつた。本当は俺と駿見さんだけで何とかするつもりだったんだ。けど、あんな事になった以上、俺は死んだ扱いの方が都合がいいと思っていた。」
「……まあ、いいけどさ。生きてるんなら何とでもなる。それに、こいつもあんな嫌な所から抜け出してきた訳だし。」

リカの頭に手を置くと、ぶぎゅつと声を漏らした。そしてポカポカ殴り始めた。

「んじゃ、火垂、ゴー。」

蓮太郎の合図と共に火垂は全力で走って鬼八に激突した。

「ぐえっ!!?」

火垂は呪われた子供たちの力を遺憾なく發揮し、鬼八の腹にタツクルを決め込んだ。何とか踏ん張つてそのまま吹っ飛んでいくという事態は防いだ。

何するんだと言おうとしたが、服がしつとりと濡れているので、何も言わずにしがみ

ついでに火垂を抱き返した。

「……よし、先に行くか。火垂が場所知ってるから待つてるから来いよ。おら行くぞお前ら！」

そして空気を読んだ蓮太郎達はすたこらさつきと件のマンホールへと移動した。

そして、残されたのは鬼八と火垂だけ。

「まあ、その、なんだ……ごめんな。隠し事したり勝手に置いていたりして。」

「……馬鹿。」

「……ほんと、ごめんな。」

「……許さない。だから、もう勝手に居なくなっちゃだめ……」

「ああ。もう勝手に居なくなつて死にかけてたりはしないよ。」

二人は暫くの間、抱き合っていた。

「やっと来たか。」

「すまん。」

外周区のマンホール前。蓮太郎達がそこで待機してから数分が経った頃に鬼八と火

垂は手を繋いでやってきた。

「気にすんな。あ、後で警察に自分から説明しに行けよ。俺、お前を殺した罪で追われてんだから。」

「そこら辺は室戸先生と司馬の社長令嬢さんが既に動いている。」

「……先生だけじゃなくて美織までグルだったのかよ。」

董どころかついこの間会ったばかりの美織までグルだったことに頭を抱えて溜め息をつく。鬼八は少し申し訳なさそうな顔をしている。

「まあ、俺の冤罪が晴れるんならテイナの冤罪も晴れるし延珠も戻ってくる。後は俺達を敵に回した馬鹿共をぶっ潰して終わりだ。」

「ああ。蓮太郎、恐らくダークストーカーがお前を待ち構えているはずだ。お前はダークストーカーを倒した頃合で起爆させる。」

鬼八が背負ってるリュックの中身を見せる。中には白色の粘土が沢山詰まっていた。何度も見たことがあるC4爆弾だ。起爆装置も沢山入っている。

「お前がやらなくていいのか？ダークストーカー、已継悠河はお前を殺そうとしたやつだ。」

「構わん。それで死んだら火垂をまた泣かせちまうからな。」

鬼八はすぐに延珠達との談笑に混ざって行った火垂を見ながら言った。

「ロリコンめ。」

「ロリコンじゃない。たまたま愛情を注ぎ込む対象が火垂だったただけだ。」

「十分アウトだ。」

蓮太郎と鬼八はマンホールを退かすと、そのまま軽口に言い合いながら中に飛び込んだ。

それを見た玉樹が急いでそれを追ひ、さらにそれに気付いたロリっ子達がマンホールに飛び込んだ。

中は坑道のようになっており、確かにモノリスの方へと道があった。

一同はモノリスのほぼ直下の場所まで来た。が、目の前にはバラニウムの壁。

「……ハズレか?」

玉樹が壁を触りながら呟いた。が、人外とその親友は違った。

「蓮太郎、やつちまえ。」

鬼八の言葉に蓮太郎が頷き、その壁を殴り壊す。

「この手に限る。」

「この手しか知りません。」

朝霞がネタを返したのをスルーし、その先に視線をやれば、LRV、ライトレール輸

送があった。

マイクロバスのようなそれの中に一同は乗り込み、鬼八が発進させる。

「この壁、全部バラニウムでできてる……」

L R Vを通すためのトンネルは、壁がバラニウムで作られていた。

「そうだな、マイスウィート。多分、これはシールドマシンで掘ったんだろう。」

「シールドマシンって、あの全面がおろし器みたいなあれですか？」

「最近のシールドマシンは掘りながら地盤が崩れないための補強が出来るみたいですよ。」

少し翠がゲームで得た知識を披露して、それからたまに談笑はあるものの、特にこの場で話すことは無いのか、L R Vの走行音だけが響く。

そして、二十分ほど経ってから鬼八の手によりL R Vが止まった。

「リカ、ここは知ってるか？」

「……知らないわ。多分、私以外のメンバーが使ってたところね。ほら、そこに欠プレートがある。」

L R Vから降り、リカが指をさした方にはネームプレートのような物があり、その全てが裏返っていた。

被害者という設定のリカとボソボソと話してる内に鬼八達が奥へ進もうとする。

「里見蓮太郎。よくここまで来ましたね。」

が、奥の方から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「巳継悠河か。歓迎ご苦労さん。」

蓮太郎が全員の前に出る。そして、奥から悠河が姿を現した。

「皆、行つててくれ。」

「はい。どうぞ行つてください。僕が用があるのは紅露火垂でも、水原鬼八でもありません。僕の狙いは里見蓮太郎、ただ一人ですから。」

延珠達が敵であるはずの悠河の言葉に困惑する。当たり前だ。わざわざ悠河は本陣に敵を通すと言っているのだ。

畏なのでは？と疑いが強くなる。

「巳継悠河はそこら辺キチンとする奴だ。根っからの武人つてやつだろ？」

「そんな立派な物じゃありません。ただ……里見蓮太郎を殺したらあなた達も殺すので通そうが通さなからうが変わらないことです。」

「だ、そうだ。ここは善意にあやかつて進むとしよう。」

鬼八が一人、悠河の隣を通り過ぎる。それを見てから蓮太郎を除く全員が奥へと進んだ。

「さあて……やるか？」

「ええ。里見蓮太郎、あなたを殺して僕が一番になる。」

「ほう、なら殺してみろ。殺せるもんならな。」

蓮太郎はポケットに手を入れたまま、悠河は隙の無い構えを取る。

そして、二人は常人では認識不可能な速さで戦いを始めた。

「はい」だ。」

悠河の横を通り過ぎ、たどり着いたのはドアの前。

「ここに何があるんだ？」

玉樹が聞く。ここに何があるのかはリカと鬼八しか知らない。

リカはかなり居心地の悪そうな顔をしている。

「見ればわかるさ。」

鬼八はそう返して扉を開けた。

中は暗かった。だが、夜目の効くテイナと翠はそこに何があるのか分かった。

檻だ。真つ黒な檻だ。

そして、その中のものすらハッキリと見えた。見えてしまった。だから、

「ツ!!?」

撃った。ティナは持ってきたスナイパーライフルを腰ダメのまま全弾撃った。

「ティナやん!?!」

「ど、どうしたの!?!」

「夜目が効くのか……ならこれが見えたんだな。」

鬼八は持ってきたライトで檻を照らした。

そして、それを見た瞬間、リカと既に気付いているティナと翠を除く全員が戦慄した。

「が、ガストレア……!?!」

既に何匹かが事切れているが、檻の中にいたのはガストレアだ。

「これが俺が蓮太郎や聖天使様に伝えたかった事の一つだ。」

鬼八は中に入って施設内の電気を付ける装置を操作して電気を付ける。

檻の中にはガストレアが何匹も捕らえられており、その全てがやってきた延珠達に襲

いかかろうと檻に体当たりしている。

「ま、待てよ……これ、バラニウム製の檻だろ?なんでこいつらはこんなに元気なんだよ

!?!」

黒色の金属といえばバラニウムしか思い付かない。そのバラニウムで作られているのがこの檻だとしたら、閉じ込められているガストレアはこんなに元気ではないはず

だ。

ステージⅣだって半日もいればかなり衰弱するというデータすらあるバラニウムの檻に、ガストレアは捕らえられていた。

「バラニウムに耐性を持ったガストレア……というふざけた事を言うつもりですか？」

朝霞のまさか、と言った声色で投げかけられた質問に鬼八は頷いた。

「じゃ、じゃあここから起こる事って……？」

弓月の質問に鬼八が答え用としたが、ゲーオタとオタクがこういう展開から起こる事を予測した。

『人為的なパンデミック……？』

「……少し、違うかな？」

「じゃあ……これを使って何かするのなら……」

「……脅し？ いや、違う。脅迫……まさか、この組織はこのガストレアを使って世界の実権を握ろうとしているんじゃない！」

「その通りだ。五翔会は、自分達に従わない国を全て更地にしてから再構成するつもりなんだ。この抗バラニウムガストレアを使ってな。」

「ゲーム脳とアニメ脳もたまには役に立ちましたね……」

ボソツと夏世が失礼な事を呟くが、勿論誰にも聞こえない。

「おつ、あつたあつた。本題はここだ。」

その後、いろんな場所を回ったが、その殆んどにガストレアが居り、この施設はガストレアを使つた何らかの研究をしているのがそれだけで嫌にも分かった。

そして、鬼八が培養室というプレートのついたドアを開き、電気を付ける。

「ハ、ハこれは……」

培養室の中は、ぶよぶよとした黄緑色の、血管のようなものが走っている球状に膨らんだ物が沢山、ドーム状になつた天井からぶら下がっている。

「……『ぶどう園』……」

火垂が思わず呟いた。

この光景はぶどう園の物に似ていた。もつとも、ぶどうはこんなにグロテスクでも無ければ悪趣味と思えるものでもないが。

「五翔会はこの培養したガストレアをトリヒュドラヒジンを使つて催眠状態にして解き放とうとしていた。火垂も見た羽と五芒星マークのついたガストレアはトリヒュドラヒジンを使つて実験のために解き放つたガストレアを他のガストレアと見分けのつくようにするためだ。蓮太郎にこのことを知らせる前に俺は少しリタイアしたが、まあ辿りつけば問題無い。皆、ここを焼くぞ。このありつただけのC4爆弾を設置してきてくれ。足りなかつたら多分、そこら辺に爆薬なりなんなりあるからだろうからそれを使つ

てくれ。」

「あ、ああ……」

子供達は予想外の事実にも呆然としているが、一足先に我に返った玉樹が幾つかC4を持って出ていき、子供達もそれぞれでC4を持って出て行った。

「……えっ、この気持ち悪い部屋俺一人で爆弾設置すんの？」

だが、こんな気持ち悪い部屋に誰も居たい訳がなく、火垂すらせっせと部屋の外に行ってしまった。

鬼八は仕方なく一人でC4の設置にかかるのだった。

フオーテイスリーパンチ

「オラア！」

「がはっ！」

何度目の交錯か。蓮太郎と悠河の戦いは蓮太郎の圧倒だった。

悠河の体術は蓮太郎が悠河の義眼でも視認不可の攻撃で潰し、超振動デバイスで内蔵や筋肉を破壊しようとしても蓮太郎には効かず、スナイパーライフルの弾丸を眼球に正確に当てても何でか眼球に弾かれる。そしてすぐに蓮太郎からプロレスラーやボクサーでも一撃で数日は気を失う拳を受ける。その繰り返しだ。

「ま、まだだ……まだ！」

「……はあ。いい加減諦めろよ。お前の攻撃は俺に通じない。」

「うるさい！僕は勝つ！絶対にだ!!」

立ち上がる悠河だが、足はもう生まれたての小鹿のようにガクガクだ。しかも確実に重度の脳震盪も起き、鼻も折れてるだろう。そして殴り飛ばされて壁に頭をぶつけていたからか流血も酷い。義眼も幾度もの衝撃でその機能の半分以上が機能していない。

体術だけなら、天童式戦闘術を習っていない蓮太郎には勝てるだろう。だが、蓮太郎

にはそれを差し置いて尚有り余り過ぎるその身体能力と人間を辞めた体がある。

勝率なんて砂漠の中の砂粒一つ分もない。

「ハアア!!」

悠河がボロボロながらもプロレスラー等でも驚愕するスピードで懐に潜り込み、拳を振るう。

だが、蓮太郎はそれを片手で払って顔面に拳を叩き込んで吹っ飛ばす。その時の手応えから悠河の顔の骨にヒビが入ったのが分かった。

「ぐああ!!」

「もう止めろ。死ぬぞ。」

「……で帰っても消されるだけ……なので。」

もう立つだけでも辛いだろう体で悠河は立ち上がる。

「……ならもう辛くないように一撃で終わらせてやる。」

蓮太郎が血だらけの拳を構える。

「ウオオオオオオ!!」

悠河がボロボロの体を奮い立たせて走る。

超振動デバイスを起動。義眼の機能も全開放。脳が焼き付くような痛みを出しても気にしない。

全力で体に染み付いた体術で蓮太郎に殴りかかる。が、蓮太郎はそれを右左と体をずらして避け、拳が当たって超振動デバイスが作動する。が、蓮太郎にはシャツクリすら出させることができない。

「終わりだ。普通のパンチ!!」

「まだだ……まだ!!」

悠河の義眼がさらに熱を持つ。異音を上げてその性能を限界の限界まで引き出す。

その瞬間、何時もなら視認不可能な蓮太郎の拳が、見えた。ハッキリと、自分へと向かっているのが。

『ターミナル・ホライズン『二千分の一秒の向こう側』。一秒が二千秒に感じる程の感覚。堇の臨床実験でそれを体験した全員が脳を破壊された。だが、それを悠河は超えた。

だが、届かない。その拳は、二千秒を超えても、悠河には速過ぎる。見える、見えるのだが、届かない。体がついていかない程速い。

遠い、遠すぎる。自分の持てる全ての力の限界を全て突破させ、これから先どうなるかが関係ないと言わんばかりに体のリミッターを外し尽くした。だが、蓮太郎はその先を行った。

人外。人間を辞めた、と蓮太郎を見た者は言う。そして、悠河もこの瞬間、蓮太郎の事を人外だと認めた。だが、それは人間を辞めたのではない。

全力の努力で、ただ単純な努力で人間を超越したのだ。人間を超越し、別の、違う次元へと踏み込んだ、人間。それが、人外、里見蓮太郎。

(勝てない筈だ……こんな人外に。)

その瞬間、蓮太郎の拳が顔面に命中。さらに捻りを加えられ、威力が増す。

そして、拳が振り抜かれて悠河は顔面を中心に錐揉み回転しながらぶつ飛び、壁に激突した。

数秒経った。だが、悠河は立ち上がらなかつた。

「俺の勝ちだ。」

「……手加減されてこれとは、全く情けないですよ。」

「手加減しなかつたら地球がヤバイ。」

「でしようね。スコープピオンを消し飛ばすなんて芸当は僕には無理ですから。」

「喧嘩吹っかけた相手が悪かつたな。」

「嫌な上司を持つとこんなに苦労するなんて知りませんでしたよ。」

「よかつたな、勉強になつて。」

「ええ、これから先使われること無い知識ですけどね。」

ペラペラと悠河は話すが、立とうとしても全身に力が入らない。もう、体は限界をとうにぶつちぎってボロボロ。意識を保っている……いや、生きている事が不思議な程

だった。

「……じゃあな。」

蓮太郎は背を向け、歩く。もう、勝敗は決まっている。ここにいる必要はない。

「ええ、もう二度と会うことは無いでしょうね、蓮太郎。」

「そうだな、悠河。」

悠河は目を閉じ、蓮太郎は外へと向けて歩き始めた。

蓮太郎と悠河の戦いは、呆気なく終わったのだった。

「クソッ！クソッ!!」

櫃間はオーブンカーのアクセルペダルを踏み込みながら毒づく。

全てが台無しにされた。それも、たった一人の男に。

ダークストーカー、已繼悠河のバイタルサインが消えた。

櫃間がこいつは人外だと認めた男が死んだというのは悪い冗談にしか思えなかった。

だが、バイタルサインは消えている。

ハミングバード、ソードテール、ダークストーカー。優秀な駒を三つも失った。

先ほどネストから、五翔会の沙汰を待つように命じられた。

除名や全羽を消されるならまだいい方だ。あんな優秀な駒を無くしたのだ。街中で刺されるか撃たれるかだつて考えられる。

だが、櫃間には蓮太郎へ復讐出来る、唯一の切り札があった。

木更との結婚だ。今、櫃間がアクセルペダルを踏み込んでるのも木更との結婚式を挙げるためだ。

急遽ねじ込んだ結婚式。だが、日取りもちやんと選んでいる。

蹂躪し、汚し、犯し尽くしてやる。彼の中の汚い獣がせせら笑う。

蓮太郎が切歯扼腕する様子を想像すると胸がすくようだ。

十字架の目立つ協会に辿り着くとオープンカーをボーイに預ける。

壮麗なパシリカ式の協会建築と聖十字架に目をやると、大扉に手を掛け、中に入る。

「おお……ッ」

祭壇の中央。そこには、正に美し過ぎる光景があつた。

黒絹の流れる髪の毛の上に乗ったヴェールや白手袋。柔らかいシフォン地のスカート
トのドレープが見える。

美しい、美し過ぎる純白の乙女がこちらに背を向けて佇んでいた。

司祭はまだ到着していないようだった。

ぼつねんと背を向けた少女へ、櫃間は足を踏み入れる。

信徒席の長椅子を超えて、手を伸ばせば届きそうな距離に彼女のほつそりとした肩を捉える。

「木更、よく来てくれたね。さあ、司祭が来たら私達だけで結婚式を……」
だが、その瞬間、銀色が走った。

喉に何かが当たると。次に喋ればそれは喉を貫通してくると実感させられる。

——殺人刀、雪影。

木更の愛剣が櫃間の喉元には突き付けられていた。

「残念ね。私、まだ結婚する気は無いの。五翔会幹部の櫃間篤郎さん？」

その瞬間、木更の尋常ではない殺気が櫃間にぶつけられた。

心臓がその働きを何倍もこなし、大きな音を立て、冷や汗が湧き出てくる。ここまで恐ろしい事が今までであったらどうかと思わせる程の殺気だ。

「な、なに……う？な、何のことを言っているんだ、木更。ご、五翔会なんて、私は……」
「櫃間さん、残念だが年貢の納めどきだ。よく立ち回った方だとは思うがね。」

その時、明後日の方向から別の声がかげられた。

司祭用の扉が開くと、そこから中年寸胴の刑事が回転拳銃を手に現れた。

「た、多田島さん……」

「悪いな、神父の代わりのおっさん刑事で。これからあんたが進むのはその別嬪さんとの新婚生活じゃなくて豚箱での囚人生活だ。」

「ふ、二人とも何を言ってるんですか？な、何がどうやら……」

木更が無言で刀を握っていない左手で櫃間に手の中のものを見せつける。

『メモリーカード』……一体どこに……!?!」

「(ハ)の中よ。」

取り出したのは、櫃間が木更に渡した懐中時計だった。

変わってる点は、櫃間に渡された時よりもさらに綺麗になり、人に渡すために入れられたであろう、お洒落な、子供の好きそうな箱に入れている、という事である。

「まさか盗んだ物をプレゼントするなんてね。」

「そ、それは調べた筈……」

「気付かなくても無理ないわ。だってこれ、凄い細工が施されたもの。渡されたのが私だったから、気付けただけで。それにこれ、水原鬼八さん……あなたの所の人間が殺した人が、里見くんと行動を共にしている紅露火垂ちゃんに渡すものだったんでしょ？偶然これを作った人に会えたから新品同然にしてもらったのよ。」

櫃間の顔はもう蒼白だ。

計画という計画が全て失敗した。言い訳はもうできない。メモリーカードまで相手

の手に渡った。

「里見蓮太郎の調書に書いてありましたよ。水原さんは彼に証拠品が盗まれた、聖天子様に話を付けてほしい、110番はしたと。三回ほど、水原さんは警察に空き巣で連絡を入れていきます。人が死ななきや本格的に動かないのは警察の悪い癖です。おかげで、無実の英雄に泥を塗ることになりましたよ。」

軽々と言うが、多田島の怒りは爆発寸前だ。

五翔会に、櫃間に、そして、蓮太郎を信じなかった自分自身に。

もし、蓮太郎を信じていれば、どれほど早くこの事件は解決していただろうか。あの、アパートでの大虐殺も未然に防げたのではないだろうか。司馬重工でも犠牲者は出なかったのではなからうか。

「メモリーカードの中身も見ました。よくあんな事を考え付いたものですね……」

多田島の声は怒りで震えていた。

木更も、こんなくだらない事でよくも蓮太郎を陥れ、可愛い延珠とティナを……そして、二人を殺した後にさらに自分の精神を壊すために夏世と翠まで殺そうとしてくれた。と、怒りが刀を握る力を強め、殺気を膨れ上がらせる。

ここで斬殺したっていいが、そうしたら自分が捕まるので出来ない。

「そうそう、もし私を五翔会に誘おうとかふざけた事考えていたら……そうですねえ、口

に出すのもおぞましいほどの残酷さでコロコロしてあげますよ?」

「天童社長、可愛く言っても駄目です。その時はあなたであつてもとつ捕まえますよ。」
「バレなきや犯罪じゃないんですよ?」

「警察の前でそれを言いますか。」

「啣みました。」

「啣んでませんでしたよね。本心さらけ出していましたよね。」

「啣みまみた!」

「啣んでない!」

「神はいた……」

「クソつたれな神様なら私も知ってますよ……」

目の前ではおちやらけた会話が繰り返り広げられているが、殺気はピンピンだ。

だが、ここで逃げなければ捕まる。

クソつたれなの所で櫃間は後ろを向き、知ってますよの所で一気に走り出した。

「あつ、逃げた!」

「くつ、待て!」

多田島が拳銃を向け、発砲。だが、外してしまい、櫃間の足元を抉るだけ。

「逃がさないわ……つて、きやあつ!」

そして、容赦ない木更が踏み込んで斬撃を飛ばして足を斬りとばそうとしたが、ドレスの裾を踏んでしまい、転んでしまう。

「逃がわっひやいっ?!」

そして走り出そうとした多田島の目の前を雪影が回転しながら横切った。漏らしそうだった。

「天童社長、死ぬとこでしたよ!」

「私はウエディングドレスを結婚前に着たせいで婚期逃しそうなんですよ!」

「私は命掛かってましたからね!?!」ってか、あなたの容姿で迫られたら落ちない男はいませんよ!!」

「そんな軽い女みたいなさしたくありませんよ!!」

「婚期逃した女なんてみんなそんなもんですよ!!」

「聞きたかないわよそんな事実!!」

結果、逃げられましたとき。

櫃間は路地を走っていた。

計画は失敗だ。早急に立て直す必要がある。が、ふと思った。

立て直したところで、あの人外が首を突っ込んだら、その時点で計画は失敗へと一方通行で進んでしまうんじゃないかと。

だが、そんなこと言ってられない。首の皮一枚で繋がるか繋がらないかの瀬戸際なのだ。

路地裏をただ我武者羅に走っている中、目の前に黒い車がキキイーツ!!と音を立てて止まった。

「やあ、櫃間さん。」

スモークガラスが降りて顔を出したのは年若い男だった。が、櫃間はその声を聞き、驚愕する。

「その声、ネストか!?!」

直接会うのは初めてだった。

「け、計画は失敗した!早急に計画を練り直す必要が……」

その瞬間、パシユツと空気の抜けたような音が櫃間の耳に入った。

そして、胸元を感じる尋常じゃない熱。

「え?」

「ブラックスワン・プロジェクトの撤収が決まりました。それに伴い、五翔会に繋がる証

扱は全て処分することに決まりました。」

ネストの手にあるのはサイレンサーが装着された拳銃。

胸元を感じる尋常じゃない熱は、その拳銃から放たれた弾丸なのだと思っても理解できなかった。

「そ、そんな……わ、私が居なければ組織の運営に支障が……」

そして、櫃間はオレンジ色のマズルフラッシュを視界に収めた。

それが、櫃間の最後に見た光景だった。

ネストはそのままマガジンが空になるまで弾丸を撃った。

「失敗者には死を。さようなら、立派な櫃間警視。」

ネストはスモークガラスを上げ、エンジンを吹かして急スピードでその場を去っていった。

あとには、路地裏で倒れる男の死体が残るのみだった。

蓮太郎達は途中で合流すると、施設の爆破を見届けて出口を見つけて外に出てから東京エリアへと歩いた。

途中、ステージIのガストレアと三回遭遇したが、瞬殺だった。

蓮太郎の目的と鬼八の目的は無事、果たされた。

蓮太郎の罪は鬼八が生きていた事で冤罪となり、鬼八もブラックスワン・プロジェクトを潰せた事で陽の下を火垂と共に堂々と歩く事ができる。そして、五翔会に捕らえられていたという設定のリカがいる事で、その証言から櫃間も捕らえることができる。

十五と悠河、さらには一般市民の犠牲があつたものの、この戦いは無事、終止符が打たれた。

「水原、帰ったら俺の罪を全部冤罪だと主張しろよ?」

「分かっている。迷惑をかけたからな。それくらいはちゃんとやる。」

そして、しばらく歩き、モノリスをやつと視界に収めた。

「あー……気持ち悪いわね。流星にモノリスのすぐ側にずっと居たからか車酔いみたい。」

火垂のそんな愚痴を聞き、イニシエーターズの方を見れば、確かに全員顔色が悪い。

この中に一人でも体内侵食率が高い者がいたら、今頃ゲロインの汚名を着てた事だろう。

「……やつと家に帰れるぜ。」

「俺もだ。もう死体のフリはしたくない。」

蓮太郎と鬼八も愚痴った時、内と外の境界線辺りに赤い光が見えた。確実に、警察の
パトカーだ。

だが、怖がる事はない。大手を振ってパトカーの横を歩ける。

そして、ほんの数メートル先が境界線、という所で蓮太郎は警察の中に一人、何度
も見た顔を発見した。

黒色の髪をストレートに伸ばした、蓮太郎の想い人。

「里見くん、お疲れ様。」

何時も通りの黒い制服を着て、腰に刀を携えた、木更が警察達よりも何歩か前で待っ
ていた。

「全部終わったんでしょ?」

「ああ。そっちは?」

「終わったわよ。」

「そうか。そりや上場だ。」

そして、木更の後ろから、この間見たばかりの顔も出てきた。

「よう、坊主。」

「多田島さん。」

この間のような敵意の視線ではない、優しい視線を向ける多田島だった。

「すまん、信じてやれなくて。」

「あの状況じゃ仕方ねえよ。」

「そう言ってもらえりや気が楽だ。」

そして、多田島は背を向け、

「道を開ける！二度も、汚名を着せられながらも東京エリアを救った救世主様がお通りだー！」

蓮太郎がいきなり何を、といった顔をする。が、何故かニヤニヤと何かを考えついた鬼八と玉樹まで前に出た。

「そこ退かねえと殴り飛ばされるぞ！救世主様の敵になりたくなきや退けや!!」

「オラオラ！救世主様の通る道だ！勝手に塞いでると金取るぞ!!」

二人まで悪ノリし始めた。

「ほらとつとと退きなさい！通れないでしょ！」

「東京エリアの救世主様を東京エリアから閉め出す気!?分かったら道を開けなさい！」

「そんな罰当たりな事したら聖天子様からキツイ罰が下るわよ！」

「早く退かないと災害が起きますよ。」

さらにそこに弓月、火垂、リカ、朝霞も悪ノリ。

警官達はそんな彼等の言葉に押され、道を開ける。

「蓮太郎、帰るぞ。」

「早く帰ってお昼寝しましょう、お兄さん。」

「私も早くあのアパートに戻りたいです。」

「彰磨さんも戻ってきてるかもしれないし。」

「とつとと帰って馬車馬の如く働くのよ、里見くん。そうそう簡単には手放さないわよ。」

延珠、テイナ、夏世、翠、木更の言葉に背中を押され、蓮太郎は照れ隠しするように笑いながらも、警官の開けた道を歩き始めた。

こうして、五翔会の企んだブラックスワン・プロジェクトは人外に喧嘩を吹っかけた結果、失敗するよりも酷い結果で幕を閉じたのだった。

フォーティーフォーパンチ

五翔会による事件が終わったあと、事態は急展開を迎えた。

まず、五翔会と関わっていた警察官は即日解雇。すぐに裁判所へと送られた。

警視總監すら関わっていた今回の事件により、警察は今、蜂の巣をつついたような感じになっている。

そして、鬼八の事は董からの事情説明により特に問題にはならず、蓮太郎も何の問題もなく冤罪は晴らされた。この際の慰謝料が少ないと木更がブツブツ言っていたがこの金の亡者には何を言っても同じだろう。

東京エリアに帰ってきてから蓮太郎達は解散。片桐兄妹と朝霞は普通に家に帰り、鬼八と火垂は二人で手を繋いで帰っていった。

その時には既に聖天子を通して董が事情を話していたらしく、蓮太郎達も拘束されずに天童民間警備会社へと帰って遅めの就寝をとった。

その中でも帰る家のないリカはその日は天童民間警備会社へと泊まり、何故か蓮太郎の部屋に居候することになった。天童民間警備会社にそのまま泊り込めばいいじゃないかと言ったことから娯楽品が無いから暇だと言ってきた。ちなみに、ティナから予備の

シエンフィールドを貰つてたりする。

そして、昼辺りに目の覚めた延珠とティナ、木更、夏世、翠に叩き起こされた蓮太郎とリカは大人しく起床。

リカは夕方辺りに雑な縫い跡と傷跡を消すために葦に手術をしてもらう事になるので早めに出かけ、蓮太郎達は一度家に帰ろうと外に出た。ちなみに、蓮太郎は延珠と夏世のイタズラにより手にプルタブの開けられたブラックコーヒーを接着剤でくつつけられている。

全員が外に出たところで前を見れば、何故か真つ黒なりムジンがテナントビルの前に止まっていた。

「……な、何事?」

「蓮太郎さん、早く謝ってください。」

「何で!?!」

「どうせ蓮太郎さんが最初にヤのつく自営業の人に喧嘩吹っかけたせいでしょ!?!」
「してねえよ!?!してねえからな!?!」

ギヤーギヤーと蓮太郎と夏世が言い合つてるとりムジンのドアが開いた。

そこから出てきたのはりムジンの色とは正反対の色のドレスを着た聖天子だった。

「つて聖天子様あ!?!」

「蓮太郎！早く謝るのだ！手遅れにならない内に！」

「延珠!？」

「あ、あの……何故里見さんが何かしたという事になってるんでしょうか……？」

「これには流石の聖天子様も苦笑い。」

「いや、知らねえよ。」

「そ、そうですね………こほん。里見さん、借りてたものを返しに来ました。」

聖天子は蓮太郎に近付くと、懐から一枚のカードを取り出して蓮太郎に渡した。

それは聖天子に直接取られた蓮太郎のライセンスカードだった。

「わざわざ返しに来てくれたのか？郵送でもよかったですよ。」

「ついでに色々と話したかったですよ。」

蓮太郎はライセンスを器用に片手でパスケースに仕舞うともう無くさないように胸

ポケットにぶち込んだ。

「里見さん、信じていました。あなたなら、あの事件の闇を全て解決してくれると。」

「巻き込まれたからやっただけだ。つてか、聖天子様。まさか、水原の事知ってたから元

から疑う気無かつたんじゃ……」

「どうでしょうね？クスクスっ。」

今思えば、聖天子は国のトップであるのに、蓮太郎に対しての扱いは冤罪を晴らさせ

るための援助と言つても過言ではない事をした。

まあ、それも火垂の手で滅茶苦茶になったのだが、聖天子が蓮太郎を表面上でも殺人犯として扱っていたのなら、脱走の手助けなんてする筈なかった。

「元から俺を使つてこの事件を解決させようつて思つてたんじやないだらうな？」

「さあ？ どうでしょうね。」

ハメラれた……と蓮太郎は空を仰いだ。

董と美織だけがグルだと思つたら聖天子までグルだった。

蓮太郎が空を仰いだのは悪くないだらう。

「おい、聖天子様の前で空なんか仰いでどうする。」

だが、空を仰いで暫くすると、聖天子のリムジンからパイナツプルのような頭に扇子、袴という格好をした初老の男が出てきた。蓮太郎がそれに気づきその男の方を見ると、男はよつ。と気軽に挨拶をした。

「紫垣さん？」

「ちようどお前らのところに向かおうとしたら聖天子様に拾われてな。」

「ちようどそこを歩いてたので。」

「歩いてきてたのかよ。」

「たまには歩かんとな。」

白い歯をニカツと笑つて見せた紫垣は木更の方へ向き切り、照れたような困つたような顔をする。

「木更よ。その……今回は本当にすまなかつた。今日はその詫びも兼ねてきた。よかれと思つて引き合わせた結果がこれだ……本当にスマン。」

大の大人が平謝りをする。人の出来た対応に木更は特に憤慨せず微笑む。

「いえ、結局警察の汚点潰せたのでいいんですよ。実害なんてありませんでしたし。」

「その返しは予想外だった。」

「これを巻き込んだのが運のつきですよ。」

これ呼ばわりされた蓮太郎は軽く凹んだ。

そんな蓮太郎の袖を延珠がクイクイと引つ張る。

「どうした?」

そのほうを見れば、不安そうな表情をした天童民間警備会社のインシエーターズがいた。

「あのおじちゃんは誰なのだ?」

「ああ、そういえばお前らははじめてだったな。あの人は紫垣仙一さん。天童民間警備会社の書類上の経営者で俺達の後見人の真似事みたいなのも請け負ってくれている爺さんだ。」

「おお、そんなエライおじちゃんだったのか。」

蓮太郎は柴垣を手招きする。

「紹介するよ。俺のイニシエーターの延珠と訳アリの夏世とティナ。それと、彰磨兄いのイニシエーターで訳あつて預かつてる翠だ。」

訳アリ三人という何とも奇妙な紹介となつたが、柴垣は特に気にする様子もなく延珠とティナの頭に手を置いて乱暴に撫でる。

「これまた可愛らしいのが四人も出てきたな。そういえばお前、司馬の嬢ちゃんとも出来てたよな？六股か？このハーレム野郎。つてかその手にくっ付いているブラックコーヒーは何なんだよ。」

柴垣がからかう様に蓮太郎の肩に手を置いて揺らす。

「お、おい、あんま揺らすと……」

蓮太郎の忠告が入つたが時既に遅し。ブラックコーヒーが柴垣の手にバシヤツとかつた。

「アチチツ!!」

「言わんこつちやない。」

柴垣は慌てて袖を捲つてハンカチで腕を拭くとすぐに袖を戻した。

「お、お前、何されたんだ？」

「そのガキンチョ共のイタズラで接着剤で接着された。」

テハッと頭に手を当てる舌を出して延珠と夏世にゲンコツをお見舞いする。

柴垣はそんな様子を見て笑いながら天童民間警備会社の水道でコーヒーのかかった場所を冷やそうとビルの階段を上がって行った。

(なんか羽の入れ墨があつたような………まっ、気のせいだな)

延珠は柴垣の腕にほんの少しだけ見えた入れ墨を不思議に思ったが、気のせいだと割り切った。

さて、今回のオチ。

聖天子と柴垣が帰った後、蓮太郎達は懐かしき床が吹っ飛んでいる部屋に戻って畳を直した後、一息ついた。ブラックコーヒーの缶は力づくで引っぱがした。

全員で床に寝転がってまた二度寝でもしようかと思っていた時、何の予兆もなく玄関のドアが蹴り開けられた。

『何事!!?』

「蓮太郎、ヘルプ!」

ドアを蹴り開けて突入してきたのはなんとポストンバッグとキャリーケースを持った火垂だった。

「火垂!?!何でここに!?!しかも何だよその荷物!」

「これを見て!」

部屋に入ってきた火垂は空いた手に持っていた手紙らしき紙を蓮太郎に見せつけるように突き出した。

『いやー、なんか波紋を教わった師匠からヘルプが来てさ。なんでも、百年ぶりに復活した吸血鬼を倒すための仲間が欲しいって言うんでちよつとエジプトまで行ってくる。何年かかるか分からないから火垂の世話頼んだ。by 鬼八』

P・S お土産何がいい?』

衝動的に手紙を破いた蓮太郎は決して悪くない。

「多分、朝には出て行ってもう東京エリアにはいないと思うわ……しかも大家さんに鍵を返したらしくて、さつき大家さんにたたき起こされて私の私物を纏められて放り出されたわ……」

「隠れ家はどうしたんだよ。」

「もう鍵を返したわ。」

「何で。」

「お金、もう五千円くらいしか無い……」

「ああ……」

家賃払えないのな。という無粋な言葉は飲み込んだ。

「……まあ、水原の頼みだし特に拒む理由はない。こんな子供を根無し草にする訳にも
いかないしな。」

「ありがと。」

「お前らも異議ないよな？ あつても聞かん。」

蓮太郎は火垂の荷物を受け取ると、部屋の隅、翠の荷物の横に置いた。

「あいつは帰ってきたらシバく。」

「そんなもって調きよ………お仕置きするわ。」

「おい、今調教って……」

「あーあー聞こえないわー」

「……まあ、自業自得って事で。」

そんな訳で、里見家には延珠、夏世、ティナ、翠、リカ、火垂の計六人のロリが住む
ことになった。

そろそろ本格的に御近所からの目が危ないな。と考える蓮太郎であったとき。

番外パンチ

「……………ろー……………たるー、れんたるー！起きてよ、れんたるー！」

眠っていた蓮太郎は延珠に体を揺すられ、目を覚ました。目を覚ますとすぐに何か焼けている変な匂いがする。

火事か？と思つて感覚を研ぎ澄ますが、この部屋が燃えている様子はない。じゃあ、何故延珠がこんなにも必死で起こしてくるのかが分からない。

「なんだよ延珠……………今日は休みだろ？」

「そんな呑気な事言つてる場合じゃないんだ！早くれんたるーがあれを何とか……………」

その瞬間、何か嫌な予感が蓮太郎の体を突き抜けた。次の瞬間、壁が何者かによつて打ち破られ、そこから侵入してきた触手の様なものが延珠の足に絡みつき、延珠を声上げる間もなく連れ去つていった。

「延珠!!？」

何か異常が起きている。そう確信し起き上がり、打ち破られた壁から外の様子を確認する。

——外は、地獄だった。

「な、なんだよ、これ……」

外ではガストレア共がそこら中に湧き、市民たちを食らう。応戦している民警もいるが、次から次へとやられていく。

モノリスはある筈なのに、何故こんなパンデミックが。

「延珠は……？」

「れんたろー!!助けて!!」

「お兄さん、ヘルプです!!」

「里見さくん!こつちですく」

「何で私だけ逆さま何ですか!あ、ちよつ、揺すらなあばばばばば!!」

「うっわあ……キツそう」

「蓮太郎!とつとと助けなさいよこのハゲ!!」

「ハゲてねえよ!つてお前ら何してんだよ!!」

延珠達、イニシエーターズ+リカは地面から生える触手的な何かに全身グルグル巻きにされて捕まっていた。何故か夏世だけは逆さ吊りにされ、シエイクされていたが、あ、吐いた。

「何が何だか分かんねえが待ってろ、すぐに助けてやる!」

すぐに蓮太郎は二階である自室から飛び降り、延珠達を助けるために走り出す。が、

その瞬間、地中から巨大な腕がアスファルトを突き破って出現し、蓮太郎を殴り飛ばした。

「ぐはっ!!?」

吹っ飛ばされ、何枚もの住宅の壁を突き破り、地面に着地。

「くそっ、いてえじゃねえか」

口から流れてきた液体を寝巻きの袖で拭う。それは、血だった。久しく見ていない血を見て頬が釣りあがる。

その瞬間、地面が急に揺れ始める。

「う、うおっ!!」

これはマズイと思ったら行動は早い。すぐさま地面を蹴り、数百メートルほど飛び上がる。そして、さつきまで居た地面を確認すると、思わず息を飲んだ。

巨大なガストレアが何匹も地面から湧いてくるのだ。それらは全てステージIVで収まるガストレアではない。明らかに、ステージVとしか言えない程の大きさだった。

しかも、よく見ればこの間倒したスコープイオンまで混ざっている。しかも、何匹も。その内の一体から伸びる触手が、延珠達を捕えている。

だが、燃える。こんな地獄絵図だからこそ、燃える。

「ウオオオオオオオオオオオ!!」

吠え、空中を蹴り、真下にいるガストレアに狙いを定める。

「ダツシヤアアアアアアアアアア!!」

タイミングを合わせ、思いつきりぶん殴る。一撃でガストレアは砕け散り、肉片が舞う。

だが、砕け散ったガストレアの内部からステージIVは確実なカマキリ型のガストレアが、蓮太郎の目でも捉えるのがやつとな速度で鎌を振るう。それを無防備な背中にくらい、地面に叩きつけられ、バウンド。空中で身動きが取れない内に触手が迫り、蓮太郎をさらに追撃。目にも止まらぬ速さで蓮太郎を何十回も殴り、吹っ飛ばす。

その勢いで蓮太郎は砲弾の如く吹っ飛び、モノリスに激突。モノリスはその衝撃でバラバラになり、崩れ落ちる。

が、それで死ぬ蓮太郎ではない。崩れたブロック状のバラニウムを殴り飛ばし、地上に這い出る。

「へっ、面白いじゃねえか」

ボロ布と化した寝巻きの上を破り捨てる。

目の前には様々な大きさのガストレアが。全てが蓮太郎を敵として認め、殺意を放つ。だが、その中でも蓮太郎は笑う。

「ガストレア共！東京エリアは、俺が守るツツ!!」

叫び、宣言。そして、一気にガストレアの大群の中へと突っ込む。

「ハアアアアアアアアアアア!!」

殴り、蹴り、投げ、また殴り、ぶつ飛ばし、消滅させ、我武者羅に戦い続ける。だが、攻撃を受け、地面に叩きつけられ、溶解液をぶっかけられる。だが、それでも蓮太郎は止まらない。

ただ、東京エリアを守るため、同居人を助け出すため、戦い続ける。

戦いは、丸一日続いた。瓦礫の山と化した東京エリアの中心で、蓮太郎は降り注ぐ雨をその一身に浴びながら、勝利の余韻に浸る。蓮太郎の後ろには、助け出したイニシエーターズナリカ。夏世は人様に見せられない事になっているが、助け出したものは助け出したのだ。

「ハア……………ハア……………」

充実した疲労感。体中に走る痛み。これこそが、これこそが戦い。蓮太郎の追い求めて来た物だ。

だが、その充実した疲労感と勝利の余韻を打ち消すかのように、目の前の地面がヒビ割れ、横に割れ、中から巨大なガストレアが湧いて出てくる。

その大きさはステージVの比では無い。ステージV等よりもさらなる力を感じる。

『フハハハハハ！よくぞ人間如きが私の眷属をここまで蹴散らせたものだ！その敬意に

評してガストレアの王である我が直々に貴様の相手をしてくれよう!」

「……へっ、望むところだ! テメエもこの残骸共みてえにしてやるぜ!!」

蓮太郎は鬪志をその目に宿し、地面を蹴り、飛び上がる。

目の前には全てのガストレアの王。これを倒せば、全てが終わる。人類を、守ることが出来る。

「ウオラアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

鬪志を込めた雄叫びを上げ、その拳を引き絞る。そして、その拳は炸裂し——

——ジリリリリリリリリリリ!!

「うっせえ!!」

耳障りな目覚まし時計の音が鳴り響き、思わず目覚まし時計を殴る。目覚まし時計は音を止めるどころか殴り壊され、ただのゴミになった。

「……………あれ? ガストレアは? ガストレアの王は?」

目を覚ますとそこはいつも通りの蓮太郎の部屋。同居人達は何故かいない。

立ち上がり、欠伸をしながらちゃぶ台の前に座り、テレビを付ける。と、そこでちゃ

ぶ台の上に置かれた紙を見つけた。延珠が置いていったものらしい。

『れんたろーへ。何か、美織がVR訓練室で天誅ガールズの3Dアニメを見せてくれるって電話をかけてきたから行ってくるのだ！夕方には帰るぞ！あ、皆も一緒だ!!』

何ともハイテク技術を持って余している感が凄い。それに、あの訓練室ならアニメどころか会話とかも出来る気がするのだが、蓮太郎の知る由ではない。

一人分のパンと目玉焼きを焼いてちやぶ台に座って食う。いつも通りとはいかないが、平和な日常だ。

「……………夢オチかよ。つまんねー」

番外編其の二パンチ

「蓮太郎さん」

「んー、なんだ？」

とある日。夏世はゴロゴロと暇を持って余している蓮太郎に声をかけた。

「一ヶ月ほど木更さんの家に泊まりに行つてきます」

「おー、行つてら」

一ヶ月という、かなり長い時間泊まりに行くというのに、蓮太郎は特に何のアクションも起こさなかった。普段ならかなりイラつく事だが、今回ばかりはそれで都合が良かった。

「では、荷物もまとめてあるんで行つてきます」

「気いつけるよ」

そして、夏世は蓮太郎の部屋を出ていった。かなり悪い笑みを浮かべながら……

はい、ここからは私からの一人称視点です。え？メタい？大丈夫、次の文からはちゃんとしませうから。

さて、私は蓮太郎さんに木更さんの部屋に泊まりに行くと言いましたが、そんなのは嘘。全ては延珠さんとテイナさんにも協力を要請したこの計画のため……そう、蓮太郎さん観察期間のため！

この期間の間に蓮太郎さんの弱みや何やらを握って性癖か何かを握れたらそれに漬け込んであわよくば……とか考えている延珠さんとテイナさんからお金を貰ったから実行に移しました。ええ、お金こそが正義です。お金は裏切らない。

それに、テイナさんはIP序列二桁だった大物……そりゃあもう沢山のマネーをくれましたよ。最近では司馬重工の株を買って儲けてるおかげで一財産築けそうですよ……うへへへ……

で、私が行くのは元々は火垂さんの使っていたらしい隠れ家。一時的に追い出されたけれど、再び借りたらしいこの部屋で私は蓮太郎さんの観察を行う。ちなみに、火垂さんはプロモーターの水原さんから定期的に振り込まれる謎の大金で最近では潤沢に……とはいかないけど、それなりに贅沢して暮らしています。隠れ家は武器とかを貯蔵するのに使っているのだから。

使うのはシエンフィールドみたいな物を脳みそに機械を埋め込まなくてもヘッドマ

ウントディスプレイを装着する事で思考を読み取り、動かせるようにした物。で、シエンフィールドもときにはビデオカメラを取り付ける。これは司馬重工が後々発売する予定の物らしく、その試作品を美織さんがタダでくれた物です。

家の中は延珠さんやティナさんが見ているので、私が見るのは学校にいる蓮太郎さんや深夜の蓮太郎さんといった、主に一人でいる蓮太郎さん。

蓮太郎さんだって男。いつかは溜まった性欲を発散する筈……それを弱みとして延珠さんとティナさんに渡す……それが私のミッション！

あ、あと監視ミッション（？）にはあんぱんと牛乳が鉄板だって聞いたので朝昼晩全部あんぱんと牛乳で過ごします。さあてつと……

「ドルフィン号（シエンフィールドもどき）、発進!!」

既に練習は済ませてあります。そして、中身を改造して音も最小限まで抑えるようにしてあるし、カメラだって魔改造した物を採用しました。見つかる可能性はゼロ！

むふふ……完璧！これが完璧な作戦です！

さあ、早く弱みを見せてください……来週、欲しいゲームの発売日なので早く帰りた
いのが本音なんですから……

監視一日目。蓮太郎さんにこれと言った動きはありませんでした。ですが、まだ一日目。まだまだこれからです。あと、あんぱん美味しいです。

あれ？翠さんが深夜に起きて……パソコン？それにゲーム……？ノベルゲームみたいですね。とりあえず、深夜に寝てる蓮太郎さん見てるだけなのはつまらないので翠さんのノベルゲームも観察することにします。あ、ちょうど二週目に入るみたいなので丁度いいですね。

三日飛んで四日目。蓮太郎さんに動きはありません。夜中にトイレで何かしてる様子もありませんし……あ、お風呂はノーマークでしたね。後でティナさんに言つて隠しカメラを設置してもらいましょう。プライベート？知つたこつちやありませんよ。

で、翠さんのノベルゲームですが、なかなか面白いですね。音を拾えないのが残念ですけど……読唇術が使えるので音は心配ないと思つてたのが仇になりましたね……あと、あんぱん飽きてきました。

一週間経ちました。何もありません。何かしろよこの人外。いい加減あんばん飽きてきたんですよ、キツインですよこれ。オレンジジュースと焼きそばパン食べたんですよ、はよ何か晒せや。

あ、翠さんのノベルゲー……あ、告白した！告白しましたよ！き、キス！キスまでしました！つて、そこで止めるんですか！焦らしプレイですかそうですか！

一週間と一日経ちました。変化ありません。クソが。

で、翠さんのノベルゲーはつと……え、ちよつ、あ、その、これ……うそ、ちよつ、そんなところに？え、あ、うわつ……ここにあんなのが……

一週間と二日目。蓮太郎さんの変化はありませんが、凄いもの見ました。つていう

な、エロゲーって始めてみましたけど、あんな感じなんですね……エクスタシーでした。色んな意味で。

あと、あんぱん飽きました。ほんとどうにかしてくださいマジで。あ、今日から翠さんのノベルゲーは違うのになるみたいですね。えつと……ロボットが出てくるエロゲーみたいですわね。

流石に生活リズムが崩れ去ってきた二週間目。マジではよ終われ。キツイ、ひたすらにキツイです。娯楽が深夜のエロゲーだけって辛すぎます。あんぱんも段々と口にするのが苦痛になってきました。

あと、翠さんのエロゲーは段々と熱い展開になってきました。カッコイイですね、戦術機。プラモデル買ってみようかな……

二週間と五日目………純夏をあんな事にしたBETA絶対許さない!! మరిもちゃ

んの件もあるけど絶滅してしまえあんなクソ生物!!

三週間目……………ぐすつ、みんな死んじゃうなんて……………でも、元の世界だと皆生きてよかった……………それにしても、あの世界はあの後どうなったんでしょうか……………?きつと、きつと救われたんですよね。だって、武ちゃん達があんなに頑張ったんですから……………

あんばんもうやだ。食べたくない。牛乳もいらさない。

え?今日はやらないの?最近はや更かししすぎたからしばらく止めるって……………じゃあ私の娯楽は一体……………

三週間と一日目。つらい、やめたい。

三週間と二日目。あんぱんがせまってくるゆめをみた。きもちわるかった。

さんしゅうかんとみつかめ。ぎゆうにゆうにおぼれるゆめをみた。しにたい。

あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん
 あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん
 あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん
 はんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん

気がついたら一ヶ月と三日経っていました。一週間前から記憶がありません。あと、あんぱんと牛乳が喉を通りません。髪もボサボサに伸びきってます。シャワーも浴びるの忘れて臭いそうです……そうだ、あんぱん買いに行かなきゃ……

一ヶ月と四日目。スーパーの店員にスパークンツ!!

一ヶ月と五日目。コンビニの店員にスパークンツ!!

一ヶ月と六日目。大家さんに向かってスパークンツ!!

一ヶ月と七日目。木更さんと延珠さんとティナさんと火垂さんとリカさんに向けて
スパアアアアキンツツツツツツツツ!!

気が付いたら監視を始めてから一ヶ月と三週間経っていました。あと、右手と左足骨
折して首を脱臼して肋骨本が折れてました。それと、全身に切り傷があります。銃痕も
ありました。テロにでもあいましたっけ……？

あと、部屋に書き置きがありました。部屋を掃除したらもう帰ってきていいとの事
です。確かに、壁や床にこびり付いた館とか、零れた牛乳とか、あんぱんと牛乳のゴミが
詰められたゴミ袋とか……うわ、ハエまで集ってますよ……

早いとこ掃除して帰りましょうか。蓮太郎さんのご飯が食べたいです。

蓮太郎は心配していた。一ヶ月どころか二ヶ月近く家を開ける夏世に。

木更は何も問題ないと言っているが、事務所にも姿を見せなければ電話にすら出ない。何かあったのではと心配していたが、木更の言葉を信じて東京エリアを走り回るのだけは止めた。

「ただいま戻りました〜」

その時、玄関のドアを開け、夏世が帰ってきた。

「夏世！無事だったか!?!」

「無事って……そりゃあ、何もありませんでしたよ」

あながち間違いではない。

「何も無かったって……髪の毛ボツサボサだぞ!?!しかも右手と左足折ってるようにも見えるぞ?!松葉杖もついているし……」

「あはは……まあ、色々あったんですよ」

あながち間違いではない。

「そうか……なら、早く入れよ。今日はパン屋で安く売ってたパンを沢山買ってきたんだ」

「あ、楽しみですね」

蓮太郎の手料理ではないのが残念だったが、あんぱん以外の物を食べれるのなら何だっていい。

ちやぶ台の前に座って待っていると、蓮太郎が皿に盛り付けたパンを持ってきた。

「ほら、あんぱんだ。何でか大量に安売りされてたから買ってきたんだ。沢山食えよ」

「えっ……？あんぱ……ん？」

目の前の皿に盛り付けられているのは、見間違う訳がない。あのあんぱんだ。

「あ、あんぱ……あんぱん……あんぱ……」

夏世が震え出す。何かに怯えるように震え出す。

「ど、どうした？」

「あ、あんぱん……イヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「えっ、ちよっ、夏世お!!」

夏世が足が折れているのにも関わらず立ち上がり、杖すらつかずに玄関から飛び出し、そのまま走り去っていった。何かに怯え、追われるかのように走り去っていった。

「……なんだよ、こんなに美味しいのに」

が、蓮太郎はその内帰ってくるだろうと思つてあんぱんに齧り付いた。

夏世が帰ってきたのは、三日後だった。しかも、ドロツドロに汚れた状態で。

そして、夏世はずっと眩いていた。

「あんぱんこわい………」
と。